

ONEPIECE 空の王者が海 を征す

魔女っ子アルト姫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゾン動物系ドラドラの実幻獣種モデルリオレウス

それが俺の食った実の名前だ、多分……。

暁様のほうと同時投稿させていただいております。

作者の活動報告にてお知らせなどを掲載して行こうと思しますので宜しく願います。

目次

空の王者と海賊王を目指す者の出会い	1
空の王者は海を往く	9
空の王者、偉大なる航路へ	20
空の王者、海の黒き城と会う。	28
空の王者、謎の男女と老人とクジラ	39
空の王者、歓迎の町へ	46
空の王者、秘密組織の目的を知る	55
空の王者、小さき庭へ	64
空の王者、誇り高き戦士と会う	
空の王者、誇り高き決闘を穢した者へ激 昂する。	71
空の王者、看病する	91
空の王者、冬島に到着する	99
空の王者、冬島を舞う	106
空の王者、トナカイと仲良くなる	116
空の王者、さらば冬島	124
空の王者、いざアラバスタへ	134
空の王者、船長の兄を見る	141
空の王者、砂漠を往く	151
空の王者、黒幕へと向かう	157

空の王者、竜と会う	165
空の王者、竜と対峙する	176
空の王者、アルバーナへ	185
空の王者、戦う	196
空の王者、反乱の終わりを見る	205
空の王者、王と話す	213
空の王者、宴と風呂を楽しむ	221
空の王者、王女と語らう	231
空の王者、砂漠の国を後にする	239
空の王者、何故か怒られる	252
空の王者、サルと会う	261
空の王者、怪物を見る	271
空の王者、猿山連合と遭遇する	281

空の王者、空島への可能性を見出す	289
空の王者、笑う者を壊す	299
空の王者、遂に空へと昇り往く	309
空の王者、空の海へ至る	321
空の王者、空島に上陸する	328
空の王者、住人から話を聞く	336
空の王者、禁じられた土地を知る	344
空の王者、聖地の真実を解く	351
空の王者、黄金郷に着くまでの間	360
空の王者、黄金探しを開始する	364

空の王者、神官と戦う
 空の王者、危機を覚える
 空の王者、古龍と戦う
 空の王者、黒炎を纏う
 空の王者、覚醒の一端を遂げる
 空の王者、狙われる
 空の王者、理由を知る
 空の王者、水の都へ
 空の王者、変態と姫に出会う
 空の王者、恐怖する
 空の王者、覚悟する
 空の王者、居ぬ間に襲いかかる現実。

442 436 428 424 416 408 401 394 387 381 371

空の王者、——決める。
 空の王者、居ぬ間に襲いかかる騒動。
 空の王者、居ぬ間に襲いかかる組織。
 空の王者、別れを告げる。
 空の王者、愛とは何かと思う。
 空の王者、——仲間と思われる。
 空の王者、政府の目的に怒る。

483 467 461 474 479 488 453

空の王者と海賊王を目指す者の出会い

「——な、ななななっ……」

開いた口が塞がらない。今の状況を的確に表現する言葉はこれ以外ない。本来の意味は、あまりにも呆れるとぼかんと口を開いた状態のまま一言も言葉を発しなくなることから」という事な為意味は異なる。呆れているのではなく驚きで口が塞がらないのだから。

「如何なああああてんだあああああああああ!!!????」

喉が張り裂けんばかりに大声を発する。唯でさえ、**魁鹿**デカイ大声は物理的な衝撃を生み出しながら生き物が豊富にいる無人島に響き渡る、その声の主は水面に映り込んでいた自らの姿に驚愕していた。全身に真紅に輝く鱗は宝石のように光を放っている。酷く発達した筋肉は強靱で全てを叩き壊す鈍器を思わせる。そして左腕の先の手は異形の物、竜の頭部を思わせるようなものに変質していた。

——目を覚ますとそこは森だった。ある日の事、俺は自動車学校の卒業試験を合格しウキウキ気分を送迎バスに乗車し、何の問題も無く家にたどり着くと、その旨を唯一

の家族であるペットの犬に嬉しげに報告した。その後食事を共に取り、久しくかなり頭を使ったのでベッドに飛び込むように倒れ込み、眠りについた筈だった。

それなのに妙に肌寒く、身を丸くしながら布団を探すように腕を動かした。だが何時もは深々かぶっているふとんが見つからないことに疑問を覚え、瞳を開けて見つけようとしたら自分は、ジャングルの中にある泉の畔のような場所にポツンと横たわっていた。

『——え……えっ?』

混乱し強く動揺した。自分の家という絶対的に安心出来る場に居た筈なのに自分はその中には居らず全く違う森の中に居たのだから。混乱しながらヨロヨロと立ち上がり周囲を見つめた。これはきつと夢なんだと思った、きつとそうだと願うように決め込んだ。だが…覚束無い足取りだったからか足を滑らせて泉へと身を落とした。

『ゴボバツ!?!』

入ってくる水、苦しくなっていく呼吸。全てがリアルに感じられる、これは夢ではない現実だと世界が教えてくれるように思えて来た。もがきながら泉から這い出て水を吐き出し置かれている現実を理解していく。自分が家から何処かの島に転移のようなことをしている事を認めざるを得なかった……。そして不意に目についた果物、自分が横たわっていた場所のすぐそばに無造作に置かれていたその果物。

『……とりあえず食ってみようか……?何か、気分が変わるかも……しれんしな』

その果物は見れば見るほど派手な物だった、刺々しく皮の一枚一枚が鱗のように見える。それを剥いで中身を割ってみた、中身は胡麻のような種子が散らばっていて、果肉は触ってみるとやわらかく食べれそうだった。続けるようにそれに嘔り付いた。

『つつつつ?!?!?』

口に含んだ瞬間に身体を貫いてくるのは酷い物だった。渋み、苦味、酸味、辛さ、それも耐え難いほどに凄まじい物、そして止めと言わんばかりの恐ろしいまでのえぐみ。思わずそれを吐き出そうとするよりも早く自分は泉に顔を突っ込み思いつきり水を飲み続けた。幾ら水を喉に流し込んで消える事のない不快な味、何故吐き出さなかつたのかと後悔の念を抱きつつ唯々飲み続ける。

そして15分ほど経つただろうか、漸く口の中の不快感が消えた所で顔を上げ一息を付く。呼吸をするのも忘れて無我夢中で水を飲み続けて居た為かかなりの満腹感に襲われているが不快感に口の中に支配をされているより遥かにマシだ。呼吸を整えながらももう一度果実を見た。

『……いやもう食いたくないけど……勿体ないよなあ……』

世の中にはとんでもない味の果物があると思いつつも口の中にまたあの不快感が湧いて来たのでそれを洗い流す為にながいでもしようと泉に顔を近づけた時だった。自

分の変化に気づいたのは……。そして冒頭へと戻る。

「な、なあなあんああああ!!?!」

身体の異常な変化に驚愕しつづ思わず後退りしてしまった、いつの間にか自分は化物のような物になってしまっている、それが恐ろしくて堪らなかつた。もうこれは自分の物ではない、何か違う物だと認識しそれを必死に外そうと地面に叩きつけた時、地割れが起きた。

「……………はっ?」

地面を走った罅割れは酷く深かつた。先程まで地割れなど全くなかつた、ならばどうしてこんなものが?自分が、やったのか…………?と呆然となる。自分に此処までの力などない、つというか人間がここまで力を生身で持つとか不可能な筈だ。思わず左手の竜の頭部のような物をしげしげと見つめる……。

「何か、どつかで見た事が……………」

そうこの腕の何かは見た事があると思つた、凶悪な面構えに猛々しく荒々しい。身体を覆っている鱗も見ようによつては鎧のようにも見えた。真紅の鎧、そして竜…………?

「ああああああああ!!!これ、リオレウスじゃねえかああああああ!!!」

そう、彼は自らの身が何に変化しているのかを理解した。自分が狩獵ゲーム、”モジ

スターハンター”に登場する飛竜、火竜リオレウスと化している事に。そして後に彼は知る、自らの口にした果実の正体とこの世界の事を。

悪魔の実。動物系ゾンドラドラの実幻獣種モデルリオレウス。そしてこの世界がONE PIECEの世界であるということに……………。

「……………もう何年経ったんだろうな……………」

近場の岩場に付いた線の山。線が意味するのは日にち、6つの線の中心を貫くような一本の線の合計7つの線がもう数えるのも面倒なほどにある。一週間を示す線の束、それを付けようと決めたのはあの日、あの悪魔の実を食った時だ。幸いな事に腐るほどに時間はあつた、時に悩んで時に暴れた。力は身に余るほどにあつた、あの果物を食べた事で得た力が。

悪魔の実、海の秘宝とも言われる果実。食べば悪魔の力を得る代わりにカナヅチになると言われているこの実を自分は食らった。悪魔の実は簡単に三種類に分類出来る、超人系。動物系、自然系。自分が食らったのは動物系。

動物への変身能力を得る。自分の場合はリオレウスと呼ばれるドラゴンへ変身する力を得た。生半可な攻撃は跳ね返す強固な鱗、岩をも焼き尽くす火炎、大空を自由自在

に飛び回る飛翔能力。なんとも豪華な力を得る事が出来る実を食べた。

「はあ……なんか順応しちやってるなあ俺……」

そう言いつつ住処にしている洞穴に寝そべりながら顔を横に向けてみる。そこには煌びやかに光を放っている宝があった。元々この島にあったものだけという訳ではない、この島に上陸し自分に刃を向けて来た海賊から奪った物だ。その一つである金の杯に泉の水を入れて口にする。

———大海賊時代。この世界を表現するならそれが一番だろう。ゴール・D・ロジャーという男が処刑される寸前に放った一言。

———おれの財宝か？ 欲しけりやくれてやる。…探せ この世のすべてをそこに置いてきた。

それが切っ掛けとなって始まった大海賊時代、海には海賊が溢れている。そんな海賊がこの島にもやって来た、どうやらこの島には財宝が眠っているらしくそれを目当てにやって来たらしい。そこで自分は初めて能力を行使して対人戦闘を行い、生きる為に人を殺し食料を奪い財宝を奪った。

初めは恐怖もした、吐きもした。だが生きる為に必死に割り切つて戦っているうちに恐怖などの感情は消え去って行った。人は慣れていく、何もかも……とアニメで見た言葉は間違っていないかった。気づけば洞窟には見つけ出した財宝だけではなく海賊から

奪った財宝であふれていた。だがここは無人島、溢れるほどの財宝も使いようが無かった。

「……5年ぐらい経ってるのか、んじゃそろそろ行くか旅に！」

思い立ったのはこの財宝を現金に換えて思いっきり贅沢をしたい事から、だから旅に出ようと思つた。丸三日休む事無く飛行することも可能である程に高い飛行能力がある自分なら海を越えて人のいる島に行くことも可能だろう。が問題があつた。

「……………どうやってこの財宝運ぼう……………？」

海賊から奪った財宝袋などに詰めても数は20を超えるだろう、そんな数を持つて飛ぶのは流石に難しい。何か良い案を考えなければならぬ、出来る事なら砂浜に出る前にそれを考えておくべきだった。そんな時だった

「おおい誰かいるぞ〜!!？」

「無人島の筈よここは？」

「あつても誰かいるぞ!？」

「漂流者か」

「なんか荷物持つてんな」

麦わら帽子を被つた男が率いている5人ほどの集団がこちらに向かつていた。今までの海賊と違って敵意などを感じない為攻撃はしない。寧ろ…何故か好感を持てた、何

故だろうか……？

「なあお前、ここで何やってんだ？」

「何つと言われてもな……お前こそ何者だ？一応ここは俺の島なんだが」

「俺か？俺はモンキー・D・ルフィ、海賊王になる男だ!!」

これが後の海賊王、モンキー・D・ルフィとの出会いだった。

空の王者は海を往く

「すつつつごおおおい!!!お宝の山♡」

「おいおい本当にすげえなこれ!」

島の砂浜で出会った男、モンキー・D・ルフィ。彼が率いる海賊団、麦わら海賊団。無人島で一人で住んでいた男は彼らの船に乗船し次の島まで乗せて貰う事になっている。そしてその代金として宝を換金した際の4割を譲るという契約を結んだ。

「なあこの4割貰って良いのか!」

「ああ。どうせあの島じゃ使うに使えねえからな、使えるようにする為に乗せて貰うんだからな」

「私の眼によると総額3000万ベリーはするわよ!その4割……1200万ベリーが私の手にー♪」

「おいナミンこの船の船長は俺だぞ?」

目の前で繰り広げられている漫才に近いやり取りに思わずクスリとする、何年も一人で過ごしていたせいかな人間と人間のやり取りが酷く新鮮に感じられる。それに加えてこの海賊団は陽気で楽しげ。所謂平和主義ピースメイな者達、今まで自分が狩って来た略奪主義モーガニアと

また違うタイプ。

「そう言えば名前なんて言うんだお前」

「んっ……名前、言つてなかったか」

金髪のグルグル眉毛の男、サンジにそう尋ねられる。名前……正直名前などあまり気になどしていなかった、んなものを気にするぐらいなら身体を鍛える事の方が大切だったからだ。この世界に来る前の名前は当然あった、名無しなど生きて行ける世界ではない。加えて本来知っていた筈のこの世界原の知識作の殆どが磨耗し使い物に成らなくなっている。それが残念でならない。

「名前か……人に言うのも久しぶりすぎてピンと来ねえな」

「おいそれ大丈夫かよ」

「はははっ数年無人島に一人だったんだ、人に名前を言う機会なんて無くてな。宝目当ての海賊にわざわざ名乗る必要もなかったしな」

名、か……変えてみるのも悪くない。もう以前の自分ではない。過去その自分れを捨て去つて新しい今れを名乗つてみるのも面白いかもしれない。

「レウス。レウス・R・リオスだ」

「はくん……全部う行だな」

「ほっとけ」

適当に考えた名前だ、そんな事一々気になどしていない。それに基本はレウスで通せばいい。

「なあレウス！」

「お、おういきなり呼び捨てか……悪くないな。んでなんや」

「お前、俺の仲間にならねえか？」

「あつ？」

思わず妙な声を出してしまった。まだ出会って小1時間しか経っていない正体不明な人間を仲間に勧誘？普通なら頭の中身を疑うレベルの発言だがレウスは自然と納得していた。ルフィの事は少なからず知っていた、幼い少年がそのまま大人になったかのような性格をもった彼に妙な意思は無い。ただ仲間に欲しいから誘っているのだろう。

「だからオメエ俺の仲間になれ！」

「おいルフィてめえいきなり何言ってるんだよ？」

「そうだけ。まだ会って間もないいきなり勧誘して受ける訳がないだ「いいぞ」っていいんかい!？」

ズビシッ！と擬音が立ちそうなほどに鋭く突っ込みを入れてくる狙撃手を担当する長鼻のウソップ。

「俺自身旅をしようと思ってたんだ、お前達といると楽しそうだしな。俺で良ければ宜

しく頼むよ」

「おいおいそんな簡単な理由で……」

「そうよもうちよつと考えた方が良いじゃない？」

「そうかな？俺としては平和的ならそれで十分だけど。あつそうだ仲間になるんだから4割じゃ可笑しいよな。んじやえつとナミちゃんの良いんだっけ？君に渡す割合を6割に増やすよ」

「ようこそ麦わらの一味へ!!!」

「うおい!!!」

自分に入ってくる金が増えると解ると一気に態度を変えるナミ。言っちゃ悪いがかなり扱いやすい、金は掛かるだろうが……。

「まあ良いじゃねえかキャプテンが決めたんだからよ」

「良いんじゃないやねえか。俺はナミさんがいればそれで十分だ」

「ゾロ、サンジまで……まあいっか」

既に一味の5人中4人が容認している事が解るとウソツプも少々肩を落としながらも笑顔を浮かべて一味への仲間入りを歓迎した。

「では改めて自己紹介を……レウス・R・リオスだ。先程まで無人島で数年間過ごしてた……時折来る海賊相手に戦いをして生きてきたから腕には自信がある、そして……悪魔

「の実の能力者でもある」

「マジか!？」

「どんな能力なんだ!？」

悪魔の実の能力者であると解るとルフィとウソップは眼を輝かせながら見つめてきた。どうやらどのような能力なのかひどく気になるようだ。レウスは軽く笑ってから能力の一部を開放し背中に翼を生やした。

「うおおおおおおおおおお!!翼が生えたああああああ!!カッコいいいいいいいい!!!」

「これが俺の能力だ。動物に変化する能力を持つてる、後は……飛べて火を吐ける」

「すげええドラゴンみてえ!!!」

「(まっドラゴンなんですけどね……)」

この後ルフィやウソップを背中に乗せて空を飛んだり火を吐いて見せてくれとせがまれたり、竜化した際に鱗が宝石のように美しかったためナミに鱗を剥いで良いかと迫られたりと割と散々な経験をしたレウス。若干一味に加入したこと後悔するのであった。

「サンジ、包丁砥ぎは終わったが他の仕事はあるか？」

「んじゃ皿洗い頼むぜ」

「承知した」

麦わらの一味に加入してから数日、順調に大海原を行く海賊船「ゴーイングメリー号」。

「可愛らしい羊の船首を持った船を使用して旅を続ける麦わら海賊団、今レウスはそんな一味の雑用係として活動していた。

「助かるぜ。お前が皿洗いしてくれるってんなら俺は何時もより時間を掛けて、ナミさんのおやつ調理が出来るぜ」

「役に立ててるなら何よりだ。一味に入ったからには何か仕事しねえとな」

「良い心掛けだ、ルフィにもその10分の1ぐらいの気持ちを持つてくれたらな」

「いや無理だろ。入って数日な俺でも解るぞ」

「だな」

皿を洗いながら調理を続けるサンジと雑談をするレウス。今現在一味の中で一番仲良くなっているのがサンジだった。それなりに話に乗ってくれるのでかなり接しやす、それに食事のリクエストにも対応してくれるからだ。

「うーん本当に綺麗ね……これなら結構な値打ちになるわね」

ラウンジではナミがレウスから貰った鱗をじっくりを観察しつつ鑑定を行っていた。剥いで良いかと迫ってくるので鱗をいくつか自分で剥ぎそれを渡したのだ。少しだけ

痛かった、この鱗は自分でいう所の皮膚だからしょうがないが。

「ねえレウス、もつと鱗貰えないかしら？」

「勘弁してくれナミちゃん……金欠になった時なら良いがそれ以外じゃ拒否するぞ」

「解ったわよ、まあ緊急時の資金面が解決したと考えれば儲け物ね」

「勘弁して欲しい物だ……」

ちよつぴり女性^{ナミ}に恐怖心を抱きつつ左手を変化させ竜頭の口から温風を吐き出し洗い終わった皿へと浴びせていく。能力の有効活用なのだがなんだか食器洗い機のような事をしているせいかちよつぴり複雑な気分になるレウスであった。

「洗浄と乾燥終わったぞ」

「いやマジで助かったぜ。誰かがやってくれるってのは良いもんだな」

「食器洗い機という扱いの定着は勘弁願いたいかな」

「まあそういうなって。また頼むぜ」

「……………まあ頼まれればやるが」

溜息を吐きつつナミの隣の席に座りつつ部屋の隅に置かれている袋を傍に寄せ中身を取り出してじっくりと見る。茶とおやつ^{ナミ}の準備が済みそれをナミに差し出したサンジと鱗を綺麗に拭き値打ちを出来るだけ高めようとしているナミはその行動が気になったのかそちらへと視線を向けた。袋から取り出したのは爪や牙のように見えた。

「レウスそれってなんだ？牙に見えるが」

「ああこれ？竜化してた時に抜けた俺の牙や爪だよ、何かに使えないかなあつて取つてあるんだ」

「へえ、それも貰つても良い？もしかしたら売れるかも」

「商魂逞しいなあナミちゃんは」

「そう言いつつ袋から幾つか牙や爪を差し出して渡す。

「結構硬いし鋭い、道具としてかなり使えそうね」

「まあ好きにしたらいいさ、その内また抜けたりするだろうし」

「そのようなやり取りをしていると船は目的地であつたローグタウンへと到達した。

別名始まりと終わりの町、”海賊王”イーストブルー ゴール・D・ロジャーの出生地であり処刑地でも

ある事で有名であるこの町が東の海から偉大なる航路グランドラインへ行く時の玄関口となる町である。

そのため東の海中の無法者達が偉大なる航路を目指しこの島に集結している。

「つつう訳で俺はこの財宝を換金してくる、ゾロ悪いが手伝つて貰えるか？この量だ、一人じゃ骨だからな」

「ああ分かつた。その後で武器屋に寄りてえがいいか」

「俺は良いぜ興味あるからな、でもお前金あるのか？」

「試しに聞いてみた所ゾロはうげつと言いたげな表情をした。数日共に過ごしたがこ

の一味の財布は如何考えてもナミが握っている。そして守銭奴な彼女が普段から金を渡しているとは考えにくい。

「んじや俺の元々の取り分の4割から工面してやるよ、それで買うつてのは」

「ああ悪いがそうさせて貰うぜ」

「んじや換金所へ出発」

ゾロと共に宝を分けて中央街へと歩いていく。中央街は活気に溢れ多くの人がいる、そんな所にあつた換金所は大きく宝は容易に換金出来そうだ。

「んじや俺は換金してくるから先に武器屋にでも行つててくれ」

「ああ解つた、んじや……あそこの店にいるからよ」

「おう」

一旦ゾロと別れ宝を担ぎ上げて換金所へと入っていくレウス、入ると直ぐに周囲から喜々とした目の店員から見られる。それを流しつつ換金の受付へと向かう。そこには如何にも頑固そうな老人が席に着いていた。

「……………おう。それを換金すんのか」

「頼むぜ」

「物を見せな」

ドスン！と大きな音を立てながら宝を老人へと差し出す。袋から宝を取り出すと老

人は猛禽類のような眼光で宝を品定める。時折目に付けるタイプのルーペで細かい部分などを見つめている。それを宝全てへと行っていくがかなりペースが速い。かなりのベテランのようで僅か1時間半で全ての宝の鑑定を終えた。

「……………待たせたな小僧、中々の上物ばかりで久しく嬉しくなっちゃまって長々と見ちゃまってた」

「いや結構早かったと思うけどな、この量を1時間半でやるんだから」

「んで査定額だがな……………こんぐれえだな」

老人が査定をしながら計算していた算盤に示した金額を紙に書き起こして見せてくれた。そこにはナミの査定額を上回る5000万ベリーの文字が書かれていたので思わず口笛を吹いてしまう。

「こりやうちの航海士の査定以上だぜ、この額で頼むよ。爺さんサンキュ」

「へへへっこつちこそ良い宝見せて貰ったぜ小僧、しかもこれは小僧が取ったもんだろ」「おっ解るの?」

「長年こういう仕事してると解るもんさ、中々いい腕だ。お前さんの幸運を祈る」

老人と最後に握手をし他の従業員が持ってきた5000万の入ったアタッシュケースを持って換金所を出る。このうちの6割、3000万がナミに入るから自分の取り分は2000万ベリーという事になる。まあ2000万という大金を持ち歩く訳には行

かないので基本的に管理はナミに任せるつもりでいるが。先程ゾロがいるといった店に入ってみるとそこには腕を突き出しているゾロと地面にへ垂れ込んでいる眼鏡の女性と店主と思わしき男性、そして床に突き刺さっている刀が目についた。

「おいゾロどういう状況？」

「レウスやつと来たか。いやちよつと妖刀と勝負をな」

「ふくん……んで買うもん決まった？」

「一本はな。なあもう一本選んでもらっていいか？」

地面に刺さった刀を抜きつつ女性に頼むゾロ、その後ゾロの男気に惚れたのか店主が店で最高の刀である良業物「雪走」という刀を先程の妖刀と共に無料で手に入れた。

「やつぱ三本あると落ち着くな」

「そういう物なのか……？まあいつか、なあゾロ。金使わなかったんだし飯でも盛大に食って行かねえか？50000万って額が入ってよ、俺の分だけで考えても20000万だ」

「そりやすげえな、んじやどつかの店で派手にやろうぜ」

この後、ゾロと共にたつぷり飲み食いした結果、20万ベリーの支払いとなった時流石に食いすぎたかなと顔を見合わせたそう。

空の王者、偉大なる航路へ

「流石に食い過ぎたな、身体が重たくなっちゃった」

「そりゃあれだけ酒やら肉を食べばそうなるだろうよ、さてとこれから如何する？」

「俺は適当に散歩して帰る、このままだと流石にキツイ」

「解った。俺は先に船に戻ってるよ」

食事をたっぷりと堪能した後ゾロと別れ一足先に船へと向かう。気分良く船へと向かうレウスだが風が妙に強く潮の香りが先程より強くする事に気が付く。島にいた際に何度も経験した事がある感覚、湿った風と強い潮の香り、大きな嵐が来ている。嵐が近づいている事を察し足早にゴーイングメリー号へと向かう。

「雲行きが怪しくなってきたな、これは出航の準備をしないといた方が良いかもな！」

地面を強く蹴りつつ海岸線へと出ると波が大きく荒れ始め巨大な雲が近づいている事が分かった。そして遂に雨が降り出してしまった。

「ちっ降り出しやがった、面倒だ……んっ？」

雨が降り出し苛立ちを覚えたが次に思ったのはメリー号の傍で何かの作業をしている男と大型のライオンの姿。なにやら船には爆薬と思われる物が巻き付けられている

のも見えた。ぱつと見ても敵だ、巨大なライオンを連れてくる男は何度も何度もマツチを付けようとしているが風と雨の勢で消えるせいが苛立ちながらもマツチをすり続けている。

「……脅かすか」

無駄な力を使うのも面倒臭いと考え左腕を竜化する、潮つ気が強い空気を勢いよく吸い込みつつ男の背後へと近づきある程度吸い込んだ所一気にそれを開放する。

「——グオオオオオッ!!!」

「うっひゃあああああああ!!!?」

凄まじい爆音と本能に直接訴えかける竜の咆哮に男は身体を縮めこませ耳を思いっきり抑える、何が起きているのかも理解できずに理性は混乱し本能は恐怖に脅えている。

「ソイツ!!!」

「おわあああああ!!!?」

驚き体が浮いた瞬間に男の身体を掴み一気に町の方へと投げ飛ばす。竜化していた為か一気に流星のような勢いで飛んでいく男を慌てて追いかけていくライオン、満足げなレウス。なんともシユールな絵となった。

「おっレウス〜!」

「んっ?」

男を片付け船に乗り込もうとすると背後からウソツプの声がするので振り返ると大荷物を抱えたナミを連れながら巨大な魚を引きずるようにこちらに向かってくる。

「大変なのよ大嵐が来るの!大急ぎで出港の準備をして!!」

「つて大変だナミ後ろから海軍だあ!!」

漸く船へと迫り着いた二人に続いて現れたのはこの世界で秩序と正義をもたらず軍隊の海軍。海賊である自分たちにとつては最悪の敵である、どうやら船長のルフィの存在がバレて船その物を拿捕しに来たのだろう。

「ウソツプ帆を張れ!一旦海へと出るぞ!」

「ハアツ!?おいでもルフィにサンジにゾロは?!」

「俺の能力忘れたか?俺が飛んで迎えに行く!」

「そっかその手があったわ!ウソツプ錨お願い!帆は私がやる!」

「わ、解った!!」

船の準備を任せレウスは船から飛び降り海軍へと相對する、なんだかんだで海軍と戦うのは今回が初めてだ。

「貴様大人しく投降しろ!!」

「誰がするか!!バインドホイース竜の咆哮!!」

再び竜化し今度は全力で喉が張り裂けんばかりの咆哮を放つ、爆音で周囲の地面は震えながら割れていき海軍の兵士たちの心を強く揺さぶる。精神に直接揺さぶるかのよ
うな爆音に本能が恐怖しその場で立ち尽くすようにへ垂れ込む。

「ア……………あああ……………」

「ひ、ひいいいい……………!!!」

「こんなもんか、フツ!!」

海軍兵士の戦闘不能を確認すると船へと乗り込み出港の準備を手伝う、そして増援が
来る前に船を出す。荒れ狂う波に船は大きく揺れながらも進み始めるとその直後にこ
ちらへと走ってくるルフィ、ゾロ、サンジの姿を確認した。

「おおおおい待ってくれよ〜!」

「ナミスワアアアン只今戻りました〜!!」

「もう船出したのかよ!」

「レウス!」

「よし来た!!」

大きくジャンプし身体を一気に竜化させる、普段のような人の形を留めるような生易
しい物ではない。全身その物を竜へと変化させる竜化、身体は膨張しながら一気に鱗や
甲殻が身体を覆っていき太く長い尾も生えてくる。大空を自由に飛ぶ為の翼を広がり

レウスは完全なりオレウスとなつてルファイたちの元へと向かつていく。

「うっひよひよひいっいカッコいいっ!!」

「助かったぜレウス！」

「おいルファイ何時まで感動してやがんださっさと乗れ！」

完全竜化し目の前に降りて来たレウスに感動するルファイを無理矢理引つ張つて背中に乗る二人、そしてレウスは飛び立った。向かつてくる砲弾などでは止める事など出来ずあつさりと回避しながらメリー号へと戻つた。

「はははははっ面白かつた〜！」

「いやあ危なかつたなあ……ありがとなレウス、後で美味しい飯食わせてやるぜ」

「やれやれだな……」

嵐の中の飛行は初めてだったためかレウスは若干お疲れ気味だった。加えて完全竜化はそれなりに体力を消耗してしまう技である。

「はあはあ……なんか精神的に疲れたなあ……。嵐の中は出来れば飛びたくねえな」

「こんな強風の中をだもんね。でもお疲れさまレウス、貴方のお陰で皆欠けずに行けそうよ見てあれ！」

「んっ島の灯台か？」

ウソップの言葉通りそこには光があつた。嵐の中にポツンと浮かんでいる光は孤独

だが強く光で先を指さす、これから無難に挑む冒険者達を祝福するように指された光。それが示すものは偉大なる航路、グランドラインの入り口。

「導きの灯……グランドラインの入口があるわ！」

「あの先に……!!」

「折角だからグランドラインに船を浮かべる進水式でもしようぜ」

「おっ良いなそれ！」

「おいこんな嵐の中で?!」

嵐の中、甲板に出された樽。それを6人のクルーが囲む。

「俺は、オールブルーを見つける為！」

樽を持ってきたサンジが一番最初に足をのせ自らの夢を語る。4つの海の魚が生息する奇跡の海を見つける事、どこにあるかも解らないのにそれを語るサンジの目は輝いていた。それはローグタウンにて見た近海物という魚にもあった。他の海の魚が取れる、それはオールブルーがあるのではないかという思いを加速させた。

「俺は海賊王！」

かつて偉大なる航路を制覇した偉大な海賊ゴールド・ロジャー。彼はそう呼ばれた、その称号をルフィは目指す。全ての海賊の頂点に立つ存在、それが海賊王。険しい道であるだろうが彼の表情は明るい。

「俺は……最果ての海を見る為に!!」

レウスが叫ぶ。元々は旅をするのが目的だった、だがそんな言葉はこの場に似つかわしくない。ならばもつとでかい旅を、大きな冒険をする事を目的とする。この世界に来て数年、もう元の世界に戻る事は出来ないだろう、ならもつと大きな世界を見たいと言う夢が生まれた。

「俺あ大剣豪に!!」

ゾロの夢、それは果てしない先の自分。ひたすらに強くなるという事、そしてある男に勝つ事。王下七武海、鷹の目のミホーク。世界最強の剣士、ゾロは一度敗北したがもう二度と負けない、必ず世界一の大剣豪になると誓った。この先に、あの男が待っている……静かにゾロの闘志が燃え滾る。

「私は世界地図を描くために!」

ナミの夢は壮大で凄まじい。自分の目で見て自分の力で地図を描く、素晴らしいと同時にスケールがデカイ。幼き日に決めた夢を叶える為の一步が始まる、苦難の旅に成るだろうとこの仲間ならば絶対に大丈夫!と思える。

「お、お、お俺は勇敢なる海の戦士になるためだ!」

ウソップは偉大なる海賊である父の背中を追っている、いつか自分もそんな父のようになりたいと願っている。子供だった自分と母を故郷に残してまで海に出た父、今もこ

の海の上で命を張って生きている父を尊敬しながら自分も勇敢な男に成り、戦士に成ると！

それぞれの夢を分かち合った一同、これから自分たちはそれを叶える事が出来る場所へと足を進める。その夢を目指す為に進むと誓い笑う、そして大きく足を上げ樽を――割った。

「「「「行くぞ!! 偉大なる航路!!」」」」

空の王者、海の黒き城と会う。

「偉大なる航路への入り口は山よ！」

「山!？」

進水式も終えて一度室内に入って身体を温めるついでに身体を休める事にした一同。そんな時ナミが偉大なる航路の入り方について口を出した。思わずウソツプが聞き直してしまふ。

「そう！海図を見てまさかとは思ったんだけどね、”導きの灯”が差していたのはここ”赤い土の大陸”にあるリヴァース・マウンテン」

海図に記されているのは4つの海、即ち北の海、南の海、東の海、西の海に繋がっている線。それは運河を表す線でありそれが山へと向かって伸びている。それが頂上で交わり最後に偉大なる航路へと流れ込んでいる。

「運河あ!?!バカいえ幾ら運河があろうと船で山越えなんて出来るわけねえだろ!？」

「でもそう描いてあるのよ」

「そうだぞお前ら、ナミさんの言うことに間違いがあるかよ!？」

「でもそりゃバギーから奪ったやつだろ?その時点で偽物って線もあるんじゃないやねえか

「？」

それぞれの意見をぶつけ合う、まあ一般常識的に言えば船で山を登るなど考えられない。だがこれから行く海はそんな常識など通用しない魔の海、その入り口が常識を適用出来なくても可笑しくはない。

「いや、ナミちゃんの言う通り入り口は山だ」

レウスが口を開いた。全員がそちらへと向き一部は同意者がいることに喜び一部はお前もんなこと言ってるのかよつという視線を向けている。

「俺も船に戻ってくる間に一応情報を集めてきたんだ。そしたら入り口は山しかないって事になった」

「なんでだよ、こことかこう行けば行けんじゃねえのか？」

ゾロが指差している所は山を通るのではなく真つ直ぐ下へと向かつて直接行くルート。確かにそれが出来れば一番いいのだが……。それをナミとレウスは否定する。

「いや、それは出来ないんだよ。そこは風カームベルトの海と呼ばれる風の帯で、完全に風がない無風の海域なんだ。風を受けて進む帆船にとってこれは致命的だ」

「んじゃ漕いで行けばいいじゃねえか」

「それが出来れば誰でも偉大なる航路に入れてるのよ」

「ってやばいぞナミちゃん!?!外を見る嵐から出掛ってる!?!」

大声で叫ぶレウスに言われて外を見てみると前方は全く雲がない快晴の海が広がっている、それを見て顔を青くするナミ。この船はいつの間にか“風の帯”に向かつてしまっていることに気付いた。

「たつ大変急いで反転!？」

「は〜いナミさ〜ん♡って舵おつも!?!か、海流の流れがキツイ!!！」

「ああもうしやねえな!俺が竜化して直接航路を戻す!!きついけどな!!」

「お願いレウス!!」

外へと出ていくレウスは即座に全身を完全竜化させ船を足で掴み嵐の海へと戻る、飛び上がる直前に“風の帯”に入ってしまった海面から超大型の海王類が飛び出してきた。どれもこれもゴーイングメリー号が粒のように思えてしまうような大きさ。

「うおおおおおでつけえええええ!!?!」

“風の帯”は海王類の巣なのよ!しかも超大型の!!これが“風の帯”から入れない理由なの!!」

『おい聞こえるかみんな!?!このまま入り口に直行するぞ!!衝撃に備えろ!!』

外から聞こえてくるレウスに声を聞きナミが即座に帆を畳むように指示をだしルフィ達は急いで帆を畳む、そして完全竜化したレウスは凄まじい暴風と豪雨に晒されながらも必死に体勢を整えて“赤い土の大陸”の隙間の入り口の直線状になるように船

を落とし、自身も甲板に落ちた。

「レ、レウス大丈夫!？」

元の人間体に戻りながら甲板に落ちたレウスをナミが抱き起すとサムズアップをしながらレウスは起き上がった。

「あ、ああ大丈夫だ……だけど海水を浴びすぎた……力が入らねえ……」

「十分よほら見て!!」

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

海水を浴びすぎたために力が身体に入らなくなってしまったが既にゴーイングメリー号が入り口へと突入し、クルー全員が歓声を上げながら偉大なる航路への入り口へと至ったことへ歓喜した。

「おいレウスおめえやつぱりすげえな!!」

「感謝するぜレウス」

「おいレウス何が食いてえ!?!好きなもん作ってやるぜ!!」

「お前が仲間でよかった!」

「本当!レウスありがと!」

それぞれが自分の行為に感謝し礼を述べてくれている事に喜びを覚えながら抱きついてくるナミに慌てるレウス。

「お、おおいナミちゃん!?だ、抱きつかないでくれよ!?あわわわわ!!」

「何恥ずかしがつてるのよ?」

「い、いいいいいいだつて……!!」

「(ふくんレウスつて意外に可愛い所あるのね、良い事知っちゃった♪) きゃ〜レウス
かつこい〜♪」

「ぎゃあやめて〜!!!」

更に強く抱きついてくるナミに顔を真つ赤にしながら大慌てするレウス、無人島に一人
で住んでいた為か女性と触れ合う機会など一切なくまして抱きつかれた事など前の
世界でもなかったのが女性に触れ合われるということに対して全く耐性がないレウス。
そして限界を超えたのか顔を真つ赤にしたままあわわわつと言いながら硬直してし
まう。

「つてやりすぎたかしら……?」

「あわわわわ……」

そんなレウスを壁により掛かせてからナミは吹き抜ける風を堪能するように声を
上げる、船は頂上から下る海流へと乗り一気に山を駆け下りていく。凄まじい速度で駆
け下りていく船に爽快感を感じる一同は叫びながら駆け降りる快感に身をゆだねる。
だがそんな時不気味に響く低い音が聞こえてくる。

「なあなんか聞こえてこなかったか？」

「知るかー行けー!!」

「風の音じゃない? 変わった地形が多いのよきつと!」

「気のせいだと思う、と確かに自分でも僅かに聞こえる声をそう割り切ってしまった。

「ナミさん!! 前方に山が見えるぜ!!!」

「山!? そんなはずないわよこの先の双子岬を超えたら海だらけのはずよ!」

「でも確かにあるぜ!」

不気味に聞こえてくる音と霧のような水しぶきで悪い視界の奥に見える黒い山のような影、だが海面上では山などない為ナミは勘違いと思ってしまった。そして霧が晴れていくとそこには……巨大な黒い壁があつた。

——ブオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

「わああああああああああああ山じやねえええええ!!」

「黒い壁だああああ!!!」

「ち、違うわ壁じゃないわ!」

「クククク、クジラだああああ!!!」

空に向かって大きな声を出しながら待ち構える巨大な壁にしか見えないもの、それはあまりにも巨大すぎる山のようなクジラであった。このままクジラに襲われてしまう

!!

「どどどどどどどうする?!」

「戦うかあ?」

「バカ言つてんじゃないわよルフィ戦えるレベルを遥かに超えてるでしょうが?!」

「お、おい左に抜けられるぞ取り舵一杯いいいい!!」

取り乱しまくる中ゾロがクジラの左側に抜けられるスペースを発見した、大急ぎでサンジ、ゾロ、ウソップが舵に齧る付くかのように取りつき力一杯に切ろうとする。三人は渾身の力で舵を動かす。

「ふんぬわああああああああ!!!!」
「おおおお!!!!」

「何舵折つてんのよあんたらああああ!!」

この強すぎる流れに加えてサンジにウソップ、そして怪力のゾロが一斉に舵を切ろうとした結果逆に舵が耐え切れずに音を立てて折れてしまう。それでも三人は根元を持つてなんとか切ろうとする。が切りにくくなつた舵は全く動かない。

「あつそうだ!!」
「レレレレウス起きてええええ!!」

レウスへと飛びつくナミ、先程のように童化して貰い船を持ち上げて貰い状況を打破して貰おうと考えた。が、レウスは自分が面白がつて強く抱きついた結果いまだに放心状態になっていた。

「お願いだから起きてえええええ!!?!」

「あつわわわ……ナ、ナミちゃん……? ってなんでまだ抱きついてるのおおおお!!?!」

「んなことどうても良いから前見てまええええ!!?!」

「へっ……? ってうおおおおおなんじやありやあああああ!!?!」

漸く正気に戻ったレウスは目の前に迫っている巨大な壁を見た。目を覚ましたと思ったら再びナミが抱き付いているし目の前には巨大な壁があるわのダブルショックを受けるレウスは混乱するが抱きついて来るナミの懇願に正気に戻る。

「お願いだからまた飛んでええええ!!?!」

「わ、解った!!」

なんとか抱きついてくるナミを引き剥がし再びリオレウスの姿へと変身し船を掴み飛び上がるうとするが——全く船は持ち上がらない。

『ぬおおおおお!!海流が強すぎるううう!!? さっき海水浴びすぎて力があああ!!!』

「お願い頑張つてええええ!!」

『あつそうだ!!進路をずらせばいいんだ!!』

必死に飛び上がるうとするレウスだが全く持ちあがらない。そこで船の前部を掴み左へとずらそうと翼を動かそうとした時、船の船首部分の大砲が火を噴きクジラを捉えた。

「『た、大砲おおおお!!?!』」

「よおくし止まったか?」

何時の間にか船首部の大砲部に入ったルファイがそのまま大砲をぶっ放したのだ。しかもその衝撃とクジラにぶつかった砲弾の爆風で船の勢いが著しく低下した。結果としてメリー号の速度はゆっくりとした物になった。これならばぶつかっても大した被害には……羊頭の船首が大破したが無事船は止まった。

「お、おれの特等席いい!!?!」

「『……』」

ルファイ以外の全員が大砲で撃たれた事で怒るのではないかというクジラにビクつきながら完全に停止していたがなにもアクションを起こさないクジラ、そしてゾロが大声を張り上げてレウスに船を引っ張るように指示する。

「なんだいったいどうなってんだ!!? 砲撃に気付いてないのか!!?」

「身体がでか過ぎて痛くないのか!!? それともトロいだけか!!?」

「知るかな事!!? レウス次急ぎで離れるお!!」

『言わずもがなあああ!!?!』

船を移動させるレウス。必死に船を引っ張る中再びクジラが大声を上げ思わず動きを止めてしまう。全員が大声で耳を押さえている中、ルファイは明確な怒りを表しながら

クジラを睨み付けていた。

「ル、ルフィ……?」

「お前……!!俺の特等席に、何してくれてんだア!!!」

怒りのままに腕を伸ばしてクジラの巨大な目玉を殴りつけた。ルフィ、なんとも怖いもの知らずというかバカというべきなのか……。

「『ドあほおおおおおお!!』」

流石に如何に巨大な身体とはいえ目玉を殴られれば気が付くのかギョロリとこちらを見た。それでも臆さず掛かってこいとルフィは言うのでゾロとウソツプが蹴りつけた。そしてクジラは大きな口を開き凄まじい勢いで空気と海水を飲み始めた。

「うおおおおお!!」

「やっべえええ飲まれるぞおお!!」

「どうすりゃいいんだこれ!」

「レウスウウウ!!」

『ぬおおおおお!!』

もう形振り構ってられなくなつた状況になりレウスは全力で羽ばたきなんとか脱出を図ろうとするが空気も共に吸われている為か思うように羽ばたけず脱出不可能という状況になってしまう、更にルフィは振り落とされてしまった。

『の、飲まれるうううううううう
!!!??』

「なあ……………これどう思う?」

「い、いやどう思うって……………てつきりクジラに飲み込まれたと思ったんだけど……………」
「こ、こりや夢か……………?」

完全にクジラに飲み込まれ、もうだめかと思い全員が諦めていた時。視界に広がっていたのは青空だった。あまりに意味不明な状況に全員が呆然としレウスも元の人間体に戻ってしまい海?に落ちかけながら船へと降りた。

「夢……………か?」

「幻……………?」

——ぎざびつ

「じゃあ目の前のこれは?」

「大王イカだああ!!!」

「……………どうなってんだああああああああああああああ
!!!??」

空の王者、謎の男女と老人とクジラ

「いやお前……何やってんの？」

「とりあえず、殴っておいた!!」

「——えくつと……とりあえず状況を整理すると俺たちを飲み込んだこのクジラはラブーンという名前で50年間ずっと仲間を待ち続けている。お爺クロツカスさんさんはこのクジラの面倒を見ている。んでルフィが殴ったこの二人は近くの町のゴロツキでこのクジラを食料にしようとしていると……?」

「ああそれでいい」

飲み込まれた直後大王イカに襲われかけたメリー号だが、イカは何故か胃袋の内部にあつた島のような船から放たれた銚で仕留められた。その銚を放つたのは双子岬で灯台守をしているというクロツカスという老人であつた。

そして出口を教えて貰い出ようとした時激しく胃袋が揺れた、それはラブーンが”赤い土の大陸”レッドランドに頭をぶつけていることで起きている揺れだった。そしてその揺れで胃酸の海に落ちてきたルフィと謎の男女の二人組。一応引き上げると男女は胃袋の壁

置などの最低限の事しか知り得ていない。船医の確保は急務といえるだろう。

「ナミちゃん、次の仲間は船医が良いかもね」

「そうね。これから偉大なる航路の本格的な旅が始まるわけだし、次の島で探してみましようか」

完全に一味の雑用係ではなく頭脳であるナミの相談役という立場を確立しつつあるレウス、漸くラブーンの外に出られるとレウスは安心したのか甲板に座り込んでしまった。偉大なる航路突入からラブーンとの遭遇、一気にさまじまなことが起きる中レウスは度々完全竜化をしながら無茶をしていた、そのせいか疲労がたまってしまったのだ。

「ごめんナミちゃん……ちよつと休んでいい……う？」

「へっああそうね、レウス凄い頑張ってたもんね。いいわよ部屋で休んでて」

「30分位横にならせて貰うよ……」

完全な竜化は身体にそれなりに大きな負荷をかける為、疲労はかなり蓄積している為かフラフラと男部屋に入るとドサリと倒れるようにハンモックに横たわりそのまま目を閉じて疲れに身を任せたまま眠りについた………が

「……えらい揺れてるなおい」

折角いい感じに眠れるかと思いきや船は酷く揺れている。固定されているベットではなくハンモックなせいで揺れは余計に酷く眠れたもんじゃない。まあハンモック

クが一回転とかしているのに寧ろよく酔いそうになるだけで済んでいるものだ。なんとかハンモックから降りつつ気分を整えていると揺れは収まっていく。外に出るとウソツプがメインマストに鉄板を打ち付けていた。

「つたくルフィの野郎船をバキバキにしゃがって……!!」

「ウソツプ何やってんだ……?」

「ああルフィの野郎がマストへし折ってラブーンの傷口にさしやがったんだよ!!」

「……どういう事だよそれ」

言葉だけ聞くと全く意味が解らない、何故傷口に塩を塗る所では騒ぎではない事をしたのか。話を聞くと額の傷が開いた部分を塞ごうとしたのだろうが、寧ろさらに傷口が開きそうだ。取りあえず接岸されている岬へと上がるとそこにはラブーンの額になんとも歪んでぐちゃぐちゃな麦わら海賊団のマークが描かれており、それを描いたと思われるルフィはそれを見ながら満足げに見上げていた。

「おいおいルフィ……なんだ次の仲間はそのクジラかよ……?」

「おうレウス! どうだ俺とクジラの戦いの約束だ!」

「……? ああうん……いいんじゃない?」

「だろ!!」

もう面倒臭くなったのか適当に答えると満足げに笑うルフィ。酔いが取れずにフラ

フラしていると椅子に座って海図を広げて航海計画を立てていたと思われるナミが大声を上げた。

「ゴ、コンパスが壊れちゃった……!!方角を示さない……!!」

「お前たちは如何やら本当に何も知らずに来たらしいな、命でも捨てて来たのか?」

ぐるぐると針を回し続けているコンパスを見て面白がっている一同を見つつ呆れているクロツカス。自分たちの反応は偉大なる航路の恐ろしさを全く理解していない証拠になっているからだ。

「偉大なる航路の島々の多くは磁気を帯びる鉱物を多く含む為に航路全域に異常をきたしている。更に波や風に恒常性は一切なく出鱈目だ。この海では一切の常識が通用しないという意味がそれだ」

「方角を知る術も無くて風も波も出鱈目……知らなかったわ、皆ドンマイ!!」

「いやドンマイじゃねえよ!」

「そんな偉大なる航路を航海するには『記録指針』ログポースが必要となる」

記録指針。偉大なる航路専用のコンパスのような物で、それに島の磁気を記録させることで次の島への方角を示すらしい。

「こういう奴か?」

「おおっそれだ、なんだ持っているのではないか」

ルフィが差し出した腕時計のようにベルトが付けられている球体の中に指針がある特殊なコンパス、それこそが記録指針であった。どうやら先程の二人組がドサマギで逃げた時に落としたものを拾ったらしい。

「これを使って航海をするのね……何の字盤もない」

「この海ではその記録指針の示す磁気だけが頼りになる。そしてこの山から一本の磁気を選び旅をするという（つていう）訳だ、だが最後には一本の航路に結びつく。その先にある島の名は“ラフテル”。偉大なる航路の最終地点だ」

ラフテル。全ての海賊たちが目指す偉大なる航路の最後の島、そこを確認したのは海賊王の一味だけ。

「なあにそこに行ってみれば良いだけだ。行ってみりゃ解るさ、そこに」
「^{ワッ}とつなぎの^{ビー}大秘宝^スがあるのかは」

「……だなんてルフィ、その空になってる皿は……？」

「お前全部一人で食いやがったのかエレファント・ホンマグロおおお!!!」
「骨までねえし!!」

「俺も食いたかったんだぞルフィイイツツ!!!」

サンジが持ってきてくれた食事、それ全てを平らげたルフィ。これが原因で記録指針が壊れるがラブーンの件のお礼ということでクロツカスから新しい記録指針をもらえ

るのであった。そして先程の二人組、ミスター9とミス・ウエンズデーと名乗る二人組を町へと送るため、麦わらの一味はウイスキーピークという島を目指す航路に行くのであった。

空の王者、歓迎の町へ

リヴァース・マウンテンの麓、双子岬を出た麦わら海賊団は一路“ウイスキーピーク”を目指す。ゴーイングメリー号が行く今日の天候は冬、時々春。先ほどまで暖かい陽気は鳴りを潜め空からは止め処無く雪が降り続け船の上には雪が積もっていた。

「クシユン！うー寒い……さっきまでぽかぽか陽気で暖かったのに」

「ナミちゃん暖かいコンソメスープ作ったけど飲むかい？サンジの作った物ほど美味しくは無いだろうけど」

「ありがとうレウス、いただくわ」

舵を取りつつ片手間に作ったスープをナミへと差し出すレウス、雑用係の仕事はそれなりに多い。今は舵取りをしている。ルフィとウソップは降り積もっている雪で雪遊びをしながらはしゃいでいる、ナミはそれを室内から見つつ呆れている。

「あつこれ美味しい」

「そう言つて貰えると嬉しいよ」

「ナミすわあくん、愛の雪かきいかほどに♡」

「止むまで続けてサンジ君」

「イエスマム♡」

サンジはサンジでナミに扱き使われている。本当にそんな扱いで良いのかと疑問に思うが本人が望んでやっているしそれなりに嬉しそうだし放置しておくとしよう。ゾロの姿が見えないが大方雪に埋もれながら寝ているのではないだろうか。

「おい君、この船に暖房設備は無いのかね？」

「寒いわつというかそのスープ私も貰っても良いかしら……?」

「うっさいわねあんた達!!客じやないのに凶々しいわよ!」

この船がウイスキーピークに向かう原因となった二人、Mr. 9とミス・ウエンズデー。毛布に包まりながら震えているので一応レウスはそつとスープを入れたカップを差し出した。風邪を引いて咳き込まれたら煩くて堪らないからだ。

「ありがとうえつと」

「レウスだ、好きに呼びな」

「そだねえレウス、確か温風出せるわよね？」

「まあそりや出せるけど……」

「んじや私のそばにいなながら温風出してくれない？」

「俺の存在意義って一体……」

軽くエアコン扱いされている事に呆れつつ左手を竜化させ温風をナミに向かって吐

き出す、ナミは暖かそうにしつつ嬉しそうな声を出している。まあ役に立てている事を理解しつつ舵を取るレウスである。が次の瞬間レウスの仕事は倍増するのであった。

「あつ拙いズレてる!?! 右へ45度修正!」

「解った!」

「レウス大変だ目の前にでっかい冰山だあ!!?」

「任せる竜火球!!」

「大変だ船底で水漏れだ!!レウスちよつと船持ち上げてくれ!!」

「わ、解った!!」

「レウス頑張れ!!デカイ風が来るぞ!!」

『だらああああしやい!!』

一気に変貌していく偉大なる航路の海や天候。急激に変わる風向きや激しい海流の流れに翻弄されつつ船を操っていく一同だがレウスの仕事量はダントツで多かった。なまじ空を飛べたり火を吐けたりするので迫る冰山を破壊したり船底の穴を塞ぐ為に一時的に船を持ち上げたりと大忙しであった。こんな能力を得た事を(初めて)後悔する(後悔し始める)レウスであった。

「んっく……よく寝たくっついておいお前、幾らなんでも気抜きすぎじゃねえか? 気候が良
いからって」

ようやく気候などが安定して来た頃、今の今まで眠りについていたゾロが目を覚ました。目の前でぐったりと倒れ伏しているレウスに小言を垂れるが疲労で何も言う気が起きないレウスはそのまま横になり続けていた。そんなレウスを放置しつつゾロは二人組の前で座り込みじろじろと顔を眺めた。

「おーおー悪い事考えてる顔だ…名前、何つつたかなお前ら」

「ミ、Mr. 9と申します」

「ミス・ウエンズデーと申します……」

「そう、どうもその名を初めて聞いた時から引つかかかってんだ俺は。どつかで聞いたことがあつたような無いような……」

身体をビクつかせながら汗をかいている二人に悪い笑みを浮かべながら問いつけて行こうとするゾロだが背後から般若のような恐ろしい形相をしたナミに殴られる。

「アンタあ……よくもまあ今までのんびり寝てたわね……!!レウスがアンタの分以上に働いてくれたから何とかなつた物の……!!」

「ああいいよナミちゃん……取りあえず……俺、寝てて良い？」

「うーん……」

正直悩み処であつた。今は気候が安定し安全に航海が出来ているがこの後また荒れないとも限らないからレウスには緊急時の最終手段として身体を休めてほしい感じも

する。此処まで頼りすぎている感じもする。

「……良いわよレウス、ゆっくり身体を休めて。一本目の航海が終わったみたいだし」

「島だア!!でつけくサボテンがあるぞお!!」

「ねっ?」

「みたいだね」

見えた来た島、目的地であるウイスキーピーク。それを確認するとMr. 9とミス・ウエンズデーは海へと飛び込んで泳いでいく。

「……んじゃ俺寝てるから、何かあったら起こしてね」

「おうお疲れさんレウス、寝る前にさっきの残りのおにぎり食うか?」

「貰うよ」

おにぎりを食べつつ室内に入り、完食するとハンモックに乗っかり瞳を閉じる。徐々に睡眠が襲い掛かり意識を沈めていった……。

眠りについていているレウス、此処まで身体を酷使してきた為じつくりと身体が自分を休ませようと食欲に睡眠を食っている。ただでさえ完全竜化は身体に負担を掛けるのに立て続けに起こる（立て続けて起きる）状況の対処に動いた為かかなり睡眠は深い。体力の回復に勤しんでいた……が

「ぐっはっ!!」

「んあ?」

何かの断末魔に目を覚ますと竜化した左腕の竜頭が何か男の頭部を噛み砕こうとしていた。周囲にも数人の男が呻き声を上げながら蹲っている。どうやら無人島時代の寝ている間に誰かに襲われたら反撃するという癖が役に立ったようだ、既に全身をボコボコにした連中を甲板に叩き付けると苦しげに口を開き始めた。

「チ、チクシヨオ……何だこの強さ……?」

「こんな奴が賞金も掛かってないってどうなってるんだ……」

「賞金……? ははあくん、そうかこいつら賞金稼ぎか」

身体の骨を鳴らしながら重症を負っている男達を外の岸に投げ飛ばしながら大体の状況を察する。この島はあの二人組の目的地↓ならその仲間も同じような連中↓賞金稼ぎもいるだろ↓船の金品狙ってきたけど自分に手を出そうとしたと言った所だろう。

「よく寝たし疲れもあらかた取れた、うし飛ぶか」

身体を竜化、人獣形態へと変身する。翼を羽ばたかせて島を上から見ている。石造りの家屋が多く立ち並んでいるが目を引くのがそこから中で倒れている人間たち、恐らく自分を襲ってきた奴らの仲間だろうがゾロかサンジ辺りが倒したに違いない。

「あつ!! レウスウ〜!!!」

飛行を続けていると下からナミの声がする、その声に従って下へと降下するとそこに

は血だらけになって、髪を異常にロールさせている男と不機嫌そうなゾロとナミがいた。

「どういう状況……?」

「そ、空をつ……!?」

「レウス良く聞いて!これから大急ぎでミス・ウエンズデーを保護して頂戴!ゾロじゃ心配で無理よ!」

「んだとごらあ!?!」

「ええつと詳しい事を聞きたいけど兎に角保護すればいいんだなナミちゃん?」

「ええ。彼女を狙っている奴が居るだろうけどそいつら倒しちやつてかまわないから!!」

「了解、んじゃ行つて来るよ」

ジャンプで一気に高度を稼ぎつつ上空からミス・ウエンズデーを搜索する。確かにゾロより空を移動出来る自分が搜索からの保護という役目は適任だろう。搜索をしている時巨大な爆音が響く、爆音の方向へと目を向ける。高い飛行力を持つリオレウス、その飛行力を補佐する為に高い視力を持っている。その視力が黄色い鳥に乗ったミス・ウエンズデーとコートを着た男と傘を差した女を捉えた。

「見つけた、一気に距離をつめる……!!」

一気に空気を切り裂くように降下していくが男が何かをミス・ウエンズデーに飛ばそうとしているのを見ると更に速度を上げる。そしてミス・ウエンズデーの前へと着地し飛んできた物を身体で受け止めた。それは直撃したと同時に爆裂した。が火炎に高い耐性を持つ為爆発にも十二分に耐えて見せた。

「おい大丈夫か、ミス・ウエンズデー」

「わ、私生きてる……？？そ、その声もしかして貴方Mrレウス?!どうしてここに!?!というかその姿は!」

「良く解らないんだがうちの航海士に君を保護するように言われたんでね、それで助けた」

思ったよりも爆発のダメージは少なく身体は普通に動いた。流星は火属性に高い耐性を持つリオレウスとிட்டた所か。

「一体何者だ、てめえ俺たちの邪魔するとは!!」

「ただの海賊さ。お前と同じ悪魔の実を食った、海賊さ」

「その姿……どうやら動物系ゾオンの能力者みたいね」

「まあな。さてと、直ぐに終わらせてやるから覚悟してとけよ、ミス・ウエンズデー。君は隠れてな」

ミス・ウエンズデーはレウスの言うとおりに黄色いカルガモのカラーと一緒に岩場に

身を潜めた。

「お前、この町の平社員を切りまくった剣士の仲間か。何故そいつがアラバスタの王女を庇う？」

「航海士に保護しろって言われたから、それだけ」

「はつまあいさ。いずれにしろ俺達の邪魔をする敵だろ、消すぞ」

「キャハハハ、そうね邪魔ね。地面の下に埋めて上げるわ♪」

「——出来るならな」

刹那、レウスの姿が消えた。Mr. 5とミス・バレンタインはその姿を探すがレウスは二人の懐に飛び込んでいた。一気に地面を蹴って一気に加速しながら急激に回転、そしてそのまま二人へと突撃した。

「火竜玉!!」

「ぐっはっ!!!」

レウスの技をまともに食らった二人はホームランボールのように吹き飛び巨大なサボテンに突き刺さった。それを見ていたミス・ウエンズデーは呆然としながら戻ってくるレウスを見つめていた。

「あ、貴方……何者なの……!?!」

「唯の海賊さ、竜人って特徴があるけどね」

空の王者、秘密組織の目的を知る

「……ああ成程、そういう経緯で俺に彼女を保護してくれって言ったのか」

「そう言う事。流石レウスね、バツチリと保護してくれたわ」

ミス・ウエンズデーことビビを保護し彼女を連れてナミの元へと戻って来たレウスは漸く事の経緯を聞く事が出来た。王女であるビビを故郷である国へと送り届ける契約を10億ベリーという大金で約束したらしい、その契約を成立させるかどうかはこれから決まるらしいが……。

「助けてくれた事には感謝するわ、でもそれは無理なの」

「どうして？王女なら10億位……？」

「アラバスタという国を知ってる？」

その言葉にルフィ、ゾロ、ナミは首を横に振った。唯一それを理解しているのはレウスであった。以前新聞でアラバスタに関するニュースを掲載していたのを見た事があった。

「確かサンディ島アイランド って所にある文明大国って新聞に書いてあったな、後は砂漠があるってことぐらいしか俺は知らないけど」

「あつ私もそれ見たかも、その後直ぐに別のニュースに目奪われちゃったけど」

「……ええそれで合ってるわ、数年前までは……。ここ数年は革命の動きが現れたの、そしてその裏に潜んでいる組織が、バロックワークス!!」

秘密犯罪集団“バロックワークス”。その組織が民衆を煽り暴動を起こし国を荒らしていた。その組織の工作によって人々は唆されてしまい革命の動きが顕著になってしまった。全ては“バロックワークス”の目的、アラバスタという国そのものの乗っ取り。ビビは幼い頃から世話をしてくれたイガラムと共に組織に潜入しボスの正体と目的を明らかにした。

「はあ……話が繋がったわね。内乱中ならそんなお金もないわよね」

「いやナミちゃん、内乱中じゃなくても10億なんて大金は出せないと思うぞ……」

「そうかしらね、一国の王女の値段がそこまで安い訳無いでしょ?」

平然と目の前の女性の値段がどうのこうのと云えるこの胆力は見習うべきかどうかと激しく迷う。いやただ単に金にがめついだけなのかも知れないが……。

「なあ、その黒幕^{ボス}って誰なんだ?」

何気なくルフィがそう聞いた。国一つを乗っ取ろうとするほどの人物だ、気になるのも当然だろう。が、その質問を耳にしたビビは顔を真っ青にしながら酷く取り乱した。

「ボ、ボボボボボスの正体!? そ、それだけは言えない!! 聞かない方が良いわ!!」

「お前知ってんだろ？」

「聞かないで！それだけは言えない!! 貴方たちも命を狙われる!! 幾ら貴方達が強くても王下七武海の一人であるクロコダイルには決して敵わない!!!」

「言つてんじゃねエか……」

——……。場を、静寂が支配した。

散々言えない言えない言わせないと騒いでいたのにも拘らず、結局は自分から大声でそれを白状してしまった。そしてその場をバッチリ見ましたと言わんばかりにトリとラッコの2匹は大空へと飛び立っていった……。

「ちよつと今の何なのよトリとラッコは?! 今アンタが私達に秘密を喋ったって報告に行つたんじゃないのなんてことしてくれたのよおおお!!!」

「ごめんなさい! ごめんなさい! 本当にごめんなさい!!! 本当にごめんなさい! 口が滑つて……」

「ついで済むかああああ!!!」

半狂乱になりながらビビに掴み掛りガクガクと震わせるナミ、まあ気持ちは解らなくないが……。ビビは泣きながらひたすらに謝罪の言葉を述べ続けている。

「七武海だつてよ!!」

「悪く無エな、なあレウス？」

「……俺は、なんて一味に入っちゃったんだ……今更だけど」

「ああああんもう！なんで偉大なる航路に入った途端に七武海に命を狙われなきやいけないのよお!!レウス行くわよ!!」

涙ながらレウスへと詰め寄るナミ、そしてその迫力に思わず硬直してしまうレウスはそのままずるとナミに引きずられていく。

「ちよちよナミちゃん何処行くの!?!」

「顔はまだバレてないのよ!?!貴方に乗って逃げるのよ!!」

「つて首首首!!!!しまってるしまってる!!!!」

レウスに乗って逃走を図るが、そこへ再び登場したトリとラッコの二匹のアンラツキーズ。ラッコが握っているスケッチブックには見事なルフィ、ゾロ、ナミ、レウスの似顔絵が描かれ完成させるとまたどこかへと飛び立っていつてしまった。

「これで逃げ場も無いって訳ねええええ!!!!」

「面白れくなあの二匹」

「つうかそもそもレウスに乗って何処に行くつもりだったんだよ」

因みにレウスはナミが掴んで引つ張った服が首を見事に締め軽く意識が飛びかけている。

「まあ兎も角これで俺たちは”バロックワークス”の抹殺リストに載っちゃまったって訳

だ」

「ニヒヒヒ！ぞくぞくして来たな！」

「ゲホゲツホ……首がア……息がア……」

「ご安心なされ！」

顔を上げるとそこには……ビビと似た服装と化粧、髪型をしたイガラムがそこに居た。余りに強烈な見た目にレウスはめまいを起こすのであった。

「ぞぐ……ゴホツ！ マ〜ママ〜♪ ……策がございましてよ」

「口調まで真似する必要あるかそれ、それとすっげえ不気味だぞ」

「そうか、そっくりだと思うぞ俺は」

「いや誰にだよ」

格好こそ不気味極まりないがイガラムの策とはこうだ。まずイガラムはビビに成りすましながら4人分のダミー人形を連れて一直線にアラバスタに向かい（う事で）囷になる。その間に自分達は通常の航路でアラバスタを目指すという物だ。

「良いのかいイガラムさん」

「これが最善の手です。ビビ様の為なら喜んで命を張りましょう」

「……良い根性してるよアンタ。ルフィ、ビビちゃんを送るかどうかはお前が決める」

「つまりうちまで送ればいいんだろ？良いぞ」

「感謝致します……！皆さま、ビビ様を宜しくお願い致します……!!!」

イガラムは出来る限り、感謝の念を懸命に込めた声を張り上げて頭を下げた。その光景に観念したのか、それともどうせ命を狙われるから連れて行くのが行くまいが同じだと考えたのかビビをアラバスタへと送ることを了承した。

「おいレウス」

「何だゾロ」

「出向の準備頼めるか？直ぐに出る事になるだろうしな」

「了解だ。あつてもサンジとかは？」

「あ……：……：……：そういえばお前船で寝てたんだよな、おイルフィ。あのバカ二人の回収は任せたぞ」

「おし任せろ」

出来る事ならイガラムの出向を見送りたいかったが雑用係としての仕事があるならしょうがない。船へと駆けていく、暗い道を一気に駆けて行き船へと到着すると凄まじい爆発と閃光が闇夜を照らした。

「あの方角ってまさか……!!?」

あれだけの爆発、ただ大砲の弾が着弾しただけとは思えない。恐らく船の火薬庫か何かに引火した物だろう……：……：そうだとすればイガラムは……：……：。

「……………くそつ!!」

悪態をつきながら錨を上げ直ぐに船を出せるように準備を進めて行くが……

「クエツ!」

「……………え〜つと、確かビビちゃんが乗ってた鳥……………」

帆の準備をしていた時に船に飛び乗って来た黄色い鳥、それはビビが乗っていた大型の黄色い鳥。ビビに言われて此処に来るように言われたのかは謎だが元気に自分に挨拶をしている。

「えつと……………これから宜しく?」

「クエエツ!!クエツクエ!」

悪魔の实の影響か解らないがある程度は動物の言葉が理解出来るようになっていた為か彼、カルーが名前を言いながら宜しくお願ひしますと言っている。

「カルーね……………まあいいや、直ぐにビビちゃんも来るだろうから適当に待つてな」

「クエ」

どうやら理解しているのか船首辺りの甲板で大人しく座り込んだカルーを見た所でゾロヤルフイ達が到着した。サンジやウソップは……………引きずられて来た為か気絶しているが。次々と船に乗り込む仲間とビビを確認すると一気に帆を張った。船は風を受けて上流を目指して進んでいく。

「ゾロ、三角帆をちよつと緩めて来てくれない？」

「おう」

作業を進めている中暗い顔を浮かべ続けるビビ王女、状況から察するに恐らくイガラムはやられたと考えるべきだろう。カルーも心配そうに彼女の顔色を窺っている。そんな彼女を気遣うようにレウスは肩を軽く叩いた。

「Mrレウス……」

「ただのレウスでいいよ。心配要らないよビビちゃん、この船にいる限り君は安全だからさ」

「有難う、御座います……でもやっぱり貴方達を危険に……」

うっかり口を滑らせてしまったばかりにとんでもない事に巻き込んでしまった事を後悔している、だがもうそんな事など自分たちは気にしていない。ナミでさえ気にしている様子は見せずに指示を出している。

「この船の船長はいずれ海賊王になる男さ、七武海はどうせ立ちはだかる壁さ」

「でも……」

「どうせ旅の途中で立ち寄る島にある国に君を送るだけだよ、唯それだけ。それに俺たちは強い、君は絶対に安心さ」

そうビビに笑いかけてくるレウス。そんな笑いにたづなられてか漸くビビは笑った。

「ご迷惑おかけしますけど宜しくお願いしますレウスさん！」

「おう」

「(むっ) ちょっとレウス何時まで喋ってるのよ仕事しなさい仕事!!!」

「あっはいはい!!何すればいいの!?!」

「自分で考えなさい!!」

「何それ理不尽?!」

何故か不機嫌そうに顔をむつとさせながら指示を出すナミ、これから彼の船旅は波乱に満ちている事だろう。

空の王者、小さき庭へ

ウイスキーピークを出港したゴーイングメリー号は比較的平和且つのんびりとした船旅を続けていた。最初こそ一本目の航海のような荒れた航海を予想していた一同だったが、それはリヴァース・マウンテンが巻き起こしていた7本の磁気が周囲の天気と異常を来していた為らしく平和に航海は続いていく。途中巨大なイルカ型の海王類が出た際は少々騒ぎになったがそれ以外に目立った問題は起こらずに順調そのものだった。そして

「おおい島が見えたぞお〜！」

「あれがグランドライン二つ目の島だア！」

眼前へと迫りくる島、鬱蒼としたジャングルと白く至る所に穴のようなものが無数に空いている不思議な山。あれがウイスキーピークを出る際に出くわしたMr. Oのパートナーであるミス・オールサンデーに教えられた島、リトルガーデン。

「にしてもこの島の何処がリトルなんだ？寧ろピックじゃねえか」

「まるで秘境の土地だな」

島の内部へと伸びて行く川をメリー号は遡って行きながら一同は島へと視線を投げ

て行く。リトルというのはまるで名ばかりで島は巨大な樹木が立ち並び見た事が無いような植物が大量にそこいらじゆうに生えていた。

「お、お、おとおおおい上陸なんかせずに直ぐに次の島に向かおうぜ!?!あの女言つてただろ!?!この島で全滅しちゃうって!!」

「でも直ぐには出航できないわよ、ログが溜まつてないし。でもまあ上陸したくないつて気持ちは解るわ、あの植物なんて凶鑑でも見た事無いし」

ナミも得体の知れない島への上陸は肯定的ではない。出来れば直ぐに出港したいという気持ちはあるものの記録指針がログを記録しなければ次の島への航海には出られない。がそんな時樹木の間から虎が姿を現した。がその虎は通常の虎よりもはるかに巨大なものだった。

「おおっ!!巨大虎だ!!」

「虎つてネコ科だから猫じゃらしって効くのかな?」

「効くだろネコなんだし」

馬鹿な事を話しているレウスとゾロだったがそんな話をしている間に大虎は大量の血を吐き地面へと倒れ込んだ。その身体にはまるで鋭利な刃物で切り付けられたかのような傷がつけられていた。つまりこの島にはこんな虎を倒す事が出来る生き物がいるという事にウソツプとナミは顔を青くさせた。

「船でログが溜まるのを静かに待って、直ぐに次の島に行きましょう……?」

「賛成!!」

「は、早くアラバスタに行かないきゃね……?」

という航海士の提案に基づき錨を下ろしてログを溜まるのを待つ事となった。何かやばい脅威があるこの島に迂闊に上陸するのはあまりに危険——

「サンジ弁当作ってくれ!」

「弁当?」

「ああパワー補給だ!肉一杯の野菜抜き海賊弁当!冒険のにおいがする!この島冒険のにおいがプリンプリンする!!」

な筈だが船長のルフィは目をキラツキラと輝かせてサンジに弁当の催促をする。どうやら未知の島にとらを倒す生物という物に冒険心を掻き立てられもう辛抱できなくなってしまうようだ。

「冒険つてルフィ、アンタね……」

「しししし、お前も来るか?」

「誰が!行かないわよ!!」

「あつなら私が行つてもいいかしら?」

「「え」」

強く否定するナミをスルーするように手を上げたのはなんとビビであった。

「んじやルフィに海賊弁当にビビちゃんに愛情弁当だな。カルーにドリンクは必要かい？」

「ええお願い」

「意外だねビビちゃん。君も冒険に興味があるのかい？」

「いえじつとしてたらなんだか色々考えちゃいそうだし気晴らしに♪」

ルフィやカルーもいるから大丈夫と笑う逞しい王女にレウスも思わず笑ってしまった。未知の島だというのに度胸が据わっている王女様だ、流石は敵の会社に潜入するという事をやってのけるだけのけるだけのことはある。まあ化け物よりも化け物じみているルフィと共に行動すれば危険を跳ね除けられるという考えは解らなくもないが。

サンジは直ぐに調理を終わらせたのか弁当を入れていると思われるリュックを二つと樽造りの水筒を持って出てくるとルフィとビビに持たせカルーに水筒を持たせる。それを確認するとルフィは元氣よく船から飛び降りビビもカルーと共に船を下りルフィの後を追いかけた。

「んじや俺も散歩に行つてくつか」

「散歩お!?!おいゾロマジかよ!?!」

「何だお前も来るのかウソツプ」

「誰が行くかあ!!」

暇潰しがてらと船を下りるゾロだがサンジが食べれそうな獲物を取ってきてくれると言うが……ゾロがお前が獲れそうも無い獲物を取ってくるといった為にサンジにも火が付いてしまった。

「狩り勝負か……いいか。肉何キロ取れたか勝負だ」

「何トンかの間違いだろ」

「はん、獲物を並べてから御託を並べやがれマリモヘッド!」

「望む所だラブコックが!」

互いを強く牽制しながら森の奥へとずんずん入っていく二人を見ながら思わず涙を流してしまうナミとウソップだがはつとしながら船首辺りのフェンスに寄りかかりながら本を読んでのんびりしているレウスを見ると素早くすり寄った。その素早さに思わずレウスは身を引いてしまう。

「お、お前は行かねえよな!?!か弱い俺たちをおいて、上陸なんかしねえよなああ!!!」

「お願いだから船に残ってレウスウ!!今の私達にはもうアンタだけが頼りなお!!」

「解った解ったから、俺は別に上陸したいとは思ってないから……」

なんとか二人を宥める事に成功したレウス。取り敢えずナミとウソップはレウスの傍が一番安全と考えたのか彼の両隣に陣取った。特にナミはかなり恐ろしいのかレウ

スの左腕に抱き着くようにしている。

「……………にしてもウソツプ、お前勇敢な海の戦士になるとか言つてなかつたか？」

「た、確かに言つたけどいきなり勇敢になんてなれるかよ!？」

「まあそりやそうだけだよ……………」

「…ねえレウス、さつきから何の本読んでるの?」

「んっああ。」 探検家 ルイ・アーノートの冒険記 って本さ。結構面白いだよね」

一旦本を閉じながら表紙を見せる、するとナミは何かを思い出したかのようにはつとした顔をした。

「ちよ、ちよつとその本貸して!？」

「んっああ、ああ」

レウスから奪うように本を受け取るとページを次々とページをめくつていく。そしてある記述へと辿り着いた。それはこの島、今自分たちがいる島であるリトルの由来についてだった。

『あの住人たちにとつて、まるでこの島は小さな庭のようだ。この土地をそう呼ぶ事としよう。探検家 ルイ・アーノート』

住人たちにとつて、つまりこの島にはこれほど大きな島を庭と言えるだけの巨大な何かが居るといふ事になるとナミは悟った。その予感当たっていた、その記述を見つけ

ている間に巨大な何かがメリー号へとじりじりと迫ってきていた……。

空の王者、誇り高き戦士と会う

「さあ焼けたぞ食え！」

ズドンと大きな音を立てながら置かれた巨大な肉の塊。良い感じに焼かれた肉は香ばしい香りを放ちつつ食欲のスイッチを連打するがナミとウソップは食欲など沸かなかった。

本でこの島について解った直後姿を現したのは島に住んでいるという巨人族のブロギーであった。通常の人間の何倍もある巨体な為かナミもウソップも大いに動揺した。唯一冷静だったレウスは彼と話をする事になった。どうやら酒は無いかと尋ねて来た、あると答え酒を渡す代わりに情報提供をしてくれるようにレウスは取り付け、今はブロギーの家となっている白い山のようになっている彼の住処へとやってきていた。

「美味いぞ恐竜の肉は、ガブっといけ！」

「美味そうだな確かに、ナミちゃんにウソップ。切り分けるか？」

「け、結構です……！」

「そうか？残念だなあ、美味そうなのに……！」

一部、右手を竜化させて肉へと差し込んだ。そのままナイフのように手を扱いながら

肉を裂き、こぶし大の大きさの肉を口へと放り込んだ。それを見たプロギーはほう……つと感嘆にも似た声を出した。

「うんっイケる……味はちよつと淡泊だが油は甘みもあつて食欲を誘う。歯応えも良くて腹に来るな」

「お前レウスと言ったか。悪魔の^{ゾオン}実の、動物系の能力者みたいだな。しかもかなり能力は熟練してると見える」

「解るか？」

もう一度肉を抉りながら視線を向ける。

「解るさ。身体の一部だけを変化させるのは至難の業と聞いた事がある、能力をコントロール出来ている証だ。だがまだ少しだけ粗さを感じるな」

「自己流だからな、粗さも個性だ」

「ガババババツ!!そりやそうだ、威勢の良いチビ人間だ!」

豪快に笑いながら肉に食らいつくプロギー。一応レウスの身長は184センチである。(平成の)成人男性の平均身長は170.9cmなので一応高身長という部類に入るが巨人族である彼にとっては小人人のようにしか見えないのだろう。

「あ、あのプロギーさん。この島のログってどの位で溜まるんでしょうか……?」

「んっ?おおログか、1年だ」

「1年っ?!」

余りの時間にひっくり返ってしまふナミとウソップ。島によっては1日や半日、1週間などとログの溜まる時間は変化するがまさか1年という時間がかかってしまうとは予想外にもほどがあった。二人にとつてこんな秘境のような島で1年過ごすなどやつてられない事である。

「まあゆつくりしていくが良い!ガババババツ!!」

「1年……随分と長いもんだ。俺が島に居た時よりは短いが」

1年という時間の長さに呆れつつ、レウスは再び肉へとかみついた。今度は直接肉へと、その時に僅かに竜化している自分に気づいていなかった。それを見たブロギーは視線を鋭くした。

「なあレウスよ。一つだけお前に言っておく、その能力は希少且つ危険だ。ワイバーン 竜はいずれ龍ドラゴンに変わる」

「どういう……ことだ?」

「その答えはとある島にある、航海を続けて居れば解る」

そういったのち再び笑い肉を食らう。首を傾げつつまた肉を喰らった。立ち直った二人は食べ続けている巨人と仲間を見て、溜息を付きながら肉に手を伸ばしてみた。

「結構、美味しいのね」

「だなつ。醤油持つて来ればよかったな」

腹に物を入れれば少し心が穏やかになった、ウソップはこの島にブロギー一人で住んでいるのかと聞いた。他に人は住んでいないのかと。

「村ならある。エルバフというこの偉大なる航路のどこかにあるな。だが村には掟があつてな、騒ぎを起こすと俺たちはエルバフの神の審判を受ける。俺たちの神は常に正しい物に加護を与えてる、そしてこの島は俺とある男との決闘場なのさ。だが彼此100年ケリが付いてないがな!!」

100年も戦い続けている事実ナミとウソップ、そしてレウスも驚きを隠せなかった。巨人族は人間の寿命の約3倍の命がある為100年という時間はあまり気にならないらしい。

「良くもそんなに戦いを続けてられるわねえ……理由は何なの……?」

「闘い始めて早1000年、何時の間にか真ん中山の噴火が決闘の合図になった」

持った肉を火へと投げ捨てるようにくべて立ち上がるブロギーの視線は鋭い戦士の物へとなっていた。そして幾ばくか離れた所から同様にもう一人の巨人が声を上げ姿を現した。それがこの島のもう一人の住人と言える存在でありブロギーが1000年間も戦い続けている相手。

「決闘の理由など、とうに忘れた!!」

「ガババババババ、今日こそは勝たせて貰うぞドリー！」

「ゲギャギャギャギャー！それはこっちのセリフだブロギーよ!!」

大型の恐竜を容易く上回っている巨人が二人、互いに向けあうは研磨され鋭すぎる殺気。豪快な笑いと共に殺気は島へと充滿していき思わずナミとウソップは涙目になりながら震え上がり、レウスは思わず無意識に自分を守ろうと完全竜化を行いリオレウスの姿になっていた。そうしなければ自分は死んでいたとさえ思える濃厚で強い殺気に心が反応していた。

「グオオオオオオオオ!!」

「ウオオオオリアアイ!!!」

剣と斧が振り抜かれる、全くの同時に振り抜かれると同時に互いの巨人は盾でそれを防いだ。巻き起こった衝撃は大型の爆弾が起こす爆風にも匹敵しうるもので島へと広がっていく。木々は揺れ動物たちは恐怖して逃げ惑っていく。純粋な相手を倒すという思いと肉体に宿る力がぶつかり合っている。思わずレウスは威嚇の声を上げてしまっていた。恐怖、している。

「うおおおおおおお!!!」

「そおおおりゃあああ!!!」

喉元へと振るわれる一閃、肺へと一直線に伸ばされていく突き。攻撃の全てが相手の

急所を狙って繰り出されているという事実、そしてそれを100年間も続けてきた二人の生きざまに3人は呆然と見ている事しか出来なかった。

「こんな殺し合いを100年も……?」

「理由も忘れてるのに……誇りを賭けて戦ってるんだ……!!」

「……」

ウソップが口にした誇りを賭けている戦い、正にこの巨人の戦いはそれであった。元々は戦いの火種があつたがそれは大昔の彼方に忘却されている、だが負けないという強い意志と誇りがある。それがある限り互いに一步も引かないつというだけの事。それがウソップには非常に男らしく勇敢に見えた。だがレウスはそんな事が考えられなかった。

「……………弱いなあ、俺って……………」

「レウス?」

「はあ……………」

自分を恥じた。殺気に恐怖を感じ咄嗟に自分の身を守る事しか考えられなかった、それ以外の事など頭になかった。情けない事この上ない、これならば野性に身を委ねた竜の方が幾分かマシかもしれないとつい思ってしまう。

「俺もなりてえな……………あんな風に強い戦士に……………」

「だよなあレウス！俺も絶対にああいう勇敢なる海の戦士になるんだ！」

ウソップも同調して憧れの言葉を漏らす。が彼らの言葉は同じ意味ではない。ウソップはブロギーとドリーの心、誇りに憧れているがレウスは彼らの強さに憧れた。何物も圧倒する絶対的な力に、そんな力が心から欲しくなってしまった。

——そして互いの武器が吹き飛ばされ地面に突き刺さり最後に残った盾を用い、渾身の力で相手へと殴り付けた。鈍い打撃音が島中に木霊していく、突き刺さった痛烈な一撃。顔を歪めながら二人の巨人はこう言った。

—— 7 3 4 6 6 戦

—— 7 3 4 6 6 引き分け

つと。

「本当に凄かったぜブロギーさん!!アンタらの戦い、本当に誇り高い戦いだったぜ!!」
「ガバガババそうかそうか!そりや俺たちの誇りをぶつけあってるんだ誇り高くて当然だ!」

戻ってきたブロギーは自分達が渡した酒をドリーへと渡し、先程の戦いで罅が入ってしまった斧の持ち手を新しくしながらウソップに戦いを褒められてうれしそうに笑った。寿命が長い彼らにとって財産や人の命も結局は消えてしまう、だからこそ如何死ぬかを考える。それ故に誇り高く死ぬことを彼らは望んでいるらしい。

「俺も絶対になつて見せるぜプロギー師匠！エルバフの戦士のような勇敢なる海の戦士に!!」

「ガバババそりやいい!」

豪快に笑いながら酒を飲むプロギー、が視線に端に拳を握り締めているレウスの姿を見た。何処かで見ただかのような既視感は嘗て強くなりたいと願っていた自分とそっくりだった。

「なあレウスよ、てめえの能力について少しでよければ聞かせてやる」

「話……?」

「悪魔の実の中でも最も希少とされる動物系ゾオンの幻獣種、その中でもそのお前のような竜は今も現存していると言われている」

「ド、ドラゴンが!」

「マジか!」

プロギーの言葉に驚愕する二人、ドラゴンは空想上の生物というのが常識。だがそれは今壊された。

「俺も話で聞いたただだがこの偉大なる航路グランドラインの何処か大陸みてえに馬鹿デカい島があるという。その島の名は”狩猟モンスターが全ての世界”ワールドって言うらしい」

「モンスター・ワールド……?」

「その島は世界政府にも加盟はしていない所で特別な組織が全体の管理、統制をしているらしい。そこには神秘に溢れた怪物達が蔓延る世界、海軍も手が出せないような危険地帯だがお前の能力の元となっている生物はそこで現存していると聞く」

「(リオレウスが実在してる……!?)」

「そこには固有の悪魔の実もあるらしくてな、その生物の力を得る事が出来るという噂がある」

「じゃ、じゃあレウスが食べた実も元々はその島の……」

「その可能性は高いな」

そう言いながら肉を食い千切って話を終える。能力の元となった生物がいる島、つまりそこはモンスターハンターの世界と言っても過言ではない場所、直感的にレウスはそこに行きたいと思った。リオレウスという生き物の故郷だから、故郷に帰ってみたいという帰巣本能かは理解出来ないが自分はそこに行かなければならないという気がした。「俺が知っているのはここまでだ。その島の話はあるが実際に行つた者はいないとも言われている幻の島だ」

「それでも……俺、行ってみたいぜ俺……そこに行けば俺、強くなれる気がする!」

「ガバガバ!!元気が出たな!」

「へっ?」

気づけば自分は立ち上がりながら左腕を竜化させていた、何故そうしたのかは解らないが妙に気分はすつきりしていた。

「お前はまだ若い、俺も昔は強くなりたいつて悩んだ事もあった。だが悩んでいつて解決しない事もある、そういう時はまず身体を動かして行動だ」

「……オッス！」

元氣を取り戻したレウスにドスンと与えられたのは先程の巨大な恐竜肉、ブロギーはそれを食べ！という、そしてレウスはオッス！と強く答えながらリオレウスに変身し肉へと飛びかかるように食いついた。肉を食いちぎりながら強靱な足で肉を押しさえつけないながら一心不乱に肉を食らう姿は正に竜、ブロギーは再び笑った。

「恐らくこいつは暫く食い続けていると思うぞ」

「みたいね……」

「おっブロギー師匠！また真ん中山が噴火したぜ!？」

「おおっ今日は珍しく噴火の間隔が短いな、望む所だア!」

肉を貪り食うレウスを置いてブロギーはウソツプの声援を受けながらドリーとの決闘に向かっていく、ドリーも同じくして向かい酒の味を言いあいながら再び、決闘を始めた。

その二人の決闘を不吉に見つめる二人の陰に、誰も気づきもせずに……。

空の王者、誇り高き決闘を穢した者へ激昂する。

遠くで爆音のような激突音が木霊する中、レウスは一心不乱に肉へとかぶり付き貪り続けていた。ブロギーによつて掃われた心の中のくすぶりが消えた事である意味更にリオレウスに近くシンクロをし近い竜化をしていた。今はただこの美味しい肉で腹を満たしたいという原始的な欲求に取り付かれていた。

ナミとウソツプはブロギーの言葉通り暫くはレウスを動かす事は出来ないと悟り自分達は一旦この島のログが1年も掛つてしまうという事態を何とか解決する為に船に戻る事を考えるが正直レウス抜き今のナミとウソツプではジャングルに蔓延る恐竜や怪物たちを薙ぎ倒して船に辿り着くなど不可能。そこで比較的に近いもう一人の巨人のドリーの家へと向かう事にした。ブロギーの話ではドリーの家にはルフイ達がいるという話を聞いたからだ。

「(ガツガツガツ、ゴキヤ、バキゴキ)……」

肉の中央を通っている骨さえ容易に噛み砕き全てを咀嚼し飲み込む、竜は貪欲に望む物を全て手に入れる。それがなんであろうと全てを自分の糧にし明日を生きる力と変える力強く恐ろしい生物。だがレウスはそれがある意味清々しく感じられた。

「ゴフウ……食ったあ食ったあ♪」

満足げに声を上げるレウスは大きく御ちそうさまでしたと言うと近くにナミやウソップ、そしてブロギーの姿が無い事に気づく。だが遠くで鉄同士がぶつかると誇り高い戦士の声が聞こえた事から恐らくまた戦いをしているのだろうと察した。ナミとウソップについては解らないが……。

「兎に角空から探してみるか……？ルフィやビビちゃん的事も気になる」

一先ずルフィ達との合流を決め込むと翼をはばたかせ空へと舞い上がる。空からは島全体を見渡す事が出来た、勿論ブロギーとドリーの対決も。二人の対決の凄さに感心しつつルフィ達を探そうとした時、突如ドリーの足元に白い液体のような物が溢れだしドリーの足を絡め捕りバランスを崩させた。

「なっ!?!」

それを見たレウスは驚愕した、木々の間に隠れていた二人組も同時にリオレウスの視力を持つ彼は捉えていた。はっきり鮮明と確認した。髪の毛を3の形にセットしている眼鏡をかけている男ともう一人は帽子を被った少女だった。男は手から白い物を溢れださせドリーの邪魔をした、そしてブロギーは振りかぶった斧でそのまま——ドリーを切った。

「!!!」

レウスは瞬間的に頭に血が上るを初めて感じた、自分が激高していくのも理解出来た。自分の進むべき道を記してくれたブロギーが誇りをかけて戦っている男ドリとの神聖な決闘を邪魔したのだ。

「おおおおおおおいレウスウウウウウウ!!!」

「———船長……」

だがそんなレウスの怒りを僅かに沈めたのは自分が乗っている海賊船の船長の声だった。ドリーの家の近くにいる、空を飛んでいる自分を発見し声をかけたのだろう。今直ぐにもブロギーの元に行きたい気持ちを抑えつつルフィの元へと降下した。

「レ、レウス大変なんだナミが!!」

「!? ナミちゃんがどうしたんだ!?」

「レウスさん大変なのよ!! 多分だけどバロックワークスに捕まっちゃったのよナミさん!!」

「ンだとお!?!」

掛けられた言葉は衝撃に尽きる。レウスは一気に巻き起こった出来事に混乱しかけるが深呼吸をし落ち着く、だが落ち着いてはいられない。大急ぎでナミを探す必要が出てくるがよく考えてみればどこにいるかなど簡単なものだった。ドリーの足元をすくったあの無粋な下種野郎の所だと瞬時に確信した。

「こちらも拙いぞウソツプ、プロギーとドリーの決闘に水を差した下種がいる!!!」

「何だとお!? それまじかよ!? じゃ、じゃあさっきの血飛沫って?」

「ああ……ドリーの足元をすくった下種野郎のせいだ!」

それを聞いたウソツプとルフィは凄まじい憤怒を表情に表わした。ルフィもビビもドリーの戦士としての誇りの凄さは話をし戦いを見て理解していた。そしてウソツプは師と仰いだ男の誇り高い決闘の邪魔をした者への怒りを燃やした。

「ぜってえええええに許さねえええええええええ!!!」

「俺とて同じだ!! 俺はプロギーに救われた、心をな!! そんな彼の誇りをかけた戦いを邪魔するものなど、許さん!!!」

「私も行くわ!! 行くわよカルー!!」

「クワアー!!!」

カルーも男として本能で理解していた。あの戦いは決して他人が介入し穢してはいけないものだと、それを穢した者は絶対に許せない。

「ルフィ、ウソツプ、ビビちゃん、カルー全員乗れ!! 空中から強襲をかける!!!」

「ああ頼むぞ!!」

「任せろ!!!」

空の王者は吠える、誇り高き決闘を穢した者に。

空へと舞い踊る王者は更に力強く羽ばたき炎を燃やしている。

「レウスあそこだ!!プロギー師匠に、ゾロやナミもいるぞ!」

「うおし、先に行くぞお!!」

ルフィは勢いのまま高高度から飛び降りていくがそれを止めはしない。したところで無駄だから。

「全く……ウソップにビビちゃん、これから地上に接近する。いい感じに飛び降りろよ!」

「解りました!いいわねカルー!」

「クワー!!」

「お、おう!!」

王者は怒るだろう、決闘を侮辱した愚者どもに……。

「な、何だガネ!」

「煙……!?!」

突如として巻き上がる土煙、驚きの声を上げるはバロックワークスのオフィサーエー・ジェントの一人、Mr. 3そしてそのパートナーたるミス・ゴルドンウィーク。煙から飛び出し空中に滞空する巨大な影、そして煙の中から現れるのはルフィ、ウソップ、ビビとカルー。

「誰だあああおっさん達の決闘を邪魔したのはあああああああ
!!!?」

「師匠オとおおとおお!!!」

「ナミさん!!大丈夫ですか!?!」

「ルフィウソツプビビ!!」

「クワア!!」

「ヘツカルーもいるみたいだな」

舞い上がった煙で隠れていた姿を現した麦わら海賊団の船長、狙撃手そして客人として乗っている王女。強い敵意と怒りを滲み出しながら凄まじい覇気を纏って顔を覗かせた。

「お、お前らはぞ、そうかボスからの抹殺リストに乗っていた男……そしてその仲間!!」

「アチャー3頭!?!」

「喧しい!!」

「頭の3燃えてるし!!」

「黙れ!!」

「ぞ、そんな事よりルフィ私たち助けてよ!?!」

巨大な蠟の塊、それに足を捕らえて身動きが取れなくなっているナミ達。蠟の塊の上部では何かが高速で回転しながら蠟の霧のような物を散布し続けていた。それを浴び

ているナミ達は徐々に蠟に塗れている。

「おし、ウソツプにビビ。俺はあの3をやる」

「おう解った！俺は師匠を助ける!!」

「私は何とかナミさん達を……そうだ炎!!レウスさん!!」

ビビは直ぐに上空で旋回し続けているレウスに向けて大声を張り上げた、彼が炎を吐ける事は知っている。あの炎ならば容易に溶かす事が出来る筈と踏んだ、意図を理解したレウスは完全な竜化である獣型から人獣型へと変化しナミとゾロの元へと降りる。

「こいつを溶かしていいんだな」

「おう頼むぜレウス」

「早くお願い!!」

「任せろ。微・竜火炎」

蠟を含んでいる息を軽く吸うとそこへ小さな火球で火をつけて火の息として吐き出して二人の足元の蠟を溶かしていく。やや熱そうだがそこは我慢してもらおう、全身蠟塗れになって動けなくなるよりマシだろう。が

「させる訳が無いがね!!ドルドル彫刻、剣!!」

レウスの行動を快く思う訳が無いMr. 3、蠟を身体から生み出しそれを即座に剣の形にするとそれを思いつきり投擲した。真つ直ぐと向かっていく剣にゾロは刀を抜こ

うとするが間に合わない。だがそれは蹴り碎かれた、怒り心頭で全身からまるで湯気のような物を漂わせているルフィによって。

「わ、私のドルドルの力を蹴り、碎いたアア!? あ、有り得ない!? 鉄の強度を誇るのだから私の蠟は!」

「俺は頭来てんだ、ぶっ飛つべ3頭ア! ゴムゴムのおく!! バズくカアツ!!」

怒気と覇気の両方を発散させているルフィ、その気迫は一番長いゾロでさえ見た事が無いほどに凄まじい物。勢いよく伸ばされていく両腕、がその速度も尋常ではない。瞬間的に数十メートルは伸びている、そしてゴムの特性のまま伸びた腕は凄まじい勢いで縮みつつルフィの腕力でMr. 3へと叩き込まれた。到底人間が叩き込んでいるような打撃音ではない、最早爆音の領域。それを受けたMr. 3は空へと打ち出されて行き空の彼方へと消えていった。

「はあはあ……あつえつ、い、今の力は……!」

敵を吹き飛ばした事で頭が多少冷えたのかルフィは自分の身体へと目をやった、先程の一撃は自分で有り得ないほどの力を感じた。そして同時に身体を襲ってくる疲労感、確実に今までは無かったこと。

「よし溶けたぞ! ビビちゃん、頼むぞ! 俺はブロギー救出の方へ行く!」

「任せて!! ってナミさん上着燃えてる!!」

「う、嘘!? きゃあ蟻に引火しちゃったんだわ!」

リトルガーデンでの戦いは怒りによってボルテージが上がりきっていた麦わらの一味へと軍配が上がる。この後、レウスの炎によってプロギーは救出され、ドリーも無事である事が判明した。

「ナミすわぁーんビビちゃん!! その他共ー!!」

ドリーが無事である事に対するプロギーの男泣きの中、森の中からバスケットを一つ抱えたサンジがメロメロな声を発しながら踊りつつやってくる。思わずそれを見てレウスは脱力したのか上着を脱ぎつつ押し折った木の上に腰掛けた。

「サンジ、遅い参上だな」

「つてうおおおおでつけええええ何じゃこいつらあああ!? お前がMr. 3かあ!」

「聞いちやいない……俺、今回色々頑張ったのに……」

「まあレウス……あんたの頑張りは私が認めてるから」

地味に凹んでいるレウスを助けて貰ったので慰めるナミ、今回は流石にレウスの能力が無ければ本気で危なかったかもしれない。これからもレウスには色々と迷惑を掛けるかもしれない、しっかりとフォローなどもしていこうと心に決めるナミであった。

「いたっ」

「どうしたナミちゃん?」

「なんでもないわ（きつと虫ね）」

「そうだこんな物手に入れたぞ」

そう言つてサンジはバスケットの中からあるものを取り出した。それは……アラバスタへのエターナルポースであつた。

空の王者、看病する

リトルガーデンのログが溜まるまでに1年という時間が掛かる事が判明し深刻な事態に陥ってしまった麦わらの一味を救ったのはMr. 3との戦いでは一切姿を見せずに戦いに関与する事がなかったサンジであった。どうやら自分達の捜索中にアジトらしき拠点を発見しそこでバロックワークスのボスことMr. 0であるクロコダイルのデンデン虫での会話をしたとの激白した。

どうやらそこはMr. 3のアジトだったらしく、ちょうど居合わせたサンジがMr. 3になり済まし自分立ち麦わらの一味とビビを始末したと虚偽の報告した上にアラバスタに向かう為のエターナルポースを手に入れたと意気揚々と報告をしてきた。これにより追撃は無くなりリトルガーデンのログが溜まるのを待つ事無くアラバスタへと向かえる事が判明した一同は大喜びした。皆はドリーとブロギーとの挨拶を済ませると足早に島を出向する事になった。

「レウスよ、達者でな。お前らは必ずでかくなるぞ、自信を持って旅を続けるが良い」
「ああ、有難うなブロギーさん。いや、師匠。オッス!!」

そしていざ出向すると二人の巨人が出向の見送りにと島の海岸に仁王立ちしていた。

二人はエルバフの戦士としての誇りを守ってくれた事に対しての感謝を述べながら自分達を信じて決して道をかえずに真っ直ぐに進め！と力強く宣言した。ルフィ^{船長}その言葉に強く頷きながら船を進めた、だが島を出て少しと立たない間に島喰らいとも呼ばれる超巨大金魚が姿を表した。

「覇国ウウウ!!!」

だがその巨大金魚を、二人の巨人の戦士が、最強の一撃にて葬り去った。友の海賊旗^旗を守らん為に100年以上をも苦楽を共にし数々の敵を打ち取ってきた武器が砕けるような最大の一撃を放った。凄まじい覇気と斬撃は容易く、だがゴーイングメリー号を一切傷つけずに島喰らいを巨大な風穴をぶち開けて麦わらの一味のこれからの旅を祝福するように道を示した。

「さア、行けエ!!!」

「エ〜ルバフバフエ〜ルバフ♪きよきよ巨人きよきよ巨人!!」

「やれやれ我らが船長と狙撃手は元気だな。俺は少し気抜けしちまったかも」

「奇遇ねレウス……私もよ」

「ビビちよつとログ見てもらっても良いかしら、私ちよつと疲れちゃって……」

尊敬するプロギーの誇り高き凄まじい一撃を目の当たりにしたウソップとそんな戦

士がいるエルバフという村に行きたいと強く願うルフィは二人して肩を組んでコサツクダンスにも似た踊りをしながら今だ先程の興奮が覚めない様子。二人を見ながらナミは呆れながらレウスに寄り掛かるように座っている、先程の島喰らいで一番取り乱してパニックになっていたのは彼女なのだから致し方ない。どうかあれが普通の反応だろう。

「ナミすわあ〜ん♡ビビちゅわ〜ん♡本日のおやつ、プチフルです♪ドリンクはコーヒー、紅茶どちらになさりますか？レウスお前の分もあるぜ。お二人を助けるとは流石だぜほれ」

「サンジさん、ええいただきます♪私は紅茶が良いかな」

「サンキュ……。まあ折角助けるならお嬢様方を助けるさ、野郎よりは乗り気がするってね」

「気が合うな流石だ」

レウスからしたら正直当たり前の事でゾロを助けたのだがサンジからしたら彼など正直、彼女らに比べたら比較対象にならないのだろう。サンジらしいと言えばサンジらしいが、ナミも折角だからリラックスする為にとプチフルを手を取ろうとするが急に身体を震わせながら苦しそうに息を洩らしながらレウスに凭れ掛かってしまう。

「お、おいナミちゃん？如何したんだ一体……？」

「うおおおレウスでめえなんて羨ましいんだこんちきしよおお!!」

「ちよつちよつと待つてナミさんの様子が可笑しいわ!? 顔が真っ赤だし、凄いい熱よ!!」

「……こいつは拙いぞ!? サンジベツトだ、大急ぎでベツトに運ぶぞ!!」

「ナ、ナミさああああああんっつ!!」

ナミの体調が急変した事を受け大急ぎで彼女をベツトへと担ぎ込む、取り合えずエターナルポースはウソツプへと預け逐一チェックしながらの舵取りを任せる事にした。顔を酷く赤くしながら息を洩らすナミへと濡らしたタオルを当てながらビビは病気の原因はグランドラインの気候の影響だと言う。

「この中で少しでも医療を齧ってる人は誰? 少しでも良いの」

「ナミ」

「ナミさあんだ……」

ビビはやつぱりと唇を噛むがその中で一人、手を上げていた。ビビは視界の端に映っていたレウスに希望の光にも見た物を見た。

「本当に少しでも良いんだつたら……」

「それで良いの、お願いレウスさん!」

「解った。サンジ、応急キットを早く!」

「お”う!!」

ナミのみを心配しながら号泣しているサンジは一旦部屋から出ると瞬時にその手に応急キットを持って戻って来たその速さに思わずルフィが驚いて飛び上がるほどに、その中であつたキットを使いながらナミの身体に器具などを当てながら診察を開始するレウス。一同が固唾を呑んで見守る。

「お前、医者だつたのかレウス？」

「本格的な治療は出来ないけどな。島に居た頃、余りにも暇だつたから襲つてきた海賊から色々奪つてた本とかを読んだ。その中には医療関係の物もあつたからな、それを元に数回病気になつた時は自分を治療してた」

「何でも良いがらナミさんをおおお……!!」

「解つてる……!!」

慎重に診察を続けていく中、レウスは体温計を見ながら眉をひそめながら驚愕した。今のナミの体温は40度という高熱だつた、通常だつたらあり得ない体温だ。確実に拙い……!!

「おいサンジ。俺から抜けた爪とか牙が入った袋を「持ってきた!!」早いな!! まあいいや助かつた!」

「レウスさんナミさんはどうなの!?!」

「熱が40度、加えて多分だけど動脈炎や他にも……!!」

「そんなっ……!!?」

レウスの診断にビビは思わずシヨックを受けながら口に手を当て如何したら良いのかと思つてしまう、病気に掛かった事の無いルフイはそんなに辛いのか?と思わずサンジに聞いてしまふが彼も掛かった事は無いらしいがこんだけ辛そうにしてるんだからそう決まつてんだろ?ア!!!と蹴り飛ばされた。舌打ちをしながら自らから抜けた牙や爪に鱗をすり鉢に突つ込むとそれを磨り潰して粉状にしていく。

「レウスさん如何しよう……!!?って何をやってるの!」

「竜化した時に抜けた俺の牙とか爪とか鱗を磨り潰してるんだ、動物の牙や爪は煎じて呑むと薬になるだろ?俺は病気になつた時にそれを試して見たんだ、それが大当たりだつたんだよ!」

「それじゃあ薬になるの!」

「ああ、鎮痛剤と解熱剤位にしかならないけどな……ないよりマシだろ!サンジ水!」
「此処に!!」

三種類の物を粉にしてナミにそつと飲ませる、少々苦いがそれでもナミは飲んだ。それを固唾を呑んで見守るが次第にナミの表情は少しではあるが安らいでいく、ある程度は苦しみを取り除いて上げる事は出来るようだと思わず安堵してしまう。

「おおつ治つたか!」

「直ぐには治らねえよ。今は安定してるだけ、大急ぎで医者に見せないと命に関わる……!!」

この言葉にルフィは医者を探すことを決意し大急ぎでアラバスタに行こうと言うがビビによると一週間以上は掛かってしまうとビビは力無く答えた、そんな時間ナミの身体が持つとは思えない。だがビビも急いで国に戻らなければならない。先程ナミを看病する為に道具を探した際に見てしまったのだ、アラバスタの凶報を知らせる新聞を……。30万人以上の国王軍が反乱軍に寝返ったと言うニュース、一刻でも早く国へと戻らないと行けないと言う事態になったのにこの状況。ビビは絶望に表情を染めたが瞬時に顔を切り替えた。

「私は直ぐにアラバスタに行かないと……だから今すぐ医者を探しましょう！ナミさんが元気になってこそ、一番のスピードが出るでしょ!!」

「ビビ!!おうそれ以上は出ねえ！」

「惚れなおしたぜビビちゃん！良く言ってくれたぜ!!」

「ああ、そうだな。サンジ、ルフィ大急ぎで見張りを頼む！近くの島を探すんだ、ビビちゃんはウソツプの手伝いに！」

レウスは新たな薬を作ると同時にナミの傍で看病を続けると告げ指示を出した、現状でナミの苦しみを少しでも和らげられるのはレウスのみ。ならば傍に居続けて何時で

も薬が出せるようにしておくが良いとサンジ達も納得し部屋から飛び出していった。それを見送るとレウスは新たな薬を作り始める、少しでも多く作って置かなければいけない……という意識があつた中、ナミが目を覚ました。

「レ、レウス……船、は……?」

「これから医者を探す。ビビちゃんがトップスピードでアラバスタに向かうには君の病気を治すのが先決だと言ってきてね。俺が付いてるから今は寝てた方がよいよ」

優しく囁くように言うレウスにナミは弱弱しく震える手を伸ばした、酷く暖かく震えているその手を取った。

「レウス……私、私……死んじやう、のかな……!?!」

消え入りそうな震えるで涙ながら問いかけた、何時もは気丈に振る舞い強がるであろう彼女もまだ少女だ。病気の時は誰しも心細くなる物、心も身体も衰弱してしまふのが病気。今一番辛いのはナミだ、酷く不安なのだ。そんな彼女を安心させる為にレウスはその手を優しく強く握りながら笑顔で言った。

「大丈夫、必ず医者に見せて君を助けるから……だから安心して今は眠って」

力強い言葉と笑顔に励まされたナミは安心しきつたのかそのままゆっくりと眠りに付いた。

空の王者、冬島に到着する

ナミが病気で倒れてしまつてから既に二日が経過している、一番焦り早く国に戻りたいと願つてゐる筈のビビの言葉により医者を探す事になつたが一向に島は見えず唯闇雲に航海をするしか出来ずに一味には悔しさと齒がゆさを味わつていた。航海士であるナミが倒れてしまつた為に航海士の代行に一味の中でそれなりの知識があるレウスがする事になつたがそれにより負担は激増してしまつていた。

特殊な磁場の影響で非常に気候が変動しやすい上に嵐も何の予兆もなく発生する偉大なる航路^{グランドライン}。今まで順調に航海が出来ていたのはナミのお蔭であつたと一味はそれを実感した。本で得た一般的な航海術しか持たぬレウスでは偉大なる航路の航海は非常に難しい物だつた。無造作に、前触れも無く風が変化するこの海。幾度と無く危機が訪れたがその都度、完全竜化する事で脱出してきたがその影響で日常的にレウスに掛かる負担と疲労はかなりの物であつた。

レウスの航海術では日が出てゐる内の航海がやつとで夜は船を止め朝を待つしかなかつた。その際もレウスは休もうとしなかつた、ずっとナミの傍にいながら看病をしなから牙などを磨り潰し薬を作り彼女に飲ませながら支えとなつていた。保温性に優れ

ている自分の翼膜を切り取りそれをナミに掛けてやったりしながら彼女を見守り続けていた。因みに翼膜は自然に元に戻る。

「水を変えてくるか……」

ナミの熱ですつかり水も暖かくなって来てしまっている、変える為に立ち上がった時ナミの腕が布団から伸びると腕を掴んだ。桶を置くとそっと手を握りながらナミに視線を合わせる。

「ナミちゃん、大丈夫か？ 欲しい物でもある？」

「ううん、大丈夫だから……貴方も少しは眠って……もう、二日は寝てないでしょ……？」

「鍛えてるから大丈夫さ、俺なんかよりナミちゃんはしつかり休んで。大丈夫絶対医者は見つかるから」

まだ熱い額を触りつつ頭を撫でてから外に出ると雪が降っている、かなり冷え込んできています。リオレウスの力を身に付けてからはそれなりに寒さには耐性は出来ている、体内に火炎袋がある為か体温を維持出来る上に高高度を丸三日休む事無く飛行することも可能であるスタミナと上空での寒さにも耐える事が出来る身体となっているのがかなり良い方向になっている……が

「っー」

キッチンに向かおうとした時ガクつと身体が崩れ落ちそうになってしまった、それを必死に食い止めるように足に力を込めて甲板を踏み締めた。常人離れたスタミナを持つているとはいえたつた二日で完全竜化した回数は10回を越えていた、自分の未熟な航海術を補う為には能力を使うしかなかった。だがそれでも10回という回数で体力は限界を迎えようとしていた、本来ならとつくに倒れていても可笑しくのにそれを精神力で支えている。

「俺が、倒れたら……一体誰がナミちゃんを、楽にして上げられるつて言うんだ……？」
今現在ナミの苦しみを少しでも和らげる薬を作れるのはレウスのみ、材料自体はあつてもビビ達ほどの割合で混ぜたり磨り潰したりして飲ませればいいのか解らない。ならば倒れる訳には行かない。自分だつて麦わらの一味なんだからしつかりしなくてはという強い意思で気を持ち直すとキッチンへと入り濃いコーヒーを淹れて喉へと流し込むと直ぐにナミの元へと戻つて行つた。

「(無理が、祟つたか……？少し眼が……)」

翌日、降頻つていた雪はなりを潜めた気候が安定しつつも寒さが続くようになっていた。不安定さが異常さの一つでもある偉大なる航路にしては安定しすぎていると思いつつも疲労からか掠れ初めている視界に活を入れながら獣人形態になりながらリオレウスの視力の良さを活かしながら周囲警戒をしながら島を探す。

「うゝさみい……にしても安定して寒くなってきたな」

「だなく、それもやっぱりこの海の不安定さゆえかもな」

「いえきつと島が近いのよ。きつと冬島ね」

偉大なる航路には四季の一つが主な季節となつている島が幾つも点在しているらしい。それらの島に無数にある偉大なる航路の海は普通で入られなくなり不安定になつてしまふとの事、逆に言えば気候が安定した場合は島が近い事の証明になると言う。その説明に感心しつつレウスも水平線を見続けると僅かに何かが見えたような気がした。

「サンジ、何か見えないか!」

「ああ、見えたぜ遂に見つけた……! 島が、あつたぞおおお!!」

見張り台に立っているサンジが思わず歓喜の声を上げた、雪が高く降り積もつて冬島が少しと奥に見える。これで念願の医者にナミを見せる事が出来る!!とウソップやビビも嬉しそうに声を張り上げる、それに釣られるようにレウスも嬉しげに笑みを浮かべるが気が抜けてしまったからかその場に座りこんでしまう。

「レ、レウスさん!」

「お、おいおいレウスまさかお前も病気か!」

膝をつきながら激しき呼吸を乱す彼を心配そうに見つめながら肩を貸して立ち上がらせるビビにレウスは疲れ切っている笑みを浮かべた。

「大丈夫……これで、ナミちゃんを医者に見せて上げられると思うと気が抜けちゃつて……」

「つたく吃驚させないでくれよ……」

「少し休まないと駄目よレウスさん、まともに寝てないんでしょ……?」

「何……もう大丈夫さ、心配してくれて有難う。元氣出てきた」

お姫様に心配されるなんて男冥利に尽きるねと軽口を叩きながら柵に手を置きながら迫つて行き冬島へと真つ直ぐ視線を向ける。後少し、医者所まで連れて行つてナミがもう大丈夫だと解るまでの辛抱だと思ひながら上手く力が入らない身体に活を入れる。一面雪に覆われている島、正に冬島というような島だ。まあこれは初めての冬島なのだ。上陸をしようとしたその時、

「今すぐ出て行け海賊共!!」

そこらの木々の隙間や周辺の窪みから銃などで武装している防寒着を纏っている人々が次々と現れてきた。恐らくこの島の住人だろうがこちらに明らかな敵意を向けながらこちらを威嚇している、既に威嚇ではあるだろうが一発銃弾が打ちこまれていく。それを一人の男が制したが、かなり状況は緊張している。

「おい如何する、斬り込むか?」

「威嚇だろうが一発撃たれてる、だけど下手に動けば医者呼んで貰えなくなる」

「如何する船長?」

「……………」

ルフィは着ていた防寒着ごと服を脱ぎ捨てた、ウソップ達は余りの行動に驚きの声を島の人々と同時に上げた。現在の気温はマイナス10度、熊が冬眠の準備を開始する気温で凍えるような寒さの中で上半身裸になってそのまま土下座をした。頭を床に叩き付けるかのような土下座を。

「医者を、医者を呼んでくれ!!病気になっている仲間を助けてくれ!!肉を食って元気にならねえし、凄いい熱で苦しそうなんだ…………!!お願いだ、ナミを、俺の仲間を助けてくれ!!頼む!」

ルフィに続くようにレウスも防寒着を脱ぎ捨て土下座をした。

「お願いします…………皆さんには危害を加えない事を約束します。もしも約束を違えたら、この命を差し出します…………!!」

今の気温で半裸になるのは下手すれば命を危うくしなけない行為、それを行っての懇願に島の間人は酷く動揺していた。彼らの中では海賊と言うのは悪という認識で残酷非道な物ばかりだと思っていたのに仲間の為に此処までする物なのだろうかと困惑の聲が広がって行った。その誠意が伝わったのか緑色のコートを羽織った大柄の男が前へと出た。

「村へと案内する、早く服を来て付いて来たまえ」

空の王者、冬島を舞う

雪が降頻る道を進んで行く、少し視線を上によれば分厚い雪雲が天を高く深く、塗っているように覆い尽くしている。同時にまるで地面から生えている大砲の砲身のように円柱状に高く高く伸び聳えている巨大な山、それがこの島の特徴なのだろうと思いつきながら積っている雪を踏み締めながら進んで行く。途中巨大な熊に遭遇するが先頭を歩く男、麦わら海賊団の上陸を認めてくれたドルトンはハイキングベアーと言う危険のない熊だと説明する。登山マナーである一礼をすると同じように返してくれハイキングベアーは去って行く。

「……くまって言ったら死んだふりだろ……？」

但し、ウソツプのみは死んだふりをして雪に倒れこんでいたが。

「因みにウソツプ、死んだふりしたらそのまま食われるからしない方が良くぞ」

「マジかよ!!!」

「ここが私の家だ」

ビックホーンと言う村へと辿り着くとドルトンは海賊達は自分達に任せてくれと皆

に言った、海賊なのに大丈夫かと心配している声もあったが長年の勘で彼らは大丈夫だと納得させた。かなり信頼が厚いのかドルトンに掛けられる声は純粹な厚意に満ち溢れている。そのままドルトンの家の上がらせてもらいナミを休ませる事となった。

「そのベットを使ってくれたまえ、今部屋を暖めよう。申し遅れたが私の名はドルトン、この島の護衛隊長をしている者だ。我々の手荒な歓迎をどうか許して欲しい、皆海賊と言う言葉に敏感になっている」

基本的に海賊というのは無法者や凶悪な人間が多い、寧ろその対応は正しいだろう。威嚇とは言えいきなり発砲するのは流石に不味いだろうが、凶悪で凶暴な海賊だったら問答無用で皆殺しだろう。謝罪をし終えると背負っていた武器を降ろしながらビビを見つめた。

「一つ聞いていいかね。どうも私は、君を何処かで見た事があるような気がするのだが……」

「き、気のせいですよきつと！私は知りませんし……そ、そんな事よりお医者さんと呼んでくださいー！」

「医者、か……この島には医者はたった一人、魔女と言われている医者しかいないんだ」「い、医者が一人だけえ!?おいおい折角ナミさんを見て貰えると思ったのによお……!!」
齒がゆい思いをしながら齒軋り音を立てながら目を反らすサンジ。無理もない、元か

ら女性を尊重し大切にしようにしている彼にとつて苦しんでいるナミは見えていられない状態ですぐにも元気にして上げたい。それなのに医者はずっと一人しかないと云う状況はかなり拙い。思わず外を見てしまうと窓の外では元気に雪遊びをしているルフィとウソップが見えた、サンジの怒りのボルテージは一気に上昇し二人をボコボコにして屋内に引つ張つてきた。

「この島のたつた一人の医者。この村に来る途中、山が見えなかつたか？」

「え、ええ。あの凄い山ですよね」

「この国で唯一人の医者、魔女と呼ばれる女、Drくればはあドラムロッキーの山の頂にある城にいる」

「あの山の頂上!?!よりもよつてんな所にいるのか!?!」

「ああ。加えて通信手段も無く、降りてくるのを待つしかないんだ」

「医者はたつた一人に加えその医者がいるのは雲をも貫かんと伸びる巨大な山ドラムロッキー、更に追い討ちを掛けるように連絡を取る手段も無く本人が自分で降りてくるのを待つしかないと言う事実が待っていた。」

「糞……」

「うーん、なあどんくらい時間掛かるかな?」

「頂上までか、そうだな……健康な人間が行くとして数時間だな」

「結構かかるな。あつそうだレウス、お前飛べねえか?」

ルファイが何気無く発した言葉はその場にいる全員に希望を齎した。レウスの飛行能力、高い飛行能力を持つている彼ならば普通に行くよりも遥かに早く行く事が出来るのではないか!?!とルファイは考えた。それだけ早く着けばナミを見てもらう事も出来ると思っただのだ。

「飛ぶ!?!君は一体何を言っているんだ?」

「ああ、こいつは悪魔の实の能力者なんだ。こいつはドラゴンに変身出来て空を自由に飛べるんだ」

「なんとドラゴンに……!?!では悪魔の实の中でも最も希少とされる動物系ゾオンの幻獣種!!?!」

「ドルトンさん随分、お詳しいですね」

「ああ、私も同じく悪魔の实の能力者だ。動物系の悪魔の实、ウシウシの实モデルバイソンを食べたバイソン人間だ」

一瞬ドルトンが目つきを鋭くするとみるみるうちに姿が変じていく、体格は更に大きくなりながら頭部には二本の角が生え身体はバイソンの黒い毛に覆われていく。ルファイとウソツプは目を輝かせビビは何処か見られているような眼をしながらも興味深そうに、サンジはレウス以外の変形を見るのは初めてなので少し驚いている。

「うおおおおすげええ!!!おっさんカッコ良いぞ!遅しくて!!」

「そ、そうかね……？有難う褒め言葉として受け取っておくよ」

「しかし悪魔の実にも色々あるんだなあ……本当に」

「私の事はさておき空を飛ぶのはお勧めはしない。ドラムロッキーの周辺はかなり吹雪く上に一気に気温が低下する、彼の身体が持たないのもあるが彼女の身体が真っ先に凍えてしまう」

ルフィは良い考えだと思っただけだなあとガツクリする。

「だから彼女は先日下山している、だがひよつとしたら今日も下山するかもしれない。少し待とう、彼女の身体も休めなくては仮に吹雪いていないとしても身体が持つまい」

ドルトンの冷静な問いかけに一同はそのまま身体を休める事になった、暖かな暖炉の火を囲みながらナミの病状が少しでも安定するのを待つ。その間もレウスは疲労からか倒れこみそうになっている体を必死に起こしながらナミの為に薬を作り、飲ませていた。2時間がたっただろうか、ルフィはこのまま待つるのは嫌だから直接山に行つてナミを見て貰えるように頼んでくると言い出した。

「だってそれが一番だろ？ナミは動かせないだったら俺が行つてその魔女つて医者ばあさんを連れてくるしかないだろ？」

「そりゃ、まあそうだけだよ……だけどルフィあの山だぞ?!しかも吹雪いてるんだぞ?!」「んな事関係ねえよ」

仲間の為ならやると言いながら準備運動をしているルフィを見てドルトンはこの少年はどれだけ仲間の事を、大切に思っているのだろうと感動してしまった。この島の嘗ての王国の国王も彼の用に人を思いやれる人物であればどれだけ良かったのだろうかと思わずにはいられなかった。そしてルフィの為に防寒着と食料を別けて上げようとしたその時、ドルトンの家に一人の男が入ってきた。

「ドルトンさん、Drくれはが今隣町のココアウィードに来てるらしいんだ。彼女を探してるんだろ?」

「本当かそれは!? 待っていて正解だったか!」

「おい医者而降りてるのか!」

「ああ直ぐにソリを出そう!!」

「否俺に乗れ、そっちの方が速い!!」

再び差した光に一同は大喜びだった。大急ぎで隣町なら何とかナミの体力でも大丈夫だろうと言うドルトンの判断でかなり分厚く服を着せるとゴム故に衝撃を吸収し易いルフィが彼女を背負う事が決定した。そしてココアウィードで素早く話を通す為にドルトンも同行する事になった。

「ぐっ……もう体力が……いや、後一回だけなら……!!」

完全竜化を行いリオレウスへと変形するレウスは己の体力が既に現界を突破してい

る事を理解してしまった。もう意識を保っているのもやつとな状態、しかも低い気温が更に体力を奪い意識を刈り取ろうとして来るのを必死に耐える。背中へと飛び乗った6人を確認すると身体を持ち上げた。

「レウス頼むぞおっ!!大急ぎで!!」

「疲れてるだろうけどお願いレウスさん!」

「道案内は私がする」

「頼むぞドルトンさんよ、さあレウス。ナミさんの為だ!!」

「出発進行だレウスウッ!!!」

「しっかり、掴まってるよ……!!」

一秒毎に重くなっていくような身体を必死に持ち上げながら翼を羽ばたかせるとその巨体はゆっくりと宙へと上って行き、木の上スレスレを通るように飛びだった。道が解りやすいようという判断からではなくこの高度で飛ぶのが限界なのである。完全竜化するだけでも体力を使うのに極限状態での竜化と飛行は想像以上に精神力をすり減らしていく、それでもナミを助ける為だと身体と意識に鞭を打ちドルドンの言葉通りに翼を動かす。

「……!!」

「レウスさん……もう何日も寝てないし何回も変身してるから体力だって、限界な筈な

の……後少し、だから頑張つて!!」

「見えたあの町だ!後もう少しだ!」

「レウス頼む頑張つてくれ!後ちよつとで、ナミさんを診せられるんだ!!」

必死にレウスを励ますサンジ達、その言葉はしっかりと聞こえているが既に彼の意識は無くなり掛けていた。それでも身体は進んで行く。仲間の為に……そしてココアウィードの中央の広場へとレウスは降りた、その際に住民たちは大騒ぎするがドルトンが必死に呼び掛けパニックを静める。

「この町にいるんだな魔女のばあさんは」

「おいルフィもつとそつと降りやがれ!!」

雑にジャンプして降りるルフィを咎めるサンジ、それに続くように降りようとした時レウスの身体が一気に傾いた。ビビとウソップがずり落ちドルトンはジャンプして飛び降りる。リオレウスという巨体は重力に引っ張られるように雪が積る地面に没した。

「お、おいレウスしっかりしろよ!!大丈夫か!」

「レウスさんしっかりしてレウスさん!!」

必死に二人は呼び掛けるが全く応答はない、徐々に身体は元の人型に戻っていく。それを見て周囲の人々はドルトンと同じ悪魔の実の能力者である意味安心したがそんな事は気にならなかった。今新たに仲間が倒れてしまったのだから。

「おやなんだか騒がしいと思えば、ドルトンアンタかい」

「ド、Drくれは!!」

レウスが倒れこんだ広場に一匹のトナカイを連れた女性が現れた、その姿を見た瞬間にドルトンが叫んだ。それを聞いて一斉にそちらを見た、皆が魔女というのが納得出来てしまった。140近い高齢だと聞いたのに背筋は真っ直ぐに伸び言葉は強くハッキリとしている、しかもこの寒さの中臍だしの服を着ている、正に魔女だ。

「あのばあさんが医者か!?!」

「ああそうだ、唯一の医者。Drくれはだ。Dr、すみませんが急病人です、熱が42度もあるんです!!」

「何だって……?見せな!」

彼女はドルトンの言葉を聞くとすぐさまナミの元へと走り、その顔を見ながら熱を測った。そしてすぐさま彼女が患っている症状を理解し病気の正体まで特定し顔をこわばらせた。

「こいつは……確かに拙いね、だがここで治療は出来ない。薬は城だ、付いておいで。それとそちの奴も病気がい見せな」

くれはは倒れこんでいるレウスを仰向けにすると即座に診察を開始する、だがこちらは病気ではなかった。過度に溜まった過労と精神的な負担によるダウンと診断出来た

がこちらもちちらで治療は必要になるレベル、どれほどまでに身体を酷使すればこのようなのかと不思議に思える程だ。

「その小僧も連れて来な、但し遅れたら置いて行くからね」

「ああ、サンジレウスを頼む！」

「任せろ！」

空の王者、トナカイと仲良くなる

意識が泥に絡め取られるように薄れていく、自分が自分で決めたナミを医者に診せもう心配無いと解るまで倒れないと誓ったのに医者居る所に彼女を連れて行く事しか出来なかった。消えて行く意識の中僅かに聞こえてきたのはドルトンのドクターと言う言葉だけだった、凄まじい疲労と磨耗した精神ではもう意識を保ちきれずに糸が切れる様に何も感知出来ないようになっていった。

薄つすらと瞳が開き意識が回復する、まだ何処かぼうつとハッキリしない意識。時間を掛けながらそれをゆっくりと掘り起していく、大分意識がハッキリした所で自分が置かれている状況を確認してみることにした。どうやら簡易型のベットに横なっているらしい、此処は何所なのだろうかと身体を揺り起こす。

「此処は……？」

薄暗い空間の中、良く見えない空間を見渡すと石造りの壁に葉が置かれている棚などが目立つ。手術に必要な道具なども見えている、意識が戻った事で記憶も戻りもしかしたら此処は医者が居るといふ城なのではないかと思つた。ベットから立ち上がって見ると身体の疲れがかなり抜けている事に驚いた、倒れる前は意識が薄れるほどに辛かつ

た筈なのに今では平然と立ち上がる事が出来ている。

「もう起きたのかい、想像以上のタフだね」

突然声が聞こえてきたそちらに目を向けて見るとそこには片手に酒瓶を持った女性
こと、Drくれはが笑っていた。

「ハッピーかい、小僧」

「アンタは……もしかして、医者だつていうDrくれは……？」

「そうアタシがそうさ。ドクトリーヌと呼びな」

「ドクトリーヌ……？えっと、140近いって聞いたんですけど……見た感じいい所5
0 近くなんじゃ……」

初めてDrくれは、ドクトリーヌを見るレウスが抱いた印象は聞いていたよりも遙かに若々しいという事だった。140近い高齢と聞いていたが背筋は真つ直ぐ伸びているし肌の艶も良い、声もハッキリ通っている。これが100歳を超えている女性とは思えない、レウスの言葉にドクトリーヌは軽く笑いながらお世辞だとしても有難く受けとくよと答えながらそれを受け取る。

「だけど私はそこまで幼くないよ、艶々で華の130代だよ。独身だしね」

「130ウ!?嘘でしょ!?ミス、どれだけお元気なんですか!？」

「若さの秘訣かい？」

「あついえ聞いてませんけど、だけど普通に気になります……」

ドクトリーヌ曰く若さの秘訣は常に病気ハッピーでいる事らしい、それで常に身体が活性化されるハッピーと語っている。それを熱心に聞いてしまうレウス、長生は矢張り生きていく上にそうなりたいと思うものの一つだ。

「あつ。そうだドクトリーヌ、俺の他に女の子が居ませんでしたか!? 凄い熱で俺が見た限りだと動脈炎も起こしてて……!!」

「おやある程度の医療の知識はあるようだね小僧、あの小娘の治療は終わってるよ。もう良い方向に向かつてるよ」

「はあ……良かったあ……」

ナミの治療は既に終わっていてそれも回復に向かっていると解るとまた力が抜けてしまった、だが今度は安堵から来る力の抜け。安心してこの脱力感に身を委ねられた、仲間の安全が解って嬉しそうに浮かべている笑みを見るとドクトリーヌもイツヒツヒッと笑った。ドクトリーヌは付いて来なと言うとレウスを連れて隣の部屋へと案内した。そこにはナミが眠っておりその表情は酷く穏やかだ。安心したような息を吐くとドクトリーヌは椅子に座りながらレウスを見た。

「小僧、お前が処置をしたのかい? 小娘の着てた服の中に粉状の薬が入ってた」

「あつはい、それは俺が作った物です」

「調べさせて貰ったけどこいつだね、娘の命を繋いでたのは」

それにレウスは驚いたように声を上げた、命を繋いでいた？ 一体どうということなのだろうか。

「こいつには抗生物質が含まれている、それも上質な物だね。加えて解熱に鎮痛作用まであるね。こんな薬をどうやって作ったんだい？ このアタシだつてここまでの物は簡単に作れない、かなり良い材料が船に積んであるのかい」

「ああそれは俺の身体から作ったんです」

「お前の、身体から？」

その言葉に良く解らそうな表情を浮かべるドクトリーヌ、三つの作用を含みながら此処まで上質な物は中々作れる物でもない。聞いた限りレウスには医療の知識はそこまではないのに一体どうやってこんな薬を作ったのかと思索してしまう。しかも自分の身体から作ったと語る意味が解らない、どういう事か聞こうとした時廊下側の扉が開き誰かが入ってきた。

「おやチョツパー、良い所に来たね。隠れてないで出て来な」

「チョツパー……？」

ドクトリーヌの言葉に導かれるように振り向いて見ると一瞬眼を白黒させてしまった。そこにはなんともお粗末に隠れている者がいた。モコモコした毛皮に湾曲した二

本の角にピンク色の帽子を被っている二足歩行をしているトナカイと思われる生物がいた。それはドクトリーヌの言葉に従うようにゆっくりと部屋へと入るとドクトリーヌの後ろに素早く隠れるように移動した。

「えつと、ドクトリーヌそれは……?」

「こいつは私の助手チョッパース」

「助手……?もしかして悪魔の実を食べているんですか?」

「ほう解るのかい?」

「俺も食べて化け物になってますからね」

ケラケラと笑うレウスにチョッパースはそつと見るように身体を出しながら蹄でちよんちよんとレウスに触れるように突く。彼にとつてドクトリーヌ以外の人間は警戒する対象なのかもしれないと察する。何所が化け物なのかを確かめるようだ。

「お前、なんで化け物なんだ……?普通の人間だぞ」

「俺は動物系悪魔の実を食べてドラゴンになれるようになったんだ」

「ド、ドラゴンウウ!?ド、ドラゴンって空想上の生物だろ!」

「まあ見てな、でもあんまり大声出さないでくれよ?ナミちゃんが起きちゃう」

そういうとチョッパースは口に手をやって大声を出せ無いようする、寝ている患者がいるのに大声を出してはいけないと自分の行動を咎めるようだ。言葉から察するとこの

チョッパーも良い医者なのかもしれない、静かになってから頷くのを確認すると片腕だけを竜化させていく。次々と鱗や甲殻で覆われていく腕を見たチョッパーは目を見開きドクトリーヌは興味深そうにそれを見つめた。

「俺はリオレウスという竜に成る事が出来るんです、その薬も俺の爪や牙に鱗を混ぜて合わせて作ったんです」

「ほう？それは実に興味深いねえ、お前さんの治療費はお前さんのその鱗や爪、牙つて事にしておこうつかね」

「その位だったら」

その場で爪を切断し鱗を剥がし牙を抜いていくレウス、痛み自体はあるが竜化すると痛みにかなりの耐性が出来るためか痛みはそれほどでもない。大きな袋一杯に素材を入れるとドクトリーヌは満足そうに頷き何処か意地悪い笑みを浮かべるとそのまま去って行ってしまった。チョッパーはナミのポケットに入っていた薬を改めて調べて見るとその効力に大きく驚きながらレウスに目を輝かせながら近寄った。

「お前すげえんだな!!俺こんな薬になる素材なんてみた事ねえよ!!」

「そうか、有難う」

「それに俺ドラゴンなんて初めて見たぞ、なあ身体も見せてくれよ!!」

「医者 of 身体検査つて事なら受けない訳には行かないな」

レウスは服を脱ぎながら身体を人獣型に変形されていくチョツパーは更に目を輝かせながらカッコ良いと騒ぎながら大興奮しながら触れながら色々調べ初めて行く。がその途中はチョツパーは手を止めてしまった、その顔には影を作り少し距離を取った。

「お前俺の事恐くないのか……？」

「何でさ」

「だって俺はトナカイなのに二本足で立ってるし……人間じゃないのに喋るし、青鼻だし……ば、化け物だし……」

段々声は小さくなっていくチョツパーの声、たつたそれだけのなのに今まで辛い経験をした事がある事が解ってしまう。ドクトリーヌの助手となった今では考えられないような辛い事があったのだろう、化け物と揶揄され襲われた事もあったのかもしれない。気付けばそんなチョツパーの頭を帽子越しに撫でていた。

「俺はそんな事思っていないぞ、確かに少し驚いたけどさ。化け物とか恐いとは感じてない」

「な、なんで……？」

「それなら俺の方が化け物だからさ、だって竜に成れるんだ。普通の人間から見たら俺の方が異常さ」

「そう、かな……？お前からは嫌な臭いとかなしいし悪い奴じゃないと思う」
「ありがと、嬉しいな」

気付くと二人はにこやかに笑っていた、エツへへへへと笑うチョツパーに釣られて一緒に同じような笑い声を二人して漏らしていた。

「俺はレウス。レウス・R・リオスだ」

「俺はトニートニー・チョツパー、宜しくな！」

化け物と呼ばれたことのある優しいトナカイ、自らを化け物と呼ぶ竜人。似たような二人は何処か通じ合っているように感じたのか気付けば仲良くなっていた。

空の王者、さらば冬島

チョッパーと仲良くなったレウス、自分もナミの看病を手伝うと進言するがチョッパーはそれは認めようとしてくれなかった。理由として患者に看病をさせる訳には行かないし、まだ完全に疲れが抜け切っていないから安静している必要があった。致し方なくベットも戻って横になる事になってしまった、ご丁寧に点滴までして動かないようにとチョッパーがしてしまった。

「これでよしつと、じゃあ俺は看病しに行くけど動いちや駄目だからな！安静にしてるんだぞ」

「はいはい。名医のチョッパー先生の言葉なら聞きますよ」

「う、うるせ〜！そんな、名医だなんて言われても嬉しくねえぞ♪ふざけんよ馬鹿♪」
「（感情が隠せないタイプみたいだな……）」

口では文句や罵倒を言ってるが嬉しさが隠しきれずにウキウキとステップを踏んだり声が高くなっているチョッパーに微笑ましい視線を送りながらしつかりと忠告どおりに布団に潜る事にした。チョッパーはそれを確認するとナミの看病へと向かおうとしたが、バダンつと強く扉を開ける音が木霊した。

く、完全には眠れてはいないがそれでも自分では起きていると思いつつも眠っているような状態にはなっていた。そしてそんな状態でそれなりの時間が経つたと思えた時だった、爆音が響き城全体が揺れていた。それに飛び起きるとまた爆音が響いた。

「何だ……？ 敵襲？ 悪いチョツパー起きるよ」

チョツパーに謝りつつ点滴を抜くとベットから立ち上がる、爆音がまだ続くと思つたが途中で音は途切れてしまった。兎に角状況を確認したいと部屋から出て廊下に出ると異常な寒さと周囲に降り積もっている雪に目を見開いてしまった。此処は城の中だと言ふのに何故此処まで雪が積もって居るのかと疑念が積つたがそれを頭の隅に追いやると部屋に掛けてあつたコートを借りて廊下を歩き始めた。

「城中雪だらけ……一部の部屋の扉は凍つてて開かない。もしかしてずっと城門でも開けてるのかこの城……？」

簡単な推測を立てながら足を進めて行くと妙に騒がしい事に気づきそちらへと足を進めて行くとコートを着ているナミを何かバケツのような何か階段を降りている。凄まじく珍妙な光景に思わず思考が凍り付いてしまふが次の瞬間には更に凍りつく。バケツから高身長スリムな美男子……とお世辞でも言えないような男が飛び出してきた。もう訳が解らない、完全にレウスが混乱しているとそれはナミへと襲い掛かった、瞬間的にレウスは正氣に戻り凍り冷たくなっている柵に乗りそのまま蹴る様にナミへ

と向かう。

「まずお前から食ってやるウ!! マツハハハハ!!」

「何しとんじや貴様アアアアア!!」「みつけえええええ!!」

レウスの竜化した際に左手の竜頭を振り抜き巨大な岩をも貫通する一撃が妙ちきりんな男、ワポルの頭部に炸裂し吹き飛ばうとした時に全く別の方向から飛んできた足が頬を直撃、加速した足の打撃は高い攻撃力の一撃となつてワポルに襲い掛かりそのまま石壁にめり込ませるように吹き飛ばした。その足の主は勿論ルフィであつた。

「はあはあ……有難うレウス助かつたわ……」

「大丈夫かいナミちゃん、まだ熱があるじゃないか。動いたら悪化するぞ」

「でも後三日も安静だなんて、じつとしてられないもの」

疲労で倒れた自分と違つてナミの病状はれっきとした病、安静していなければ再発してまた苦しみを味わう事になってしまう。だがナミはじつとなどしていられない、ビビは自分の国が大変な事態になつているのに自分の為にこの国に寄つてくれたのだから一刻も早く出航しアラバスタへと向かいたいのだ。その気持ちも良く解るがと渋るレウスだがそこへルフィがやつて来る。

「おおレウスもう良いのか?」

「お蔭様でな、所であれなんだ?」

「ああ邪魔口だ、海賊邪魔口!!」

「何よ邪魔口って? まあいいわ、兎に角ルフィあいつ気絶してるし今の内にぶっ飛ばしちゃってよ。そうすれば、あんたがボロボロにしたそのコートの弁償代、少しは安くするわよ?」

「なあああ!! お前まさかこうなるって予想してたのか!? わ、解った直ぐにぶっ飛ばす!!」

「ナミちゃん……君も悪よのお」

「フフフ、小悪魔ナミちゃんだもん♪」

「ゴムゴムのバズウウウカアア!!」

後ろを見て見ると城の城壁ごと貫通して放たれたルフィのバズーカの一撃がワポルの腹部に炸裂しそのまま天高く打ち上げるかの如く、飛び去って行った。その速度はレスの視力でも瞬時に見える圏内を越えていくほどだったとか。

敵の撃退も終了しルフィはチョッパーを仲間にすると言って追いかけて行った、それを見届けるとナミは部屋に戻れと言われビビはそれの見張りとして立たされた。自分もベットに戻ろうとするがドクトリーヌに下手に無茶な動きをしない限りベットに戻らなくても良いと言われたのでビビと共にナミを見張っている事にした。

「でもナミさん治療はしっかりと受けた方が良いわ、確かに早くは行きたいけど最高速

度はナミさんが元気であるからこそ出るんだから」

「いいのよもう殆ど治ってるもの、後は安静にしてればきつと大丈夫よ。それにレウスが作ってくれた奴は抗生物質でもあるみたいだし行けるでしょ」

「はあ……俺としては君の身体を重視したいんだけどなあ」

本人曰くもう何とも無いらしいがもしもアラバスタへの航海中に容態が悪化したら大変な事になる、ビビはこのまま治療を受ける事を進めるがナミは聞く耳持たない。そこへ新しい酒瓶を持ったドクトリーヌが入ってくる。彼女はビツクホーンにてワポル達と戦った為に負傷したドルトンへと身体を向ける。

「ドルトン、武器庫の鍵は何所にあるか知ってるかい？」

「鍵、ですか？……あれは常にワポルが携帯していたので、今も同じなら恐らく」

「空の彼方、か……困ったねえ……」

理由は解らないが武器庫になるであろう武器を何らかの為に使おうとしているのは察する事が出来た、ドクトリーヌにとつて重要な事なのかもしれないと思つた瞬間にナミの瞳が輝いた。懐から鍵を一つ出しながら意地の悪い笑みを浮かべながら言った。

「ドクトリーヌウゥ♪この武器庫の鍵あげるから、治療費はチャラで、加えて今すぐ退院させて♡」

「なっ!? ナミ君何故その鍵を!？」

「すったのよ、ワポルから」

「まさか、あの時に……!!?」

「(名答♪)」

ワポルに襲い掛かられ押し掛かれたあの時に鍵を奪った、なんという手癖の悪さ……そしてそれを機会を逃さずに交渉の材料とする彼女の性格にレウスは少し苦笑いするのであった。

「このアタシに条件をつき付けるとはね……!!良いだろう……。おいお前達ちよつと手伝いな力仕事だ!!」

ドクトリーヌは苦虫を噛み潰したような表情でナミから鍵を奪うように受け取りながらドルトンの身を案じる村人達を連れながら扉へと向かうが、治療費の免除しか認めないと言った。医者として退院は許せないと。ナミはそれに抗議するがそれを潰すように上から言葉がかけられた。

「良いかい子娘、あたしはこれから部屋をあける。奥の部屋にあたしのコートが入ったクローゼットがある。別に誰が盗っても困らない奴さね。そしてその小僧の治療は既に終わってる、だが決して抜け出すんじゃないよ! わかったね!!」

そう良い残すと今度こそ男達を連れて部屋から出て行った、ナミは肩を竦めると今の内にコートを着てレウスと一緒に逃げ出せと意識したドクトリーヌの言葉を言う。そ

れには全面的に同意である、素直でないと言うかなんと言うか……。と言う訳でナミはドクトリーヌのコートを一着失敬した、レウスはサイズの関係上駄目だったがドルトンが城の兵士達が使っていたと言う物を一着出してくれたのでそれを着る事になった。

「うるせえ！行こおおおおお！！！」

「……おおおおおおおおおおおつっつっつ！！！！」

城を出た時、周囲に響き渡るかのような大声と嬉しさ混じりの涙声。ルフィとチョッパーの声だ、どうやらまだ勧誘を続けていたようだが上手く行ったようだ。ナミとビビと共に城門を通り過ぎるとチョッパーが此方へと走ってきた。

「レウス、俺、俺仲間になる事になった！！」

「良いのかチョッパー、来てくれるのか？」

「俺、海に出る！！」

キラキラと輝きながら嬉しそうにしているチョッパーの表情に思わず釣られて笑みがかぼれた、旅に同行しているという申し出はナミとしてもビビとしても嬉しい物だった。偉大なる航路の旅はまだまだ続いているのだから船医の確保は急務だった、それが今達成された。そしてビビとしてはこれでナミの病気に関する心配が消え去ったのだから。

「それじゃ俺準備してくる！！」

そう言つて駆け出していく新しい仲間、トニトニー・チョッパー。正直かなり嬉しい。「さてとチョッパーが来たら直ぐに出航するわよアラバスタへー! ビビも文句ないでしょ?」

「ええ。船医さんが一緒に来てくれるのなら」

「にしてもあのトナカイが船医か……後で食材にしようとしたこと謝らねえとな」
「お前んな事してたのか……?」

いよいよこの島からも出航となる、アラバスタへと向かう途中急遽寄つた島だったが結果的には寄つて正解だったかもしれない。新しい仲間を得る事が出来たのだから、これより安全に航海をする事が出来る……。そしていよいよ迫るアラバスタ、反乱を止め国を救うと言う一海賊団にしては手に余る物なのに皆の顔に戸惑いの色は見えない。ビビはそんな皆に励まされていると城が騒がしい事に気づいた。

「ねえレウスさん、城が騒がしくありません?」

「そうだな……何を騒いでるんだ?」

「全く野暮なんだから……感動の別れになるんだから静かにしてやれば良いのに」

同意しようとしたとき、チョッパーが姿を表した。が何故かソリを引きながらモーニングスターを振り回しているドクトリーヌに追われている。

「つてチョッパー追われてる!」

「あの婆さんなんてもん振りましてんだよ!? 危なすぎるだろ!」
 「皆ソリに乗ってえ!! 山を降りるぞお!!」

「はあはあ……」

息を荒げながら見下ろす景色には張られたロープの上を駆け下りて行く一匹のトナカイとそれに引かれてソリに乗った者達が見える。あのスピードならもう山を降りきった頃だろうか……チョッパー、自分の医学の全てを叩きこんだ助手。

——そうだよトナカイだ!! でも、男だ!!!

反対する自分に強く反発したチョッパーのあの言葉、泣き虫だったトナカイがあんな言葉を言えるようになったのかと少し感動してしまった。

ならさつさとやってしまおう、あいつの夢^敵者^者を。傍で見続けてきたチョッパーに見せてやらなければ。

「用意は良いかい、若造共!! 撃ちな!!」

——この日、冬島、元ドラム王国。雪に閉ざされ年中雪が降り続けるこの島に……
 鮮やかな桜が咲いた。

空の王者、いざアラバスタへ

——深い深い雪雲に覆われ閉ざされている冬島に、その天に届かんする山、ドラムロッキーの頂上より鳴り響く無数の砲音。人々はそれを悪政王ワポルが戻り王政復活を告げる物かと脅えた。やがて砲音が成り止むと、明るく照らされるドラム城。人々は思わずそれを見つめた、明るく照らされた城ではなく……

——俺は桜を咲かせてみせる！俺の発明が完成すればこの国は救われるんだ!!

昔、そう言っていた医者がいた。その男は藪医者と蔑まされ治療された人間に感謝などされた事など無い男だった。その男が30年と言う長い長い時間を掛けて作り出した物、それは人々の心に感動と言う薬を与え内部から人を治療するという物だった。それは……。

「お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お!!!」

一匹のトナカイが大粒の涙を流しながら叫ぶ、心から尊敬する医者の言葉は嘘ではなかった。研究は完成していたんだ……!!!と喜びを嬉しさを溢れさせるように流れる涙、その先にあるのはこの島の中心にあるドラムロッキーを幹にするように咲いた春の象徴の一つとも言える桜だった。白い大地と白い空に浮かび上がった鮮やかなピンクの

桜はこの世の物とは思えない幻想的な風景を生み出した。

白い大地に降り注ぐ桜のような雪、その桜に照らされるように輝く白い大地。正に奇跡のような光景だった。この世とも思えない美しさに暫し人は呆然としてしまったが直ぐにその美しさに目を奪われ恍惚とした表情となりながらその光景に酔いしれた。島で一番信用されず、嫌われていた男が作りだした奇跡を誰もが言葉を失いながら目に焼き付けた。

そして——今でも人々の心の中で生き続ける医者に医者として進めと言われ、最高の医術と優しい心を持ったトナカイは、今海賊となり海へと旅立った。

「チョッパー、これから宜しくな」

「うん、レウスも宜しくな!!」

「野郎共おく新しい仲間、チョッパーに乾杯だああ!!」

『カンパー—————イ!!!』

彼の仲間入りを祝う宴は、羊の海賊船の上で朝になるまで続いた……。

島を出航しアラバスタへと進路を取り航海をする事二日、チョッパーの診察による完全な回復が認められたナミは病気のせいでもともと動けなかったフラストレーションを解消するかのようキビキビと指示を出しながら航海をする。皆もそれを嬉しく思

いながら動き回った、そして矢張りこの船にはナミの航海術が必要不可欠だと再認識しながら船は進んで行く。

「へえ、じゃあこれが”ランブルボール”っていうのか」

「うん。5年間の研究で俺が作った丸薬なんだ」

ラウンジでは海図をチエックしながら何かをメモしているナミ、病気で動けなかった間の航路などは一応ビビが記録していてくれたのでそれをかき起こしている。後々に立つだろうしなにより彼女の夢である世界地図にも関わる大切な事だ。レウスとチョッパーは床に座りながら互いの話をしている、そんな時、チョッパーの戦闘に関する話になった際にチョッパーは自分が開発した薬を見せた。

「んでこれを使うと、どうなるんだ？」

「これを使うと悪魔の实の変形の波長を狂わせる事が出来るんだ。約三分間、俺は後4段階の変形をする事が出来るようになるんだ」

「へえ、面白いな」

ゾオン

動物系の能力は『人型』・『人獣型』・『獣型』の三段階に自在に変身できるのが最大の特徴。だがチョッパーは長い時間を掛ける事によって自分が食べた悪魔の实の変形メカニズムを解明する事に成功し新たな変形点を発見する事に成功している。これがあ
る意味ルフィが勧誘した理由、七段階変形面白トナカイと言う事である。

「凄いなチョッパ、 医術だけじゃなくてこんな物まで作っちゃうなんて……」

「そんな褒められても嬉しくねえぞこの野郎が♪もう馬鹿♪」

「私には嬉しそうに見えるけどねえ」

と茶茶を入れるとナミは直ぐに海図に向き直った。レウスはジツと興味深そうにランプボールを見つめている。

「なあチョッパ、 このランプボールって俺にも使えないかな」

「へっ? レウスに?」

「ああ、 なんか興味深くてさ」

「それは俺専用に合わせてるからレウスが使っても意味無いと思う、 レウスに合った物を作らないと駄目だと思う」

そう言われたレウスは少し希望を持たたような気がした。これから自分達が向かうアラバスタには世界政府に公認された海賊、 王下七武海の一角。サー・クロコダイルが率いる犯罪結社バロックワークスとの激突が予想される、 自分もビビの力になりたい。だから少しでも戦力の増強を計りたいと思っていた。

「それじゃあチョッパ、 俺に合った物を作ってくれないか」

「でも俺みたいなのは多分無理だと思うよ。それでも良い?」

「ああ、 構わない」

「……解った。それじゃあまず血を取らせて貰っても良いかな？」

早速血や牙や爪、鱗などを提供しチョッパーはそれを元にレウス専用のランブルボールの開発に着手する。倉庫の一室を借りての研究、チョッパーの場合は1からのスタートだった為手探りによる物だったが今回は自分と言う元がある為順調に進んでいる。このまま行けばアラバスタに付くまでには間に合う、がそれでもチョッパーは研究すればする程に自分とレウスの違いに驚くばかりだった。

動物系幻獣種、空想の産物とされている竜へと変じることを可能とする悪魔の実。根本的なメカニズムは同じであってもその途中で全く異なる方法を用いてリオレウスへと変わる力、この能力者にランブルボールを使ったら一体どんな変化が起きるのか全く想像が付かない。

「レウス、これ」

「チョッパー、これって……まさか？」

「間に合わせようと思ったから一つしか出来なかったけどなんとか」

二日後の朝早く、レウスが見張り台から降りた時に、倉庫から出てきたチョッパーが小瓶を手渡した。小さな瓶の中には自分の鱗のような、血よりも紅い色をした丸薬がそこにあつた。小瓶越しにあるというのに凄まじい存在感を放っている丸薬に思わず喉を鳴らしてしまった。間違い無い、これは自分に凄まじい力を与えると確信出来る。

「サンキュチョツパー、これで奥の手が出来た……」

「本当に奥の手にしてくれよ、それを使ったらどうなるか俺も解らないんだ……」

「……解った、有難うなチョツパー。さてと、サンジの飯でも食いに行こうか」

「うん！」

チョツパーが作った丸薬、レウス専用ランブルボール。本来はもつと時間を掛けて作らなければいけない物、それを一つだけと言う事で大急ぎで作った物。だがこれが何を齎すのかは誰もわからない。チョツパーの言葉を深く受け止めたレウスは出来れば使わない事を決めながら共に食事を取るのであった。

「おいレウスそつちなんかあるか？」

「駄目だな……調味料ぐらいしかないぞ。つたくうちの船長は……」

ドラムを出航して早5日、事件が起きた。夜中の内にアラバスタまで持つように配分されていた筈の食料全てが消えうせると言う事件だ。勿論犯人はルフィだった、それに加えてチョツパーやウソップ、カルーまで絡んでいた。チョツパーに関してはランブルボールの製作中に腹が減ってしまいついつい手を出してしまったと白状した、サンジもそれに付いてはしようがないと容認したが兎も角食料が無くなってしまったのは問題。そこで倉庫に何か残っていないかをサンジと共に搜索中。

「はあ………つたくルフィの野郎、俺も少し腹ペコなのに……」

「なら食うために探そうぜ」

「だな」

この後何とか保存食の干し肉などを発見する事は出来たがそれ以外の物を発見する事は出来ずにまいてしまったが妙に騒がしいので外に出て見るとなんと敵であるバロツクワークスの幹部、Mr. 2と遭遇したと皆は語った。相手の顔に触れることで全く同じ姿や声まで真似する”マネマネ”の能力を持ったマネ人間。敵陣に潜入し相手を内部から切り崩すのにこれほど適した能力も無い、しかもMr. 2が過去にコピーした相手の中にはビビの父親の顔まであったと言う。

「国王に成りすます……相当良からぬ事が出来るな」

「だな。だけど今あいつに会えたのはラツキーだ、対策が打てる！」

間もなくアラバスタに到着する所で遭遇した敵、だがその敵の能力を前もって知ることが出来た事は非常に大きな事。対策を打ち一味の内部崩壊を防ぐ事が出来るとゾロは語った。そして腕に×印のマークを入れた上に包帯を巻き、それを仲間の印とする事になった。

『いいか、左腕のこれが……仲間の印だ!!』

さあ、いよいよ砂漠の国だ！

空の王者、船長の兄を見る

念願となつていたアラバスタへの上陸、漸く此処まで来れたとはビビは安堵していた。途中にバロツクワークス配下のビリオンズの船を大量に確認したとしてもそれでもビビは国に辿り着けたと安心していた。ナノハナと言う街の近くへ船を停泊させたが付いた途端に空腹なルフィは勢いよくメシやを求めて駆け出して行つてしまった。何故この船の船長でありながら賞金首である彼が一番無鉄砲で無計画なのだろうか……。

「さてと……如何する、ビビちゃんは顔が割れてるし一応俺も残つて警護とかしてた方が良い？」

「そうね……サンジ君が一応私達が全滅してゐるつて話をしてくれてるけどもしもつて事も十分あり得るわ。でも此処が見つかったら戦闘になつても面倒よ、姿が見られないように慎重に全員で行きましょう」

ビビはこの国では顔が割れすぎではいるが残していくわけにも行かず、致し方なくバシれないように連れて行く事となつた。その方法は……

「なあ、これって結構無理があるんじゃないか？」

「でもこれが一番確実よ」

「ご、ごめんなさいレウスさん重く、無いかしら……?」

人獣形態となったレウスがビビを背負いその上からかなり大きめのフードを被り姿を隠すと言う物だった。見た目自体はかなり大柄の男がフードを被っているようにしか見えないようにレウスが翼をかなり無理して動かすことでカバーしている。カルーは大きめの木箱の中に入れてもらいそれを担ぐ形となった。

「大丈夫だよ、このぐらい軽い軽い。そっちこそ大丈夫?この形態はぶっちゃけ鎧纏つてみたいだからゴツゴツして痛くない?」

「ううん大丈夫よ（なんだか暖かくて少し気持ちいいかも……）」

「よし行くわよ!」

そのままナノハナへと入っていく一同、砂漠の町だけあって殆どの人は肌を隠すような服を着用しているからかレウスの格好はそこまで注目されなかった。一部の人からそこまで厚着しなくても良いんじゃないか?とからかうような声がする程度で収まった。街の外れに到着し周囲に一目が無い事を確認すると木箱とビビを降ろす。

「あああああ……あああああ……!!」

「だ、大丈夫レウスさん?な、なんかちよつと声が艶つぽかったけど……?」

「んっああごめん、なんか翼を動かした事が無い感じにやってたからちよつと直してた」

「今のがレディだったら俺は大歓迎だったんだけどな。20代半ばの野郎じゃな」
「喧しいわ悪かったなおっさんで」

半笑いのサンジにからかわれて少しむっとしてしまふ、年齢自体は余り気にする方ではないがこんな言い方をされてしまうと少し気になる。実際一味の中で最年長はレウスである、寧ろ一味が全体的に若すぎると言うのも多いにあるが。

「ええっレウスさんってそうなんですか!?! てつきり私二十歳位かと……」

「私も、結構年上だったのね」

「悪かったな27で……」

「気にすんなよ、おっさん」

「……20代はまだおっさんじゃ無いもん……」

おっさんは30代からだもんと若干いじけるレウスを他所にナミはサンジとチョツパーに服や食料などのお使いを頼む。この中でバロックワークスの社員と直接顔を合わせていないのはこの二人だけ、街にもバロックワークスの社員がいるかもしれないと言ふ警戒からの人選だ。

「ウソツプ、27っておっさんなの……?」

「うーんおっさん予備軍じゃね?」

「……マジで……? まだ、若いつもりでいたのに……おれは、おっさんなのか……?」

「え、ええっとレウスさん元気出してください！一般的にはそうかもかもしれませんけどレウスさんはとつても若々しいしお兄さんって言えるかも知れませんか!?!」

「……ビビ、それフォローになつてようになつて無いわよ?」

レウスはサンジとチョップが帰つて来るまで自分がおっさんであると受け入れようと必死に戦つていた。

「わあお素敵!私こんな感じの服好きよ!」

「で、でも派手じゃないかしら……?」

「いえいえ凄い似合つてるよ、ナミさんにビビちゃん♡」

「踊り子の衣装って……」

戻つて来たサンジとチョップが買つて来た服などを着た一同だが如何にもチョイスがあれだった。ゾロとウソップは盗賊の兄貴と子分と言つたような見た目にしか見えない、サンジとレウス、チョップは一般的な物でマシと言える……が女性陣の服はあからさまにサンジの趣味全開としか言えない。大きく露出しているセクシーな踊り子の衣装……これから砂漠を渡ろうとしている人間の服とは思えないだろう。

「大丈夫、姫と海賊だつてバレなきや良いんだろ?」

「……8割方お前の趣味だろこれ」

「オフコオオオオス!!!」

「砂漠で肌出していると火傷するから上から羽織るから砂漠に行くまでだな」

「何だとおおお!!?」

大興奮&超喜んでいるサンジに現実を突きつける、このまま騒がれていても面倒なだけから早めに本当の事を言っておくに限る。

「ほ、本当なのビビちゃん!?!」

「ええ。肌を出していると強い日差しで火傷しちゃうもの」

「なんてこった……俺の、俺の踊り子さんが……」

「今の内に目に焼き付けておいたら?」

「それだあああ!!!」

つと復活して目を♡にしながら二人をまじまじと見ながら二人の魅力に溺れて行くサンジ。いやもう既に手遅れだろうが。明らかにあの挙動と発言は変態の部類だ。サンジに呆れつつ後は何処かに行ってしまったルフィをどうやって見つけようかと思つた時、妙に騒がしく慌しい方向を見つけた、其方へと目を向けて見れば……海軍が誰かを追っていた、それが赤いシャツに青いズボン、そして麦わら帽を被つた……我らが船長であった。レウスは頭を抱えながら口を開いた。

「おーい皆、荷物纏めろ。ルフィが海軍に追われてるから早く逃げよう」

「あの馬鹿早速面倒を起こしたのかよ?」

「ああもうルフイの馬鹿！サンジ君急いで荷物持つて！」

「はあくいナミたくん♡香水で割り増しされた君の魅力に地獄の底までメロリンラアア
アブ!!!」

「俺こつち持つ！」

「ああ行くぞチョッパー！」

「カルー行くわよ！」

もう既にビビすら慣れたのか全員は直ぐに荷物を纏めると一斉に船に向かって走り出す、ガルフイはそれに気付くと置いていかれると思つたのか其方へと進路を転換すると走ってくる。当然大勢の海軍を引き連れて。

「アホオ!!海軍引き連れて来やがっててめえだけ違う方向に逃げるか全員ぶつ飛ばせ!!」

「それが駄目なんだよゾロ、ケムリンが居て!!」

「ケムリン!?何だそれ!?!」

大慌てで逃げる一同だが海軍の中から一人の男が抜きん出た、人一人分はあるかと言うほど長い十手を背負いながら葉巻を二本同時に銜えている男、海軍大佐のスモーカーである。スモーカーはその右腕を煙のように変えるとそのままこちらへと伸ばすかのように飛ばしてきた、明らかに常人の域を出ている。間違い無く悪魔の実、最強種と名

高い自然系ロギアの能力者だ。

「逃がさないぞ麦わらア!!」

「うおおお来たあああああ!!?」

——陽炎!!

煙の腕がまもなくこちらへと到達しようとした時、真横からルファイ達を守るかのように放たれた炎が燃え上がった。煙の一撃を遮断するかのように燃え上がった炎、煙を四散させた一撃の炎は次第に形を変えながら更に大きくなっていく。それはついには人の形へとなっていった、何が起きたのかその場の全員は理解出来て居なかった、たった一人だけを除いて。

「エース……!!」

「変わらねえなルファイ!」

「エース、お前悪魔の実食ったのか!？」

唯一人だけ理解しているルファイが呼んだ名にゾロが驚きの表情を見せた。何処か嬉しそうな声をしているルファイに一体どんな繋がりなんだと困惑していた。

「ああメラメラの実をな!此処じゃ話も出来ねえ、後で追うからお前ら逃げろ!此方は俺が止めといてやる!」

「ああ有難う!行くぞお前ら!!」

エースの言葉を受け取るとルフィはそのまま皆を連れて走り出した。どんどん距離が遠ざかっていくことに背後では凄まじい爆音と火柱と煙が上がっていく、二人の能力者がかなり激しいぶつかり合いをしているのが解る。走りながらゾロは思わずルフィに聞いた。

「おいルフィ、お前火拳のエースと知り合いなのか？」

「ああ。エースは俺の兄ちゃんなんだ！」

『兄ちゃん!?!』

ルフィのカミングアウトに思わず驚愕する一同は足を止めずに走った為無事にメリー号に到着する事が出来た。兄が居る事自体には驚かなかったがそれでも兄も海賊である事に驚愕した者は多かったがゾロは何よりあの大海賊白ひげの二番隊長をしているエースが兄であるルフィに驚いてしまった。驚きの中メリー号を出航させるが皆はエースを置いてきてしまつて良いのかと言うがルフィは別に大丈夫だろうと断言した。

「そんなに強いのかお兄さんは」

「ああ、昔は悪魔の実なんて食べてなかったけど強かったぞエースは！まあ今やったら俺の方が強いけどな！」

「お前が——誰に勝てるって？」

出航したメリー号へと海から飛び上がってくるかのように上がってきた男はルフィの背後の船縁に着地した。それは海軍を足止めしていたエースであった。

「おおっエース！こいつら俺の仲間だ！」

「あくこいつはどうも皆さん、何時もうちの弟が世話になってます」

『えっいや全く』

エースの口から出た柔らかかで丁寧な言葉に一同は思わず敬語で対応しつつ頭を下げてしまった、あのルフィの兄なのに予想もしていなかった態度で一味は困惑してしま

う。

「何分こいつは躰がなってねえから、おめえらも手を焼くだろうがどうか宜しく頼むよ」

『いえ全くこちらこそ……』

「えつとエースさん、兎に角どうです。弟さんと話とかあるんじゃないですか？お茶でも飲みながら如何ですのんびりと……？」

「ああいえ結構、お気遣いなく」

皆が思ったのはルフィのお兄さんがこんなにも良い人だなんて……!!と言う事だった。ハチャメチャナルフィの兄と言うからその原因的な人物である、同じようにハチャメチャであると思っただけに此処まで紳士的に丁寧に対応されるのは予想もしていなかった。

「んでルフイ、お前にこれを渡したかったんだ」

「ン？なんだ紙切れか？」

「ああ、その紙切れが俺とお前をまた引き合わせる。いらねえか？」

「いや要る！」

素直に一枚の紙を受け取るとエースは笑って立ち上がった。

「出来の悪い弟を持つと、兄貴は心配だな。んじやお前ら、これからも弟を頼むよ。んじやな！」

そう言うのと船から飛び降りると自前だと思われる小型の船に飛び乗った。その船はエースの炎を受けてパドルを回し風力など受けずに自力で凄いスピードで過ぎ去って行く、ルフイは笑顔でそれを見送りながら貰った紙を大切そうに仕舞うのであった。

「それにしても凄い人に会っちゃった……ルフイのお兄さんがあんなに礼儀正しいなんて」

「海って不思議だなあ……」

「だな。それよりも砂漠越えの準備しねえと！」

エースとの出会いを終えた一同は、いよいよ反乱を抑える為に砂漠の先にあるオアシス、ユバを目指すのであった。

空の王者、砂漠を往く

エースと別れた一同はいよいよユバへと向かう為にアラバスタの対岸へと船を付けた、途中首都アルバーナへと手紙を預かったカルーが砂漠を駆けぬけて行ったり上陸前にクンフージュゴンのルフィへの弟子入り騒動などもあったが無事上陸する事が出来た。

「あああああつ……」

いや、あんまり無事とは言いがたいかもしれない。エルマルと言うオアシスの惨状を目の当たりにした一同は打倒クロコダイルへの機運が高まりいざ砂漠へと乗り出したのだが……いざ砂漠へと入るとその歩きづらさや凄まじい暑さに先程まで元気だったルフィは杖を突きながらあーあー言いながら歩いている。加えてチョッパは冬島生まれのトナカイである為暑さで早々に脱落しゾロに台車を引いて貰っている。

「ちよつとルフィ、余計暑くなるから止めてよね」

「あゝあゝ……」

「聞いて無いし……」

平気そうな顔をしているのは矢張りこの国で生まれ育ったビビ、馴れ親しんだ気候な

為か全く堪えてなさそうにしている。続いてレウス、リオレウスという竜はマグマが溢れている火山でも活動ををする為か熱に対する耐性がかなり高い。その影響か砂漠の暑さもそれ程堪えてはいない。

「しかしマジで暑いな……少しはマシに、ならねえのか……」

「うーん……少し考えがあるけどやってみようか？」

「マジか……レウス？」

同じく完全にダレてしまっているウソツプはレウスの申し出に縋る様に頼んだ。それに苦笑しながら荷物を背負い直すレウス、ビビ達も何をするのかと思わず立ち止まってしまう。レウスはそのまま完全竜化を行いリオレウスへととなると翼を広げて太陽からの光を遮る様な影を作り出す。

「影に入れば少しはマシになるんじゃないか？」

「涼しいア〜!!生き返るぜ〜!!」

「あくウソツプずりいぞ俺も〜!!」

次々と翼の下の影へと入ってくる一同、太陽からの光を遮断出来るだけでもかなり違う物があるのか勇んでその下へと潜り込むように入っていく。

「チョッパ〜これで楽になったか？」

「うん、大分楽になった……」

「レウスさん大丈夫なの？変身するのにも体力使うし暑いんじゃない？」

「この程度の暑さなら大丈夫、それに歩くだけなら無問題。ビビちゃんも影に入つて良
いよ、つてお前らそんなに寄るな歩きづらいだろ！」

気付けば砂漠の中に出来た小さな影を取り合う陣取りゲームのような事が行われて
いた、若干こんな事をやった事を後悔しているレウスを遠巻きに見ながらビビはクスク
スと笑った。その表情は国に起ころうとしている反乱を止めようとしている王女の顔
ではなく、年相応の少女の笑顔だった。暫くそのまま歩き続けたが途中ルフィが横着し
てレウスの足に掴まったまま歩こうとしなかったので竜化は解除された。

砂漠の旅もすっかり日が落ちて夜となった、流星に夜になってからの行軍は危険とビ
ビが言う為そのままキャンプを張り明日に備える事となった。ここでも砂漠の厳しき
を一同は体験する事となった。日が落ちてきた夕暮れごろに到達した岩場近くにテ
ントを張ったが日が落ちると一気に気温が下がり凍えるほど寒くなってきた。

「昼間はあんなに暑かったのに……どうなってるの……？」

「砂漠には熱を遮る物が無いから昼は焼け付き、夜は氷点下まで冷える。砂漠は本当に
危険でいっぱいなの」

ナミは震える身体を焚き火に寄せながらなんとか暖を取っているがそれでも酷く寒
そうだ、ルフィはメシはまだかとサンジに催促したりする程元氣だが。そしてレウスと

「チョッパ―も平氣そうにしていた。」

「やっぱり夜は大丈夫そうだなチョッパ―」

「冬島では当たり前だったしね。それにしても凄い星」

氷点下が当たり前だった冬島育ちのチョッパ―は寒さなんて何のその、平然としながら空に広がる星空を見つめ続けていた。厚い雪雲に閉ざされていた冬島ではまず見られない光景にそのままうっとりで見惚れていた。それを見ながらサンジの飯を食べているとチョッパ―の暖かな毛皮で寒さを凌ぐとゾロやウソップ、ルフィがくっ付けている。

「やれやれ、サンジそろそろ自分の分のメシを食ったら如何だ？調理なら俺がやるよ」

「ああそうだな。悪いな」

「何時もメシを作ってくれてるんだからこれぐらいはね」

皆の分の調理と食事が終わると今度はサンジの分の食事が始まる、既に眠りに入っているルフィ達を見ながらサンジはレウスによって焼かれた肉などを頬張って明日の砂漠のための力を付けて行く。そんな様子を見るビビはぼうっと真っ直ぐレウスを見つめる、そんなビビにナミは思わず声を掛けた。

「どしたのビビ？」

「い、いえその……レウスさんってなんだか素敵かなって」

「えっ」

ナミは思わず呆然としてしまった、思っても見なかった言葉だったのか口を開けたままビビの方を注視してしまった。少し頬を赤らめたビビにナミは何処か危機感を覚えた、その危機感は今まで感じた事がなく自分でも良く解らない物だった。

「とつても落ち着いてるし頼りになって、カッコ良いし」

「(えっな、何この展開?!何言ってるのビビまさか、ええうそっ!?)」

内心で慌てふためきながらもビビのあげる彼の評価は概ね賛成だった。ブレーキ役が必要なこの一味としては年上で落ち着きのある安心出来る存在であり竜になれると言う強さをも持っている。加えて自分の相談役的な立ち位置でもあるし病気の時はずっと看病をして居てくれた程、考えて見ればかなり優良物件のような気がして来てしまった。それを否定したいのかもしれないか脳内でレウスの弱点とも言える事を探す、が金は自分の鱗などを売ればなんとかなるからアウトなどで中々見つからない。

「そ、そうかしら!?!で、でもああ見えて結構あれよあいつ!?!」

「そうなの? 私から見たら素敵な人だと思っただけ……」

「そ、そうよあいつ凄いい初心なのよ!少し抱き着いただけで顔真っ赤にして気絶しちゃうのよ!」

漸く見つけた弱点とも言える物、リバースマウンテンを越えた際に抱きついたら顔を

真っ赤にして硬直したことを思い出す。これなら……と口にして見た。

「そうなんだちよつと意外……でもそれはそれで可愛げがあると思うなあ」

「(うっ言われて見れば……)」

こうして当人の知らない所で女性陣二人のレウス談義は続くのであった。

「ハックツシヨン!!!」

「何だレウス風邪か？」

「否なんか急に鼻が……」

空の王者、黒幕へと向かう

砂漠の辛い旅を続ける麦わらの一行、乾いた砂漠の国に吹き荒ぶ死を呼ぶ風。反乱と
言う太陽が昇るのを阻止する為に反乱軍の拠点であるユバというオアシスを目指し続
ける一行、砂漠という環境の凄さに圧倒され其処に生きる生物達に翻弄されながらも必
死に歩き続ける。途中、ラクダのマツゲを旅のお供に加えてユバへと進み続ける。行軍
を続ける事数日、日も傾き夜になり辺りも暗くなつた頃漸くユバへと到達した。だが
……

「そんなつ……ユバの街が……砂に飲み込まれてるなんて……!!!」

そこにあつたのは今までの砂漠と差ほど変わらない乾ききつた土地、砂嵐よつて巻き
上げられた砂が幾重にも降り積もりオアシスの町だったというユバは乾いていた。木
すらもカラカラに乾ききつた土地、砂に上がった地層はオアシスを飲み込んでしまつて
いた。そんな廃墟の町に響く砂を掘り返す音、不規則に聞こえるそれを頼りにしてみる
と一人の男が必死にスコップを手にながら砂を掘っていた。

「旅の人かね？砂漠は疲れただろう……すまん、この町は少々枯れている……。だが
ゆつくり休んで行くが良い」

振り返った男は酷く痩せていた、身体をフラフラとさせながらも優しい声色で宿ならあるからゆつくりと身体を休めてくれと薦める。こんな状態で他人を優しく労うなど普通は出来ないだろう、男の性格の良さが滲み出ているかのような言葉だった。

「あの、此処に反乱軍が居ると聞いて来たんですが……」

「っ！反乱軍に何のようだ!？」

先程の優しさから一変して男は目を鋭くし威嚇するかのように此方を睨み付けてきた、男にとって反乱軍は良い物とは思っていないようだ。そして衝撃的な事を言い放った。

——此処に反乱軍は居ない、奴らはカトレアに拠点を移したつと。

「カトレア!? ナノハナの隣のオアシス!？」

「おいそれマジかビビ!？」

「ナ、ナノハナって俺達が最初に上陸した所じゃねえか!? 何の為に此処まで……!？」

反乱軍を止める為に砂漠を超えてきたというのに肝心の反乱軍は此処に居ない、そればかりか最初に上陸した場所の近くにそれは居た。凄まじいニアミスだ、此処まできたというのに引き返すしかなかったと言える。落胆する中ルフィが口にしたビビと言う言葉に反応したか男は掘っていた穴から抜け出し此方へと近づいてきた。

「お、おいおっさんビビは王女じゃねえぞ?!？」

「白状してどうすんだアホオ!!」

「ビビちゃんなのか?!?無事だったのか……私だよ解るか……?」

男は涙ぐみながら嬉しそうに、会いたいと願っても会えなかった人と会えた喜びに満ちているかのようによい声でビビに語りかけた。随分と変わったが私だという彼にビビは解らなかつた、だが直ぐに理解した。だがそれはあまりに酷い変化だった、ビビの知っている男はもつとふくよかで血色が良かった筈なのに……今は痩せ細り血色も悪い。

「トト、おじさん……!?そ、んなこんなに痩せて……」

「少し痩せただけだよ……ビビちゃん私は国王様を、コブラ様を信じている……!反乱なんて馬鹿げてる……!!!」

男、トトはビビが幼い頃からの交流があつた。彼自身アラバスタ国王、ネフェルタリ・コブラの事を信じている、絶対に国を裏切るような事はしないと。だから、反乱軍を止めて欲しいと懇願する。この国を愛している一人の国民としての願い、その言葉を深く胸に刻み込んだビビは改めて反乱を止める決意を固める。だがもう既に日も落ちていく、今日はこのままユバの宿で仮眠を取り早朝に出発する事を決めた。

翌日、太陽も昇りかけている早朝に一行はユバを出発しようとしているとトトが出迎

えに来てくれた。彼も水を出す為の砂掘り作業で疲れている筈なのに態々起きて来てくれた、それに感謝しつつ絶対に反乱を止めると約束する。

「ルフィ君、こいつを持って行ってくれ」

「水!? 出たのかおっさん!」

トトが差し出したのは小さな樽水筒に入った水だった、どうやら夜中皆が寝静まったときにルフィはトトを手伝ったらしくかなり深く穴を掘ったらしい。ルフィは疲れからか眠ってしまったがその穴を少し掘ると湿った地層に当たる事が出来た。それを蒸留し水を作ってくれたとの事。ほんの僅かな水、だがこれはユバがまぎれも無くオアシスであるという証明にも繋がる。

「真正正銘ユバの水だ、すまんねそれ位しかななくて。是非飲んでくれ」

「有難うおっさん! 俺、これを大切に飲む!」

ルフィも理解している、いやルフィだからこそ解っているんだ。一緒に水を掘り当てる為に穴を掘ったからこそ解る大変さ、こんな乾いた土地でたった一人で黙々と穴を掘り続ける大変さを。それなのに自分が飲む為ではなく自分達の為に水を作ってきたトトの気持ちを重ね受け止めた。それを首に下げながらルフィはトトに笑みを見せながら先頭に立つて歩き始めた。反乱軍を止めるために進み始める、反乱軍がいるカトレアはあまりにも遠いが進むしかない現状。唯歩くしかないのに、ルフィは立ち止まり座り

「こんだ。」

「やめた」

「えっ?! ル、ルファイさん?」

「ルファイ?」

座りこんだルファイに皆が戸惑った、ビビは如何して何をやめるのか理解出来ずにそつと近づきどうしたのと尋ねるしか出来ていない。

「ビビ。クロコダイルは、反乱軍を止めたら止まるのか」

「っ!!」

「俺はクロコダイルをぶっ飛ばしたいんだよ!!」

ルファイの言葉は自分のやりたい事を言っているようにも見えるがこの国で起きてくる出来事の核心を突いている。既に70万近い反乱軍を止める事など出来るのか? 出来たとしても勢いを削ぐ程度、仮に反乱を止められたとしてもクロコダイルは更なる手を打つ事だろう。こちらは常に後手に回るしかない、黒幕に振り回されるだけになってしまう。

「そ、それは……!!」

「お前はどの戦いで誰も死ななきやいと思ってるんだろ。甘いよお前」

「それが何が悪いの!?! この国の人は何も悪くないのに、そんな人達が殺し合おうとして

いるのを止めようとして、人が死ななくて良いって思つて何が悪いの!!!?」

「人は死ぬぞ」

普段の彼を知っている者なら考えられないほど冷静で冷たい表情で淡々と事実を突きつけるルフィ、それを止めたいと願うのにそれを否定され遂にビビは怒りを露にしルフィを殴り付けた、彼の上へと乗り何度も拳を振り下ろす。

「なんでお前は、命を掛けてんだ!!」

「だって、この国を救うには、私の命を賭けるしかないじゃない!!他に何を、賭けるって言うのよ!!!?」

振り下ろされる拳を受け止めたルフィはそのまま彼女を振り解き大声で叫んだ。

「俺達の命ぐらい賭けてみる、仲間だろうがあ!!!」

言葉を受けた、お前の命一つで賭けたりないなら仲間の命を賭けろよ!! たった一人で100万の命を救おうとしていたビビにそれは大きく強い言葉。一人の、20にも満たない少女が背負うにはあまりにも重すぎる物を、一緒に背負うとルフィは言い切った。それにビビの心は潤った。

「本当はお前が一番悔しくて、あいつをぶっ飛ばしてエんだ……ビビ、クロコダイルの場所の何処だ!?!」

号泣するビビとそれを周囲から見守る仲間、この時をもつて目的は変更となった。反

乱軍の元へ行くのではなく黒幕、クロコダイルを討伐する事へと。目的地はカトレアではなく、クロコダイルがいるレインベース……!!

「行くぞ、クロコダイルをぶっ飛ばしにい!!」

『おおおっ!!』

「あ”あ”あ”つつつ……」

「おいおい昨日の威勢の良さと覇気は何処行つたんだよ」

ユバから北へ一日ほど行くとあると言うレインベース、反乱とは殆ど無縁なギャンブルの町。そこにクロコダイルがいる、威勢よく黒幕を倒す!と宣言した割りに暑さにやられて早くもヘロヘロになってるルフィそしてウソップ。チョップもゾロに引つ張つて貰わずに頑張つていふと言うのに締まらない。

「おいレウスウ〜でつかくなつて影、作つてくれよ〜……」

「これから戦うのに体力を浪費したくないんだけどな……」

「ケチウ〜……なら……!!」

レウスに断られたウソップは既に喉がカラカラらしく我慢出来なくなつたのかルフィが首から提げている水筒目掛けて飛び掛つた。ルフィも喉が渴いているだろうにそれには一切手を付けていない、ウソップが狙っていると解ると腕を伸ばし遠ざける。

「ゴムゴムの駄目だア〜!!」

「良いじゃねえか一口ぐらい折角貰った水だろ!？」

「ゴムゴムの駄目だア〜!これはカラカラのおっさんが一晩中かけて掘ってくれた水だぞ、そうやって無駄に飲んだら駄目なんだ馬鹿野郎!!」

ナミが思わず本能に大きく偏って生きているルフィが我慢をしている事に酷く感心していると憤慨したようにルフィは失敬だな!と怒るがそれはしようがないだろうに。

「ルフィさん、本当に有難う。私じゃこんな決断下せなかつたわ」

「メシ、食わせろよ。全部片付いたら死ぬほど食わせろお!」

「うん約束する!!」

「フツ……さあ行こうか、レインベースへ!」

ルフィ達が向かうレインベース、そこに居るのは王下七武海クロコダイル。国一つを手中に収めようとする凄まじき海賊、その名の如く鰐のように口角を上げながら笑う彼が率いるバロックワークス。だがその中にイレギュラーが混ざっていた、それは乾いた砂漠揺るがすような咆哮をあげるとゆっくりとレインベースへと入って行った。

「……そろそろ行くか。怒られるのは嫌だしな」

空の王者、竜と会う

—レインベース—

水が十分すぎるほどに溢れ潤っているレインベース。反乱とは無関係な人の欲望に溢れているギャンブルの街、美しい町並みが広がる街に大きく立っているカジノ、レインディナーズ。クロコダイルが運営するカジノをビビは恨めしげに、憎しみを込めたような瞳で睨み付けている。この街に入った瞬間にルフィとウソップは自分の渴きを癒す為に食事処へと駆け込んで行った。その際についてに水の調達を願われたが本当に調達してくるか疑問である。

「あつ俺ちよつと小便行つてくる」

チヨツパーはトイレに立った、時間はあるだろうから大丈夫だろう。流石にあの二人でもお使い位は……。

「みんなあゝ逃げろおゝ!!!海軍が来るぞおゝ!!!」

『だからなんでお前はこっちに逃げてくんだけかあ!!!』

— と思ったのが間違いだつた。せめて一人は見張りにでも付くべきだつたかと後悔する、樽を抱えながら背後から迫つて来る海兵達から逃げ惑うルフィとウソップ。二人に

怒鳴りながらも怒り心頭になりながらも共に逃げる一味、チョツパーを置いて来てしまったのは拙いかもしいれないが彼の顔はバロツクワークスにバレていないという点で安心だろう。

「まったく如何すんだまだ作戦だつて練つてねえのに!!なんでうちの船長はトラブルをこ
うも見事に呼び込める!?!」

「ルフィだから一票!?!」

「同意に一票!?!」

「ハハハそうだなつて笑つてる場合じゃねえ!!もうどうせバロツクワークスにバレち
まつてる!!もうカジノに行くしかねえぞ!!」

「だな!」

このまま海軍に追われるのも拙い、ならばこのまま散開し個々別々にレインディナー
ズを目指すのが一番だろう。目印は鰐の建物!ちようど分かれ道、それぞれが別々の道
へと入っていき海軍から逃げながらクロコダイルの元へと目指して行く。

「待てえ貴様も麦わらの一味だろうお!!」

「逃がすなあ!!」

「結構な数が追つて来てるなあおい!!」

真横の道へと入ったレウス、海軍はそれなりの数此方にも流れている。このまま撒くか倒すかしないと満足に皆と合流も出来ない。戦うにしても今無駄な体力を消費するわけには行かない、なら撒くしかない。建物の隙間へと入ると瞬時に竜化し跳躍と翼の羽ばたきを組み合わせ一気に上昇する。そして素早く建物の屋上へと隠れる。

「何処に行った!?!」

「見失ったか!? 探せ、まだ近くにいますはずだ!!」

「見当違いを探しやがれ馬鹿野郎共……ふう」

一旦深呼吸をして落ち着く、なんとか海軍を撒く事には成功した。このままカジノへと進むのが一番良い、だが慎重に行こう。バロックワークスに顔はバレていない可能性は高いとはいえルフィ達の顔は恐らくMr. 2によって知られて居る筈、今降りるのは危険。このまま屋根の上を行くのが一番だと考えたレウスはそのまま屋根の上から上へと飛び移って行く。そして遂にカジノへと到達したレウスだが入り口へと続く橋には人が集まっている、怪我をしている人間もかなりいる。

「多分あれはバロックワークス……なら皆が!」

急いで橋を渡り中へと入ろうとするが奥へと進んで行こうとする自分を一人の手が止めた。

「おい待てよレウス」

「サ、サンジ!? それにチョッパーも!? 来てたのか!?」

「ああ、とつくにな」

「うん!」

そこにはサングラスを掛けたサンジがチョッパーと共にいた。煙草を吹かしながら足元に転がっている男を捨て置きながら作る不敵な笑みは何処か頼もしげに見える。

「さつきちよつとした細工をやつてな、クロコダイルは此処へと現れる」

「マジか!?!」

「ああ。これからチョッパーが囷になつて奴をひきつける、お前は俺を手伝つてくれ」

「う、うん俺は俺が出来る事をやる。だからレウスも、頑張つてくれ!」

人型となつているチョッパーは震えて入るがその声にはしっかりとした覚悟があつた、絶対にやり遂げるといふ気持ちがある。サンジの作戦では無事に逃げきれぬという確証があるらしい、ならばそれを信じる。仲間として。

「解つた!」

「おう! チョッパー頼んだぜ!」

「わ、わかつた!!……うおおおお俺の名前はミスタープリンスウウ!!」

そう叫びながら走り出して行くチョッパーと別れる。チョッパーは自分はミスタープリンスだと叫びながら橋の前に集まりつつあつたバロックワークスの社員達を薙ぎ

払って行く。サンジと共に隠れて様子を見てみるとカジノの中から明らかにオーラが
違う男が出てきた、あれが王下七武海、サー・クロコダイル……!!

クロコダイルとそのパートナーであるミス・オールサンデーが完全に橋を渡り終える
と同時にサンジが橋を落とし大急ぎでカジノへと入る。中へと入ると橋を落とした際
の衝撃と橋が落ちたという事実によって軽いパニックが起きていた、それに便乗して奥
へと進もうとすると奥の通路からビビが走ってきた。

「レ、レウスさんにサンジさん!! 大変なの、ルフィさん達が牢屋に! しかも水が入ってて
来ててこのまま皆溺れちゃう!!」

「おいおいかなりこっちも切迫してんな、ビビちゃん案内を頼む!」

「ビビちゃん安心して、俺がナミさんを助けるぜ!!」

ビビの案内で店の奥、本来はVIP専用の通路を進んで行く。奥へと通じる階段を駆
け下りて行くと周りはガラスと石造りの通路、通路の外はレインディナーズを取り囲む
ようになってい湖。その水が入って来ているという事になるのかと思いつながら三人
は急いだ。そして開いている扉の奥に見えた牢屋のような物と巨大な鰐、あれは倒して
良いのかとビビに確認すると勢い良く頷いた。

「アンチマナー 反行儀キックココオオオオス!!!」

「竜脚・毒浴エ!!」

二人の海賊は一気に加速する今にも牢屋へと襲いかかろうとしている二匹の巨大な鰐へと向かった。サンジはそのまま鰐の腹へと潜り込むと真下から渾身の力で鰐を蹴りあげる、その際の爆音と衝撃によって鰐は一瞬で白目を向きながら瓦礫を吐き出す。竜化を行ったレウスは鰐の脳点目掛けてそのまま毒が滴る爪を尖らせながら浴びせ蹴りを放つ。肉を抉りながら毒が注入され鰐は苦しむ間もなく絶命する、そのまま鰐の上へと着地する。

「間に合ったか、皆」

「待ったか？」

「うおおおおおプリンسسさああああん!!!」

「レウスウウウウ!!!」

「間に合ったか……!!ビビよくやったぞお！」

ゾロの上げた声にサムズアップするビビ。まだ間に合ったと確信するレウスは鎌を採すかあれを吹き飛ばした方が速いかと迷ってしまったが直ぐに吹き飛ばす方が速いと理解する。

「サンジ、あの檻は俺が火球で吹き飛ばす！鰐は頼む！」

「おう。レディを襲う行儀の悪い鰐は徹底的にマナーを叩きこんでやるぜ」

ジャンプしながら完全竜化を行い檻の上へと位置づける。

「レウス早く開けてくれえ!!」

「解った!全員伏せてろ、水に被つてろ火球ぶつけんぞ!!」

全員はどうするかを察すると急いで既に水が満ち始めている床に伏せた、同じく囚われているスモーカーがレウスの変身に驚いている。本人はそんな事お構いなしに思いつきり息を吸い込んだ、そして限界まで吸い込むと内部で爆発するかにように火球を吐き出した。

「大・竜火球!!!」

爆発をそのまま火球にしたかのような凄まじい炎は牢獄の天井部分に炸裂した、爆発を伴いながら牢を焼き骨組みごと焼き尽くしデカデカと大穴を開けた。ナミ達は動けなくなったルフィを担いでその穴から牢獄を脱出する。

「やったレウス有難う!!」

「レウスマジでよくやったあ!!」

「気にすんな!!それよりも早く外へ!!サンジイ!!」

「おう今行く!!」

レウスの背中などを叩いて次々と出口へと走っていく仲間を見送り最後に出ようとしたレウスだがスモーカーがじつと此方を睨み付けていた。あちらからしたら自分達は海賊、捕らえない訳には行かない。だがスモーカーは握っていた十手を背中へと戻す

とレウスの隣を通り過ぎ様に

「今回は見逃してやる、だが次はこうはいかねえぞ」

と告げると同じように出口へと走って行った、海軍の癖に律儀な奴だと呟きながら自分も大急ぎで出口を駆け抜けて行く。クロコダイルにバレない内に急がなければ……

!!

「よおし外に出たぞお!!」

「な、なんとか無事にいられたわね……」

「ほっとしてる場合じゃねえぞ! おいビビ、アルバーナはどつちだ!」

「あつちよ!!」

無事に外に出る事に成功した一同はそのまま街の外へと走っていく、なんとかクロコダイルの魔の手から逃れる事は出来た。だがまだ終わっていない、急いで首都アルバーナへと向かわなければならぬ。だが此処から行くには距離がありすぎる、走っていくには無理がある。

「俺が飛ぶか!」

「いやそれだとお前が体力を使う! ナミさん香水を吹いて! 急いで!!」

「えっ香水!? わ、解った!! こう!」

「はああああんメモリンラアアアブ♡」
「やつてる場合かサンジ!？」

何をやっているのかと咎める前に街の外へと着いてしまった。もう竜化するしか無いと思ったがサンジが三度やら無くて良いと止め前を見ると催促する。その言葉の通り前を見て見ると其処には先程の鰐と如何サイズの巨大なカニが此方へ迫って来ていた、何事かと思つたらその蟹の頭の上にはなんとチョッパーが乗っていた。

「チョッパー!？」

「何だありや!？」

「ヒッコシクラブ!! 凄い、幻のカニよ!!」

「皆乗つて〜! マツゲの友達なんだ、アルバーナまで行つてくれるつて!!」

なんと言うラクダのコミュニケーション能力。まさか一匹のラクダの友達にこんな巨大なカニがいるとは想像も出来なかつた、鋏に乗って頭の上に乗ると手綱を持ったチョッパーが発させた。身体を起こし巨体に見合つたスピードで足を動かし移動して行くカニ、これは頼もしい。ビビも何とか間に合うと希望に満ちた顔をしている。

——だがその姫にクロコダイルの牙が迫つた。ビビの身体に黄金のフックのような爪が食いつきそのままビビを攫うかのようにビビを連れ去つた。それに超反応したのはルフィだった、素早く腕を伸ばし爪を掴みビビを救出しそのままカニへと投げた彼

女を救ったが変わりにルフィがそのままクロコダイルの元へと連れられてしまう。

「お前から先に行け！俺一人で良い!!ビビをちゃんと家まで送り届けるよお!!」

そう言つて遠ざかっていくルフィ、チョッパーは思わずカニを止めようとするがゾロがそれを止める。このまま進めと、何があつても進めと叫ぶ。

「ルフィさあああん!!!」

「ビビイ!!また後で会おう!!」

小さくなつていくルフィ、クロコダイルを抑えられればなんとかアルバーナへの間に合う可能性は多いにある。このまま進むしかない……!!がクロコダイルも甘くは無かつた。ヒツコシクラブを追跡するかにのように地面から土煙が上がっていた。

「おいなんか付いて来てるぞ!!」

「何だあれ!？」

それはまるで悪魔、頭部に生えた二本の捻り狂った角と鋭い牙が凶暴性を誇示しているかのよう。背中に鎧のような甲殻を持ち、強靱な両足と先端がまるで斧のようになっている巨大な尻尾。それはアラバスタに生息している生き物ではない、レウスだけがそれが何かを知っていた。双角猛る砂漠の暴君と呼ばれる自分と同じ竜、ディアブロス。

「ななななな何だありや!!?」

「化けものだあああ!!?」

「あ、あんな生物アラバスタにいない筈よ!？」

「次々と!!」

刀を抜こうとするゾロよりも早く、カニから飛んだ者がいた。

『レウスう!!!』

「先に行けエ!!」

完全竜化を行いリオレウスと化した彼は砂漠の暴君へと襲い掛かった。両角を足で押さえつけながら背中に噛み付き一気に体重を掛けた地面へと押し付ける。衝撃を伴いながら地面へと押し付けられたディアブロスから離れるとディアブロスは徐々に姿を変質させて行き、全身に傷を作っている褐色の大男へと変じた。それに合わせるようにレウスも竜化を解いた。

「へえ……お前も竜に成れるのか」

「てめえ……俺と同じ悪魔の実を……!!」

「ドラドラの実モデルディアブロス。砂漠の暴君っていう竜なんだぜ……? 邪魔してくれんなよ、てめえ……」

「はっ何が暴君だ。空の王者が相手してやるよ!!」

空の王者、竜と対峙する

夕日に照らされる砂漠に立つ二人の男、灼熱の砂漠は冷え切った大地へと変わろうとしている。最中沈もうとする太陽に照らされた影は、獰猛な竜の姿を映し出した。低い唸り声を上げながら相手を牽制するように威嚇する竜、今にも相手へと襲い掛かろうとしている。

「空の王者か、そりやいい。なら王様よ、暴君のパワーを持ったこのディーロを味わっていけよ。サービスしてやるぜ？」

「御免蒙る、俺はノーマナーでな。タダより高い物は無いっていうぜ」

「善意だ。さあ味わえ!!」

胸の前で拳をぶつけあつたディーロの姿はどんどん変化して行く、先程のディアブロスの形を身体に溶け込ませているかのような鎧を纏っているかのような姿。人獣型へと変形していく。頭部の角は両肩へと移動するかのようにしながらもその凶暴性を保持し続けている、レウスも人獣型へと変化し左腕の竜の頭を相手へと向ける。

「へえ面白いな、お前は左手に頭が付いてんのか」

「御気に召したかな」

「ああ、てめえの腕剥ぎ取ってコレクシヨンにさせてもらうぜ！マサクルチャージ！！」
姿勢を低くしながら肩の角を此方へと向けるとそのまま強靱な足で地面を蹴り凄まじい突進力で直進してくる。かなりの勢いによる突撃はかなりの威圧感を相手を与えながらその角で相手を貫通せんと迫って来る、それを喰らう物かと軽く回避するがデューロはすぐさま方向を転換すると跳躍するようにレウスへと迫った。

「転換衝方！！」

「があっ！！」

確かな手ごたえを感じ取ったデューロ、急激な方向転換には多くの相手が対応しきれてこなかった。こいつもかと思ったがレウスは竜頭にて突き刺さる寸前の角を噛み付くように受け止めていた。それでも突進をやめようとしないうデューロは笑い声をあげる。

「止めるかいやるねえお兄さん！！」

「どうも！！毒浴！！」

超至近距離からの毒蹴りを加える、腹部へと炸裂したはずだがデューロのスピードが全くといていいほど落ちない。そのままスピードを維持したままレインベースへと向かい続けていく、このままでは拙いと思つたレウスは竜頭から火球を爆発させるように発射しその爆風で相手と自分を吹き飛ばし何とか距離を取る事に成功した。

「カカカツ!!火い吐けるのか、コリヤ羨ましいなあおい!!」

「(こいつ……ピンピンしてやがる……!!)」

大声で純粋にレウスを羨ましがっている彼に少し嫌気を感じる、出来れば体力を残したいと思つたがそんなことを思っている暇などなさそうだ。本気でやるしかない、翼を広げ宙へと浮き上がりながらディーロの懐へと飛び込みながら火球を連発する。

「ハツハツハア!!いいねえもつと打つて来いやあ!!」

「お望みのままに、喰らいやがれ!!」

「むっ!?!」

「焰ア!!」

その懐へと飛び込んだレウスは先程まで火球を放ちその影響で非常に熱くなつている竜頭を構えながら、それを深く腰をいれながら胸へと叩きこんだ。ジュウウ!と熱によつて焼ける音が耳へと伝わるのを感じながら更にそれを押し込んでいく。

「いいねいいねえ、だけど俺に熱は利き難いんだぜ……?」

「知るか!火射蛇!!」

高熱と化している竜頭を今度はディーロの頭部へと噛み付かせそのまま一気に火球を放射状にして吐きだす、ゼロ距離で浴びせ掛けられる超高温の炎。流石のディーロもこれは利いたのかうめき声を上げながら暴れるようにレウスに何度も拳をぶつけて振

り解く。

「如何だ、ちったあ利いたか!!」

幾ら炎に強いと言ってもこれには耐えられないと踏んで使ったが効果はあつたようだ、デイーロは炎の熱さに苦しみながら砂を撒きあげながら消そうとしている。ディアブ羅斯はリオレウスと同じく火に対して耐性を持つ竜だが流石に超高温の炎を常に浴びせ掛けられるのは駄目なようだ、攻略の糸口を掴んだような気がした。だが次の瞬間にレウスは焦った、奴が消えている。

「何何処へ……。し、しまったディアブ羅斯って事は?!」

——遅いぜ!!!

地面が揺れると共に周囲に響き渡る轟音、思わず地面に手を付いてしまうほどの揺れが起こっている。まるで地震が起きているのかと疑ってしまう、飛び立とうにも地面の揺れのせいで全く飛び立つ事が出来ない。目の前の地面からディアブ羅斯が現れその巨体で自分を吹き飛ばした。

「砂隠・巨飛!!」

「——っっっ!!!」

腹部からまともに受けてしまったレウスは血を吐き出しながら空へと吹き飛ばされる、ディアブ羅斯最大の脅威と言えばその角と異常なまでの突進力。その破壊力は常人

離れている狩人ですら易々と葬る威力を持つ、ワザと砂を撒き上げて自分の姿を隠し、ディアブロスへと姿を変えて地面へと潜り地面からの強襲を掛けた。重力に次第に引つ張られたレウスは落下して行くがそこへ更なる追撃が襲い掛かった。斧のような尻尾が振るわれてしまった。

「ゴハアツ!!」

「どんなお味だい、暴君の力はよお!？」

「……!!!効く、ぜ……!!!」

「ハハハハハツ!!さあこのままお前を殺してやるぜ、そしてあのカニもなあ!!!」

鋼鉄のハンマーで殴られたかのような凄まじい衝撃と痛みが全身を貫いていく、当たると寸前に竜頭で尻尾の一撃を防いだと言っているレウスの姿を見るとディーロは笑いながらウトになる、威力に顔を歪める。苦しんでいるレウスの姿を見るとディーロは笑いながら再び地面へともぐって行ってしまふ。こうなると此方からは手を出しづらくなってしまう、それでも地面からの強襲は避けたいと飛び上がり完全竜化する。

「出てきやがれ!!」

ディアブロスは潜行中は爆音に弱いと言う事を覚えているレウスはそこら中に火球を打ちこみ始める、次々と放たれていく火球は砂漠の砂を焼いて行きながら爆音を巻き散らして行く。打ちこんでいく内に地面に現れている砂煙がどんどん移動しているの

を理解した、あの下に奴がいるのだと理解しそこへ合わせるように火球を打ちこんでいく、するとそこからディアブロスが勢いよく飛び出し空中の自分目掛けて飛び掛つてきた。

「煩いんだよお!!!」

「そりゃ悪かつたなあ!!」

地面にいる間は何も出来ない相手の領域だが空中の此方の領域、幾らでもやりようはある。地面でかなり助走を付けたのか空中のレウスにも届こうとする程の勢い、だが相手の翼はそれほど飛ぶには適していない為空中での姿勢制御はあまり出来ない。対するリオレウスは空中でこそ真の力を発揮する竜、飛び掛つてくるディアブロスを回避すると背後に回りこむと尻尾へと喰らい付いた。

「いつてえええ!!!?」

「ぐう、重い……!!」

ディアブロスの巨体を尻尾に喰らい付いた口だけで支えるのも限界がある、そのまま一気に降下し勢いを付けて地面へと叩きつける。その衝撃で立派な角の一本がへし折れるとレウスは一気に畳み掛ける、首に力を込めて相手を一気に持ちあげ空へと放り投げける。

「うおおおおお!!?」

「空の王者、舐めんじゃねえぞごらあああ!!」

怒りの一撃、先程自分がされたように落ちてくる所への狙い打ち。身体を回転させその勢いで加速する尻尾を相手の喉元へと叩きこんだ。

「があっ……………!!」

「おおおおりあああああ!!」

喉元へと炸裂した一撃、重く硬い攻撃は先程レウスが受けた尾撃にも劣らない破壊力を生んだ。更に強く地面を掴み身体全体を更に回転させてより深くまでダメージを刺さらせる、デীর口はその一撃によって血を巻き散らしながら地面へと沈む。

「はあはあ……………誰を、殺すって……………!?ぎけてんじゃ、ねえぞ!!」

怒りのままにデীর口の喉元へと喰らい付くりオレウス、牙や肉を切り裂き骨へと到達する。バキバキと骨を砕くかのような音が周囲に響く、そして遂にディアブロスの命の鼓動が止まったのを確認すると勝利の雄たけびを上げるかのように空へと身体を起こし大声で叫んだ。

「か、勝った……………はあはあ……………疲れた……………」

——へえ、そりや良かったな。

「ツ!」

満身創痍の中、痛みに耐えながら竜化を解除すると自分の勝利を祝うような声が後ろ

から響いた。振り向いて見るとそこにはもうまた別の竜が鎮座していた、それを形容するとすれば原始的な竜。黄色い外殻に青の縞模様を持ちながらその身体は極めて強靱にしてしなやか、四本足で地面で立ち前足には自分と比べると小さいがしつかりとした翼があった。絶対強者、轟竜ティガレックス。それが此方をジッと睨み付けていた。

「あーあー俺の弟分をよくもやってくれたなお前さん、中々強いな」

「……そりゃ、どうも……」

「不出来な弟だがそれでも俺の弟なんぞでな、一発やらせて貰うぜ」

ティガレックスは身体を丸める、そしてそのまま一気に回転すると鋭い棘のような強靱な尻尾をレウスへと叩きこんだ。ディアブロスの一撃とはまた違う破壊力の一撃に血反吐を吐きながら吹き飛ばされる、そのままレインベース近くまで吹き飛ばされてしまった。血を吐き出すレウスへと近づくティガはボロボロとなったレウスを見ると軽く笑う。

「お前も竜なら俺を追ってみな。これからアルバーナに行くんでね」

「な、に……!? てめえ、まさかバロック、ワークスの……!!」

「まあそんなもんだ。退職金は貰ったが最後に見物でもする、もしかしたらその時に王女を殺すかもな。止めたきゃ止めてみるよ空の王者さんよ」

そこまで言うティガはそのまま走り出して、50キロを超える速度で巨体はどんど

ん遠ざかって行く。レウスはそれをただただ見送る事しか出来なかった。

「ビビ、ちゃん……!!」

気力を振り絞り立ち上がる王者は既に深手を負っている、だがそれでも立つ。仲間の

為に……

「まずはルフィを……そしてアルバーナへ……!!!」

空の王者、アルバーナへ

「ル、ファイ……無事か……!?!」

「フオウ、レウスウ!!」

傷ついた身体で一度は気を失いながらも再び立ち上がり身体を引きずりながら探し当てたルフイ、彼も大きな傷を身体に受けながらも一応は無事だった。今は大量の肉を食い漁りながら近くにいるフードの男と何かを話していたようだった、わき腹を押さえつつ傍に座りこむと男は支えるように肩を貸してくれた。

「大丈夫かい君も!?!酷い傷だ……」

「大した事じゃない……。それよりアンタは……う?」

「私はアラバスタ護衛隊副官、ペルという。君達がビビ様の手紙にあつた海賊で間違いは無いな?」

その言葉を聞き安堵の息がもれた、ビビの手紙はアルバーナに届いていた。つまりカールは無事砂漠を横断して首都へと辿り着いていたという事だ、カールも立派な自分達の仲間。何処か心の中で楔のように突き刺さり心配していた、良かった無事で……。ペルもそれを察したのか軽く肩を叩き肉を食べるように薦める。それを素直に受け取り

肉に齧り付く。

「君も手当てが必要だな、応急処置ぐらいならしよう」

「すまないなペルさん……ルフィ、クロコダイルは？」

「悪い、負けちまった……でも次は絶対にまけねえ!!」

肉を食い千切りながらそう言い切るルフィ、残念ながらクロコダイルとの戦いとは敗れてしまったようだが次は絶対に負けないと宣言している。この船長がそう言っているのだ絶対にそうだと確信できる、それに自分だって敵を倒したがその直後に新しい敵に吹き飛ばされている身、彼を悪く言える身ではない。

「こつちもなんとか敵を倒したがまた厄介なのが出てきやがった……まあある意味マシかもしれないが」

「にふいいつふあいくつぺらあるばーはへいふおふおふう!!」

「……えつとレウス君、今の解るかい？」

「肉いっぱい食ったらアルバーナへ急ごう、かな？」

頬を肉で一杯にしながらも力強く肯定するルフィにペルは少し戸惑いながらも自分も肉に手を付けた。食事が終わり次第大急ぎでアルバーナへと向かわなければならぬ、少しでも体力を付けておかなければ。アラバスタ護衛隊として、この国に住む一人の国民として、この国を愛する男として戦わなければならぬ……。

「ペルさん、こつからアルバーナへ行こうとしたらどの位掛かる?」

「私なら飛べば半日もあれば到着する」

「半日……急がないと間に合わなく……!」

「だが、私も今すぐは飛べん……すまない」

ペル自身もクロコダイルのパートナーであるミス・オールサンデーによつてかなり大きなダメージを受けている、隼になれる彼とは言え今の状態では満足に飛ぶ事すら儘ならない。かといつて自分も飛べたとしてもまともに速度を出す事も出来ない、状況的にはペルと全く同じ。

「俺も似たようなもんだ……うつ、くつそあの野郎……!」

脳裏に浮かぶのは自分を吹き飛ばしてくれたティガレックス、肋骨の数本に罅は間違はなく入っているだろう。正直身体に上手く力が入らない。だがやるしかない、あれは恐らく自分ではないと止める事は出来ないだろう。

「ルフイ君レウス君、今のうちに寝ておいた方が良い。少し休めば飛べるようになる、今は身体を休め、早朝にアルバーナへ向かおう!!」

「「ああつ!!」」

—アラバスタ 首都アルバーナ—

ビビが恐れ、危惧していた物。身を張りその身がどうなろうと構わず命とて掛ける覚悟で望んだ反乱を止める為の道。16の少女が背負うにはあまりに大きな覚悟と責任、命を張り国民の命を助けようとする覚悟をクロコダイルは嘲うかのように蹴り飛ばした。麦わらの一味が囹となりオフィサーエージョントを引き離し反乱軍の前で身を張って止めようとしたのに、魔の手はそれを越えて行つた。

『!!!』

巻き上がった砂塵、ビビの声を遮るように俟つた。ビビの傍を通り過ぎていく反乱軍、止める事が出来ないまま反乱は始まつてしまつた。互いに騙され踊らされている無実の人々は己の胸にある正義と思ひ込まされた虚実の為に剣を取り交えてしまつた。

そしてビビを守る為、反乱軍が彼女を踏みつけないようにと翼を広げラクダや馬に踏みつけられようと翼をどけなかつたカルー。全身に深く傷を受けたカルーを目にしながら涙を流すが必死に声を出す、諦めない、諦めの悪さなら船で学んだのだからと。そこへウソツプがビビを助ける為と参上したウソツプだったが事前にMr. 2と遭遇していた為に対策として講じられた仲間の印を見せなかつた事でそれを打破、襲い掛かつてくるそれから逃れようとするビビを助けたのは大怪我をしているカルーだった。

『カ、カルー!?!』

『クワアアア!!!』

全身から流れる血など、激痛など知った事では無いと言うかのごとく疾走するカルー。背後から迫ってくる刺客からビビを守る為に必死に走る、アルバーナの絶壁を登ったカルー。そして目の前で国民同士が殺しあいをしている様を見たビビは直ぐに宮殿へと急ごうとカルーを走らせる、が

『な、流れ弾が!!カルウウ!!』

カルーの脳裏にルフィの言葉が過る、ビビはしつかりと守る、送り届ける。仲間なんだからと。そして自分もその仲間の一人なんだと自らを奮い立たせ銃弾を喰らった身体で戦場を走り、一步一步踏みしめることに薄れていく意識と戦いながら進むが遂に倒れこんでしまうカルー。それでもカルーはビビを守ろうとMr. 2と戦おうとする、叫びビビを助けたのは超カルガモ部隊の仲間、そしてサンジだった。

『よくやったな。男だぜカルー隊長、ビビちゃんこいつは俺に任せな。反乱はまだ止まる、だから行きな』

『サンジさん……うん!貴方達カルーをお願い!』

この場を託しアルバーナの宮殿へと走り出す、戦場を抜け砲撃を避けながら必死に走り辿り着いた宮殿にて護衛隊副官チャカに命じた。宮殿を破壊して欲しいと。それならば確実に目を引く事が出来る、その隙があれば自分が何とか出来ると。だがチャカはそんな事をしたらと洩るがビビの言葉によって決断した。

——国が何!? 国は、今殺し合いをしている彼らの事よ!!!

——良いかチャカ。国とは人なのだ。

アラバスタ現国王、ネフェルタリ・コブラと同じ言葉に国王の面影を覚えるとチャカは直ぐにその言葉通りに宮殿に爆薬を仕掛けるように命ずる。疑問を持つ兵士もいるがそれを押し退け爆薬は仕掛けられていく、4000年と言う歴史がある宮殿だとしてもそれよりも人の命が大切だと。その言葉につき動かされ遂に爆破されようとした時、

——三度、砂塵が俟った。

『クロコダイル……!!』

王下七武海が一角、サー・クロコダイル、宮殿へ。怒りの限りの言葉をぶつけるも笑いながら受け流し残酷なまでの現実を叩き付ける。国の英雄として名を馳せながら裏では国を奪う為に暗躍した男、その男を打ち取る為に兵士達は挑むも相手にされず、ペルと同じく動物系の能力者であるチャカがその牙でクロコダイルを貫こうとするも無駄に終わる。反乱軍のリーダーコーザもその場で最悪のシナリオを思い描き、この反乱が仕組まれた物だと理解する。そこへクロコダイルが更なる絶望の種を芽吹かせた。

『4時半、広場に直径5キロを吹き飛ばす砲弾が撃ち込まれる。そして永遠に戦いは終わる。ハハハハッ!!』

後20分もない状況、コーザとビビは何とか人々を守ろうと行動する。白旗をあげ戦

いを終わらせようとするもコーザがバロックワークスの凶弾によって倒れ一時は戦いが静まろうとしたのにも拘らず再び始まってしまふ、必死に叫ぶビビをクロコダイルは首を掴んだ。

「後15分……反乱軍の援軍もまだまだ此処へ来る、自らの運命も知らずにな」

「クロコ、ダイルウ……!!」

淡々と現実と絶望を言い続けるクロコダイルにビビは涙を流しながら睨み続けた、何も出来ないそれぐらいしか出来なくてもそれをし続けた。

「お前に国は救えねえ、あばよお姫様」

「ツ!!!」

腕を砂に変えながらビビを離す、何も支える物がなくなったビビの身体はゆっくりと重力に従った下へと落下して行く。それを見ながら大声で笑うクロコダイル、これで目障りな姫は消えると確信の中で太陽の光が僅かにブレたのを見た。笑いを浮かべたまま見上げるとそこには巨大な鳥の上に乗った樽を背負った男ともう一人、翼を広げながら鳥と併走するように飛んでいる赤い者がいた。

「クロコダイルウウウウウウ!!!」

「ティガアアアアアアアアア!!!」

「ルフィさん！レウスさん!!」

麦わらのルフィ、レウス、ペル、アルバーナへと到達。地面へと向かって落ちて行くビビをレウスはそれよりも早く降下していく、地面スレスレの所でビビを助け出すと一気に上昇し街の上を飛んでいく。ペルはその隣に並び立ちながらビビの身を見て安堵する。

「間に合った……すまん遅れたなビビちゃん」

「レウスさん……ペル、ルフィさん……広場の爆破まで時間が、ないの……皆、やられちゃった……」

悔しそうに涙を流しながら言葉を口にしていくビビを三人は見つめる。不安げに、怒りと悔しさを交えながら嘆くビビをレウスは抱き締める。

「もう、私の声は誰にも届かない……!!」

「大丈夫だよビビちゃん、君の声なら……」

「俺達に届いてる!!」

強く宣言する二人にビビは嬉しさと笑いが込み上げてくる、まだ希望はある。仲間がいる!!だから諦める必要なんてないと思わされる。そしてやるべき事を解らせてくれる……。

「ビビちゃん、君には俺達仲間がいる。泣く必要なんてない、嘆く必要なんてない。だから、あいつの野望を潰そう」

「うん……!!」

地上へとゆっくりと降り立つと竜化を解除しビビをゆっくりと降ろす。ルフィはぐるぐると腕を回しながらエンジンをどんどん加速させていく、目的はクロコダイル唯一人……!!

「ルフィイイイッ!!レウスウウ!!良かった二人とも生きてたあ!!」

「だ、だだだだから言った俺には解ってたあ!!」

「解ってた奴の顔じゃねえだろ」

「トニー君、ウソツプさんサンジさん!!」

「ウソツプウアンタ要らないワザばかり作るんじゃないわよお!!」

「立ててるじゃねえかてめえ!!」

「ナミさん、Mr. ブシドー!」

続々と終結して行く仲間達、その身体はボロボロになっている。あのバロックワークスの精鋭であるオフィサーエージェントを破ってきたのだ、それなりの負傷はしているもののしつかりと生きて此処にいる。それだけでもビビにとっては酷く頼もしい物だった。

「レウスアンタ無事だったのね良かった……」

「ああ。なんとかねおいルフィ、絶対あいつを倒せよ、クロコダイルを!」

「肉一杯食ったから血はモリモリだ！任せとけ！次は絶対に勝つ!!」

そう宣言するとルフィは宮殿の上部にいるクロコダイルの元へと飛んでいく、彼なら勝てるそう信じている。

「ハハハハ、来たな竜よ!!」

大声を張り上げながらその場に現れるのは黒い装束を纏った男、見慣れない男だがレウスはその声に覚えがある。自分に一撃を加え吹き飛ばしたティガレックスの声だ、あいつがティガ……。

「あいつは俺が何とかする。あいつも俺と同じ竜だ！」

「マジかよ!?!じゃあれウス任せろぞ！」

「ああ。皆、砲撃は任せる！」

『任された!!』

一斉に散り散りになって砲撃阻止の為に動き始める皆、それを邪魔するかもしれないと竜化し人獣型へとなるが相手はそれを静かに見届けレウスだけを真っ直ぐと見ていた。他の事など興味はなく、砲撃が起きようが起ころないがどちらでも良さそうな表情をしながら。唯同じ竜と戦いたいと言う欲求を満たす為だけに此処に居るかのようだ。

「さあ始めようぜ、竜同士の戦いをよお!!」

「上等だア！」

同時に駆け出し拳をぶつけ合った竜の力を持った戦士、刻一刻と迫る砲撃のカウントダウン。拳を交えた瞬間には、それすら頭から抜け落ちるほどの興奮と高揚感に身を任せながら。

空の王者、戦う

アラバスタ 首都アルバーナにて起こっている国王軍と反乱軍の戦いの最中、そのどちらの人々の命を救おうと奮闘している者達がいた。この国を落としいれようとした元凶クロコダイルによって仕組まれた直径5キロを吹き飛ばす砲撃の発射時間が迫っている。

「アアアアアッ!!!」

「お返しだぜクソ野郎!」

その反乱の戦いの中、竜の力をその身体に宿している二人の男が激しい戦いを繰り広げていた。荒々しい鍵爪をその手に生やしながら地面を疾走しつつ眼前の赤い鎧の男を追い続ける竜、背後から凄まじい勢いで迫って来るそれを回避する為に壁を蹴って建物の屋上へと上がるが竜は壁へと腕と足をめり込ませながら無理矢理身体を持ち上げながら壁を移動し屋上へと到達すると腕の力だけで飛び上がるとそのまま相手を喰らおうとする勢いそのまま襲い掛かるが男はそれに向かって飛び竜の頭の横を抜けながら左肘をその頭へと落とした。

「流石ティガレックス、恐ろしい突進力だな」

を使って相手をどうやって身体の全てを使って倒せるのかを。大口を開けレウスの方
向へと向くと再び咆哮を放った。それは前方へと特化した咆哮。衝撃波を伴いながら
向かっていく爆音は周囲の建物を粉碎しながらどんどん迫って行く。

「ぐうう!!」

腕を交差させるような防御姿勢を取る、そして身体を貫いていく衝撃波に耐える。少
しでも足の力を緩めれば吹き飛ばされそうなほどの破壊力。地面へと突き刺さるよう
な力で立っていると言うのにそれでも吹き飛ばされそうになってしまう程、左腕の竜頭
の温度を一気に上げ衝撃波を切り払うかのように振り払うと真正面からティガが突進
してくる。

「轟衝!!」

「焰ア!!」

高温と化した竜頭をそのまま突進してくるティガへとぶつけるように殴り付ける、
デューロの時と違ってティガレックスの頭部には硬い甲殻はなく効果的に利くと思っ
ての攻撃、事実高熱故に奴の頭は焦げ始めている、なのに気になど止めていないかのよ
うにそのまま突進をし続け押し込めるように進み続ける。足に更に力を込めてスピー
ドを緩めようとしても全く速度は落ちない。

「のやろうお、火射蛇!」

竜頭の口を開きそこから炎を放射し頭から焼いて行く、暴君ですら利いた攻撃。一溜まりも無いだろうと思つたが

「轟食!!」

「何、がああああ!!」

炎さえもものともせずに進進し続け、後ろ足で地面を蹴りレウスを軽く打ちあげながら建物の壁へと叩き付けた。建物を貫通しながらレウスを前足で押さえつけそのまま力を掛けて押し潰しに掛かった、それを必死に竜頭で押し返すが徐々に押し返され地面に身体が埋まり始めて行く。

「ぐうううつつ……!!」

「轟鍛!!」

腕を退けると両足で同時にレウスを渾身の力で叩き潰すかのように、その一撃は周囲の地面ごと砕くかのように罅割れが広がっていく。

「がああああつつ!!」

物理的な衝撃と地面に押し込まれていく身体、デイーロとの戦いで負ったダメージも相まって骨がミシミシと音を立てながら罅が入っていく。追い討ちをと言わんばかりに鉤爪でラツシユが開始される、全身を絶え間なく襲い続けるティガレックスの攻撃に痛みと苦痛が全身を貫いて行く。このままでは間違いない殺される……あれだけ大口

を叩いておいてあっさり負けるのか……？ ビビを、助けに来たのに……？

「……冗談じゃ、ねえええええ!!」

竜頭から火球が放たれる、それは頭部を捉えながらそのまま相手を大きく吹き飛ばした。ボロボロになっている身体を必死に起こし立ち上がる、そしてレウスは腰に付けていたホルダーから小瓶を取り出すとそれが無事であった事に安堵する。

「良かった……割れてなかった」

その小瓶の中にはチョッパーに頼んで作って貰った切り札があった、自分専用で作って貰った”ランブルボール”。悪魔の実の変形の波長を狂わせる薬、これを使った時自分によいような変化が起こるのかは解らない。

—— 本当に奥の手にしてくれよ、それを使ったらどうなるか俺も解らないんだ。

チョッパーの言葉が脳裏を過る、僅かな時間でこれを作ってくれた名医の言葉。初めての使用がこんな大事な場面になるとは思っても見なかった。

「有難うチョッパー、お前のお蔭で最後の賭けに打ってでれる……。さあ、こいつが導くのは……いや、導くんじやない俺がそうするんだ。さあ行くぞ。ランブル!!」

真つ赤な丸薬、それが導くものなど知った事ではないが自分が勝つ事を望むならそれへと行くだけ。そう思いながら小瓶の中のそれを外へとはじき出し啜え、力を込めて噛み砕き飲み込んだ。何処かほんのり感じる甘みを感じつつも体内へと入っていく薬を

認識しながら飲み込んだ途端身体中に異様な事が起きている事を理解した。

「うううう……!!!」

身体が、熱くなつていく。前進が炎で燃えているかのような感覚に意識が消え入りそうになりながらもビビの力になりたいと言う気持ちで支えながら必死に意識を持つ。燃えるような感覚は肉体にも影響を及ぼしていく、急激な変化に身体が反応して行くのに無意識に身体を完全竜化させていく。

「お前も、竜になつたか……!」

体勢を立て直し戻つて来たティガレックスはその姿を見ながら笑うが直ぐにその異常さに気付いた。レウスの竜形態、リオレウスの姿は既に見ているがそれとは明らかに違っている。見た時よりも一回りほど巨軀になり翼もそれに見合う大きさになつている。だが一番目を引くのは甲殻が燃え滾っている事、自らの身体を焼いているその状態にティガは戸惑つた。一体何がこいつにあつたのかと。

「……………グオオオオオオオオツツツ!!!」

燃え盛っているレウスは天へと叫びを上げるとそのままティガに向かって火球を放つた。戸惑っていたティガはそれを避けきれずに喰らうがその火球は身を焼き甲殻を焦がすほどの超高温。至近距離での炎でも身動きしなかつたティガは苦しみもがくがそこへレウスが飛びかかるように襲い掛かった。

——ガアアアアアア!!!
「なんだ、こいつうああああ!!!?」

その身体に食い込む両足、身体へと刺さる爪でしつかりと掴むとそのままティガの巨体を持ち上げ投げ飛ばした、その勢いのまま地面に叩き付けられながら転がっていく、がその途中身体を壊すかのような激痛に気付いた。毒だ、先程掴まれた際に毒を注入されていたのだがそれでも僅かな時間だったのに身体を蝕む痛みは半端な物ではない。

「アアアアアああああアアアアア!!!」

身体が内部から溶けるかのよう熱い感覚を味わう、だがそこへ更なる追い討ちは降り注ぐ。連続して火球が降り注いで来る、それに恐怖したティガは必死に身を動かした。毒が身体に回るといふがそんな事も考えずに身体を動かした火球から逃れようと必死だった。周囲に被弾していく燃え上がっていく火球、掠って身体を燃やしていくがそれでも直撃よりは良いと逃げる。だが毒が全身を蝕んで行き遂に身体の動きが鈍くなつた時、空から王者が襲来し身体を足で抑えこみながら毒を打ちこみ、首へと牙を突き立てた。

「!!!」

言葉にならない悲鳴を上げながらティガは倒れこみながら地面を抉っていく。建物を薙ぎ倒しながら広場の時計塔近くへと到達しながらティガは漸く止まり全身に毒が

回り動かなくなった。そしてまだ一撃を加えようとした時頭を誰かに殴られた。その瞬間、今まで闘争本能に突き動かされてきた身体に自分の意識が通い始め正気に戻る。目の前には傷だらけで怪我もしているナミ達がいた。

「……はっナミちゃん!? 皆も、俺は……」

「それはこっちの台詞よ! いきなり化け物が来たと思ったらレウスなんだもん! しかもなんか身体燃えてるし何が起きてるのよ!」

「レウス、ランブルボール使ったのか!」

「あ、ああ。それしかなかったからな」

「って話してる場合じゃねえ! レウスなら時限砲弾何とか出来るんじゃないか!」

一体何を言っているのかレウスには理解出来なかったがナミは手早く

「発射止めたけどそれは時限式で爆発するの何とかして!! それはあの時計塔にあるからはやかう!!」

と説明をした。理解しきれなかったがそれでも何とかすれば良いと理解しすぐさま飛び立った、今の自分ならなんとか砲弾を持っていく事も出来るだろう。上昇していくとペルと同時にそこへと到達した、そこではビビが砲台の砲身部分に何度も何度も拳をぶつけクロコダイルへの恨みの言葉を言い続けていた。

「クロコダイルウ!! 此処までやったのに、何処まで人を馬鹿にすれば……!!」

「ビビちゃん、君の行動は無駄なんかじゃないよ。顔を上げなよ」

「!? れ、レウスさんにペル!?」

「ペルさん。彼女を頼むよ」

「護衛隊副官として当然の義務だ」

レウスはその足で砲弾を掴むとそのまま一気に上昇していく、広場を吹き飛ばすほどの爆発をする砲弾。かなり高くまでいかなないと下の広場まで被害が及んでしまう。必死に羽ばたきアルバーナの上空まで飛び恐らくもう大丈夫だろうという地点まで来た、だがもう時間はないだろう全力で砲弾を上へと投げるそして撤退しようとした時身体が一気に動かなくなると同時に全身から力が抜けて行こうとした時、砲弾が眩い光を放った。

空の王者、反乱の終わりを見る

その輝きは、太陽は破裂したかと錯覚するほどに眩く激しい閃光。本物の太陽の光を遮ってしまうほどの強い光がアルバーナの上空にて炸裂した、光の次に襲いかかるは爆音と衝撃波と爆風。高高度故に爆発による被害はないが爆風はアルバーナを駆け巡った、瓦礫と人々を容易く吹き飛ばしながら周囲へと満ちていく。砂塵を巻き上げ、人々は何事かと空へと視線を向けていく。

「あ、あ、ああああっ……!!」

「レ、レウス君まさかそんなっ……!?」

時計塔の頂上の内部にてそれを誰よりも近くで見ていたビビとペルは言葉さえ失い掛けていた。自分に任せてくれと力強く、猛々しく天へと砲弾を持って行つた彼。この国を守る為に奮闘してくれた竜、砲弾を天へと運びそのままそれに巻き込まれてしまった。

「そんなっ……レ、レウスさああああああああああん!!!」

砂漠の姫の悲鳴が街全体へと広がっていく、大切な仲間が。この国を救う為に巻き込まれてしまった、絶望に満ち溢れた彼女は時計塔から飛び降りそうなのを必死に止める

ペル。なんとか落ち着かせようとするが無理な話だった。ビビの此処までの旅路を彼は知らない、麦わらの一味がどれ程彼女の中で重い存在なのかを。

決して楽ではなかった旅、だけど心から楽しかった時間、そんな時間の始まりはウィスキーピークでMr. 5のペアに襲撃されたのを助けられた事だった。船の上で仲間の為に動く彼の姿には何度も助けられたし不安そうな表情をすると決まって励ましてくれる暖かな言葉が心地よかったのに……そんな彼が今……。

虚ろな瞳で見上げる天に浮かぶ深い深い爆炎、それを力なく見つめる瞳が何かを捉えた。

「あれ、は……もしかして……？」

爆炎の中からゆっくりと落ちていく一つの影、人間ほどの影をビビの瞳が捉えた。もっと目を凝らして見て見ればそれはよく知っている人影だった、ペルに直ぐに行ってくれと言う。それに一瞬戸惑う彼だったが同じように空を見ると直ぐに理解し飛び立った。それを両腕に抱えるビビが急いで下へ叫ぶ、それに従い地上のナミ達の元へと降り立った。

「君達に船医はいないか?!直ぐに彼の処置を!!」

「お、おいそれってまさか!?!」

「う、嘘だろおい!?!」

「そ、そんな……!!」

『レウスウ!!』

そこに居たのは全身に凄まじい傷と火傷を負っているレウスの姿だった。ペルはすぐさまその場に寝かせるとチョツパーが処置を開始する。だがその彼の様子は素人目に見ても手遅れとしか言い様が無いような有様、ペルもこれを処置しきれるのかと不安で一杯だった。

「酷い傷だ……ッ!? た、大変だ息をしてない!!?」

「う、嘘だろチョツパー何とかしてくれえ?!」

「ナ、ナミ手伝って!!俺一人じゃ駄目だ!」

「わ、解った!!」

全身に付き纏っている酷い倦怠感と痛みと苦しみ、そして異様な眠気。混濁する意識の中、閉ざされてようとしている意識を繋ぎ止めているのは何処から聞こえてくる声と見えている光。少し手を伸ばせば届きそうな光、それでもピクリとも動かない身体、そのまま諦めてこの眠気に身を任せようとする度にそれを払い除けて迫って来る光に少し耳を済ませてみた。

—— お願いレウス死んじや駄目だ！生きるんだよレウスウ！！

—— お願い息をして……！！戻って来て……！！

聞いた事がある声だ、友達と守ろうと思った人の声だ。一体なんで自分はその二人にそんな言葉を掛けられているのだろうかと理解出来ない。そもそもなぜ自分はこうなっている？意識に残っている記憶を掬いあげて見る、アルバーナ砲撃を回避する為に砲弾を空へと持って行つた。ここまでは覚えているがその先が曖昧だ……。

何故……—— 解。思い出した、ランブルボールの制限時間が来てしまい身体が硬直してしまったのだ。不安定かつ未完成な変形は身体に掛かる負担が凄まじかった、結果的に後数秒で薬の効果が切れる所で身体が動かなくなってしまった。そしてそのまま爆発に巻き込まれてしまった、だがまだ変形したままだった為に即死とはならなかったという事……。なんにせよチョッパには感謝しなければいけないだろう、薬が無ければティガに勝てなかつたし砲弾も運べなかつた。礼を言わなければ。そして解つた、自分は死に掛けているんだ、だからこうして言葉が掛けられている。

「……ッ、ガブッ！！」

「レ、レウス！！良かった意識が戻つた！！」

激しくする呼吸、呼びさまれた意識と覚ます瞳。ゆっくりと開かれる視界に広がって

いるのはこちらを見つめるチョッパとナミの姿だった。

「……俺、は……生きてるのか……?」

「うん、うん……!! さつきまで息もしてなかったけど、吹き返して良かったアア!!」

「心配したんだからあああつ……!!」

大粒の涙を流しながら目を覚ましたレウスに飛びつくナミとチョッパ、その際に痛みがするがその痛みが逆に意識をハッキリとさせる。なんとか二人を離させると傷ついた身体を何とか起こしながら建物の壁へと寄り掛かった。全身に激痛が走っているがそれでもティガの攻撃に比べれば大した事も無い。

「動いちゃ駄目だレウス、まだ治療は終わって無いんだぞ!」

「悪いチョッパ……でも、反乱は……? 終わって無いなら出来ることか……!!」

「大丈夫、あれを見て!」

まだ完全に止められて終わっていないならば働くと言うレウスを止めるようにある一点を指差した、人々の中を進むように目をやった先には一人の男が横たわっていた。それは間違い無くレインベースからアルバーナへと向かおうとした自分達の目の前に現れたクロコダイルに違いない。それを見た瞬間に理解すると同時に遅れながらに気付いた。ルフィが……あの王下七武海の一角であるクロコダイルを倒したのだと。そして同時に顔に触れる水に気付いた、天から降り注ぐ恵み、3年という期間も降らな

かったと言われた雨が降っている。

「雨、だ……」

「ええ、反乱が終わる……!」

この反乱は王が人工的に雨を降らせ国から雨を奪ったという疑念から始まった物だった、その雨が再び、自然のままに国全体へと降り注いでいる。乾ききっている大地を潤すように降る雨は同時に反乱の終わりを告げていた。ビビの願いであつた反乱の終結、それが今達成されたと言う言葉は彼の心を一気に安心させ心地よい眠りへと誘つた。

この日、王下七武海サー・クロコダイルは海賊、麦わらのルフィに倒されアラバスタを乗っ取り理想国家の建国という野望は破られアラバスタという国は救われた。空から降り注ぐ恵みはその日、夜になつても尚国へと降り続けた。

「ビビ様、そろそろお休みになつては如何でしょうか。彼の看病なら私がいたします」

「いいのよイガラム、私がやりたいの。だってこの国の、いいえ私の仲間なんだもん」

「そうですか、では私はこれにて」

「ええ」

夜。戦いは終わった、ビビと共に国を救うために尽力した国の恩人達は王宮へと保護

され手当てを受け今はベットに横になり眠りに付いていた。激しい戦いを潜り抜けてきた彼らには何よりも休息が必要、存分に眠る中ビビは一人の男が眠るベットの傍に座りながらその男、レウスの顔を見つめていた。

「本当に、有難うレウスさん……貴方のお蔭で……」

何処までも感謝の言葉を述べても気持ちを言い表せない。彼の行動が無ければ国民の命は散っていた、そしてあの行動が無ければ皆が戦いを中断し話を聞いてくれもしなかったかもしれない。一体どんな事したらレウスの行動に報いるだけの礼をする事が出来るのだろうか……。

「如何したら、貴方は喜んでくれます……?」

思わずそう口に出してしまった、眠っている彼に、聞こえない筈なのに。そんな時、頬を撫でる感触がした。俯いていた顔を上げると身体を起こしたレウスが自分の頬を撫でていた。

「そうだな……お姫様に笑顔でいてくれたら嬉しいかな?」

「レウスさん……本当に、よかったあつ!!」

思わず嬉しさから抱き付いたビビを受け止めるレウス、そのままベットに沈んだ彼は軽く彼女の背中を撫でる、が

「があつ身体があつ!!?」

「ハッ?!?!?」
ん
ッ
ッ
!!?!?!?」
ご、ごめんなさいレウスさん!!し、しっ
かりしてレ、レウスさあああああ

空の王者、王と話す

「な、なんか川が見えた……。誰かが手振ってた気がする……」

目を覚ますと同時に意識を失っていた際の感想を述べるレウス、ビビに抱き付かれるとそれがちょうど身体の傷に響きあまりの痛みと開いた傷で気絶していた。気絶していた間は何かこの世の物とは思えぬような美しい川を目の前にしながらそれを眺めていたら川の向こう側から誰か、親しくよくしてくれた人が手を振っていたような気がした。一体誰なのか軽く気になるがこれ以上気に掛けていたら本気で向こう側に渡ってしまいそうな気もするので此処までにしておこう。

「レウス動いちゃ駄目だぞ？ 包帯も取っちゃ駄目だからな！ 怪我人は大人しくしてるんだぞー！」

「ああ解ってるよチョッパー。だけど怪我してるのに安静にしてない怪我人っているか？ 緊急でも無いのに」

「ゾロだ。あいつ動くな！ って言ったのにトレーニングに行っちゃったんだー！」
「……あいつらしいな」

まあ確かにゾロならやるだろうかと納得してしまう。話では東の海で世界一の大剣

豪、クロコダイルと同じく王下七武海の一角である鷹の目のミホークと対決し全治2年の大怪我を負ったのに応急処置をされた身でそのまま魚人の一味と戦ったらしい。そこまでの重傷をしているのに幹部一人を撃破し敵一味の多くの魚人を一人で切り倒したとか……。ゾロに呆れながら感心するような複雑な気持ちを持つてしているとチョッパが酷く申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

「レウスごめん……俺がもつと良いランブルボールを作れてたらこんな大怪我しなかったのに……」

「おいおいチョッパー急がせたのは俺だ、寧ろあんな短い時間で作れただけ凄いつてもんだよ。あのボールのお蔭で俺は戦いに勝てたしこの国は助かったんだぞ」

急ごしらえのランブルボールは確かにレウスに尋常では無い負荷を掛けた、苦痛に加えて甲殻が燃えるという余りにも不安定すぎる変形は精神的にも肉体的にもダメージを与え続けていた。意識さえも奪い闘争本能を掻き立てる劇薬、リオレウスその物の本能を引き出し竜から龍へと誘う危険な代物。同じ薬を使うチョッパーとしてはこんな物しか準備出来なかつた事が申し訳無かつたのだが逆だ、あれが無ければ終わつていた。

「結果が如何であれ俺は生きてるし、この国は無事なんだ。お前が気にする事なんてねえよチョッパー、今度はたつぷり時間を掛けて、俺用の奴作ってくれよ。ドクトル

チョッパー」

「ド、ドクトルなんて言われても嬉しくねえぞこの野郎が♪任せとけよもうばか!」

「(あーもう、なんでこいつこんな可愛いらさうな)」

くねくねと振った身体から嬉しそうな声でくれぐれも動くなよと忠告するとチョッパーは部屋から出ていった。一味の中で最も深手を負っているから念の為別室を借りているレウスだがたった一人でベットに横になつているのもそれなりに暇だ、周囲が煩くして身体に響かないようにと言う配慮なのだろうが少々寂しい気もする。これなら騒がしくても一緒に部屋が良かったと思わず呟いてしまふ、なまじ船の上が騒がしかった所為だろうか。

「……眠くもねえしな。ちよつと抜け出して……駄目だチョッパーに怒られる、んっ」

抜け出すのを諦めていると扉をノックする音がした、態々ノックしてくる辺りビビだらうかと思いつつ話し相手ぐらいになつて貰えないかどうぞくと声を出す。扉の先にいたのは半分正解だった、そこに居たのはお見舞いの果物が詰まった籠を持ったビビとその父親であり国王であるコブラだった。思わず身体を起こそうとするとコブラはそれを制止しそのまま良いと止める。

「レウスさんあの、ごめんなさい!私が思わずその……」

「ああもう大丈夫だよ、チョッパーが処置してくれたし。まあ川を見たけどね」

「あの世寸前だったの!」

さり気無く以前フォローにならないフォローをしてくれた際のお返しをするレウスだった、軽いシヨックを受けるビビを慰めるように頭を撫でるとコブラは微笑ましい物を見ているかのような笑みを浮かべながらベット近くの椅子に座り口を開く。

「レウス君だったね、ビビが世話になった。今日はその礼を言いに来たのだ。娘を助けてくれた事を感謝するよ」

「辞めて下さい国王様、ビビちゃんを助けろって言ったのはナミちゃんです。助けるって決めたのは船長ですよ。俺はそれに従って、偶にビビちゃんの相談を聴いたぐらいですよ」

「だが君がウイスキーピークでバロツクワークスの魔の手から娘を守ってくれなければビビは今ここにはいない。本当に、有難う」

頭を提げる国王にレウスはただただ止めてくれとしか言えない、しがない海賊風情に一国の王が頭を提げるなどしてはいけないとコブラを止めようとするがコブラはやめない。

「何、私は国王としてではない。一人の親として、ビビの父親として礼を言っておるのだ。これなら受け取って貰えるだろう?」

「……ズルいですね貴方も、ビビちゃんの親としての感謝なんて受け取れない訳は無い

じゃないですか」

「もうお父様ったらレウスさんが困ってるじゃない」

「はははっすまんすまん」

ビビに咎められてもコブラは笑顔を崩さなかった。してやったりと言いたげな表情にビビはしようがないなあと言葉を洩らすのであった。

「私ルフィさんの方に行つてくるね、ごめんなさいレウスさんまた後で来るから！その時に一杯話しましょう！まだお礼とか言い足りないの！」

「もうバックブリーカーは勘弁願いたいかな」

「し、しないってば！レウスさんの意地悪!!」

顔を赤くして出て行く彼女を軽く笑いながら見送る、部屋には国王と海賊が一对一で残された。

「随分、娘は君を慕っているようだな」

「何。彼女はまだ少女です、もう直ぐ三十路のおっさんの冴えないジョークに寒がったんですよ。だから顔が赤くなる」

「私には兄を慕う妹に見えるが？」

「歳が10以上も離れた妹とは、犯罪の臭いがしますね」

「海賊の君がそれを言うのかね？」

「違うない」

流れるようなトーク、大人の男同士の話が何処か笑い所を合えて作るような話し方をしながら展開させられていく。

「君の怪我はかなり酷いと聞くが大丈夫なのかね」

「うちの名医が見てくれてますからね。多分大丈夫でしょう」

「そうか……これは戯言と聞き流してくれても良い。君さえよければこの国に残る気は無いか、この国の守護者として」

「えっ……」

思っても見なかった一言にレウスは凍り付いてしまった、こんな事を言われるなんて思っても見なかった。こんな選択肢が飛び出てくるなんて。

「君はこのアルバーナを、いや国である人の命を救ってくれた。本当に君さえ良ければだが……この国で生きてみないか……？何れはビビの婿としてこの国を」

「ちよちよちよ待つて下さいコブラ王?! ああもう頭が混乱しちやいますよ!!……ふう……」

コブラの言葉を途中でぶった切り深く深呼吸をする、突然かつとんでもない発言に追いつけない。この国の守護者として生きる、自分はある意味国の英雄なのかもしれない。加えてビビの命を救っている、コブラにとっては国民の命と娘を救ってもらって

いるビビと苦笑いを作っているレウスがいた。

空の王者、宴と風呂を楽しむ

クロコダイルの討伐から三日が経過した。内乱の影響でゴタゴタしていた国内も落ち着きを見せ始め戦いで傷つき壊れた街並みの修理が始まりつつあった。あれだけの戦いがあったのに既に人々の顔色は明るくなっていた、それらを受け入れながら前に進もうとそれぞれの人は助け合いながら国を立て直すために歩き始めようとしていた。それらを宮殿から見つめていたレウスはチョッパーの診察の元、一部の包帯を取って貰っていた。

「凄い回復力だなレウス、もう傷が治って来てるぞ！」

「これも竜の力の恩恵かな？ 実は火球一発撃つ度に焼けるんだよな喉」

「そうなのか!？」

既に身体に受けた傷が治癒し塞がってきている回復力にチョッパーが驚愕する中レウスはこうなつても可笑しくはないと言う。リオレウスという竜は体内で炎の塊を作り出し発射する事が出来るがあまりの熱量の為に発射の際に自らの喉をも焼き払ってしまうほど。だが自身が備える驚異的な再生能力により、焼けた喉は瞬く間に回復する事が出来る。その回復力は全身に深く負った傷も早急に治癒する事が出来るほどに

優れている。

「じゃあ毎回毎回喉が焼けてるのか!?こえええ!!?でも凄いなその回復力!これなら後三日もあれば完治するぞ」

「此処までスムーズに回復出来たのもチョッパーの治療が良かったからさ」

「ば、馬鹿野郎褒められても嬉しくなんかねえぞこの野郎が♪」

「よつ名医チョッパー先生!」

夕日が差し込み始めている部屋で遊びが半分混じりつつもチョッパーの腕前を褒めるレウスとそれを聞いて照れまくっているチョッパーはかなり和やかな雰囲気を作り出している。これで後目覚めていないのはルフィだけという事になった。クロコダイルとの死闘、その際に受けた毒は中和されているらしいがダメージの原因にはなっていないだろう。それを癒す為にルフィはかなり深く眠っている。

「まあその内起きるだろ、でもまあレウス良くなって良かったぜ。正直あんなだけの事やったから俺はここでレウスが一時撤退するのかもありえるのかと思っただぜ」

「買い物から帰って来たウソップは思わず元気になって仲間を見て眩いた。砲弾を空へと持って行きそのまま巻き込まれたのだから暫くはアラバスタでの休養が必要になるのではないかと少なからず思っていた、本当に重傷ならそれが一番だが仲間が離脱するのは寂しいものがある。」

「どうやら大丈夫そうだがな。ただどなウソツプ、お前全身の骨とかボロボロだったのになんでもう包帯取れてるんだよ。俺よりお前の方が化け物じゃねえのか、本当にお前生身の人間かよ」

「この俺に不可能は無い！」

「んじゃ今度一人で海軍の船に放り込んで」

「はい無理です！」

即席のコントのようなやり取りに笑いが起きた時だった、鼻提燈を作って眠っていたルフィが目を覚まし身体を起こし伸ばしながら大声で良く寝たなあ〜!!と気持ち良さそうな声を上げる。

「帽子、俺の帽子は!?!あつ腹減ったなく朝飯!帽子は!?!朝飯帽子は!?!」

「ったく起きた傍から糞煩くて騒がしいなてめえは、それに今は夕方だ。帽子なら隣だぞ」

「ルフィさん良かった元気になって!熱とかもあつて心配してたんですよ」

「そうなのか?んじゃ看病ありがとな!」

起きて早々に騒がしくしている船長だがルフィだと思ふと不思議と納得してしまうのが彼の魅力でもあるのかもしれない。そんな中にトレーニングから帰って来たゾロに挨拶するが久しぶりと言ってしまった自分に違和感を覚えた、何故久しぶりなのかと

思わず首を傾げてしまった。

「まっ三日も寝てたんだしな、そうなるな」

「三日も寝てたのか俺!? 十五食も食い損ねてるじゃねえか!」

「なんで一日辺り五食なのよ!」

「ルフィだから……」

「失礼するよ! 船長さんが起きたって? もう直ぐ夕食だから待っててくれないかい?」

ルフィが今まで眠っていたために食べ損なってしまった食事の事でシヨックを受けている中、扉を開けてウイスキーピークで別れこの国の反乱を止める為の証人となったイガラムにそっくりすぎる女性が後ろに大量のフルーツを乗せたカーゴを引き連れて入ってきた。

「イ、イガラムさん!? な、何故!」

「レウスさん違うのよ。彼女はテラコツタさん、イガラムの奥さんでこの宮殿の給仕長なのよ」

「ビビ様と夫が世話になったね、腕によりを掛けてご馳走を作らせて貰うつもりだよ」

「……似た者夫婦にも程があるだろこれ」

「同感だ……」

イガラムの女装に付いて知っているゾロは思わずそう思ってしまった、顔もさる事ながら髪型や体格まで似通っている。ここまで似た夫婦だと最早言葉すら失う。

「夕食までの繋ぎとして果物でも摘んでてくれるかい？」

「ええでもこんな沢山……」

「解った」

手を伸ばそうとした果物の山、それが瞬時にして消えた。その犯人は勿論ルフィである、瞬間的にフルーツを口へと運び咀嚼し飲み込んだ。まるでマジックショーのようにフルーツの山は消えうせてしまった。

「「手品かよ……」」

「おぼちゃん、俺は三日分食うぞ!!」

「良い食いつぶりだねえ望む所だよ!!給仕一筋三十年、若者達の胃袋なんかには負けないから存分にお食べよ!!これは腕が鳴るねえ!!」

テラコッタはルフィの一瞬してフルーツを平らげる食いつぶりを見ても全く引かなかった。寧ろあれだけのフルーツを食べて尚三日分も食べるからと宣言する彼に闘志が燃え上がってしまった、料理人としてあそこまで綺麗に食べてくれるのは嬉しい物であると同時にあの胃袋を満たしてやりたいと心から思えたのだろう。

「うんめえうめえ!!」

「いや本当に美味しい！食べなきゃ損だわこれ！」

「おい酒頼むぜ!!」

「これもうんめえぞレウス!!」

「おおっ本当だな」

「おいチョッパ―慌てんなって」

「最高だなこりゃ!!」

宮殿の大食堂にて始まった麦わらの一味へのお礼の意味を兼ねた大会食。王族の宮殿とあつて周囲には兵士達が鎮座し見守りその中で静かに、気品ある食事が行われる筈だが海賊にそんな物は無い。豪快に、荒々しく、粗暴に食事をしていく風景に周囲の兵士達は思わず呆気を取られてしまっている。次々と平らげられていく食事に補給を行われるようにテラコツタ給仕長を筆頭にした給仕チームが作った料理がどんどん運ばれては完食されていく様は圧巻である。

「早く食えなくなるぞってああっ!?!」

「おいルフィ今俺の皿から取ったろお!?!」

「飛ばすなアホオ!!」

「おい水を頼む喉を詰まらせた奴がいる!!」

ギヤアギヤアと騒がしく笑い声と抗議の聲が飛び交う麦わらの一味としては最早当

たり前となりつつある食卓は異質な物であった。共に旅をし既に慣れ当然のように受け入れられているビビは笑っている、次第に宴会芸なども始まり更に騒がしくなっていくと周囲の兵士達も大声で笑い雰囲気は飲まれていた。気付けば王やイガラム、チャカにペルまで爆笑する宴へとなっていた。

「レウスさん、楽しいですよねこうやってわいわい食べるのって！」

「全くだ!!」

こうしてアルバーナ宮殿始まって以来の大宴会は騒がしくも楽しく開催されたのであった。

会食という名の宴会が終了すると皆風呂に入るためにコブラ案内の元浴場へと通されたがそこはともかくゴージャスな大浴場であった。黄金のライオンが湯を注ぎ湯船は湯で満たされていた。その大きさと豪華さに皆のテンションは上がっていく。ルフイとウソツプは先に入ろうと競うが途中石鹸を踏ん付けてそこら中を滑りまわってから湯船へと入って行った。

「会食は実に楽しかったよ、時期が時期だけに清楚に済ますつもりだったが君達に掛かればなんでも宴が変わってしまうようだな」

「ははっ海賊にマナーは必要ありませんからね。面食らったんじゃないですか？」

「確かにな。だがそれ以上に愉快だった、あれ程騒がしくも楽しい食事も初めてだったかもしれない」

コブラと話をしつつ身体を洗い湯船へと身体を沈めると悪魔の实の能力者ゆえか身体から力が抜けてしまう、湯船で溺れるというのは笑い話にもならないので壁に寄り掛かるようにしながら気持ちが良い湯船を楽しむ事にした。隣に身体を沈めるゾロも気持ち良さそうに声を出す。

「んで女湯はどっちだ？」

「あほか言える訳無からうビビ様も居るのだぞ!!？」

「ケチケチすんなって!!男なら解るだろ？」

まるで修学旅行に來ている学生のような事を言い出すサンジとそれを決して言わないイガラム、まあイガラムにとってビビは守るべき対象であり仕える王家の姫であるのだから当然ともいえるが。

「おいレウスお前だつて見てえだろ！」

「見たいつて何を…?」

「決まつてるだろ、ナミさんとビビちゃんの、むふふふな姿だよ」

ニヤけた顔で答えるサンジは純粹に風呂を楽しんでいるレウスにそう言う、一瞬何を言っているのか理解出来なかったが次の瞬間理解してしまったのか一瞬で顔を真っ赤

にしクラクラしながら鼻から出てしまった鼻血を必死に止めようと鼻を押さえる。

「お前だつてみてえだろ……？ 広がるパラダイスを。普段服に隠れている抜群のスタイルが成す宝石みたいいな光景を……!!!」

「——ツ!!!」

力説するサンジに氣押されされながらも必死に鼻を押さえながらブンブンと首を横に振る。見たくない訳ではないが改善されつつあるが未だに女性に対する免疫が薄い彼にとってそれは刺激が強すぎる領域、興奮を抑えながら意識を保ちある事でハッキリと否定の意思を持つ。

「やめとく……ナミちゃんなら金取りそうだから……」

「確かにあの女ならやりかねえな……だけど流石に国王のおっさんが認める訳が」

「あの壁の向こうだ!!」

「国王この野郎オオオオオオ!!!」

「おいおい……」

思わずゾロとレウスは突っ込みを入れてしまった。ナミもいるがそれ以上に自分の娘まで居るのに覗きを推奨する国王に呆れさえ出てきてしまった。結局そのまま二人を除いて壁を越えて覗きをするが……

「一人10万ベリーよ。幸せパンチ♡」

『ぐはあっ!!』

「ナミさん!？」

ナミの声と共に覗いた男性人は一斉に鼻血を拭き落ちてきた、どうやらナミが自分から裸を見せたようだ。すっかりと金を取ると宣言をした上で……それを見たレウスは心から覗かなくて良かったと安堵してしまう、するとコブラが鼻血を垂らしながら礼を述べた。思わず全員からエロ親父と言われてしまうとそつちではない!と怒りながら国をだよつと訂正しその場で座りこみ頭を下げた。

「おいおいアンタ、良いのか国王がそんな事して」

「コ、コブラ様いけませんこれは大事件ですぞ!?!王が人に頭を下げるなど……!!」

「イガラムよ、権威とは衣の上から着るものだ。だが此処は風呂場、裸の王など居るものか」

一国の王がそんな事をしてはいけないというイガラムをコブラはそう制止する。だがコブラは頭を下げ続ける、王と言う権威は衣を纏った姿でこそ発揮される物。今のコブラは裸、即ち王では無いと言う。

「私は一人の父として、此処に住む民として心から礼を言いたい。どうもありがとう、本当に有難う!」

空の王者、王女と語らう

「今夜ア!?」

「此処を出るのか!?」

「まあそろそろ出航しないと厳しいところもあるだろうからね」

風呂から上がり部屋で寛いでいた皆に向けてナミが話を切り出した、今夜にはこの国を出ようという内容だった。この国へと来た目的自体はビビを送り届け反乱を阻止すると言うものだった。既に目的を果たし傷の回復や最後まで眠っていたルフイも目覚めている、此処まで来たらもう国を出るべきだとナミは話すが皆はそれに同意していた。

「よしアラバスタ料理をもう一回食ったら行こう!」

「直ぐ行くんだよ馬鹿!!」

「いつてえ!? レウスなんか今の痛かったぞ!?」

「当たり前だ竜頭で殴ったからな、牙が少し刺さったんだろ」

「殺す気か!!!」

お前なら簡単に死なないだろうと信用なのか解らない言葉を洩らしながらレウスが

一斉に怒鳴り声を上げる一同だがMr. 2ことボン・クレーは違ふと弁明する、今船はサンドラ川の上流に在ると言いながら友達じやないか!?と笑つてから電伝虫は切られた。一先ず兵士には礼を言いつつ部屋を出て貰いこれから如何するかを話し始めるが如何するかはもう決まつてゐるような物、船を取られてゐる以上向かわない訳には行かない。皆が準備を始める中、一人胸を締め付けられるような思ひを味わう姫君。彼女は揺れてゐた、海賊と王女と言う立場の間で。

「ねえ皆……皆、私如何したら……良いの……?」

「ビビ……良く聞いて」

荷物を降ろしながらナミはビビに向かつてこう言い放つた。12時間の猶予の間、心を決めて欲しいと、明日の昼12時ちょうどに東の港に船を寄せる、停泊は難しいだろうが本気で仲間として旅を続けるのであればその時が船に乗るチャンス。来るのであれば大歓迎する、それが精一杯の勧誘。皆が窓から降りていく中、最後にレウスが降りようとした時ビビが声を上げた。

「レウス、さん……私……」

「ビビちゃん。……皆ちよつと先に行つてくれ直ぐ行く。忘れ物した」

「何してるのよレウス、早くしてよ」

「解つてるよナミちゃん」

一応断りを入れビビと向きあうレウス、二人の間に流れる沈黙はビビの迷いと戸惑いを表しているかのよう。ぎゅゅと握り締める服に出来る皺は今の気持ちのよう。

「ビビちゃん、これは君が決める事だよ。このまま王女として、海賊として、対照的と言ってもいい。君自身が決めなければいけないんだ」

「でも、私……楽しかったん、です……。皆と、旅をするの……短い時間だったけど王女だつて事も時には忘れたりしてたんです」

心の奥底から楽しかった時間だった、大変で命の危険もあったけど皆と一緒に旅をするのは本当に楽しかった。そんな時間をもっと楽しみたいとさえ思えてしまう……。でも王女としてこのアラバスタを支えて行く義務とて大切、どちらも大切な物。一つ選ぶには苦しい選択だ。苦しうにするビビを見てレウスは窓の外から見える夜空を見ながら口を開いた。

「君と、王女としての君と会ったのはこんな時だったね。ウイスキーピークで」

「えっ? え、ええそうですね。あの時私はMr. 5のペアに命を狙われてたけどレウスさんが助けてくれた」

「そして直ぐにクロコダイルが黒幕だつて自分からバラしたよね、あれだけ言えないって騒いでたのに」

「あ、あれはその緊張とか動揺とかしててつい口が滑って……!!レ、レウスさんだつてあ

の時ナミさんに引つ張られて気絶しかかっていたじゃないですか!」
「それは明らかにナミちゃんのせいだからノーカウントだろう?!」

昔話というほどの物では無いがレウスの口から出てくる話は彼と自分の出来事のことだった、本当に凄い出会いだった。最初はラブーンを殺そうとしていた女の子が王女で、そんな彼女を国に送る事になったり波乱万丈な旅だった。気付けばビビは先程とは打って変わって笑顔を浮かべていた。

「笑ったねビビちゃん。君は笑顔が一番だ」

「あつ……」

「言ったよね、お姫様に笑顔でいてくれたら嬉しいって」

感謝をするなら笑顔でいて欲しい、それが彼の言葉だった。気付けば顔を曇らせてそれを忘れていた、彼との約束なのに少し自分が嫌になった。そんな自分の頭を抱き締めるレウス、そしてすぐに離れてしまった。荷物を持ち窓に足を掛けた彼にビビは立ち上がった。

「……個人的な欲を言えばその笑顔を傍で見たい、かな」

「あつレウスさん、まってっ!!」

そういつた言葉よりも早くレウスは窓から飛び降り皆が待っている超カルガモ部隊の元へと駆け出し行ってしまった。小さくなっていく背中を見ながらビビは思わず

思ってしまった。決めるのは自分だ、自分で決めなければいけないと言っていたのに最後に傍にいて欲しいなんて言うなんて……。

「ずるい、ですよレウスさん……。そんな事を最後に言うなんて……」

呟いてしまった言葉、もう自分の心は決まっていたのかもしれない。抱き締められた時から心臓の鼓動が加速してしまっている、今自覚した。自分はある人が好きなんだ、あの赤い竜になる年上の彼が好きなんだと。でもそんな気持ちを一旦しまうと自分の考えで答えを出すと決めた時、イガラムは息を大きく乱しながら部屋へと入ってきた。

「じ、びび様。ル、ルフィ君達は……?」

「海よ。海賊だもの」

「な、なんと……」

脱力する彼の手から零れたのは数枚の紙だった、一体何かと見て見るとそれは政府に危険と認められた者に掛けられる指名手配の書類だった。そこにあったのは見慣れた海賊の顔写真だった、一人は笑顔で此方に笑いかけ、一人は刀を肩に置きながら厳しい顔をし、一人は竜の頭を左腕に付けた男が映りこんでいた。

海賊狩りのゾロ 懸賞金7000万ベリ

空の王者 レウス・R・リオス 懸賞金7500万ベリ

麦わらのルフィ 懸賞金1億1000万ベリ

「なあレウス、何を忘れたんだ？」

「んっ財布忘れてた、これ忘れたらナミちゃん怒るでしょ？」

「勿論!!!」

「うっわすっげえ力入れて肯定しやがったよこいつ」

超カルガモ部隊に跨りサンドラ川へと疾走する一同、レウスはチョツパーと一緒に乗っている。アラバスタ最速の名に恥じずにあつという間に砂漠を横断して行くその速度に初めて乗るレウスは舌を巻く。サンドラ川へと到達すると上流のある場所には見事にメリー号が停泊しその上では大柄で“盆暮れ”と書かれた白鳥のコートを着たバレリーナが騒いでいる。どうやらあれが件のMr. 2、ボン・クレーらしい。

「あらん、アンタとは初対面ねえ？ボスが呼んだ竜を倒した噂の竜っていうのはアンタの事かしらあん？」

「多分そうじゃねえか、つとかなんで船を奪った。結果的に俺達は海軍に船を奪われずにすんでいるがお前に何の得がある」

思いつき踏み込んだ質問をするレウス、海軍の追っ手も間もなく迫ってくるであろうと言う時を見計らってかのような行動はかなり怪しい。パロックワークス崩壊を恨んでいるのならば逆の事をしたり罫を張り自分達を打ち取ると言うことも出来るだろ

うにそれをしていない。腑に落ち無い点が多い、警戒するような視線を送っている。ボン・クレールはサムズアップをしながら、男らしくこう言った。

「麦ちゃんとは友達だからに決まってるじゃない〜!!」

『うおおおおボンちゃああああああん!!!』

「……待ち受けてる海軍を自分達だけじゃ突破出来ないから、とかじゃないのか？俺はそう思ってたんだが」

「そうとも言うわねえ〜ん!!」

『うおおおつ麦わら海賊団の皆さん、我々ボン・クレール様部下共々宜しくお願いします〜』

!!!

「いたのかよっつ
!!!!??」

空の王者、砂漠の国を後にする

「ボン・クレー様ア！海軍の船を発見しました！」

「何隻ぐらいいる!？」

「合計で八隻です!!」

「ジヨウダンじゃなーいわよ〜う?!?!八隻ですつてえ!？」

朝日をかえた砂漠の国、その国を脱出する為に船を進める麦わらの一味とボン・クレーの船。沖へと進められていく船、それらを捕縛や撃沈させると言わんばかりに展開されている海軍の軍艦。その数八隻、四倍の戦力差が四方を囲むように迫っている。この状況にボン・クレーは思わず声を張り上げながら驚いた。海軍がどれだけ友達の事を危険だと思っているのかが良く解る軍艦の配置だ。

今回の事であの一味は指名手配となったのは知っている、僅か三名の賞金首だがその^{トータル}懸賞金額は2億5500万ペリー。大物海賊団と化している。その全員を捕縛する為の数だろうがいい迷惑だ、自分達も無事にこの国を脱出するには突破しなければならぬ。

「囲まれてるぞ?!?!このままじゃやばいぞ!!」

「やっべえ攻撃してくるぞお!!」

「つて何だあれ、槍イ!？」

海軍の船から砲撃音がしこちらへの攻撃がついに開始された。だがその砲撃にサンジが大声で驚きの声を上げた、此方へと迫ってくるのは大砲によつて発射される砲弾ではなく巨大な黒い槍であったのだ。予想外の攻撃に皆が慌てる中甲板から翼を羽ばたかせた竜人が飛び出し数本を弾き、一本受けとめながら船の上へと着地した、獣人化したレウスは肩に槍状に加工されている鉄を担ぎながら軍艦を睨み付けた。

「助かったナイスだぜレウス!!」

「砲弾じゃなくてこんなもん撃てきやがったのか海軍!？」あいつら

「……舐めるなよ、クソ海軍があああっ!!!」

後部甲板へと移動する担いだ槍を思いつき振りかぶるとそのまま全力で海軍の船へと投げ返した。竜の力も加わつて臂力によつて投げられた槍は瞬時に海軍の軍艦へと到達しメインマストとサブマストを貫通して後方の海面へと炸裂し大きな水柱を立てた。

「うっひよおくさつすが!! 一隻の動きが止まったぜ!!」

「フン!! ざまあみさらせ海軍!!」

「やるじゃないリュウちゃあくん!! このままなんとか逃げ切りましょウ!!」

一撃によつて何とか減つた追手、それでも他の船がそれをカバーするかのようには船体を動かしながら巧みに此方に迫つて来る。そして数の多さによる攻撃の速さと多さでこちらを圧倒するかのように槍を打ちこんでくる、レウスが担げる程の太さと大ききの槍を何本も喰らえば船は何れ沈む、それが敵の狙い。次々と打ち込まれてくる槍を皆必死に防いでいる。だがそれでも限界がある。

「しまった一本抜けた！」

「大丈夫甲板だから浸水はしない！でもそこ二人はしつかり防いでよ!!」

「でもナミさん、俺達だつて必死なんだ！それでも一面二人じゃ一、二本は防ぎきれない！」

左側の防御を担当するレウスとサンジだが流石の二人でも複数の軍艦からの槍を全て防ぐには無理があり数本は防御し切れずに船に当たっている。右の守りは共に船に乗っているボン・クレールに加えルフィとゾロが行っているので全て防御出来ているのが大きい、既にメリー号は槍の攻撃で浸水し始めている。防御が出来ているのといないのでは大違い。

「なんとか穴は塞いだよ！でもまたやられたら開いちまうよ!!」

「ああもうなんとかしないと……」

「陣形の一つでも崩ればそこから突破出来るのになあ……!!」

じりじりとこちらが一方的にやられているこの現状にナミは思わず舌打ちをしてしまう。打破したいがそれには軍艦をなんとかしなければならぬ、先程のように槍投げをしてもらうにもそれをさせないようなテンポで打ってくる軍艦。レウスに軍艦を沈めてもらおうにも離れば船は一気に沈んでしまう危険性まである、正に手詰まりな状況。砲撃音が響く、再び皆が構えるがそれはメリー号の後部甲板からだった、それは手詰まりな状況を打ち破るかのように南の軍艦へと直撃する、そして崩れたマストや船体は隣のもう一隻の軍艦へと寄り掛かりそのまま一気に沈めた。

「ウソツプ今のお前か!? すげえな!!」

「……っ。よ、よおおおし俺様の計算通り! 俺に掛ければああだぜ!!」

「鼻ちゃんやるわねえ!! あのまま一気に南を突破するわよ!!」

ジリ貧だったところに齎された千載一遇のチャンスにボン・クレーは飛び上がるほどの喜びを示しながら南へと行こうと宣言した時ボン・クレーの船の見張り台にいた男が大声を張り上げ報告する声を上げた。新たに迫っている軍艦を確認した所、この辺りの海を縄張りとしている海軍本部大佐、黒艦のヒナが迫っていると言う。

「何やってんのアンタ達い逃いいげるのよおう!! あのまま南に行けば被害を最小限して突破出来るのよ!?! なんて船を動かさないの!?!」

「行けねえよ、訳があるんだ」

「訳つて何よ?!命を掛けるほどの財宝でも待つてゐるつていふの?!」
 「仲間を、迎えに行くんだ」

このまま自分達だけでも逃げるといふ雰囲気だったボン・クレールはルフィの言葉を聞いて全身に電流が走った。なんと言った?仲間を、迎えに行く……?仲間の、友達の為に自分達の命までも危ないというのにそれでも進むという覚悟を持つて麦わらの一味にボン・クレールは愕然としながら感動した。誰一人として逃げ出そうとしていない、あの臆病なウソップですら逃げようと言っていない。その心意気に打たれたボン・クレールは早く行きましようかと急かす部下達に向かって大声で叫んだ。

「此処で逃げるは、ボン・クレールに有らず。命を賭けてダチを迎えに、そのまたダチを見捨てておめえ、明日食う飯が旨えかよお!!」

『はっつっつ?!?!?!』

正に漢と言うべき啖呵とその氣迫に部下は皆飲まれながらもその言葉にはつとさせられた。確かにそうだと、この人の言う通りだと思ひ知らされた。

「いいか野郎共、及び麦ちゃんチーム!アチシの言う事、よおく聞きねえい!」

涙ながらに語るボン・クレールの言葉に麦わらの一味は驚かせながらもボン・クレールの意も言わせぬ雰囲気と任せて欲しいという俠氣に任せる事を決めた。一同は船室へと入るとボン・クレールは自分の船へと乗り込み準備を手早く済ませるとメリー号から離れ

一気に南へと進め始めた。

黒檻のヒナは二手に別れる船を見るが離れていくアヒル船は囷だと見切りメリー号のみ、麦わらの一味を狙おうと考えている。だが

「ヒナ嬢！アヒル船に麦わらの一味が乗船しています、囷は羊船の方です!!」

「っ！急いで追いなさい、もう一度陣を敷くのよ!!」

速度で劣る帆船を捨て外輪船パドルシツに乗り換えて一気に逃げるつもりなのか、だがこちらと速度では負けない。大きく回りこむように進路塞ぎそこで一網打尽にしてみせる。遠ざかっている羊船を見捨てて遠ざかろうとしている船へと意識を向ける。流石に外輪船の速度には少々手を焼いたが回りこむには成功し包囲する事に成功した。砲撃準備をさせるが、その時船上へと出てきた麦わらの一味に目を見開いた。

「アンタ達がお探しの麦わらのルフィっていうのはアチシの事かあしらん!? ナッツハハハハ!!」

自分達が麦わらのルフィとその一味だと思っていたのはマネマネの実の能力でルフィへと変装したボン・クレールと変装したその部下達だった。大きく離れてしまった羊船はこの隙を逃すかと言わんばかりに東へと抜けて行く、出し抜かれた事に強く齒軋りしながらボン・クレールを睨み付ける。

「アチシ達は変装のエキスパート、そしてっ……麦ちゃん達の友達!!」

海軍大佐の船の前にしボン・クレールは堂々と胸を張りながら船の上でポーズを取りながら思うは仲間を大切にしている友達の事。人として、尊敬出来る気持ちを胸にして命を賭ける彼らをボン・クレールは尊敬した、人として。

「男の道をそれるとも、女の道をそれるとも、踏み外せぬは人の道」

だからこそ命を張ろうと思える、友達として彼らを助ける。オカマという男でも女でもない自分が進むのは人としての道、そして自分の道。その道は……自分の友達に絶対見捨てない。

「散らば諸友 真の空に咲かせてみせよう オカマ道!!!^{ウエイ} byボン・クレール……」

口上に込められる意思と気迫、それにボン・クレールの部下は涙を流す。恐ろしい人だがとても熱い義侠の心を持ったあの人だから此処まで付いてきた、そしてあの言葉に従ったのだから。涙を流しながらも部下の表情は覚悟を決めた戦士の物へと変わっている。顔を上げたボン・クレールの気迫は般若のよう、その覇気に当てられた海兵達は漸く我に返った。

「掛かってこいや……!!!」

「ボンちゃん……!!!」

遙か遠くで轟く爆音と砲撃音。自分達の囹を買って出たボン・クレール、それらを見つ

めるルフイ達。激しく鳴り響く砲撃音と上がり火柱、次々と上がる火の手と崩れるマス
ト。突き刺さって行く鉄の槍、それらを受けても彼らは抵抗、いや戦い続けている。全
ては自分達の為、崩壊して行く船を、戦い続けているボン・クレーの俠義に皆号泣して
いた。

「俺達、おめえらの事、絶対忘れないからなああつ!!」

深く深く刻まれる漢の姿、そして彼の雄たけびは海に響くかのように轟いた……。皆
はそれを受け止めながら仲間の為に船を進めて行く……。

約束の12時、東の港近辺へと一時的に船の足を止める。猶予はもう無くなった、此
処に居なければビビは海賊にはならないと言う事になるが……姿は見えず町からはビ
ビのスピーチと思われる声が聞こえている。矢張り王女として残り決意をしたのだろ
うとレウスは思った、それが良いのかもしれないと思いつつ寂しさが胸を過っていた。
「な、なあビビじゃないよな?! 似てる声なだけだよなレウス!」

「チョッパ、あれはビビちゃんの声だよ。知ってるだろ、俺達はあの声を何度も聞いて
きたんだから」

「で、でも……」

チョッパは受け入れたくなさそうにレウスに違うと言って欲しそうに言葉を投げ

掛けてしまった、解っている仲間としてずっと旅をしてきたのだからあの声がビビの物だ。でも否定して欲しかった。言い聞かせるような言葉に顔を俯かせた。まだ居ようと渋るルフイを説得しようとサンジが言葉をかけた時、岩場から一人と一匹の鳥が姿を覗かせた。

「皆ア!!」

その声に皆が一斉に後方甲板へとかけ出した、そこからカルーと共に岩場でこちらへと手を振っているビビの姿があった。カルーに乗っている電伝虫を握ると口を開いた。

「私は、この国を愛しています、でもこんな気持ちを抱いた事なんてありませんでした。この心の中でざわめくこの気持ちに、素直になりたいんです。だから、私は……行つてきます!!」

『ビビイツ!!!』

電伝虫から伝わって言葉は国中へと広がりながらメリー号に乗っている皆にも伝わりながら歓喜の感情を浮き彫りにさせながら大声を張り上げた。レウスはしようがない娘だと呆れているつもりだが隠しきれない笑みと嬉しそうに羽ばたいている翼が彼の内情を示した。船を出すように言うと言つて羽ばたいた彼はビビの元へと飛んだ。

「ビビちゃん、全く君つて子は……しようがない子」

「そうさせたのはレウスさんですよ」

「じゃあ、責任を取ろうかな」

笑いかけるレウスに表情に一瞬更に高く鳴り響く心臓の鼓動にビビは息を飲んでしまった。彼女の首に真つ赤に輝く宝石のような鱗が飾られているチョーカーが付けられる、そしてビビの手から電伝虫の受話器を取ると声を張り上げて言った。

『あくあく。こちら麦わら海賊団のレウス・R・リオスだ、たった今ネフェルタリ・ビビ王女は頂戴した！私の口車に簡単に騙され乗っってくれるような素直なお嬢さんに育ててくれた事を心から感謝する』

「えっレ、レウス、さん…?!」

突然何を言い出すのか解らないビビは吃驚しながらレウスの顔を見るが唇に当てられウインクしながら静かに♪という対応にその通りに黙ってしまう。

『たった今彼女の首に私お手製の爆弾型のチョーカーを付けさせて貰った、私の気分一つで彼女の首が噴き飛ぶ代物だ。我々に手を出すのであればどうなるかは保障しないぞ、それでもいいなら手を出して見るがいいさ。それで貴様らの正義が許すのであれば、海軍!!』

そう言い切ると受話器を電伝虫へと戻した。ビビは未だにレウスの行動に仰天しながら慌てている、そんなお姫様の姿に笑いながらカルーに手紙が入ったバックを渡しながら彼に視線を合わせながら呟く。

「カルー、こいつをコブラさん達に渡してくれ。大丈夫、ビビちゃんは俺達がしっかりと守るさ!」

「クエ〜……クエエ、クエエ〜!!!」

「解ってるよ。彼女はしっかりと帰って来るよ、ちよつと誘拐されるだけだからな」

「クエツ!!」

カルーはビシツ!と敬礼をする、ビビを宜しくお願いします!と言わんばかりの敬礼にレウスも思わず敬礼で返した。そしてビビをその腕で抱くと一気に船へと飛んだ。船へと戻るとルフィとウソップ、そしてチョッパーがお前何言ってるんだよ!と殴りかかるような勢いで迫ってきた。

「お前何言ってるんだよ!?!爆弾付けたって正気か!?!」

「おいレウス早くそれ外せよ!?!」

「そうだぞレウスひどい事はやめろ!!」

「ま、待って待ってお前ら本気でこれが爆弾だと思ってるのかよ!?!嘘に決まってるだろ!?!」

「!?!へっ嘘?!?!」

嘘だという事を言われて一気に停止する三人にナミ達が呆れ返ったかのような溜息を漏らした。

「あのねえなんでレウスがあんな事を言ったのか本気で解らないの?一国の王女が自分

から海賊になりたいって言ったら大事件よ？国その物が危うくなっちゃうのよ」

「そう言う事だあほ共、レウスはビビちゃんを誘拐されたっていう事にして連れてきたんだよ」

「「あつそう言う事か！」」

「ああ、レウスさんらしくないと思っただら……」

「おいビビちゃん君もか」

まさかビビまで理解していなかったとは予想外だった、少し考えれば解るような事かと思うが……まあ行きなり言われたから混乱してしまったのだろう。

「でもチョーカーは何の意味があるんだよレウス」

「これならビビちゃんが海賊と同じ行動をとっても脅されたからやったって言い訳がしやすいだろ？これから海軍に見られても海賊に働かされている王女、そして何時か国に戻っても海賊に誘拐されても生きて戻って来たって事になるわけだよ。まあ海賊として更に悪評が付いたけど」

レウスの行動に納得が行ったルフイ達、そして改めてルフイが聞いた。

「ビビはおれ達の仲間、って事で良いんだよな？」

「ああそう言う事」

『やったあああああつ！！！！』

メリー号は進んで行く、アラバスタの王女を連れて新しい冒険を目指して海に行く。一国の王女を仲間として乗せて騒ぎながら嬉しそうに笑う皆、ビビも皆とまた旅が出来て心から嬉しそうな笑みを浮かべていた。始まる宴は改めて仲間となった彼女を歓迎した。

「改めて仲間になったビビに乾杯だああああ！」

『おおおっ!!!』

「皆、これからも宜しくお願いしまあああす!!!」

空の王者、何故か怒られる

「おおおいもう一回乾杯しようぜ!!ビビの事を祝え〜!!」

「おいおいルフイ何回乾杯するんだよ、賛成だけどお!!」

「もうそこまでやられちゃうと恥ずかしくなっちゃいますよルフイさん」

「いいじゃないかビビちゃん、それだけ君が来てくれた事は俺達にとって最高に嬉しいんだからさ」

「よっレウスお前良い事言ったぜ!!ビビちゅわあくん♡俺も最高に嬉しいぜえ♡」

名目上誘拐されたビビの改めて仲間となった事を祝う宴が始まり皆は船上で大騒ぎしながら祝い続ける、短い間だったが紛れも無く仲間だったビビは此処で別れる事も覚悟していた皆にとってはこれほど嬉しい事ない、また旅が出来る。涙が流れるほどに歓喜するに等しい物なのだ。

「にしてもレウスお前も派手な事やらかしたな、これでもお前も高額の賞金首になるんじゃないねえか。一国の王女を誘拐した犯人になったんだからな」

「かもな、もしかしたら初回から5000万を突破したりしてな」

実際は既に7500万ベリーの懸賞金が掛けられているが当人はそれを知る術はま

だない。海軍に知られた竜と言う能力を持った海賊に加えてビビを攫った実績を含めると更に手配額が上乘せされ一気に億越えの首となると言う事も考えられるが、実際に彼が自分の懸賞金を知るのもつと先の話になる。今はただ一人少女を仲間となつた事を祝う事で頭が一杯だ。

「——あら随分賑やかね、私も一杯貰つても宜しいかしら？」

「ああ勿論さ、ほら」

「有難う、ドラゴンさん」

「……あれ、アンタって……？」

背後から聞こえてきた透き通るような綺麗な女の声にレウスは反応するように樽ジョッキを手渡す、がその時点で漸く可笑しい事に気付いた。この船に乗っている女性ナミとビビなだけな筈、その二人は自分の近くにいるがそのどちらでもなかった。浮かれている思考速度が鈍っていたが徐々に正常な思考を取り戻していくと、その女性の正体に気付けた。

「ミ、ミスオールサンデー!!!?」

大声で叫んだビビは思わずレウスの背後に隠れてしまう、無理も無いだろう。パロックワークスに祖国を無茶苦茶にされているし彼女自身ミス・オールサンデーことニコ・ロビンに攻撃されている身。その脅威が身体に染み付いているとしても可笑しくは無

い。レウスも警戒しビビを守れるような態勢になるがゾロやナミも武器を向ける。がロビンへと向けられていた武器はその手から叩き落とされた。

「そう言う物騒な物を私に向けないで欲しいわ」

「悪魔の実……」

「ええ、あいつはハナハナの実の能力者で身体の一部を自在に生やす事が出来るって言うてました」

ロビンの力を完全には知らないレウスへと説明するビビ。地面や相手の身体から腕などを生やし相手を拘束した上での関節技サブミッション、それがロビンの基本的な攻撃。それだけではなく相手の身体の急所を確実に攻撃出来るという特性まで持っている、通常の間では太刀打ちするのはかなり難しい。この船で勝てる見込みがあるのは全身がゴムであるルフィぐらいだろう。

「モンキー・D・ルフィ。貴方、私にした仕打ちを忘れていないわよね？あの時、私にした耐え難い仕打ちを」

「何言ってるんだよ俺は何もしてねえぞ？如何して欲しいんだよ」

「いいえ、やったわよ。簡単、私を仲間に入れて頂戴」

『はあっ!!?』

折りたたみの椅子に座ったロビンはルフィが自分にした仕打ちの償いの為に同じ海

賊団に入れてほしいという要求だった。当然全員が驚きの声を上げる、敵だった者が仲間に入れてほしいとは何を言っているのかと正気を疑うレベルである。

「……一体ルフィに何をされたんだ」

「貴方はあの時、死を望んだ私を生かした。目的を失い、もう生きる価値も無いと思ったのに貴方はそれを邪魔した、それが罪。私には帰る場所も行く宛ても無い。だからこの船に置いて」

ルフィとクロコダイルとの決戦、崩れゆく地下で彼女は死ぬ事を望んだ。だがそれを彼女によって齎されたクロコダイルの毒の中和剤を飲んだルフィがコブラ王共々救った。もう行く宛ても帰る所も無いのにそれを救ったのだから居場所を作ってほしいというのがロビンの要求だった。勿論ルフィの答えは拒否に決まって——

「なんだそうか、そりやしょうがないな。いいぞ」

『ルフィイイツ!!?』

「心配すんな、こいつ自体は悪い奴じゃねえんだ」

——いなかった。まさかの肯定に最も険しい顔をしているのがビビだった。自分の国を乗っ取ろうとしていたクロコダイルの右腕としてバロツクワークスで暗躍してきたとはいえないガラムの船を爆破したのは彼女だ、がクロコダイルを打ち取りアラバスタ乗っ取りを阻止してくれた大恩人でもあるルフィの命を救ってくれたという事

実が彼女に押し掛かった。

「ミス・オールサンデー……いえ、ニコ、ロビン……」

「あら何かしら、王女ビビ様？」

近づいていくビビに皆は警戒するような声を上げる、ビビの心情を考えるとこのまま襲いかかるのではないかと心配になっているからだ。確かにこの女のしたとした事は許せない、だけどそれはもう仲間達が解決してくれた事。今幾ら此処で文句を言ったとしてもアラバスタが救われたと言う事実は変わらない、そして船長であるルフィが決めた事、自分は既にこの海賊船の一員なのだからその決定には従うのが道理。故に今するべきなのは……。

「私は正直貴方の事を許せないかもしれない、貴方は国を狂わせた奴の右腕」

「そうね、それで如何するのかしら」

「でもその国はルフィさん達が救ってくれた、だから私は貴方に何もしない。だってルフィさんがそう決めちゃったんだからね」

肩を竦めながら船長の決定に従うの意図を見せる、そして最後には笑顔を浮かべながら手を差し伸べた。

「私と同じくこの船の一員で同じ海賊、だから何て言うのかな。0から宜しく」

「……意外な言葉ね、貴方からそんな言葉が出てくるなんて」

「だってルフィさんだもん、しょうがないわ」

「ニシシシ」

「ウフ、そうみたいね。それじゃあよろしくねお姫様」

差し伸べられた手を握り返したロビンと笑顔を向けるビビを見て皆は一先ずは胸を撫で下ろし安心した、兎も角大問題への進展が無くて良かったと言う所だろうか。ビビがそう言うならばと徐々に皆はロビンに話しかけたりこれから楽しく行こうと話しかけたりしているが流石にゾロはまだ警戒心を抱いているのか距離を置いている。

「やっぱりサンジさんのご飯は美味しいですね、しかもアラバスタ料理のアレンジなんて最高でした」

「そうよね、サンジ君がうちのコックで本当に良かったわ」

日も傾き夕食も終えた麦わら海賊団、サンジの料理に舌鼓をしたビビとナミは甲板に出て夜空の星空を眺めていた。アラバスタに至る旅の途中に何度も目にしてきた海の上から見る星空を見上げるビビは改めて皆と一緒に旅に出てるんだなあという実感を味わいながら不意に見張り台にて周囲警戒を行っているレウスが目に入ると思わず笑顔になってしまった、自分には笑顔でいてほしいと言う彼の言葉を守ろうと無意識に思っているのかも知れない。そんな笑顔のビビに気付いたナミはそんなに旅が出来る

嬉しいのかと思わず聞いてみた。

「そんなに嬉しい、私達と来れて」

「えっ? ええっ勿論。でもそれだけじゃないんです、レウスさんに言われたんです。笑顔で居てほしいって」

「レウスに?」

「ええ、お礼は如何したらいいのかって言ったたら笑顔で居てほしいって、それも出来れば傍でって」

「へ、へえ〜……そんな事を言われたんだ……」

まるで口説くような言葉にナミは顔を強張らせ口角を痙攣しているかのようにヒクつかせた、まさかそんな事を言っていたなんて……つと小声で呟いたのをビビはしっかりと耳にした。そして僅かに生まれた悪戯心に従って少し悪い顔をした。

「今思うとあれって口説き文句みたいだったな〜……もしかして、脈有りって思ってた良いのかな〜……?」

「っ?!? な、何言ってるのよビビ!?! レウスがまさかそんな……!!? 私にも言ってる事なんて……!!?」

「フッフツやっぱりね。ナミさんもレウスさんの事、好きなんですよ?」

悪戯が成功した子供のような笑顔を浮かべたビビは顔を真っ赤にしながら慌ててい

るナミを見た、ナミは更に顔を赤くして軽いパニックになってしまっている。笑っているビビを見つめると少し冷静になったのか自分も、という言葉から何かを察した。

「ビ、ビビまさかアンタ……?」

「ええ。私好きです、レウスさんの事」

「え、ええええっ!?!」

「ナミさん、仲間ですけど私達はライブルですね。負ける気、ないですから♪」

そう言っ歩いていくビビにナミは慌てて何処かウキウキしている背中を追いかけた。

「えちよま、待ってよビビあんた本気なの?!」

「本気も本気です♪ボヤボヤしてると、頂いちゃいます♡」

「えええええっ!?!?!」

「おーいビビちゃんにナミちゃん、何騒いでるんだい?」

「何でもありませんよレウスさん、私もそこに行つて良いですか?」

「いいよ」

「レ、レウスウウウウツツ!?!」

「うわあああなんでナミちゃん激怒してんのおおおおおおお!!!?!!」

「あらあら」

!!!?!!

見張り台へと登っていくビビとそれを追いつけながら怒っているナミ、そしてそんなナミに脅えているレウスを見ながらコーヒートを啜っているロピンは思わず笑いがこみ上げてきた。これは予想以上に面白い船に乗ったのかもしれない。

「楽しい航海になりそうね♪」

空の王者、サルと会う

アラバスタを出航して既に数日が経過していた、誘拐されたビビの影響もあつてか海軍の追手も無くのんびりとした船旅を送るメリー号。本日も良い陽気となっている天気の下を元気を進む麦わらの船、新しく仲間になったロビンもある程度は馴染み始めているのか甲板で椅子に座りながら本を読んでいる。ビビはレウスと何やら船首付近の甲板で話し合っている。

「そうなんだよ、だから新しく武器を作つて貰おうかつてウソップに相談してるんだよ」
「でも武器なんか無くても十分にレウスさん強いですよ?」

「ありがとう、でもこれでも元々は棒術が得意なんだよ。それに守りたい仲間が居るからね」

「それって私ですかそれとも……?」

「フフフツ想像にお任せするよ」

頭をポンポンと優しく撫でて見張り台へと向かうレウスを追いかけるように教えてくださいと後が続いていくビビをマスト近くで見てしまったナミは何処かもやもやとする不愉快な気分になりながら記録指針を確認しながら進路を確かめる、偉大なる

航路を航海する上で重要な立場を預かつてる身としての責任を果たしながら船は順調に進んで行く、がそんな時であった。快晴であった空から何かがぱらぱらと降ってきた。

「雨……じゃないな？」

「霰か？」

「違うな、何かが降って——」

『ええっ!!?』

降ってきた何かに釣られるように空へと視線を向けて見た時、全員が呆気に取られ驚愕した。降ってきたのは雨でも霰でもなかった、降ってきているのは木片。そしてメリー号の何倍もある巨大ガレオン船が海へと落下してきていた。ガレオン船はメリー号の近くの海面へと叩き付けられるかのように落下し巨大な波を生み出しながら着水した。それによって生まれた流れに飲まれるように大きく揺られるメリー号、レウスは大きく揺れる船の上で竜頭をマストに噛み付かせるようにして身体を固定しながらビビを抱きながらマストへとしがみ付く。

「しっかり船にしがみ付け!!投げ出されるぞお!!」

「うおおおっ…!!?ビビちゃんしっかり掴まってろ!!」

「はっはい!!」

「まだ何か降ってくるぞお!」

「いやあああああ骸骨ウ!!」

「馬鹿投げないでよこっちにいい!!」

激しく荒れる波が収まった頃、周囲にはガレオン船やその破片や様々なものが浮かんでいた。余りにも唐突にやってきた異常に驚きながらも改めて空を見上げて見るが何かあるようには全く見えない。通常の海の常識が全く通用しない偉大なる航路ではこのような事も起きるのかともう一体何が常識なのか解らなくなって来そうな気分だ、そんな時ナミが悲鳴染みた声を上げた。

「如何しよう記録指針が壊れちゃった!上を向いたまま動かない!」

この海での航路で最も大切ともいえる記録指針が壊れたと慌てるナミ、実際記録指針の故障は致命的な問題。方角、天候、気流、海流、あらゆる常識が通用しないこの海では記録指針が導く進路こそが信用出来る唯一の道標だと言うのにそれが壊れたということはまともな航海が出来なくなったと言う事に等しい。だがそれは違うとロビンがナミを嗜めた。

「より強い磁力によって記録ロクが書き換えられたのよ航海士さん」

「ええっ!?より、強い磁力に……?」

「上に向いた記録指針を見ると、空島に記録を奪われたと言う事になるわね」

『空島ア!?』

ロビンの発言に皆が仰天した、ナミは記録指針が壊れてるのでは無いかというがロビンはそれを疑うべきでは無くまずは頭の中の常識を疑い記録指針は絶対に信じなければならぬと告げる。

「空に浮いているのよ、海が。そしてそこに島があるのよ」

「空に海が浮いてて島があるのか!？」

「よし直ぐ行こうぜ船長!」

「おう決まってるだろウソップ!!」

「野郎共、上舵いっばいだあ!!」

「どうやればその舵は出来んだよ」

と真つ当なツツコミをサンジが入れると二人は暫し顔を見合わせた後レウスへと顔を向けた。

「……おいまさか俺が船抱えて飛んで行けって言うのか」

「おう!!」

「出来るかあ!! 一体どんだけの高さにあるのかも解らない所になんぞ行けるかあ!!」

と拒否されると二人はシヨンボリしつつも浮かんでいるポロポロなガレオン船へと視線を向けるとキラキラと目を輝かせて探検してくる!とその船へと乗り込んでいっ

てしまった。ロビンは船へと降ってきた棺桶をあげそこにあった骸骨を復元し情報を引き出した。

骸骨から得られた情報は骸骨となった人間は200年前に病に倒れた30代前半男の物、歯が確り残っている事からそれはサウスブルーの一部地域にてタールが塗りこまれる風習があるからと断定。そこから情報を繋ぎ合わせ船は2008年前に出航した探検隊の船だと言う事が発覚した。最低でも200年余り、その船は空を彷徨っていた事が明らかとなった。

「凄い骨ってそんなに解っちゃうんだ……ミス・オールサンデーじゃなくてロビン?」

「骨は喋る事は無いけど情報は持っているのよ、栄養状態や当時の状況も読み取れるの。探検隊の船なら情報や記録もあるはずだけど」

「確かに、でも船は沈んで……ってあんた達何やってんのよお!!」

振ってきた船の方へと目をやって見るとそこにあつた筈の船は塔に海底へと沈んで行ったのか既に船の一部しか浮かんでおらず、しかも船へと探検に行ったルフィとウソップが溺れ掛けている光景だった。大急ぎでレウスが二人を引き上げ甲板へと連れて帰った。

「おい、皆ア!! やつたぞ、凄いもん手に入れたぞ!! これを見る!!」

ずぶ濡れになりながらもポケットに入れていた何かをルフィは皆に見えるように広

げた、そこにあつたのは〈SKYPIEA〉と名が書かれまるで雲のような描かれた海の上に浮かんでいる島の地図であつた。名前からも、地図の見た目からも読み取れるかのようにそれは空島の地図だと思えるような一品だつた。

「スカイピア……つてレウスさんこの地図つてまさか本当に……!?!」

「こりやルフィマジでお手柄か?」

「待ちなさいよ、落ち着きなさいよ。あくまで可能性が高まつただけよ、偽物の地図なんて世の中幾らでもあるんだから」

「ナ、ナミさんちよちよつと……」

現実的な意見を述べるナミだがビビは思わずもう少し言い方を考えてと伝えながら後ろを見るように促す、そこには空島はあるから行けると喜び勇んでいたルフィウソツプチョップパーが絶望に打ちひしがれているような表情で落ち込んでいた。大慌てでそれを訂正しあるのだろうかが行き方が解らないと言い換えた。

「行き方が解らないって言ってるのよ!!」

「レウスに連れて行って貰えばいいじゃねえか!!」

「だから場所が解らないって言ってるんでしょうが!!」

「航海士だろ何とかしろよ!!」

「何とかなるもんとならないもんがあんの世の中!!」

「知るか！空に行くんだあ!!」

平行線な船長と航海士の言い合いはナミの怒りの一撃によってルフィが物理的に黙らされた。だが現状として必要となってくるのは情報、これ一択である。巨大なガレオン船が行けたのだからこの船とて行く方法はきつとあるとナミは言うがまずはあの船にある筈の情報なんとしても引き出す必要がある。

「だけどナミちゃん、船は既に沈んでるんだぜ?」

「沈んだんならサルベージよ!!」

「マジか……!?!」

沈没船の引き揚げ作業を指し示すサルベージ、だがあれだけ巨大な船をメリー号でサルベージを行うのは不可能。なのでウソップ特製の樽型潜水服を纏ったルフィ、ゾロ、サンジの三名を海底へと派遣し情報のみをサルベージする事となった。

「ルフィさん達気を付けてね……?」

「ビビちゅわん俺の事を心配してくれるんだね♡その言葉だけでもう千人力だよ♡ん」

「よぉし降ろしていいぞ」

「つたく面倒だな」

ホースと繋がった潜水服を纏った三人が海へと降ろされて行く、潜水服には問題ない

のかどんどん不覚へと三人は潜つて行くがビビはどうにも不安そうに海面を見下ろしている。が直ぐにあの三人ならきつと大丈夫、と信じる姿勢へと変わった。そんな三人が海へと潜つて行く中遠くからこちらへと迫つてくる学期と笛の音が聞こえてきた。周囲を見回して見ると船首にサルがついたガレオン船にも負けず劣らずの巨大な船が此方へと迫つて来ていた。

「全体とまれっ!!」

『アイアイサゝ園長!!』

笛の音と共に響く男の声、それに合わせて静止する船はメリー号を見下ろすかのよう。そして姿を表したのはサルのような風貌をした大男であった。

「引き上げ準備!!沈んだ船はこの俺、サルベージ王マシラ様のモンだウキツキー!」

『ウキツキー!!』

「なんかまたキヤラ濃いのが来たなおい」

船員もなんだか何処かサルっぽい、というか船も船首にサルがある上にバナナのような物まで船に付けられている。サルによるサルの為の船にしか見えなくなってきた、しかしその船の船長らしきマシラがメリー号を見るとその船員であるレウス達に鋭い視線を向けてくる。

「おいお前から()で何をしている?()はおれの縄張りだ、この辺りに沈んだ船は全て

俺の物だ！」

「サルベージするみたいねあの人達」

「ならこれってチャンスじゃない……？レウス、交渉お願い出来る？」

「おう」

「ゴチャゴチャ言つてんじゃね〜！俺の質問に答えろ！」

名乗りからしてサルベージを専門している連中だと判断したロビンとナミはこのまま彼らにサルベージをやらせれば順調に情報を引き出せるのではないかと思いつく、此処は上手い話を付けられれば良い展開に出来るのではないかとナミは考えレウスに交渉を任せる。

「すまない、ここは貴方の縄張りなのか？」

「おうその通りだ！」

「申し訳無い。我々は先程降つて来た船のせいでパニックを起こしてしまつて一時的に船を止めていたんだ、それで貴方達はかなりサルベージ技術を持つているとお見受けする。私達はサルベージと言う物に縁が無い、出来れば見学をさせて貰えないだろうか？」

「おおつ良く解るじゃねえかウキッキ〜♪良いだろう良いだろうそんなに見たければ俺達の見事なサルベージを見せてやろうじゃねえか、良いだろう好きなだけ見学して行け



上手い事相手を乗せる事に成功したレウスは話を取り付ける事に成功した、だがこの時レウス達は失念していた。潜りに行かせたルフイ達が何もせずにいる訳が無いということを。

空の王者、怪物を見る

「ボス大変です!!海底へ揺り籠を仕掛けに行ったクルーが怪我をつ!!」

「何!?直ぐに手当てだ、怪我の具合は如何だ?!海王類にやられたのか!?!」

サルベージ王と呼ばれているらしいマシラ海賊団園長^{ボス}マシラ、彼はルフィ達が情報入手の為に潜っていた船をサルベージすると言うのでそれを見学させて貰い隙を見つけた情報をいただこうと思案しその許可を取り付けた時、彼の船にクルーと思われる男達が引き上げられた。マシラは医療班に指示を出しつつ部下の身を案じている。かなり部下思いの船長のようなだ。

「い、いえ殴られたような痕があります」

「何だとお海底に誰か居るって事か!?!」

「あ、あいつらあ……」

思わずナミが何てことをと声を漏らしてしまった、そうだった潜っているのはこの麦わら海賊団の中でも好戦的な男だけで構成されたメンバーだった。何者かが迫ってきたのであれば撃退しようと思案を加えるに決まっている、それをすっかり忘れていた。このままでは自分たちがその犯人の仲間だとバレてしまう何とかしなければと思つて

いる、マシラが鋭い目を此方へと向けながら大声を張り上げる。

「おいおめえらっ!!」

「は、っはいえつとその……」

「俺の自分が何者かにやられた!おめえらもしっかり警戒しとけ!」

「は、は〜い(馬鹿で良かった……)」

人が良いと言うかなんと言うか、此方を心配し注意するような言葉を掛けるマシラに安心してビビも胸を撫で下ろした。怪我をした部下を船内へと運んでいくと準備を進める為にマシラは部下を招集した。

「おめえら、今回は見学者つつうギャラリーがいるけど緊張することはねえぞ。普段通りにやれば良い、落ち着いて、ウツキツキ……き、緊張することねえぞおめえらあ♪」
『アイアイサー♪』

緊張する事は無いと言いつつも声色は何処か嬉しそうにしながら硬い、なんだかんだで彼らも嬉しいのかもしれない。あそこまでサルベージ技術に自信を持っているのだから誰かに見せ付けたいと言う気持ちもあったのだろう、そして今こうして見られていると言う事を実感するといやおうにも緊張しているようだ。解らなくも無いが……一度深呼吸をするとマシラ海賊団はサルベージ作業へと取り掛かった。

「揺り籠沈降!謎の敵に注意、発見した場合は攻撃を許可する!」

『アイアイサー!』

船の各所に設置されているクレーンが稼動して行き海中へとホースのように見えるロープを投下して行く、こちらと同じように酸素を確保する為のホースを降ろしているが規模とスピードが段違いだ。加えてこちらの樽を改造して作った物とは全く違う鉄で拵えている潜水服を着たマシラの部下が次々と潜って行く。本職の腕前を見せてやると言わんばかりの迫力と気合を見せ付けている。

「レウスさん、あれって何を降ろしてるんでしよう……? 私サルベージって本当に知らなくて」

「多分船に打ちこんで引き上げる為のアンカーじゃないかな、サルベージ自体にも船その物を引き上げる物と船を分解しながら引き上げるやり方がある」

へつくと砂漠の国出身のビビは素直に沈没船のサルベージ作業と言う物に興味津々だった、恐らくバレないかと心配そうしているウソップやナミ達に比べても純粋にサルベージ作業の見学をしている。そんな熱心なギャラリーの影響もあつてかマシラ海賊団は気分良さそうにしながら作業を行っている。

「あれ、あのすいませんマシラさん。その船首のお猿さんは何なんですか?」

「おおこれか? ウツキツキ、お嬢さん良い着眼点してるじゃねえか。そうこれは唯の船首じゃねえんだぜ?」

「じゃあ一体何なんです?」

「ウツキツキ、まあ見てな。時期に解るぜ」

ビビの質問にも快く答えるマシラは聞いて欲しかった部分を聞いて貰えたのか更にご満悦になりながら回答する。素直に待つ事にしたビビにウソツプとナミからナイスアシスト!と言われるが当人は意味が解らなそうにしている、どうやらルフィの声がホースと繋げたスピーカーから聞こえたらしくそれを聞かれないようにフオローしたと勘違いされたようだ。

「いお〜し発進だあつ〜バルゴ船体ハンター!!」

『アイアイサー!!』

その指示の元船首付近にあったクレーンが作動して行く、すると船首の猿へと伸びていたロープを救うようにしながら前進して行く。猿もそれに引つ張られるように進んで行き投下してたロープに合わせるかのように海中へと沈められていく。純粹にギミックとして面白さを感じたのはウソツプ、チョツパー、ビビは凄いという声を上げる。生憎ナミは解らないようだが。船体ハンターという猿は投下した揺り籠と言うアンカーと接続されるとマシラはホースをその手にしながら吹き込み行くぞ!と意気込みながら思いつきり息を吸い始めた。

「ま、まさか空気を自分で吹き込んで船を!」

「そんな事が出来るってどう言う肺活量してんのよ?!

「肺活量ならこの世の人間じゃ誰にもまけねえ自信があるぜ俺は!! (すううううううう……)」

「よく吸つてる時に答えたなおい」

十二分に息を吸い終わつたマシラはそのまま一気にホースへと息を吹き込んで行く、その空気量は半端ではないのか見て解る程にホースは膨らみ海へと降りていく。肺活量の事もあながち間違つていないかもしれない、そして船体が浮いたのか続けてポンプで空気を送り込んでいく船から突然悲鳴が響いてきた。マシラは仰天しながら思わずスピーカーではなく海に向かって叫ぶ。

「何があつた子分共?!

『ふ、船の中に何者かが、ぎゃあああああ!!!』

「うおおおおお!!! 何処の馬の骨だ俺様の可愛い子分をお!! お前たちは作業を続ける、俺は行く!!」

『アイアイサー!!』

仲間の事を大切に思いその身を案じるマシラは作業を部下に任せ自分は勢い良く水中へとそのまま飛び込んで行つた。あの肺活量なら間違い無く普通に深々と沈んでいくであろう船にも容易く到達出来るだろう……が、此処で海上であろう筈の船が大きく

揺れると言う事が起きた。加えて海中には余りにも巨大な影が見えていた。

「な、なんか見えてませんか……?」

「見えてるな」

「見えてるわけ」

「なんでそこ二人は冷静なの!?!」

「海王類とかで耐性は付いてるわ」

「アラバスタで竜とか戦ったから」

と冷静なロビンとレウスを他所にその影は遂に海上へと浮上した。海王類と比類無いレベルの超巨大な亀、まるで大陸に見間違ってしまふかのような凄まじい大きさの亀に思わずナミ達は現実逃避してしまっているがロビンが船が食べられた事と給気ホースが亀の口へと続いている事で決定的だと言ってしまったのでの一斉に現実へと引き戻された。

「レレレレレレウスさん如何しましょう!?!ルフィさん達食べられちゃいましたよ!?!」

「……。如何しようか、少なくともあいつらが食われた程度で死ぬとは思えないけど

……」

「レウスお前ドラゴンになれるんだから何とかしろよお!?!」

「無茶言うなよ、下手に攻撃してこつちに気を引いたら食われるぞこつちも。それでも

良いのか？」

「やっぱり止めてください!!」

などと言っている間に亀は少しずつだが海中へと戻ろうとしているか沈み始めている、ホースで繋がっているこの船もマシラのビクトリー・ハンター号も海中へと引きずりこまれようとしている。ナミは迷う事無くホースを断ち切る事を指示した、それによつてウソツプとチョツパーから悪魔か!?!と叫ばれるがまずは身の安全を確保するのが当然と主張する。

がその時——周囲の明るさが消え去り夜の闇に引きずり込まれたかのように昼だった空は一気に暗くなった。一瞬の内に夜へと変化した空に驚きパニックを起こす一同。がそんな時に海中からルフィが跳ね上がるかのように甲板へと上がり続いてゾロとサンジが上がってきた。

「ふ、船を出せここから離れるぞ……!!」

「やべえぞあいつは……海獣の一種みたいな猿が……」

「ルフィと楽しく話してたと思つたら、暴れだし始めやがったんだ……!!」

「暴れることゴリラの如しだ!!」

どうやら潜つて行つたマシラと遭遇したゾロとサンジは目の前に現れた海獣の一種であろう猿の凶暴性を語り続ける、目の前でどれだけマシラが暴れたのだろうか。加え

て沈没船の中と言う悪条件も加わりまともに応戦出来なかったようだ。そして漸く亀に気付いた二人も加わって船を動かそうとした時船の上へと現れたマシラは此方を敵視しながら腕に力を込め始めている。

「おれのナワバリで財宝盗んで逃げきれると思うなよ、てめえら容赦しねえぞ……!!!」

「財宝!?!財宝があつたの!?!」

「ああいつぱいあつたぞ♪」

「つてナミさんそんな事言ってる場合じゃ!?!」

「ビビちゃん、ナミちゃんにんな事言っても無駄だ。一国の王女の値段が云々つて本人の目の前でいう人間だぞ」

「……そうでした」

目の前の男は財宝を奪つたのならば容赦しないと云っているのに財宝があつたかなど聞いたら余計に起こらせて襲ってくるに決まっていると航海士^{ナミ}にいうが好意を寄せた男の言葉で即座に彼女の人間性を思い出し直ぐに黙った。兎も角戦う準備をしようとして武器を取り出すビビだがマシラは震え声をあげている部下の方を見た。

「園長、あ、あれえ……!!!」

「如何した?!」

その声と指先を見た瞬間、今いる世界が現実なのかどうかと言う事を全員が疑った。

明るい昼間が夜になったと言う事象が既に起きている状況に畳み掛けるかのような出来事に全員が心の奥底から驚愕し言葉を失ってしまった。それは余りにも突然現れながら頭の中では絶対にはありえないと否定した上で異常さを理解するしかなかった。真つ暗な夜にも等しい空の中に浮かび上がっている生き物の姿のような物、突然現れたのも実に不可解なのに異常なのがその大きさ。リトルガーデンにて出会った巨人族のドリートとプロギーの百倍以上もありそうな巨大とその身体に見合うかのような槍のよ
うな武器、震える身体と恐怖を訴えかける本能が導き出すことは

『怪物だあああああつ!!』

その場から一刻も早く逃げ出す事だった、余りの出来事に何も考えられずに出されたオールを全員が命一杯漕いだ。レウスでさえ竜化するという考えすら出てこずにオールを必死に動かし続けた、必死に腕を動かし漸く光が見え元の昼の空に戻った所で巨大な怪物の姿も見えなくなり全員が床に座りこみ溜息を吐いた。

「……全く偉大なる航路ってのは次から次へと不思議のオンパレードだな……」

「全くだ……今日だって」

「巨大ガレオン船が降って来たと思っただら……」

「記録指針を空に奪われて……」

「妙な猿が出てきて……」

「それでサルベージを始めて」

「船ごとを食っちゃう亀が出てきて」

「夜が来て……」

「最後は巨人族の何百倍もある大怪物!!」

「あれには流石に参ったねどうも……」

思わずその言葉に同意しボーっとしているが漸く気付いた、何故かこの船にマシラが乗り続けている事に。そしてルフイ、ゾロ、サンジ、レウスは4人揃ってマシラを囲うと

「!!」出でいけええええつ!!!」!!」!!」!!」

「ああああああああああああつ!!!」!!」!!」!!」

空の彼方へとマシラを蹴り飛ばした。

空の王者、猿山連合と遭遇する

「おおっ!!こりやいいぜメリーの破損箇所がどんどん補修出来る!!おいレウス、もういっそのこと尻尾一本くれねえか?」

「おい、また確り生えて来る保証ねえんだぞ」

「痛いから嫌とかじゃないんですかそこは」

サルベージから帰還したルフィ達、3人が持ち帰ってきたのは確かに財宝自体はある程度はあったが当初の目的であった空島に関する情報は全く無かった。ゾロ達曰く船内は何者かによつて既に荒らされており情報の欠片すらなかった。故にルフィが持ち帰ったスカイピアという名称が掛かれた地図のみが空島の情報となつてしまった。

手掛かりも無くなり途方に暮れるナミを救つたのはロビンがマシラ達から失敬した〈ジャヤ〉という島のエターナルポースであった。マシラ自身がこの辺りを縄張りとしていると言つていた為拠点としてゐる島だと判断したが行く宛も無い為その島で情報収集をする事となつた。到着した島は荒くれ者共が集う島、そこら中に海賊船が停泊してゐる無法者の島。意気揚々と降りていくルフィとゾロを追つてナミが上陸し情報収集を担当する事となり残りのメンバーは居残りをする事となりレウスはウソツプの船の

修繕の手伝いをチョップパーやビビと共にする事となった。

「ちよつと打ち付けるのにコツ居るけどこれは木材よりも良い素材だぜ」

「良かったウソツプ！これでメリーを直せて！」

「おうレウスもつと鱗とか頼むぜ！」

「はいはい……」

以前ワポルに食べられ簡単に修繕しただけの所へ打ちこまれていくレウスの鱗や甲殻、その甲殻をフレームにしながら木材と鱗を組み合わせて補修して行く。素材としてはかなり上等なりオレウスの鱗や甲殻を船の補修に使用する、ハンターが聞いたらかなり贅沢な使い方だと言われるかもしれない勢いで使っている。

「それにしても、メリー号も結構傷ついちゃってますねウソツプさん」

「ああ。だから確り守ってやらねえとな……大切な仲間だからな」

「俺も守るぞウソツプ！俺もメリー大好きだからな！」

「良くぞ言ったチョップパー！良し板！」

「へいっ!!」

元気に修理のお手伝いをするチョップパーはウソツプの声と共に釘や板を差し出して行く。ビビは備品の補充、レウスは素材提供と見事に役割が出来ている。

「この先も旅は続きますし、船大工を仲間にする事も考えた方が良いでしょうかね」

「船大工か……そりや良いな！俺なんかよりも船の修理が上手い奴がいたら心強いぜ！」

「ウソツプより直すの上手い奴いるのか？」

「そりや居るよチョツパー、ウソツプだつて手先が器用だけど狙撃手なんだから」

次に加えたい仲間の目星が決まりルフィ達に今度相談してみようと話しているトルフィ達が帰ってきた、がルフィとゾロは全身に怪我を負い血まで流していた。傍を歩いているナミには怪我は無いようだが酷く不機嫌そうだ。

「お、おいルフィにゾロ一体如何した何があつたんだあ!？」

「ど、如何したんですかその怪我!?!、急いで手当てしないと!!私治療道具持つてきます！」

「い、医者あああつ!!?!」

「いやチョツパーお前が見ろよ」

「ああそうか俺医者だ!!」

名医なのだが天然なせいかこういつた時慌てる我らが船医。もう少し落ち着いて頂きたい物だ。どうやら海賊に絡まれただけらしいルフィとゾロの治療を開始した所二人とも見た目は派手だが怪我的には大した事は無い物ばかりなそうさ、二人の回復力なら直ぐに治ると断言したが、ある意味一番重傷な患者はチョツパーでも治療出来なかつ

た。

「何よあんな奴ら!!男なら喧嘩全部買ってぶっ飛ばしちゃえばいいのよ!!いいえこんな町いつその事焼き払ってやるう!!」

「ナ、ナミさん落ちて着いてください!!?流石にそれは拙いですって!!?」

「なんでナミちゃんが一番荒れてんの?」

「さあ?」

「レウスウ!!アンタちよつと変身してこの町焼き尽くして来なさいよ!!」

「いやなんでだよ、落ち着きなよナミちゃん……」

訳を聞くと空島に関する情報を収集しようとしたところ酒場では大笑いされ自分たちの海賊のあり方さえも馬鹿にされた、相手は懸賞金5500万のベラミーと言う海賊だった。ナミはやり返せば良いと言ったのにルフィとゾロは全く相手にせず一方的にやられ続けたと言う。

「ねえ腹立つでしょ!!?」

「確かにね、でもどうせ取るに足らない雑魚の言葉なんてさ」

「ナミさん言わせたい人には言わせて置けばいいのよ、それに夢を追い求める心は必要よ。だって私がそうなんでもん」

ナミは何所か収まりきらないが僅かに怒りを納めた、夢を求めて何が悪い。人には人

の考え方がある、自分の事を否定する奴の言葉など無視し続ければ良い。そんな奴らは殴るのも斬るのにも値しない、ルフイとゾロはそのベラミーと言う海賊を既に格下、攻撃する価値すらない海賊として捉えていると教えられると溜息を付きながら気にしない事にしようと結論付けた。

「随分賑やかだったけど、何かあったのかしら航海士さん？」

「ロビン、あんた面白い物に行ってたの？」

「ええ。服と情報ね、それとはい船長さん」

「おっ地図か？」

ロビンが手渡したのはこの島、ジャヤの地図。今いる町、モックタウンの対岸には×印が記されている地点が合った。

「そこにはジャヤのはみ出し物があるらしいわ、夢を語り町を追い出された男。名前はモンブラン・クリケット、話が合うんじゃないかしら？」

「ふーん……まあこの町で情報収集するよりもマシかもね……よし皆行くわよ!!」
「よしし出航だあつ〜!!」

モックタウンを出航し東へと進路を取る、島をぐるりと回っていくように船を進めて行く何処か見覚えがあるような船が姿を現した。マシラのピクトリー・ハンター号に良く似た作りと大きさの巨大帆船がゆく手を遮るように姿を現し、そこからマシラと同じ

ように人間とは思えぬような風貌、サルのような大男が姿を見せた。

「オウオウ、兄ちゃん兄ちゃん何処行こうってんだ？ここの海は俺たちの縄張りなんだぜ」

「縄張り？なんかマシラみたいな事言っただけかあいつ？」

ウソツプが思わずそう呟いた、確かにサルベージ王マシラもここの海は縄張りだと述べていた。同じ海を縄張りにして居る別々の海賊団、同盟でも組んでいると言う事なのかと思つてると大男ことシヨウジョウがそれに気付きこちらに向かつて声を出す。

「何だおめえら兄弟と会つてるのか」

「(レウスお願いね！ルフィ余計な事言つたらご飯抜きよ!!)」

「(なにいい！わ、解つた黙つてる！)」

「(この手に限るわ)」

「あははは……あ、ああ。サルベージをする所を見学させて貰つた身だ、見事な物と感心したよ」

「ウオツホホホ、そりやそうだ。兄弟のサルベージはすつげえからな、俺もハラハラするぜ」

シヨウジョウはマシラの事を褒められると我が身の事とのように嬉しそうに笑つた。

「あいつは俺と兄弟でな、共にこの辺りを縄張りにしてる猿山連合だ。んでおめえらこ

の島を出て行くのか？」

「いやこの先にいるモンブラン・クリケットと言う方に会いに行くんだ」

「何、おやつさんに？おやつさんに何のようだ？」

この先にいるというはみ出し物の名前を出すとシヨウジョウを始めとした部下たち全員が反応した、しかもおやつさんとその男を呼んでいる辺りなにやら関係性があるのではないかとビビは思い慎重に交渉しようとレウスに言う。

「実は俺たちは空島へと行きたいんだ。記録指針が空に奪われてしまつてな、それでそのモンブラン・クリケットさんに話を聞きたいんだ」

「何空島……？ウオツホホ面白い事言う兄ちゃんじゃねえか！良いだろう連れてつてやろうじゃねえか！」

「えっ良いのか？」

「勿論だ。一瞬断られるんじゃないかとハラハラしたぜ。そんな夢を追い求める奴を放つてはいけねえな、さあ野郎共おやつさんの元へ船をだせえく!!」

『へい園長!!』

三度交渉に成功しレウスはナミとハイタッチをする。これで少しでも空島へ手掛かりを得れば良いのだが……。

そう思いながら船を進めるメリー号を他所に、世界中の各地にニューズを運ぶニュー

ス・クーが近場を通り過ぎて行った。その鳥が抱えるニユースの中には手配書も存在し、その中に、今話題の海賊たちの現状が示されていた。そして……間もなく麦わら海賊団は自分達が置かれている現実を知る事になる。

空の王者、空島への可能性を見出す

「さあ着いたぞおめえら、ここがおやつさんの家だ！」

この辺りの海を縄張りとしている海賊、猿山連合のシヨウジョウに案内されジャヤの東にあるモンブラン・クリケツトと言う男の家へと向かう二隻の船。巨大な船に従いつつ海を進んで行くとシヨウジョウが目的地が見えたと言った。前方へと目を向けて見るとそこには凄まじい大きさの大宮殿が姿を現した、そのモンブラン・クリケツトは大金持ちなのではないかとルフィとウソップが騒ぎ出すがビビが怪訝そうな声を上げる。

「待ってルフィさん、あの宮殿可笑しいわ。なんだか立体的に見えないって言うか……なんだか絵みたい」

「えっ何絵？」

船を着け、いざ陸へと降りて再びその宮殿を確認して見るとなんと巨大なベニヤ板が裏にある小さな家を隠すように立て掛けられていた。見栄っ張りなのか如何なのか解らないが、何がしたいのだろうか。次々と陸へと降りて行く一味に続いてシヨウジョウも部下に食事の準備をするように指示して陸へと降りる。家の中を見るように顔を覗

きこませると留守なのかガランとしていた。

「おやつさんは留守か……？？じゃあまた潜ってるんだらうな」

「潜ってる？ダイビングでもやってるのか、そのクリケットさんは」

「ああつちよつとな」

取り合えず帰ってくるまで待つ事になったがナミは切り株の上に置かれている一冊の本を発見した、多くの海図の参考書や物語を読んで来たナミだったがこれ程までに読み込まれながら年季が入っている本は久しく見る、何かの古文書的な物かと思つたが表紙を見ていると予想とは違い絵本だった。

「うそつきノーランド？絵本みたいだけど」

「ああ、そりやおやつさんのだな。そいつは北ノースの海では有名な物語なんだぞ」

「確かに。俺も知ってるぞ」

「えっサンジ君も？でもなんで？」

「んっああ言つてなかったっけ、俺生まれは北の海なんだ。育ちは東イーストの海だけどな」

ロビンやチョッパーを除いて全員が東の海の出身者だと思つたナミやウソップは意外そうにサンジの言葉に耳を傾けていた。正確に言えばレウスも東の海東の海の生まれではないので違ふと言えるが……目覚めた場所が東の海東の海の無人島だった為、その海の出身者と言つても悪くはないかもしれない。

「てめえら一体そこで何やってやがる!？」

うそつきノーランドについての話を聞いている時海から一人の男が勢い良く上がってきた、頭に栗のような物を乗せているかなり鍛えられている身体をしている男。それは切り株を囲んでいる麦わら海賊団を見ると敵意むき出しに声を荒げる。

「お、おやつさん落ち着いてくれ!こいつらは俺が連れてきたんだ!」

「シヨウジョウ、お前がか……? 一体、何を……」

シヨウジョウの姿と言葉を受け荒げた声をしまいながらもこちらへと歩き出すおやつさんこと、モンブラン・クリケット、が足取りはふらつき始め身体も震えさせていた。苦しげに呻き声を発するとそのまま倒れこんでしまい意識を失ってしまった。

「お、おやつさん!大丈夫か!？」

「待つてくれ俺は医者だ!俺が見る!!」

掛けだそうとするシヨウジョウを抑えチョッパーが駆け寄りクリケットを抱き起こす、苦しげに息を洩らす彼を手早く診察すると直ぐに家の中へと担ぎ込み処置を始めた。シヨウジョウは体格の問題で家の中に入るとスペースを取ってしまうので外から窓越しにクリケットを心配そうに見守っている。

「お、おやつさんは大丈夫なのか……?」

「……大丈夫、もう安心だ。タオルを冷やしてきて、窓は全開に!」

処置が終わり容態が安定した事を伝えるとシヨウジョウは安心したのか崩れ落ちるようにへたり込み安堵の息を洩らした。

「チョツパー、この人病気なのか？」

「うん、ダイバーが偶に罹る病気で潜水病っていうんだ」

「どういう事なんだその病気って？」

「あー……俺も詳しくは言えないが、一回潜ったらそれなりの時間休まないといけないんだけどそれをせずに潜ると身体が可笑しくなる病気……でいいのかなチョツパー」

「うん大体あつてるぞレウス」

「なーるほど、つまり休憩不足か」

珍しくルフィも病気の事がある程度理解する事が出来た、休憩不足という答えも間違っていない。クリケットは十分な時間も置かずは無茶な潜り方をしているせいでのような事になっている。しかもシヨウジョウの話ではこれは持病になっているらしい。普通はそんな事にはならない筈だがチョツパーは顔を険しくする、命にも関わる病気でもあるからだ。処置を進めていく中どすんどすと大きな足音を立てながらこちらへと向かつてくる影が見えた。

「お〜いシヨウジョウお前何やってんだあ!?!まさかおやつさんに何かあつたのかあ!?!」

「おうマシラじゃねえか!」

「ゲツマシラって!!」

ウソツプが思わず顔を青くしながらその名前を思い出した、あのサルページを行いそれを見学した相手であり最後には4人同時に空へと蹴り飛ばした相手である。怒りを露にし攻撃しても可笑しくない……

「こいつらはおやつさんの病気の処置をしてくれたんだ、良い奴らだぜ」

「そうなのか……!!? ううううっ お前ら良い奴らだなあ……!!」

のだがそんな事よりも大切なクリケットの病気の処置を助けてくれた事への感謝が上回ったようだ、一体どれだけ彼らがこの男を慕っているのかが良く解る一幕だ。そのまま看病を続けているとクリケットは目を覚ますと煙草を吹かしながら礼を述べる。どうやら自分達を金塊狙いの奴らと思つたようだ。

「世話掛けちまつたな、何にせよ身体の事ありがとよ。大分楽になった」

「一応この薬を飲んでくれ、潜水病を治せる訳じゃないけどこれである程度身体に掛かる負担を減らせる」

「すまねえな……。お前は……。ああトナカイ、一瞬鹿に見えちまつた」

「おおおっ!! レウス聞いたか!!? 俺の事一発でトナカイって解つてくれたぞ!!」

思わずチョッパはクリケットの言葉に喜びを感じてしまった、今まで狸や鹿に間違われる事もあったので実はチョッパーも気にしていたようだがおやつさんはいとも簡

単にトナカイだと見抜いた。

「んでお前ら、シヨウジヨウが連れてきたらしいが俺に何のようだ」

「おやつさんこいつらは空島に行きてえって言うてるんだ。夢みたいな事を大真面目に言ったんだ」

シヨウジヨウが事情を説明するとクリケットは一瞬顔色を変えると、まさかまだこれ程までに夢を信じるような純粹な連中が居る事に驚きながらも複雑そうに笑った。傍からすれば伝説や御伽噺にしか登場しない空島へ行きたいとほざく若者達、侮蔑を孕み大笑いしても可笑しくないのに彼は面白そうに笑うだけだった。

「空島、か……確かに夢みたいなの事を言いやがるな」

「空島はねえのかおつさん!？」

「……ある、と言っていた奴を一人だけ知っている。だがそいつは世間では伝説的な大嘘付きだ」

「大嘘付き……まさかうそつきノーランドか、あれちよつと待てよ。確かフルネームはモンブラン・ノーランド……」

「ああそうだ、俺の遠い先祖だ」

クリケットは忌々しげに語った、実在した話であるうそつきノーランド。当時国を追われたモンブラン家、だが一族はノーランドが正直者だったと言われているのでそれを

信じている。そしてこのジャヤはうそつきノーランドの舞台となった島、此処に辿り着いたクリケットは海に沈んだと主張したノーランドの言葉が正しいのか嘘なのかを確かめるために此処に住んでいるとの事。

「んじやシヨウジヨウ達は？」

「絵本のファンだ、ノーランドの言う黄金郷はあるんだと押しかけて来て俺の手下になりやがった」

「ず、随分と簡単な繋がりだな」

「ああ。だけどな、暗い海に潜ると酷い孤独感に襲われてくる。正直あんな一途な馬鹿には救われる」

何処か照れくさそうに語るクリケット、自分の噂を聞き付けてやって来た二つの海賊団。そして先祖のいう黄金郷はきつとあると信じて部下にまでなったあの二人にはクリケットも助けられていた。たった一人で何年も海へと潜り続けていた生活に中へやってきた二人は馬鹿騒ぎしながらも自分のやる事を肯定しながら手伝った。それがどれだけ有難かったか……。

そしてルフィが空島には行けないのかと言うとノーランドが書いていたと言う40年前の航海日誌を見せてくれた。そこには空島に関する記述や空島に生息している空魚という魚に付いても書かれているだけでなくまるで空島はあって当然と言う風

な書き方がされておりルフィ達は絶対にある！という希望を抱けた、無邪気にはしゃぐ彼らにクリケツトは笑いながら自分の知っている空島の全てを教えてやろうと言いだした。

「言って置くが俺の情報も確実とはいえねえ、乗るか反るかはそつちで決めろ」

「おう信じる！」

「いや早いつてルフィ」

「フフフツ面白れえ小僧だ。この辺りの海では真昼だというのに突然夜が襲いかかってくる」

クリケツトが語る言葉に行きなり心当たりが出来た、マシラと遭遇している時にいきなり出現した夜。そして異常な怪物……。クリケツトも話が早いと言いつつ怪物に付いては省きながら夜の正体に付いて話す、それは巨大な雲の塊である積帝雲だという。

「幾ら積み上げても気流を生まない雲だなんて……。偉大なる航路ならではって感じね」

「まあそういう事だ、もしも空島があるとすれば可能性は最早それしかない」

「成程……。それじゃあ後は行く方法かっててめえら一々俺を見るんじゃねえ!!」

場所が解つたなら行けるだろ?!とキラキラと目を輝かせ天井気味な事をするルフィとウソツプにレウスも若干キレながら一発ずつパンチをお見舞いした。クリケツトは一旦話を区切るように煙草を吹かす。

「此処からが本題だ。突ノックアップ上げる海流、こいつに乗れば空へと行く事が出来る。理論上の話だ解るな」

「それって船が吹き飛ばされる海流って事？」

「ああ。時間にして約一分間、海は空へと伸び続ける」

突き上げる海流は所謂大災害の一つとして数えられる自然現象、だがその力をあえて利用し空へと行こうという考えにナミ達は驚かされる。そしてこれは大きな賭けでもある。月にして5回の頻度で発生する突き上げる海流の上に空島がやってこなければ意味がない。だがクリケツトは明日にそのチャンスがあると断言した。

「でも船の強化も必要なんじゃ……」

「その点は問題ない、マシラとシヨウジョウにサポートさせる。船の強化作業もしてやる」

「クリケツトさん、一つ聞いて良いかな」

「んっ……？」

「なんで会って間も無い俺達に手を貸してくれるんだ？」

思わずレウスが疑問を口にした、確かに潜水病で倒れこんでしまった身を看病はしたがあくまでそれだけの話。此処までしてくるにはいささか親切すぎるのではな
いかと思ってしまう、正直言つて空島に行けるのは非常に有難いが此処までしてくる

事は自分達はしていない。その言葉にクリケットは確かになつと肯定する。

「普通には怪しむだろうな、おめえの判断は正しい。純粹にな、嬉しいんだ。お前達みたいな馬鹿に会えてな……同士とも言えるおめえらとの出会いに感謝だ。さあ一緒に飯を食おう、力を付けとけ」

「……ああそうだな」

空の王者、笑う者を壊す

「さあどんどん作るから食ってくれ！秋刀魚のフルコース!!」

「いやあ本当にうめえな！おめえの料理最高だ!!」

「なんで酒のうめえ日だ！最高だ、ガツハハハ!!」

日も落ち夜になってからクリケットの家の中では夢を追い求める者同士の宴会が行われていた。シヨウジヨウの部下達が釣ってきた大量の秋刀魚、それをサンジが調理し仕上げた大量の料理を頬張りながら心晴れやかに酒を飲み交わし宴会を行っている。上機嫌に酒を煽りながら歌うクリケットにウソップにタバスコを食べさせられて怒るマシラ、ゾロと肩を組みながら飲み比べをするシヨウジヨウと兎に角賑やかな空間が出来上がった。

「おう姉ちゃん、こつち座れよ！」

「てめえナミさんとビビちゃんを口説こうなんて100年早えぞ!!」

「あはは、さあクリケットさんお注ぎしますよ」

「すまねえな！いやあ美人に注がれる酒はうめえな!!」

ビビに酒を注がれて更に上機嫌になっているクリケットは秋刀魚料理の皿を一つ一

気に空にすると壁に寄り掛かりながら静かにお酒と料理を食べているロビンへと目がいった、彼女は今ノーランドが書いた航海日誌を読んでいる、そして最後のページに行きついた時クリケツトはこう言った。

—— 髑髏の右目に、黄金を見た。

その言葉に全員の眼がクリケツトへと注がれた。

「涙で滲んだ文章が書き残された最後のページ、『髑髏の右目に、黄金を見た』その日にノーランドは処刑された。髑髏の右目、その言葉の意味は此処ジャヤに来ても解らなかつた、それは嘗ての都市の名か。それとも死に逝く己への暗示か、その後には続く空白のページは何も応えず語らない、だから俺たちは潜るのさ、夢を見るのさ海底に!!!」

「おおっくそうだ〜!」

「ロマン最高だぜ!!」

「俺達は飛ぶぞ〜!!」

『おっく!!』

酒も回りクリケツトの機嫌も終始良い。ノーランドを嫌っているといつていと言っていた彼の口から次々出てくるのはまるで先祖の事を敬愛しているかのような言葉ばかり、心の奥底ではノーランドの事を好んでいるのかもしれない。そしてクリケツトはノーランドがこのジャヤに着いた時の事を語る。

——この島に到着し耳にしたのは、森から聞こえて来る奇妙な鳥の鳴き声とそれは大きな、大きな鐘の音だ。黄金からなるその鐘の音は何処までも、何処までも鳴り響き、あたかも過去の都市の繁栄を誇示するかのようでもあった。広い海の長い時間に咲く文明の儂きによせて、高々数十年全てを知るように語る我らには、それは余りにも重く言葉を詰まらせる。我らは暫しその鐘の音に立ち尽した——

体験を書き綴った文章を言葉にして言い放つクリケットに皆は思わず聞き言った、何ともロマンと夢に溢れながらもその時の感動を表すかのような文章。思わず興奮の聲が上がってしまふ、そしてクリケットは自らの成果を見せた、それは鐘のように加工されている黄金であった。

「すげえこれがクリケットさんが見つけた黄金か!？」

「ああそうだ、こいつは鐘型のインゴットだ。これを3つ海底で見つけた」

「なんだやっぱりあるんじやねえか黄金都市！証拠になるんじやねえか!」

「この程度の金じやそうとも言えねえよ。だが文明があつたと言う証拠にはなるけどな」

クリケットの言葉の通り小さなインゴット三つでそういった証明には程遠いがそれ

でもグラム分けする為のインゴットの存在が金属などをグラム分けする技術があった文明の証拠にはなる。更にまだあると言つてマシラと共に布に包まれた大きな物を取り出し見せてくれた、それは鳥の形に加工された黄金の塊であった。

「こいつはサウスバードつといつて確りこの島に現存してる鳥だ」

「へえくじやあこいつがさつき言つてた変な鳴き声の鳥か？」

「ああ日誌にあつた通りさ」

この島にもいるサウスバード、黄金の鐘とこの鳥。それが嘗てのジャヤのシンボルであつたのかもと言るマシラはサウスバードには船乗りに語り継がれている言い伝えを話そうとした時、クリケットとシヨウジヨウと顔を見合わせ顔を青くし絶叫を上げた。

「し、しまった何てこつた！お前ら森だ！森へ行くんだ急げ！！大急ぎでこの鳥を捕まえるんだ！！」

「鳥を？」

「ク、クリケットさん何故ですか？理由を教えてください！」

その理由とは空島へと行く為であつた。明日、船を出し向かう突き上げる海流は南にあるとされているが一体どうやってそこまで辿り着くか。普通の海であるのなら真つ直ぐ南へと向かえば良い話のだが偉大なる航路では一度外海へと出てしまえば方向を確認する術は失われてしまう、通常の航路では役に立つ記録指針も今回は頼りには

ならない。

そこで頼りにするのが話にも出て来たサウスバードである。動物には体内に正確な磁石を持ち常に正しい方角を知る術を持っているものが居る。サウスバードはそれの最たる物であり常に南の方向を示し続けるという、その名通りの特徴を持つ鳥である。その特徴ならば迷う事無く真つ直ぐと南へと向かう事が出来る……！

「なんでそんな大事な事今言うんだよおっさん!!？」

「急げお前ら!!空島に行く機会すら立ち会えなくなるぞお!!」

「そりゃ拙い!!いそげえ!!！」

追い出されるかのように飛び出した皆は森へと駆け出して行く、サウスバードを捕獲する為に。結果的に言えばサウスバードの捕獲は成功した、森の中の様々な生き物達が立ち塞がり森を荒らす対象として襲ってきたが全てを跳ね除けつつ司令塔であったサウスバードを捕獲した。それでもそれなりの時間が掛かってしまった。そしてクリケット達の元へと戻ってきたとき、思わず絶句してしまった。

「ひし形のおっさん……!!？」

「マシラアツ?お、おい何があつたんだしつかりしろお!？」

「シヨウジョウ?!おいお前何があつたんだ!？」

そこに居たのは全身に傷を負い血を噴出し地面に倒れ付しているクリケット達の姿

だった、仮にも2300万と3600万ベリーの懸賞金が掛けられているマシラとショウジョウ、そしてそれらの上のボスとして立っている筈のクリケツトを此処まで痛めつけられているという異常事態にルフィ達は驚き混乱してしまった。そしてメリー号が大破に近い状態にされていた、本当に何があったのか……。

「す、すまねえ……お前ら、俺達が居ながら情けねえ……!!だが、安心しろ、お前らは俺達がちやんと空へ……!!」

「おっさん、一体何があつたのか話せよ!!おっさん達はなんでこんな事になってんだよ!!?」

「……良いんだ気にするな」

頑なに話そうとしないクリケツトに戸惑いを隠せない皆だったがクリケツトの家から見せてもらったはずの金塊が無くなっているのに加えて宮殿の絵が掛かれた板の裏側には何かのマークが記されていた。それは昼間ルフィ達に喧嘩を打ってきた海賊、ベラミーのマークだった。それを見た時ルフィは静かに怒りを燃やした。

「……なあロビン、海岸走って行ったら町に着くか?」

「ええ着くわよ」

「ルフィ、俺が送ろう。走るより遙かに早い」

「悪いけど頼む」

歩き出すルフィとレウスをクリケットは止めようとしますが二人は止まらない、許せない。二人の心中にあるのはそれだけ。クリケットの金塊は決して奪った物ではない、病に倒れるほど海に潜り続け漸く見つけた結晶なのだ。そしてこの人達は自分たちの航海を手伝ってくれると言ってくれた恩人である、それを傷つけ力尽くで奪ったような奴らを唯では済ませない。

「朝までには戻る」

「行くぞ……」

リオレウスへと姿を変え高々と吠えるその背中に飛び乗るルフィ、ゆっくりと身体を持ち上げながら羽ばたき空へと舞い上がって行く姿をクリケットは複雑そうな表情で見つめた。レウスが何か空を飛べるような能力を持っているのはルフィ達の言葉から推測していた、だがこのような能力とは予想外だった。

暗がり支配するモツクタウン、立ち並ぶ建物からは光が漏れ頼りなく夜の帳を照らしている。たった30分で到着したレウスの背中の上でルフィは立ち上がりながら町を見下ろした、町中にベラミーの姿は無い、どうやら何処かの建物内に居るようだ。一番高い建物の上にルフィと共に降りつつ、ルフィは思いつきり息を吸い込み叫んだ。

「ベラミイイイイイ!!!何処だあああああ!!!出てこおおおおい!!!」

月を背中に見下ろす荒くれ者共の街は酷く小さく見える、小さく見える町の酒場から

多くの人が出てきた。その中に右目に傷があり青いコートを纏った人相が悪い男が出てきた、それを見た時ルフィの顔の険しさは更に深くなっていくのを見てあいつがそんなのかとレウスも理解した。そしてベラミーは高々と跳躍しルフィの正面へと立った。

「船長、雑魚は貰うぞ」

「ああ好きにしていどうぞ」

「サンキュー船長」
キヤッテン

建物の上から飛び降りたレウスは酒場の前へと着地しながら左腕を竜頭にしながらベラミーの部下と思われる連中へと対峙した。

「お前たちか……マシラやシヨウジヨウを、クリケツトさん達を痛めつけたのは……？」
「ああそうさだから如何した!?俺達は海賊だ、海賊がそれをやって何が悪い!?あんなくだらねえ夢を追い駆ける爺を痛めつけてな!!」

「————」
「ダチに手え出されて黙ってる奴は、男じゃねえだろ」

「笑わせてくれるぜ、お前あの麦わらの部下みてえだな!じゃあお前も大した事ねえだろうな!!」

「加えてうちの船長の事を侮辱か……」

サングラスを掛けながら下品に笑う男に向かって腕や手の骨を鳴らしながら怒りを燃やす、こいつをどうやって痛めつけてやろうかとレウスの頭の中ではそれで一杯だつ

た。笑い続ける男の横で手配書の束を持っている男がレウスの顔を見て大慌てで手配書を見るとその中であつた、レウスの手配書が……。

「サ、ササササ、サーキース?!?!」

「何だうるせえな!!」

「そ、そそそいつ空の王者のレウスだああ!!手配書の中にあつた、こいつの懸賞金は……懸賞金は……1億5000万だああつ!!」

その言葉に瞬時に周囲が静まりかえりサーキースという男も呆然とした、1億5000万ベリーというとんでもない懸賞金に。自分に掛けられた3800万と比べ物にならないほどの超高額。1億5000万、なんでそんな超大物があんな奴に従っているのだと頭の中がパニックになってきた。身体を大きく震わせながらもククリ刀を抜き構える。

「ち、ちくしょう!!ど、どどどどうせそれだつて偽造に決まつてやがる!!うおお!!」

自棄になつて突撃するサーキース、大振りで振るつた刀は簡単に避けられその首に竜頭が迫り首を押し折らない程度に噛み付いた。肌を切り裂き肉に食い込んだ歯の痛みで悶え苦しむサーキースをレウスは侮蔑を込めた視線を向け続けた。こんな屑がクリケットの夢を侮辱したのか。

「人の夢を笑つてんじゃねえよ、糞餓鬼!!」

頭上にまで持ち上げたそれを、一気に地面へと叩き付けるかのごとく振り降ろした。地面を大きく陥没させながら血反吐を吐いたサーキースはそのまま意識を失った。それと同時にルファイがベラミーをたった一撃のパンチで沈めた。海賊としての格が、余りにも違いすぎた。

「終わったか船長」

「ああ、終わった」

「そうか」

「おっさんの金塊、返せよ」

ルファイの眼光に睨まれたベラミーの一味の者が恐怖に駆られ金塊を差し出すとルファイはそれを笑顔で受け取りリオレウスとなったレウスの背中に乗ってモックタウンを去って行く。あっさりと消えていく海賊だがそれらが与えた恐怖と見せ付けた強さは簡単には消えない。酔っ払いの手から零れた数枚の手配書、そこには最新の手配額が乗っていた。そこには麦わら一味の3人の物もあつた。

海賊狩りのゾロ 懸賞金9000万ベリ

空の王者 レウス・R・リオス 懸賞金1億5000万ベリ

麦わらのルファイ 懸賞金1億6000万ベリ

意気揚々と空を舞う彼らがそれを知るときは、遠くない。

空の王者、遂に空へと昇り往く

「おーい皆々！取り返して来たぞー!!」

「おいおやつさんルフィとレウスが帰って来たぜ!!」

「……戻ってきたか」

朝の明るみが見え始めて来た夜明け、森の上を飛行する巨大な姿を見た時ウソップは大声を張り上げながら二人が戻ってきたと治療を受けているクリケットに声を掛ける。既に治療が終了しているマシラとショウジョウはもう動けるまでに回復したのか船の強化修復作業に取り掛かっている。見た目通り野生動物のような回復力だ。猿山連合の皆は降りて来たレウスに驚きながらもドラゴンが実在したと大はしやぎしながらカメラやスケッチをしようとする道具を出している。

「ひし形のおっさん！これでいいんだよな、取り返してきた！」

「……手間、掛けさせたな」

「なあにおっさん達には世話なるんだから当然だ」

笑顔で金塊を切り株のテーブルの上に置くルフィにクリケットは何所か申し訳なきそうにしながらも礼を言う。まさか自分達のために取り返しに行き本当に全てを奪い

返してくるとは思ってもみなかった。

「世話、か……俺もお前たちに世話になつてる。よし、猿山連合軍！ 気合入れて強化作業に入れ!!」

『イエツサー!!』

「あの、俺は何時になつたら元に戻っていいんだ……?」

「もう暫く頼む……こんな機会滅多に無いんだ!!」

「そ、そんなあ……」

その後、ルファイ達も作業を手伝い急ピッチでメリー号の空島へ行く為の強化が行われた。怪我をしているとはいえマシラとシヨウジヨウも猛烈に張りきり作業に取り組み、ベラミーによつて大きく損傷した船体は猿山連合軍の船大工及び装備開発チームが中心となつて見事に直されていく。その際にもレウスの甲殻や鱗などが有効活用され予定よりもより強靱なメリー号へと仕上がつていく。そして日も昇り朝日が海から顔を覗かせた時、改修されたメリー号が完成した。

トレードマークの羊のヘッドには赤い甲殻などで作られた兜のような物が被せられ、赤い翼とバランス調整の為の尾のようなパーツが装着させられたメリー号を皆満足そうに見つめている。レウスを除いて。

「うっほっお……!! 何度見てもカッコいい!!」

「ゴーイングメリー号フライングモデルver. レウス!! いやぁいい仕事したぜ!!」

「本当! 最初は鶏にするって聞いてたから少して思ったけどこれなら行けそうって気がする!」

「まあ鶏に比べたら遙かに飛べる気がするぜ」

それぞれがやりきった表情をしつつ出来上がったメリー号見つめてこれならきつと空島にだつていけるだろうと言う気持ちになっている。普段から空を羽ばたいっているレウスの姿を真似ているメリー号、何処か酷く頼もしく思える。

「レウスさんみたいになって良いじゃないですか! レウスさんもそう思いますよね!」
「いやその……俺からしたら凄い恥ずかしいんですけど……」

唯一デザインを容認し切れていないレウス、折角レウスの甲殻等を使うのならいっその事レウスのようにしてしまおうと言うウソップとビビの思い付きのせいでこうなつたしまった現状に頭を抱えながら自分と同じになつてしまったメリー号に恥ずかしさを覚える。

「え〜尚、このデザインにするに辺り作業をしたのはこのウソップ様と猿山連合軍の船大工及び装備開発チーム。俺たちの力作だ!!」

『うおっ〜レウスの兄貴最高だぜ〜!!』

『この写真一生大事にする〜!!』

「……もういつそ殺せ……」

そんな事をやっている間に出航時間となりそれぞれの船へと乗り込んでいく一同、マシラとシヨウジョウは麦わら海賊団を空島に行くまでのサポートとして随伴。クリケツトはそれに同伴せずにここで別れるという。

「猿山連合軍!!へまやらかすんじゃないやねえぞ!!そいつらの為に全力を尽くせ!!」

『おっく!!』

「小僧!空島も黄金郷も誰一人それが絶対にならないと証明出来た奴はいねえ、馬鹿げた理屈と人は笑うだろうが結構な事じゃねえか!それでこそロマンだ!!」

「ロマンか……ああロマンだ!!」

「さあ行つてこい、落ちてくるんじゃないやねえぞ!!」

見送るクリケツトの力強い言葉と溢れ出るロマンに背中を押されて船は進んで行く、互いにはないと言われ続けている物を追い求める者。それに違うはなく同士だ、海賊たちは空の海を目指して行く。

「クリケツトさん!!行つてくる!!」

「おう。金をありがとよ」

いざ南へと船は進んで行く、森で捕獲したサウスバードは変わらぬ事のなく南を指し示し続けるコンパス。そのコンパスに従い真っ直ぐ南へと進む三隻の船、偉大なる航路

の天候は悪くは無い良い陽気に包まれた空の下を比較的穏やかな海をかき分けて進んで行く。期待に胸を膨らませながら途中数回停止し、海流を探しつつ進んで行くとビクトリー・ハンター号の見張りが大声を張り上げた。

「園長報告します!! 南西により夜が来ています、積帝雲です!!」

「本当か、今何時だ!?!」

「10時です!! 予定よりも早いです!!」

「拙いなシヨウジョウ、まだか!?!」

「待て今やつてる!!」

南西の方向より近づいて来ている巨大すぎる雲の塊、気流も生まず雨にも変わらぬ謎の雲。予測した時間よりも早く現れた雲にマシラとシヨウジョウは焦りを感じながら調査を続行する。此処で自分達がしっかりとサポートしなければ空島へと辿り着くなど夢のまた夢、落ちていてうー誕ダイバーズの報告を待つしかない……シヨウジョウの声とダイバーズの組み合わせによって行われるソナー調査、それが海流をつかめるかが鍵。

「反射音確認!! 12の方向大型の海流を発見!!」

「9時の方向、巨大生物探知海王類と思われませす!」

「10時の方向、波に逆らう流れを探知! 巨大な渦潮ではないかと!!」

「ツ！マシラア！！」

「おう、それだああ！！爆発の兆候だ、船を10時の方向だ急げ！！」

掴んだと確信した二人の船長の言葉がぶつかり合う、遂に見つけた突き上げる海流の爆発地点！！メリー号の両サイドに付きながら共に船を進めるが急激に波が高くなり船を飲み込まんと荒れ狂い始める、激しくうねり荒れる海に二人は笑みを浮かべながらこれならば絶対にいける！！とそしてマシラはメリー号へとロープを張りそのまま船を渦の流れへと導く。

「ちよ、ちよつとまさかこのまま渦の流れに乗るの!？」

「ああ！！逆らうなよ、なるようになれば行ける!!」

「簡単に言わないでよおおく?!?!」

マシラは大丈夫と語るが渦潮に吞まれると事前に聞かされていなかったメンバーは大騒ぎである。

「大丈夫だナミさんとロビンちゃんとビビちゃんは俺が守る!!」

「こんな大渦始めて見た……!!」

「大渦こえええええ!!?!」

「いやあああああもういや帰らせてえええつ?!?!」

「勘弁しろウソツプ、もう無駄だ」

「いやあああレウスさああああん!!!?」

「ちよ、ビビちゃん解つたから落ち着いて!? 良い感じに首極まつてる!?」
「行くぞ空島アアアツ〜!!!」

大騒ぎし、ウソツプとナミは今なら間に合うから渦から逃れようとルフィに懇願するが肝心のルフィは夢のまた夢の果てにあるという空島への大冒険、これを逃したら一生後悔すると酷く楽しそうなキラキラとした笑みを浮かべていた。それに啞然としている間に、船は遂に大渦の中心へと飲み込まれようとしている。レウスに竜化して今すぐ船を持ち上げてと交渉するナミだがビビによつて首を極められ苦しそうに息をしていてそれ所ではなかった。

「大渦に、呑まれるツ……!!!」

遂に訪れた渦と言うレールの終着点、中心へと飛ぶかのように跳ねたメリー号はそのまま渦の中心点へと落ち粉々に……ならず平然と水面と着地した。

「何?! 消えたア!?!」

「何が起きた!?!」

「あの馬鹿でかい大渦が消えたのか!?!」

「ゴホゴホ……どうなってんだ……!?!」

巨大な海王類であろう容易く飲み込むかのような大渦が瞬間的に消えた、謎の現象に

襲われメリー号は軽いパニックに襲われていた。だがナミは僅かに水面に浮かび上がった泡を見た時全てを察した、何故渦が消えたのかその解を得た。

「違う……始まつてるのよもう!!渦は海底からかき消されただけ……!!」

始まろうとしている突き上げる海流、それを理解し身構える皆にそれを止めるかのような声が響いた。遠くから、此方へと迫ってくる黒い帆を掲げながら迫って来る大型の丸太船。それに乗っている一人の男にルフィとゾロ、ナミは見覚えがあつた。モックタウンで出会つた男だ。

「麦わらのルフィ、てめえの1億6000万の首を貰いに来た!!観念しやがれ!!」

「俺の首?1億?何の話だ?」

「やはり知らないようだな、お前には1億6000万の懸賞が掛かつてるんだよ!!加えて空の王者レウスもてめえの船に乗つてるつて事は知ってる!そいつは1億5000千万!!そして海賊狩りのゾロ、てめえは9000万だあ!!」

ルフィの手配額は知っている限りでは初回手配の3000万だった筈のにそれは5倍以上にもなっていることに驚くナミだが加えてレウスやゾロまで手配されている、それはアラバスタのことが引き金になっていると簡単に気付けたがそれでも1億越えが二人に9000万が一人とは、とんでもない事になってしまっている……!!

「うっひよおおお!!!!聞いたかよ俺1億6000万だつてよお!?!ガハハハハッ!!」

「1億5000万だと……ビビちゃんを誘拐したからか……でもこれは照れちまうなあ……♪」

「ははははっ9000万か不満だぜ♪」

「あんたらなんでそのリアクションなのよ!? 喜ぶなああつ!!!」

迫つて来る丸太船、それによつて告げられた事実に一喜一憂している間にも自然は溜め込んだ力を今に開放しようとしていた。メリー号の真下の海面は膨張するかのよう膨れ上がっている、まるでこれから巨大な泡が弾けようとしているかのようだ。

「全員船にしがみ付くか船室へ!!!」

「船が、吹き飛ぶぞおとおおつ!!!」

各々が船にしがみ付くかのようにしながら唸りを上げる海に備える、徐々に大きくなっていく音に身を震わせながらも今か今かとその時を待ち続けた。そして……

ズドドオオツツン!!!

海を天まで吹き飛ばす大災害、爆発と言う規模では収めきれないほど凄まじさの爆発が巻き起こった。何億という海水を天へと吹き飛ばす大爆発によつて巻き起こり空へと続く道となった水柱、それを垂直に走り続けるメリー号。最早理解を超えているよう

な出来事に混乱するしかないが解る事実はこれで空島へといけると言う事!!

「船が水柱を垂直に走つてますよお!？」

「これが突き上げる海流!!? 想像以上だああ!!」

垂直に走り続ける船の上で壁に立つようにしながら揺れへと堪えているビビを支えながらレウスはこれが何の悪意も無く自然に出来た現象と言う事に寒気すら覚えていた。未だ遠い積帝雲へと水は上り続けている、このまま行けるのかと思つた時サンジが声を上げた。

「船体が浮き始めてる!!このまま弾き飛ばされちゃうぞお!!」

水柱から離れ始めている船体、このままでは何れ弾き飛ばされ海面へと叩きつけられてしまう。だが如何すればいいのだ、この船は爆発の勢いで空へと昇っているのにそれを今更自分たちの力で制御しろと言うのか。レウスが飛び出す事も考えたがこの勢いの中で飛び出しても船に付いて行けずに弾かれるだけ、もうどうしようもないと言う時にナミが大声を張り上げた、自分に任せてと。

「帆を張つて!!これは海よ、唯の水柱じゃない。立ち昇る海流なの!そして下から吹く風は地熱によつて暖めれた上昇気流!相手が風と海なら航海して見せる!この船の航海士は誰?!」

「ナミさんです!!おい野郎共、直ぐにナミさんの指示通りに!!」

空の王者、空の海へ至る

「ゲツホ、ゲホ……どうなったんだ……?」

突き上げる海流によって積帝雲へと吹き飛ばされ、遂には空まで飛んだメリー号。風と海に押し上げられて舞い上がった空、雲へと入った瞬間に感じたのは凄まじい圧迫感。ビビとナミを支えるように腕に抱え込んだまま爪を船体に食い込ませていた筈だが身体に感じていた物が消えている。

「ぜ、全員いるか……?吹き飛ばされちゃった奴とかいないよな……?」

苦しげに息を漏らしながらも船にいるメンバーを確認して行く。全員が苦しげにしてはいるが問題なく船の上へという。あの勢いで誰かが欠けていると言う緊急事態は起きずにいるようだ。

「ゲホツ……レ、レウスさん……何が起きてるんです……?」

「はあはあ……空、島に着いたのかしら……?」

「おい皆！回り見てみるよ!!起きろお!!」

あんな事があったと言うのに唯一元気なルフィは大声を上げながら皆を叩き起こしていく、まだフラフラする意識が徐々に覚醒していくと視界に広がっているそれに絶句

してしまった。広がっている景色の全ては白く染まっておりまるで雲、メリー号も雲の上に浮かんでおり幻想的な世界に迷い込んだかのような感覚になってしまう。

「何よこれ……雲の上!?なんで乗ってるの!？」

「そりや乗るだろ、雲だもん」

「「いや乗れねえよ」」

「凄いい、まるで御伽噺の世界に迷い込んだみたい……」

見渡す限り白い雲の海、船の上も下も雲雲雲。下にあつた筈の青い海などは無く純白の雲が広がり周囲には手が届かないほど高い空にある筈の雲が浮かんでいる。確かに御伽噺の世界と言われても違和感が無いしそれが妥当だと思えてしまう。

「つまり此処が空の海……でも……」

「ナミさん?」

見つめる先には記録指針、此処が空の海だと言うのは解るが記録指針はまだ上の方向を示し続けている。つまり空島はまだ上空にあると言う事になる、ここからなんとかしてまだ上に行くしかない。いざとなつたらもうレウスに頑張ってもらうしかない。

「おいウソツプ泳ぐのはやめとけよ、此処は底が無いんだぞ?」

「……はつそうじゃねえか?!あつぶねえ危うく雲から落ちる所だつたぜ!!」

「つたく無闇に泳ごうとしてんじゃねえよ。まだ得体の知れない海だぞ」

軽い気持ちで泳ごうとしていたウソップを引き止めるとチョッパーとビビは双眼鏡を用いての周囲警戒を始める事にした。此処が目的の空島のある雲の島なら絶対上にかかる事が出来る術がある筈だ、それを探そうと双眼鏡を覗き込んでみるとメリー号と同じように空の海に浮かんでいる船を発見した。思わずチョッパーは船を見つけたと声を上げるが同時に見つけた浮かんでいる人のような物を見た時思考が凍った。その人間が船を攻撃したのか、船が爆発したのだから。

「チョッパー船か？」

「レレレレウス大変だ!!ふ、船が見えたんだけどもう船はいなくて!!なんか牛みたい人間がこっちに向かって来てて!!?」

「な、何?つまり誰かがこっちに？」

酷く慌てているチョッパーの言葉から何とか情報を引き出したがそれでもやや不明瞭だ。この空の海に人が浮かびそれがこちらに向かっているという事なのか、チョッパーが見ていた方向を見るとこちらに凄い勢いで何者かが迫って来ていた。空の上を滑走するかのよう。

「おい誰か来るぞ!?!おいお前は何者だ!?!」

「排除する」

「おい敵襲だ!!」

海の上を滑る人間はそのまま船の上へとジャンプしそのまま襲いかかる敵を迎撃する為に向かうサンジを蹴りするとそのまま跳躍し迫るゾロの剣を容易く避け顎を蹴り飛ばしルフィに踵落としを決めた。あの三人を容易く退けるといふ事に警戒したレウスは飛び上がりつつ軽い身のこなしで船を上から見下ろしている敵へと向かっていく。

「いきなり何しやがんだてめえ!!」

「排除する、と言った筈だ!」

回し蹴りを放ってくるそれを軽く受け止めつつ左腕の竜頭で殴り付けるかのように噛み砕こうとするが差し出された盾によってそれは阻まれてしまうが敵は竜頭に驚いたのかメインマストの頂点で後退するようにジャンプした。

「能力者か!!」

「だから、どうしたあ!!」

敵は接近戦では部が悪いと判断したのか持っていたバズーカを構える、それと同時に竜頭を構えるがそれを中断するかのような声と一人の老人が間に入った。鳥に乗った鎧の老人は槍で縦を狙うように突き出し、それをガードした敵はそのまま海へと没していく。新たに現れた存在に軽いパニックを起こすナミだが船の上へと着地した老人は静かに答えた。空の騎士と。

「去ったか…もう心配ない、安心するが良い」

「助けてくれて有難う！」

「いや何これはサービスだ」

「チョッパの言う通りだ、あなたの気まぐれか知らないが俺達が助かったのは事実だ。礼になるか解らないけどお握りでも如何？」

「ぬっいやこれはすまぬ、丁度小腹が空いておつたのだ…これは美味しい！」

お礼をチョッパと同調しお礼のお握りを差し出すレウスとそれを受け取り絶賛する空の騎士、少々シユールな状況だがナミは3人もいて一蹴されてしまつて情けないとルフィ達に言う。だがルフィ達もそれは自覚しており妙に体が上手く動かないらしい。

「きつと空気が薄いせいね、あれだけ高く飛ばされたのだから空気が薄くても可笑しくないわ」

「確かに…：私も少し辛いかも」

「此処は上空7000メートルの白海、更に上層の白々海においては1万メートルにも達する。通常の青海人では体が持つまい、因みに青海人とは青い海からきた物の総称だ」

「つまり俺達か…：よっし段々慣れてきた！」

「そうだな、大分楽になつてきた…：」

高高度を飛行する事も出来るレウスは薄い空気環境にも適応出来る身体を持って
いるがまさかルフイ達がこんなにも直ぐに適応出来るとは思ひもしなかった。矢張り
常人離れしていると改めて認識させられる。そんなこんなで助けてくれた空の騎士は
フリーの傭兵らしくビジネスの話をしたいと言ってきた、1ホイッスル500万エク
トルで助けようと言うが、自分たちには意味が解らなかつた。如何やらこの海に来る方
法は他にもあるらしく其処から来たと思つていたらしい。

「成程、中々の航海者たちと見た……」

「いやあ……それとエクストルって一体……この先もしかしたら頼むかもしれないけ
ど、ベリーっていうお金も使える？」

「無論。エクストルとはこの空で使用する通貨の事、1ベリーをエクストルに直すと1
万エクストルじゃな」

「つてことは……500ベリーで助けてくれるつて事か」

それを聞いてナミは嬉しそうな声を上げた、この空の事情を知っている人間の助けが
僅か500ベリーという格安である事が凄まじく嬉しいらしい。

「では追加サービスとして1ホイッスル、即ち一度の救援要請を無料でプレゼントじゃ」

「やったあ！」

「あ、後名前を!!あと白々海つてのはどうやって行けば!?!」

「そうじゃな。先程の美味き物の礼もある。我輩は空の騎士、ガンフォール。そして相棒ピエール」

「ピエール！」

「上へと昇るのであればあの滝のような雲を目指すが良い、さすれば上へと行ける。では勇者たちに幸運あれ！」

そう言い残すとガンフォールはピエールの背中に乗り颯爽と空の彼方へと消えて行ってしまった。兎も角情報ともしもの時の保険まで手に入れる事まで出来た、どうやって記録指針が示す上へと行けばいいのかと困っていたときに差し伸べられた助け。これは無駄にするわけにはいけないとナミは張り切る。

「さあ皆船を出すわよ!!いよいよ行くわよ、空島へ!!」

『おおっ!!』

空の王者、空島に上陸する

ガンフォールから得た情報を頼り滝のように流れている雲の元へとやってきたメリー号、そこにあつたのは天国^{Heaven's Gate}の門と刻まれた大きな門のような建造物だった。ここまで雲ばかり見てきた皆は少々面を喰らったがその門から一人の老婆が出てきた、がその老婆は背中に羽を生やしている一般的にイメーჯされている天使のような形相をしているのでもしかして自分たちは既に死んでいるのではないかという事をビビが言ってしまう周囲は少々顔を青くするのであった。

「あ、あの〜」

「私は天国の門の監視官アマゾン。あんた達観光かい？それとも、戦争かい」

「空島に行きたいんだ！此処からいけるのか!？」

「行けるよ」

「戦争つて答えたなら如何するんだよ……つというか普通にそう聞くか?」

意味ありげに笑うとアマゾンは別にと口にする。如何にも食えない老婆だと思いつつも怪しさを感じてしまう。本当に真つ当な人間なのだろうか。

「上層に行くのなら、一人入国料として10億エクストル置いておきなさい。それが法

「律」

「10億ウ!?」

「すっげえ値段だなおい」

「えつと、1ペリーが1万エクストルだから……10万ペリーで9人で90万ペリーですよナミさん」

「90万ペリー……結構な大金……」

エクストル換算では途方もない大金のようにも思えてしまうがペリー換算では何とかなりそうな金額になった。ナミは如何にも渋い顔をしてしまう、幾ら入国に必要な物だとしても90万と言う大金を支払っても良い物なのだろうか……。

「あのーアマゾンさん、ペリーでも大丈夫なんですよね?」

「青海の金かい、使えるよ」

「でも90万でしょ……? レウスの鱗とかその他でお金は稼いであるから大丈夫だけど……」

「別に払いたくないなら別に構わないよ」

悩むナミに払わずとも良いと告げるアマゾン、その発言に思わず目を輝かすナミだが他のメンバーは如何にも解せない顔をする。門番でも衛兵でもない、だから意思を聞くだけというアマゾンだがサンジは如何にも解らなそうな顔をする。監視官なのに入国

料も払わずに国に入ろうとするよそ者を放置するか？と思わずそれを王女であるビビに尋ねて見る。

「ビビちゃん、如何思う？ 仮にアラバスタに入るのに入国料がいるとして」

「普通なら考えられませんが、職務放棄みたいなものだし不法入国を認めるって事。このまま入ったら確実に犯罪者扱いを受ける事になると思います」

「だよなあ……ナミさん、ここは確り払っておいた方が良くと思うぜ。空島には海軍もないと思うし追われる事もない、それなのに態々追われる立場になる事はねえぜ」

「……解ってるわよ、レウス。後で鱗お願いね♪」

「この船での俺の役割って何なの？」

「金策？」

「……ビビちゃんにロビン頼むからやめてくれ、俺を苛めないでくれ……」

かなり渋い顔をしながらナミは90万ベリーをアマゾンへと渡す、アマゾンは受け取った金を入念にチェックし90万ベリー、90億エクストルであることを確認すると一冊の手帳のような物を手渡してきた。

「それに今名前を書きなさい、全員分をね。それが正式に入国した証明になる」

「解ったわ。ねえ、もしも払わずに入ってたらどうなるの？」

「……さあね。知ってどうなるんだい」

何処か言葉を濁すアマゾンを警戒しつつ再び船に乗り込んだナミ、それを確認したかのように船の下に巨大な影が映りこんだ。そして海のような雲から二本の巨大な鋏が姿を現すとがっしりと船体を両サイドからはさんだ。

「な、何これ!?!ア、アマゾンさん何これ!?!」

「白海名物、特急エビ」

鋏の下には赤い甲殻をした巨大なエビが潜んでいた、ゾロは思わず刀を抜こうとしたがそれよりも早くエビは動き始め曲りくねっている歪な滝の流れを遡るかのように凄まじい速度で移動し始めた。激しく揺れ動きながら自然的とは思えぬ雲の道を進んでいく船にしがみ付く一同。

「チョッパー無事か?!」

「あ、ああああ!!助かった……」

「なあサンジ、あのエビってうめえのかな?」

「今んな事聞くな!!」

右へ左へと傾きながらどんどん上へと向かっていくエビ、だがそれも遂に終わりが訪れる。暗い周囲に降り注ぐかのように輝く光、エビもそこへ向かっていく。その途中で看板のような物が見つかった、そこにはこう書かれていた。『神の国 スカイピア』と、有無も言わず加速したエビはメリー号を打ち上げるかのように放り出し暗い空間か

ら太陽の光が降り注ぐ上へと導く自分は下へと戻って行った。打ち上げられたメリー号は海面、と行っていいのか不明だが着水する。そしてルファイが大きな声を張り上げた。

「島だ！空島だあああつっ!!!」

目の前に現れたのは雲のような大地で形成されている島、木々が茂り建造物と思われる物まである。ナミは一応記録指針を確認すると間違い無くこの島を示していた、間違い無い。ここが目的地であった空島、そしてルファイが海底に沈んだ船から手に入れた地図にあったスカイピアという島、本当に来れたのだ。

「冒険の臭いがプンプンするぞ!!行くぞ!!」

「ああおい待ってってルファイ!?底が無いかもしれないねえのに!!」

「大丈夫だ足付くぞ!しかもふかふかだぞ!!」

「あールファイウソップ俺も俺もく!」

我先にと飛び降りたルファイ、ウソップそしてチョッパーは空島は自分たちでも触れるようなふかふかした雲で出来ている事に嬉しそうにしながらキラキラとしながら上陸していく。ゾロは少々怪訝そうな顔をしつつも試しに錨を降ろしてみると半ばまで沈むとそのまま突き刺さった。どうやら普通の雲ではなく自分たちが慣れている地面のような雲のようがあるようだ。

「にしてもたまげたなこの光景は……まるで夢だ」

「ああ、流石に、面食らうなこりゃ」

流石のゾロとレウスも現実離れしすぎている光景にやや気疲れているような言葉を漏らしてしまう、突き上げる海流に乗って空までやってきてそこからもう驚きの連続だ。寧ろ疲れない方が可笑しいかもしれない。また一人、サンジがはしゃぎまくった声を上げながら飛び込んでいくのを呆れた目で見つつ自分も行くかと腰を上げた。

「レウス、お前は？」

「んっ……びびちゃんたちと一緒に行くよ」

「そっか」

飛び降りるゾロを見送ったレウスは目の前が本当に現実なのかと疑ってしまい思いつき頬を抓ってみるが凄まじく痛い。どうやら夢ではないようだ。すると船の中からナミの痛い痛い!!という声がある、其方を見て見ると上を水着に着替えたナミの頭の上でサウスバードが突いている光景が見えた。気がすんだのかサウスバードは飛び立ち何処かに行ってしまった。

「サウスバード、連れて来ちゃったんだっけ……逃がすの忘れてた……」

「……まあ鳥なんだし何とかなるんじゃないか？」

「ナミさん、こんな感じですけど如何でしょ？」

「わあお似合ってるじゃない！レウスみなさいって」

ナミに言われて船首からデッキへと移動するとそこには白いショートパンツに明るい緑のビキニを身に付けているビビの姿があった。レウスが現れるとやや恥ずかしいのか頬を赤らめながら口元に手をやる仕草をするがそれが妙に愛らしくビビの容姿も相まって凄まじい破壊力となってレウスに襲いかかってきた。ナミの水着姿もかなり刺激が強いのに着美女二人が視界の中にいるのはかなりきつい。

「そ、そのレウス、さん……如何です、似合います……？」

「あ、ああ……眩しい位にね。流石砂漠の国のお姫様だ。ナミちゃんと一緒だと、水着美女二人って感じで凄いいよ。可愛いよ二人とも」

「もうレウスったら当然の事言わないでよん♪」

「て、照れちゃいますよ……♪」

「さあお早く行って来たなら如何かな？うずうずしてたまらないって感じだけど？」

「行ってきま〜す!!」

その言葉で二人は船から飛び降り笑いながら上陸して行く、その様子は如何にも女性に慣れないレウスには眩しい物なのだ。そこへ同じく水着に着替えたロビンがやって来るがロビンの水着はビキニのような肌を大きく露出させた物ではないのでまだなんとかなる。

「皆行ったのかしら？」

「ああ行ったよ」

「貴方は行かないの」

「いや行くよ、エスコートでもしようか。ロビンお嬢さん？」

「ならお願いしようかしら、お兄さん？」

「お兄さんって歳じゃないよ。もう直ぐ30だし」

「あら、意外と歳が近いみたいね」

「あれそうなの？」

ロビンを紳士的にエスコートしながら船を降り上陸したレウスはお互いの年齢を改めて知りロビンと様々な事を交わしながら暫し話す。それを見ていたナミは少しムスっとしつつビビはふむふむと興味有り気な表情でそれを見つめている。

「何よレウス……あいつ誑しなの？」

「いいえあれは単純に同年代である事を知って嬉しいって顔ですね。良かったですねナミさん。ロビンさんは違うみたいですよ？」

「そう……ってなんでそうなるの!？」

「フフツ♪レウスさくん一緒に遊びましょう!!」

「あちよつとビビ!?待ちなさいって!!!」

空の王者、住人から話を聞く

苦勞と命懸けをして漸く到達した伝説や御伽噺だけの存在とされていた空島へと到達した麦わら海賊団、一面広がる雲の海に触れる事が出来る雲が地盤となっている空の島。全てが自分たちの世界と異なっている世界に胸を躍らせながらまるで楽園のような場所に皆の気は思わず緩んでしまいがちながらもその楽園を堪能していた。それも当然といえる。此処には自分達を追い首を狙う賞金稼ぎや海軍の存在も無い為に自由に活動が出来るのだから。

「キャツ！もうレウスさんったら反撃！」

「ワプツ!? やったなあそらこれで如何だテールシヨック！」

「ちよつちよキャア!?! レウスアンタ尻尾で水を撒き上げるなんて卑怯よ!!」

「2対1なんだから多めに見てよそらどんどん行くぞ！」

普段は自由奔放な麦わら海賊団のメンバーのブレーキ役となっているナミやレウスもテンション高く、空島のビーチでビビと共に水かけをしたりして遊んだりしている。良く考えて見ればこうやって遊ぶのも初めてな事なのかもしれない、故か青海でも出来る事でも酷く楽しく思える。

「よくしならこれでどうよ、行くわよビビ!」

「はい!」

「いつせいの、せえ!!」

「ギヤアツ!!?ちよまつ……!?バ、バケツでローテーションで掛け続けるのは流石に、卑怯すぎるでしょう!!?あああああ止めてええつゝ!!」

「ナミさんにビビちゃん!!俺も参加するぜえ!!この野郎羨ましすぎるんだよオラ喰らえレウスウウウツツ!!!」

「ギヤアアアア!!?やめろお前らゴボゴボゴボ!!!」

そこへ美女二人相手を独占しつつ遊んでいるレウスを嫉んだサンジまで参加しレウスは圧倒的な不利に陥る。バケツ二つを持ったナミとビビ、そして持ち前の足技で水のような雲を撒き上げてレウスへと掛けていくサンジと圧倒的な手数の違いと圧倒的な水量にもう何も出来ずに降参の意を示すしかないレウスはそのまま砂浜に打ち上げられた魚のように倒れこみながらぜえぜえと荒い息を吐き続け、勝った3人はハイタツチをしながら喜ぶのであった。

「さあ二人とも空島の花ですよ♪折角の楽園みたいなところなんだから楽しまなきゃ

♡」

「ありがとサンジ君♪如何?」

「有難うサンジさん、こんな感じかな？」

「お似合いですぜお二人とも!! さあてロビンちゃんにも渡してこなくちゃ♡」

花を差した二人に目をハートにしながら今度はロビンに花を渡す為に駆け出している、途中倒れこんでいるレウスを強く踏みつけながら。

「グフウ!! サンジあの野郎ワザと強く踏みやがったな……覚えてやがれあのグル眉……あいつ何時か殺す……俺のプレスで焼き殺してやる……」

「まあまあレウス落ち着きなさいって、流星のアンタでも3対1じゃ勝てないみたいね」
♪

「ゲホゲホ……相手に勝たせないようにしたのはどこの、ゲホツ! 誰だよ……」

漸く立ち上がるレウスだが二人に対しての嫌悪感や怒り等は全くない、遊びだったのだからこの程度で怒る訳が無いという認識。但しサンジはあからさまな悪意と故意による行動だった為許さん。そんなことを思いながら立ち上がると不意に心地良い音が聞こえてくる。

「んっ…ハープの音？」

「もしかしてまた敵!？」

「あつあそこに人がいます!」

指差す先にいたのは翼を生やしている女性が肩に狐のような動物を乗せながらハ―

プを華麗に奏でている光景だった。優雅に美しくハープを奏でる光景と容姿も相まっ
てまるで天使のような姿に見える、そしてその女性はこちらに笑いかけながらへそつと
言葉を漏らした。

「へそっ？へそつて何だ？」

「へそはへそだろ」

「挨拶、なのか？」

酷く独特な挨拶に戸惑いながら挨拶を済ませる一同。

「ようこそスカイピアのエンジェルビーチへ、私はコニス。こちらは雲狐のスーとい
ます。何かお困りでした力にならせて下さい」

「えっと私はナミ、さつき此処に来ただけど知りたい事が一杯あるの！此処は私達に
とって不思議な事だらけで……あっちゃんと入国の為の手続きはしたんだけどこの手
帳でOKかしら？」

「えっとはい大丈夫です、改めてようこそスカイピアへ」

「おい、なんかこっちに来るぞ？」

「ああ、あれは父です」

ゾロが雲海の向こう側から何が迫ってくるのを見つけ警戒するがコニスはそれは父
だと告げるとそこから父と言う男が挨拶をしてくる。がコニスの父であるパガヤが

乗っているのは小船ほどのサイズだが自力で雲海の上を進んでいるのようにも見える、風を帆で受けるのではなく自ら推力を発生させて進んでいるように感じられる。その船はウエイバーというらしくそのままこちらへと迫って来るが止まらないのかそのまま浜に乗り上げ木に激突しそうになったのをレウスが間一髪で受け止め無理矢理停止させる。

「こ、これはすいません。お手数をおかけしてしまいました、すいません……！」

「いえ、お気になさらず」

「父上魚は取れました？」

「ええ大漁です。そうだ、このお礼に皆さんこれから私たちの家でお食事は如何でしょうか？空の幸を^ご馳走いたします」

空の幸と言う言葉にルフイやサンジは興奮しながらぜひともお願いすると叫んでいる。空の食材を用いた料理というのはかなり興味深いのかサンジは特に興奮しているがナミはそんな中そつとウエイバーに近づきながら如何してこれが海の上を走つていたのかと聞く。

「まあ、^{ダイヤル}貝^{ダイヤル}を^ご存知無いですか？」

「^{ダイヤル}貝……？なんだそりや。俺達は直接この空にやってきたから、そう言った知識は0なんだ」

「そうなんですかそれはすいません。では我が家へどうぞ、お食事にしながらご説明致しますよう」

その厚意に甘える事にして一同はパガヤとコニスの家へと御呼ばれする事にした。その途中でこの空島に存在する雲の種類に付いての説明を受けた。この空には船で進めるようなく海雲>とその上に浮かぶ歩けるく島雲>が存在しているらしい、この雲は地上に存在する海楼石という鉱物に含まれる粒子が空に上がり水分を得た時、その時の密度によつてこの二つの雲のいずれかになると言う。そして着いた家ではパガヤとサンジが調理に入りその間にコニスダイヤルが貝についての解説を始めてくれた。まず一つの貝をルファイへと手渡した。

「何だこれ？貝殻か」

「はい、それに向かつて何か話して見てください」

「よし。うくん、ウソツプのあほく!!」

「いやなんでなんでなくんで俺だよ!?!」

「フフフツ、それじゃあその貝の殻頂を押し見てみてください」

貝殻に向かつて何故かウソツプへの罵倒が放たれるとルファイは言われるがままにその貝殻の天辺を押し見て見た。すると……。

『うくん、ウソツプのあほく!!』

「うわウソツプが貝に馬鹿にされた!？」

「いやお前の声じゃねえか!？」

「凄い!音を記憶したんですね!？」

「これが、貝か」

コニス曰く貝には様々な種類などがあり今ルファイが使ったのは音を記録、再生する習性があるというトーンダイヤルだという。

「面白〜い!!もしかしてウエイバーもそれで!？」

「はい、トーンダイヤルではなく此方ですが」

棚の上に置かれていた貝を手に取りそれを窓の近くに掛けられている風鈴へと向けながら殻頂を押す、すると貝殻から風が吐き出され風鈴が耳障りが良い音を鳴らした。こちらの貝は風を貯え自在に排出する事が出来ると言うプレスダイヤル、これを船尾に取り付ける事で軽い船ならば動かす事が出来ると言う。

「成程、風を受けるんじやなくて自分で風を起こすから自由に動けるのね。面白〜い!!

私ウエイバー欲しいわ!!」

「あれでもナミさん、俺たちもう持つてるんじやないか?」

「あらお持ちなんですかウエイバー?」

「……?あつるファイさん達が海中から拾ってきた中にそんな物がありましたね!」

そう、海中へ沈んだ船のサルベージ。それを行った際に拾ってきた様々な物の中になり古く壊れていると思われるウェイバーのようなものがあつた。今思えばあれがウェイバーなんだと理解するが200年以上昔の物だからもう動かないでしょ？とナミが言うがコニスはそのを否定した。

「基本的には貝は死骸を利用しますので、それ自体が壊れていないのであれば大丈夫だと思えます。お食事の後父に見てもらいましょうか、父はダイヤルシップのエンジンニアでもあるんです」

「わぁ助かる!!是非お願いするわ!!」

空の王者、禁じられた土地を知る

空の幸を堪能した麦わら一味の一行は青海にて手に入れたウェイバーらしき物をエンジンニアであるパガヤである見てもらう為に再びエンジンエルピーチへと戻ってきていた。船内に保管していた酷くボロボロで古びた小船のような物、比較や体験の為に持ってきてもらったウェイバーと改めて見比べて見ると確かに似通っているような部分が非常に多い。

「これですか貴方方の古いウェイバーと言うのは？確かに酷く古いものですね」

「下の海で手に入れたんだ。多分200年位昔の物だと思うんだけどさ、おっさん如何かな？」

「ふむ……確かにこれは真正銘ウェイバーですね。しかしこれは古いですね……私も資料で見た事があるぐらいの古さです、すいません」

ウソツプの言葉通りこれは約200年以上前に使用されていたウェイバーのタイプ、パガヤ自身も文献や資料などで見た事がある程度で実際に此処まで古い物を実際に見て触ったのは初めてとの事。少々興奮しながらも調べていくパガヤを見つつもナミは現行タイプのウェイバーに興味津々そうに見つめている。

「これがウエイバー……これでもプレスダイヤルが着いてるのよね」

「はい。先程家で見せた物よりも大きい物を一つ付けています。基本的にウエイバーはダイヤル貝を一つで十二分に動きまますし二つ以上だと出力の調整や船体なども関係して操縦が難しくなるんです」

「ウエイバーの船体はプレスダイヤルで動くように軽く作られていますので、基本的に一つで事足りてしまいますからね、すいません」

「ふくん……確かに十二分に良い機動力だもんね」

ウエイバーのついでの説明を行いながらも手際良くウエイバーを調べていくパガヤは心臓部であるダイヤル部分を開いて見ると、そこは全くの無傷。これならば手入れをし修理をすれば動かす事が出来る事が解った。

「これなら船体を修理してハンドルを現行タイプに取り替えれば十二分に使えるように出来るかもしれません」

「本当?!おじさんお願い出来る?あつ幾らぐらい掛かる?」

「いえいえお金は結構です、これほどの物を見せて頂けただけでエンジニアとしては価値は大きいのです。すいません」

「ううんこつちこそ有難う!やったウエイバーが手に入る!!」

余程自ら風を起こして自由に走るウエイバーの事が気に掛かっていたのかそれが手

に入ると解ると大喜びして小躍りするナミだが、パガヤは簡単にウェイバーは動かせない
いと注意をする。

「先程も申し上げましたがウェイバーの船体は非常に軽く作られておりますので小さな
波さえ舵を取られてしまうほどなのです。ですので操縦は酷く難しいのです、通常であ
れば訓練すれば10年ほどで満足に出来ると言うほどでしょうか」

「そんなに難しいのか!? 大変だな!! 医者 of 勉強みたいだぞ?」

医療技術や知識を学び貯え、それを実践出来るまでかなりの時間と訓練などが必要な
医者であるチョップパーが言うのと重みを感じさせる。ナミはそんなに大変だと知っても
矢張り乗りたいのかうずうずしてしまっている。そんな彼女の姿を察して試しにその
ウェイバーに乗って見てくださいという。

「えっいいの!?!」

「ええ構いませんよ。しかし慎重にお願いします、慣れていない方がウェイバーに乗っ
て事故を起こしたという事例も多々ありますので。すいません」

「よしー」

ナミは早速ウェイバーに乗り込みつつアクセルやブレーキの説明を受けると早速ア
クセルを踏みブレスタイヤルから風を吹き出させ海雲の上へと繰り出して行く。ハン
ドルを確りと握りつつ真っ直ぐ向けている筈なのに周囲からの弱い波を受け簡単に舵

が変わろうとしてしまふ、軽い船体ゆえに波の影響をダイレクトに受けやすいのだと直ぐに察するとアクセルとハンドルの巧みに使いながらあつという間に波を克服しスピードを出しながらサイコー!と声を張り上げるのであつた。

「なんと凄いですね!!まさかあんな直ぐに操れるようになってしまふとは!!」

「流石ナミさん……10年掛かるつて言つてたウェイバーをあつという間に」

「流石うちの航海士!!おいナミ次は俺に乗らせる〜!」

「デリケートすぎるから本能で動くあんたにはきつと無理よルフィ!!」

「んなことねえ!!だから乗せろ!!アホ〜!!」

この後一応ルフィに交代したがかなりの揺れと波によってまともに進まないウェイバーに悲鳴を上げつつアクセルを踏み込んだルフィは船体から放り出された。

「……そういえば、能力者にとつてこの海つてどうなるんだろうね」

「ああ確かにそうだな、普通の海じゃねえんだもんな。浮かぶかもしれないねえ」

「(ブクブクブクブク……)」

「あつ沈んだ」

「駄目か」

「あつ〜ルフィが沈んだ〜!!!??
大変だあああつ!!?」

「まったく世話掛けさせやがって!!下に突き抜ける寸前だったぞ!!後ちよつと白海だったぞー!」

「チョツパーてめえなんで泳げねえのに飛び込むんだよ?!余計な手間掛けさせんな!」

「ご迷惑、おかけ、しました……」

「海雲も性質的には青海と同じって事か……だな」

「そりやあんだけ水掛けられれば俺もまともに反撃できなくなるわけだわな」

「いやお前は元から駄目だろ」

「……はいそうでしたね」

結局まともに操縦出来るのはナミだけと言う事になりそのままウエイバーはナミ専用の乗り物として認定される事となった。と言つても青海にて入手したウエイバーはパガヤも見た事の無い部品も多く一度解体してみないと完全な修理は難しいとの事。

「つてあれっねえレウスさん、ナミさんは?」

「んっそこらにいるんじゃないのか?」

パガヤの解体及び修理が完了するまでのんびりとする事になったがビビは気づけばナミの姿が見えなくなっている事に気付いた。それをレウスへと伝えるが彼の高い視力を持つてしても視界内にナミを捉える事は出来なかった。

「駄目だ。何処にも見当たらない」

「遠出でもしてるんじゃないかねえのか？ウエイバーの事を大分気に入ってるみたいだしな」

それならば良いが、彼女の事だからきつと大丈夫だろう。海軍もいないこの空島ならばなんとか無事でいるだろうと思ってる矢先にパガヤとコニスは不安そうな表情をしながら何かを話し始めた。

「如何したんだ二人とも？」

「その……この空島に決して入ってはいけないと言う禁断の聖地があるんです。そこはウエイバーで少し行けばいけてしまう距離にあるんですが……」

「心配ですね……ナミさんがそこに行っていないければ良いのですが」

「禁断の聖地？なんなんだそりゃ」

「神が住む土地。聖なる土地、アツパーヤードと言われている場所です」

「何、これ……!?なんて、大きな木なの……!?」

その心配は的中していた。ウエイバーという自由に海の上を走る事の出来る乗り物に出会えれば嬉しきゆえにナミは酷くはしゃぎフルスピードを試したくなりそれを行っている最中に見えてきた巨大な樹木が群生している土地を発見しそこへ近づいてしまっていた。

「空島にも、地面ってあるんだ……」

その土地は自分たちにとっては当たり前な存在である土などの地面がある島だった。全てが島雲や海雲といった物ばかりで形成されていると思いついて空島にも青海と同じような物もあるのかと思いをはせつつもその土地を見つめ続ける。樹齢何百いや千年以上は経過しているだろうという大樹がこれでもかと乱立している島は青海でも滅多に御目に掛かれない。

「なんなの、この島……!?!」

思わず鳥肌が立った、何故かは解らないが今まで数多くの修羅場を潜り抜けてきた自分の勘が危険を感じしているかのように警告音を鳴らしている。ここは大樹が乱立しているだけの土地では無いと。それを思いながらも好奇心を掻き立てられそうになりながらもゆっくりとその島の周囲をゆっくりとウェイバーで回っていく。

「
」
だがナミは気づかなかつた。その土地に目を奪われていたせいで、その土地の上空を飛行する巨大な影に。それはその島の周囲を一回りすると何処かへと飛び去って行った。

空の王者、聖地の真実を解く

「よろし野郎共、行くぞアツパーヤードに!!冒険じゃなくてナミを探しに!!」

「おいルフィ、テメエ本当にナミさんが目的なんだろうな?!?!」

絶対に入ってはいけないと言う禁断の土地、アツパーヤードの話聞いてしまつてルフィはすっかりそこへ行く気満々冒険気分になりキラキラとした笑みを浮かべながらいざ船に乗り込もうとしながら大声を張り上げる。彼の中では禁断の聖地を冒険するのが第一で中々帰つてこないナミを迎えに行く事など何処かに捨てているのだろう。ある意味ルフィらしいのが何とも言えない。

「あのすいません、現在風向きが宜しくありません。このままアツパーヤードに行くのであればかなりの時間が掛かると思われます!!」

「なにい?!おっさん、かなりつてどの位なんだ!?!」

「そ、そこまでは……風に聞いていただけかなければ……すいません。この船がダイヤルエネルギーを使用してるのであれば大した時間は掛からずにすむのですが」

勇んで出発しようとしているがそれでも風向きが悪く出発出来ない、ある意味これであつたのかもしれないとウソップは安心するがルフィはすぐさまレウスに船を引つ

張ってくれと要請する。少々渋りながらもナミが心配なのは変わらないのであくまでナミを迎えに行くと言う事を念頭に置くと言う事です承しロープの準備に取り掛かる。船体に大きめの鉄の輪が付けられたロープを括り付け、後は完全竜化したレウスが引張るだけと言う事になると言うところでエンジェルビーチに何やら軍服にも見えるような服装をした集団の男達がやって来た。

「コニス、あれって何だ？」

「ホワイトベレー部隊です、この島で法の番人というべきでしょうか」

「ある種の海軍みたいなもんか」

『へそっ!!』

「へそっ」

「やっぱり、あれ挨拶なのか……」

WB部隊という男達は船に乗っている此方に体を向けるともう一度へそっ!と言う、一応挨拶なのか?と思っているレウスとビビ、そしてロビンはへそつと返す。

「これは態々どうも、我々はホワイトベレー部隊。神官直属の部下である法の番人であり、貴方方ですな青海からの入国者と言うのは」

「ああそうだが……」

「失礼ですが入国の証である手帳を願います」

「あつはい！えつと手帳なら私が預かってます！」

ナミが濡らすといけないとウエイバーに乗る前にビビに渡していた手帳をWB部隊の隊長と思わしき人物に渡す、彼は手帳を確認しながら名前を見ながら人数を確認していく。

「確認いたしましたがお一人足りないようですが」

「ああはい、実は最後のお一人であるナミさんは私が貸したウエイバーに乗って遊んでいるのです。しかし帰りが遅いのでこれから探しに行こうと皆さんと」

「成程そうでしたか。しかし申し訳ありませんが此処で待機を願います、全員揃い確認を取らせて頂きたい。それでもスカイピアに住む皆様の安心の為です」

「えく？困るぜそれは、それじゃナミが行っちゃ行けねえ所から帰ってきちゃうー！」

そのルフイの言葉に隊長は瞳を光らせた、一体如何言う意図があるのかと。

「行つては行けない所、それはつまりアツパーヤードへ行つたと言う事ですがそのナミと言う方は」

「い、いえまだそれが決まった訳ではありません！しかし帰ってこないのでもしやと思いい心配しているのです!!」

「……怪しいですね。もしも貴方方が禁断の聖地への侵入を企てていたのであれば、既に第2級犯罪者という事になりかねんませんが」

「だ、第2級!?ち、違います! 私たちは唯ナミさんを探しに行きたかっただけです! その聖地という場所に足を踏み入れるつもりなどはなく、そこに行つたかもしれないと言う危険があるからその場所とこの場所の間を探そうと言う事です……!!」

何とかビビがこの場を脱しようと言つて試みる、王女と言う立場から多くの学問を修めておりその中には交渉なども含まれている。必死に自分たちの無実を証明する為の材料を組み立てつつ相手の機嫌を損ねず理性に訴えかけこちらの話を聞いて貰えるようにして行く。WB部隊の隊長はビビの言葉とその熱意、そして冷静な話の組み立て方とコニスやパガヤの証言も合わせていくと信じてても良いという結論に至つた。

「……良いでしょう。お嬢さん、貴方の言葉は信じてても良いという結論に至りました。ですがそのナミという方がいらつしやりましたら是非ラブリー通りにあるWB部隊への連絡所へ来て頂きたい。それで、宜しいですね」

「はい有難う御座います!」

「では、これにて!!」

『へそっ!!』

再び挨拶をすると今度は匍匐全身で元来た道に戻っていくWB部隊、法の番人と言うにはあまりにも奇抜で変態のような部隊だ。それでもなんとか事情を解ってくれただけでも十二分な収穫なのだが……今回はビビの話術と交渉術が非常に役に立っている。

WB部隊が帰っていくのをみてビビは思わず大きな溜息を付きながら汗を拭った。

「流石ビビちゃん、王女様だ。見事な交渉だったぜ」

「は、ははっ……さ、流石に緊張しちゃいました……」

「いやよくやってくれたぜビビ!!これでいきなり犯罪者つて事は逃れられた!」

ビビは周囲からよくやってくれたと褒められまくと顔を赤くしながらも嬉しそうに笑いながら酷く照れている、今までは何かとミスをしたりドジをしたりという印象があつたがこれでかなりイメージが変わつたのではないだろうか。そんな時にウエイバーに搭乗したナミが海岸にフルスピードで突っ込んできた。船体を曲げるようにして無理矢理スピードを殺すと皆に鬼気迫るような表情をしている。

「皆急いで船を出すわよ!!急いで!!」

「ナミさん一体如何したんだ?遅いから俺たち迎えに行こうにしてたんだぜ?」

「それは悪かつたけど、私見たのよ、とんでもないのを!!」

ナミが語つたのは空島にも存在したと言う地面がある島、そこは樹齢1000年以上であるだろう樹木が乱立する森が茂りそこでは神官というとんでもない連中が他の空島から来たと言う航海者を襲っていたという。そしてそこに白海で自分達を襲つたゲリラまで現れたと思いきや、突如空が光だし航海者を一瞬のうちに島の一部分ごと消し去ってしまったというのだ。

「ナミさんアツパーヤードに行つてしまつたんですか!? 何て事を……」

「行つたと言うか島の周りに居ただけよ!? それでもとんでもないのよ神とか神官とかつて!! しかも今度は私達を標的にするとか何とかかんとかつて言つてたのよ!」

「俺達を!」

「ええ、なんか畏にはめるとか行つてたから大急ぎで此処を離れないと不味いのよ!!」

ナミの説明を聞きウソツプやチョツパーもこの島を離れる事に大賛成したがルフィはその話を聞いてますアツパーヤードに行きたいと言う欲を掻き立てられていた。ナミは必死にルフィを食い止めようとしている中レウスがパガヤに質問した。

「パガヤさん、アツパーヤードって言うのは島雲なのか?」

「い、いいえ違います。元々はこの空ヴァースにない物、大地と呼ばれている物です。数百年も前に神によつてこの空島へと与えられたとされています、すいません」

「数百年も前に……与えられた……?」

「数百年前と言え、ちょうどノーランドがジャヤにあつたと言う黄金郷を発見した時期と重なるわね」

話を聞いていたロビンも興味をそられたのか其方へと参加した。何か引つかかるレウス、この空にない大地のある島。それは数百年前にこの空に現れた、そしてノーランドは再び訪れたジャヤには黄金郷はなかった……様々な情報を繋ぎ合わせていく

と突如レウスの脳裏にある考えが浮かんだ。

「まさか!?!皆集合だ!!」

突然大声を出して全員を招集をするレウス、一体なんだと言いながらも皆は集まる。

「如何したのよレウス、急がないと不味いわよ!?!」

「ああ。だけど凄い事が解ったかもしれない。皆、落ち着いて聞いてくれ、だがこれに確証はないが」

「いいよ信じるから。だって仲間のいう事だし」

「……サンキュルフィ。まず、この島に大地のある島は存在していなかった。そのアツパードという島は数百年も昔に神によってここに来た今パガヤさんから聞いた」

皆はパガヤの方を向くと肯定しながらもう一度話をする。

「そしてクリケットさんの先祖であるモンブラン・ノーランドは数百年前にジャヤに黄金郷を見つけた」

「時期がピッタリ合うな」

「ああ。そして再び訪れたがそこに黄金郷はなかった……此処までは良いか?」

首を縦に振りながら早く続きを話してくれと急かす。

「次に青海でクリケットさんの家についてだ、あの家は2階建てなのに何故か2階へ行く為の場所が無かった」

「欠陥住宅か？」

「そうじゃない、俺が言いたいのは……黄金郷であるジャヤはこの空島にあるアツパ―ヤードの事じゃないのかって事だ!!」

『な、なにい?!』

思わず驚愕してしまった、あの猿山連合軍の皆が捜し求めていた黄金郷。それは海底に沈んだのではなくこの空へと上がってきたのではないかと言うのだから。

「じゃ、じゃあどうやって空まで上がってきたって言うんだよ?! 島だぞ島?!」

「それは恐らく突き上げる海流だろうな、島さえ吹き飛ばすようなとんでもない爆発が起きたんだ」

「有り得るわね……クリケットさんは爆発位置は毎回違うって言ってたし」

「それじゃあノーランドの日記にあった髑髏の右目に黄金を見たって言うのは……」

「さあ、やって見ればわかる。ウソップ、スカイピアの地図だ。ナミちゃん、ジャヤの地図を」

二つが出されレウスはそれを何とか合わせてみようと苦心してみる、クリケットが住んでいた家の位置を計算しスカイピアの地図を合わせようとする事約15分、それは実を結んだ。二つの地図、それを合わせてみた結果ジャヤと言う島の本来の姿が現れた。それはまるで巨大な髑髏のような形をしていた。

「髑髏に見えるぞ!!んじや黄金は…!!」

「右目、此処だな。さあ如何する皆、黄金は目の前まで来てるみたいだぜ。海賊として、行くか?それとも逃げる?」

「決まってるじゃねえか、海賊が目の前のお宝を逃すかよ!!」

「よおし野郎共やるぞおおお、黄金探しいいいつつつ」

『おおおつつつ!!!』

!!!!!!

空の王者、黄金郷に着くまでの間

「それじゃあパガヤさん達、私たち行くわ」

「は、はいでも本当に行かれるんですか……?」

「ええ。もうルフイさんが行く気満々ですし、此処に居るとお二人に迷惑が掛ります」

この空島にあの黄金郷があると判明すると皆は海賊としての血が沸き上がり、今すぐにもそのアツパーヤードに行こうと口にはしている。例えそこに危険かつ強敵が居たとしても海賊が後少しで手が届こうとしている宝を放置してそのまま何処かに逃げる事など全く出来ない。立ちはだかる敵が居るのならば全てを薙ぎ倒して目当ての宝を掻つ攫つて行く、それが自由な海賊と言う物だ。そして加えて言うのであればあちらは此方を罠にかけるつもりでいるそれならばこちら側から突撃してやろうでは無いかという事だ。

「しかし皆さん……神官はホワイトベレー部隊とは比べ物にならない強さで……!!」

「コニスさん、それ以上言っても無駄でしょう。これ以上お引止めしたとしても行かれるのでしょうか?」

「ああ、俺達は行く!おっさん、美味しい飯ありがとな!」

「いえいえ……ではこちらを持って行ってください」

そう言うとパガヤは修理が完了し現行タイプのウェイバーにかなり近づいているポロポロだったウェイバーを差し出してくれた。何とか修理が間に合ったらしく、使えなかった物を使えるようにしてくれた。

「有難うおじさん!!本当にウェイバーだひやつほ〜い!!」

「ナミさん。幾つかの注意事項を口頭でお教えしたいのですが時間が惜しいでしょう。こちらの方に注意事項を書き起こしたので確りとお読みになった上でお使いください」
「うんありがとう!よしレウス、メリー号に積み込んで!」

「あつ俺がやるのね。まあいいけどさ」

パガヤとコニスの厚意、いや心配故に渡されたウェイバーや空の食材を船に積み込むと大急ぎで船を出航させた。畏にかけようとするならば此方に向けて確実にアクションを起こそうとする、ならばあの親子が巻き込まれる可能性も高くなってしまうのを危惧し丁度風向きも変わりアッパーヤードへと進路を取る。猿山連合軍が捜し求めている黄金郷、どれ程の黄金が自分達を待っていてくれるのか。ドキドキとワクワクが身体を弾ませる。

「黄金郷か〜やつぱり綺麗なんだろうな〜」

「黄金か〜、沢山手に入ったら俺たち金持ちだな〜。銅像買うんだ俺!」

「いやお前黄金を銅に変えて如何すんだよ、つうか何処に置くんだよ」

船首付近で先を見つめ続けるルフィとチョッパー、考えるのは早くも黄金を手に入れてからの使い道だった。ルフィは自分を模った銅像を妄想しそれが船に乗っているのを想像するがゾロの置き場所と管理が面倒だろという言葉に夢が粉碎されるのであった。

「俺はまあ飲み放題だな」

「俺は本が良いな、俺の知らない最新医学が乗ってる本！」

ゾロは酒の飲み放題、チョッパーは医学の勉強をするために本という考えだった。ルフィに比べればゾロのやりたい事も解る上にルフィに比べてよっぽど良い物だろう、チョッパーに限ってはかなり健気である。遊びたいとか好きな物を食べたいとかではなく自分の医者としての能力を高めたいという思いから来ているから何とも言え無い。しかも本である、医療器具とか薬ではなく本である。

「……チョッパー、本ぐらいなら俺が買ってやるよ」

「ホントレウス!？」

「ホントホント」

この船で最も金を持っているのが財布を握っているナミ、その次が緊急時の金策を發揮出来るレウスである。彼の鱗は一般市場でも良い素材として見られるので鱗一枚で

1470ベリー程の値段で取引されている。鱗は剥ぎ取っても直ぐに生え変わるのでも量産する事が出来る、故にナミの次に金を持っているのがレウスである。

海雲の上を進み続けていくメリー号、風はあるものの自ら風を発して前進するウエイバーとメリー号では重量もスピードも異なってしまう為流石にウエイバーでは既に着いている筈だが中々到着しない。その間にナミはウエイバーの注意書きを読み込んでいく。

「そうだビビ、頼まれた武器出来てるぜ」

「本当ですかウソツプさん!？」

「ああ。レウスの鱗とか牙で作った武器、ちよつと初めてで戸惑ったけど会心の出来だぜ!!」

「有難う御座います!」

様々な思いをその胸に抱きながらもメリー号は黄金郷と呼ばれたジャヤ、空島へと打ち上げられアツパーヤードと名を改められた地へと向かっていく。目指すは黄金、海賊が夢を見る心躍る財宝達。空の大冒険が今、始まるうとしていた。

空の王者、黄金探しを開始する

途中風などが変わった影響で到着時間が変動してしまい夕暮れに到着した島。禁断の聖地とスカイピアの人々に認識され敬われている土地、神が住む土地アツパーヤード。空にある島であるにも関わらず島雲ではなく真正銘の土によって形作られている島。完全に青海にあるものと同じ島にレウスの仮説は本当に正しいという確証が持て始めた。加えて

「おいこれってひし形のおっさんの家じゃねえか!？」

「こりや…自分で言っておいて何だが、仮説が此処まで当たっていると怖いぐらいだな」
今朝まで青海で見ていた物と同じ物、クリケットが住んでいた家の半身と言える部分を見つける事が出来た。それは酷く蔦に覆われ、長い時の流れによって自然に飲み込まれていた。だがこの発見によりこのアツパーヤードが本当にジャヤであるという確証を得られた上に島の正確な座標を導き出す事が出来、三度地図を合わせ、正確な地図を見出せた。正しく髑髏のような島の右目、そこに黄金はある……!!

「よしそれじゃあ皆、もう日が暮れちゃうから今日はこのままキャンプにしましょう。黄金探しは明日の早朝からスタートよ!!」

『おおっ!!』

ナミの指示を受けて上陸してのキャンプを開始する麦わらの一味、船の上では襲撃された際に船を壊されるかもしれないと言う懸念の上。兎も角皆はキャンプをしながら明日、黄金搜索チームと船で待機しつつ皆が戻つて来次第出航する準備を整えておく2チームに別れる事となった。

「俺は冒険に行くぞ！来ちゃいけねえ所なんて冒険の臭いがプンプンするじゃねえか!!」

「敵地なんだろうこは、なら行かねえ手はねえだろ」

まず真つ先に立候補したのは船長と、一番付き合ひの長いゾロ。元々血気盛んな二人が行きたがるのは予想済みであり特に皆は止める事はなくそれを認める。

「私も行くわ、この島は是非とも調べて見たいもの」

「俺も行くぞ！冒険して、一人前の海賊になるんだ！」

次に考古学者としてこの島にある黄金郷が気になるロビン、歴史的に貴重な物などがあるかもしれないと言う思いからチームに入る事とする。そして意外な事にチョッパも黄金搜索チームに志願、言い方が悪いがお世辞にも勇敢ともいえず臆病な彼からしたら珍しいと言えてしまう。チョッパもそれを気にしているのだろうか、それを乗り越えて立派な海賊になる為の名乗りでたようだ。

「私も行きたいです」

「ビビ貴方も？きつと島の奥はかなり危険よ……？」

「良いんです。私だつて皆の仲間なんですし、私はもう海賊です！」

そう笑つてナミの忠告を聞き入れつつも搜索チームに加わつたビビ。この空島は新しく仲間になつたビビとしての初めてとなる記念すべき冒険、皆と同じ海賊と言う立場になつたのだから少しでも皆と同じ冒険がしたいと語つている。その表情は何処か生き活きとしており輝いている。そんな笑顔を見たナミは肩を竦めつつ了解しながら、レウスも搜索チームに行つてと言う。

「いいのかい、ナミちゃん」

「ええ、チームの中でフォロー出来そうなのつてロビンしかないじゃない？ロビン一人じゃ大変そうだし、ブレーキ役お願いね」

「ああそう言う事ね。解つた良いだろう」

加えてもしもの事態の保険として、ビビが空の騎士からプレゼントされたホイッスルを持つ事となつた。この中では彼女が持つのが最適であるとレウスも納得した。こうして黄金搜索チームはルフィ、ゾロ、ロビン、チョップ、ビビ、レウスに決定。ナミ、ウソップ、サンジが船での待機チームとなつた。その後は敵地だと言うのにキャンプファイアーが開始されてしまい、ビビは慌てながらも最終的にはもう止めるのを諦め楽

しんでいた。

そして翌日……遂に麦わら一味による黄金探索がスタートした。数百年前にこの空へと飛ばされた島であるジャヤ。青海のジャヤとは比喩物にならない森、この空の環境によつて巨大化されたと思われる木々の中を進んで行く探索チーム。目指すはノーランドの最後の言葉にあつた鬮の右目。

「にしても本当にこの森ってあの森と同じなのか？」

「登りてえな！」

「恐らくこの空の環境によつて巨大になった、と思うべきね。青海の環境とは全く違うだろうし」

「凄い。なんか、ドキドキしちゃう……！これが冒険！」

「おおおっ……。なんか俺もわくわくドキドキして来た！」

一行はジャヤと同じ森であろう筈の巨大樹林の間を行きながら、地図通りの右目へと向かつていく。初の本格的な冒険にビビは嬉しそうに軽くスキップしてしまっている。チョップも同じなのか、ドキドキしつつもこれを気に立派に海賊になろうと言う思いの元、足取りを軽く進めて行く。そんな彼らを一番後ろから見つめつつも何処か保護者の的な雰囲気を出しているレウスは周囲を警戒していた。

「神の住む土地、アツパーヤードか……。何時、何処に敵が出て来ても可笑しくは無い……」

何時でも竜化出来るような心構えを持ちつつも足を前に進めて行くと突然木々の間から何かが動くような音が聞こえてくる。思わず身構えながらもゆっくりと周囲警戒をして見ると木の間に何か巨大な何かが蠢いているを見てしまった。

「皆気を付けろ！なんかいるぞ!？」

「何だ敵か？なら俺にやらせろレウス」

注意を促す言葉は直ぐに皆に伝わり一旦足を止めるが、特に血気盛んなゾロは刀に手をかけながら自分にやらせろと言う。ビビはそんな事言ってる場合じゃないでしょ、と言いながら周囲に目を配りつつレウスの傍に寄った。皆が周囲を警戒していたとき、それは姿を現した。

「ジュラララアアアツツ……!!」

余りにも巨大すぎる身体、周囲の木々よりも太い身体を持っていた。最早神話に登場する怪物レベルの大きさと存在感にビビとチョップは思わず顎を外しそうな勢いで呆然としていた。身体にはニシキヘビのような模様と鱗が重なっておりこれも空島の環境が育んだ結果だと言うのだろうか。

「面白れえ、斬ってやろうじゃねえか大蛇!」

「ちよつと挑発しないでくださいよ!」

悲鳴のような声に反応したのか大蛇はゆっくりと身体を動かしつつこちらに狙い定め始めた、そして身体を伸縮させると、その反動を利用してバネのように伸び、一気に襲いかかってきた。一同はジャンプし回避するが、大蛇はそのまま大口を開け木へと激突した、が木からは異様な煙が上がり始めた。大蛇が木から離れると噛まれた部分はドロドロに溶け酷く抉れていた。

「ど、毒!」

「なんつう毒だよ、即死物じゃねえのか……!!」

「毒液に触れるな!! 即死だぞ!!!」

「全員、逃げろおおおっ!!!」

回避した全員はまだ此方を睨み付けてくる大蛇から逃れる為にバラバラに回避しあさつての方向へと逃げ始める。パニックを起こしているチョッパーや完全に大蛇を煽っているルフィ、持ち前の方向音痴を發揮してどこぞへ迷い込んでいるゾロなどそれぞれがとんでもない方向へと向かっていた。

「ビビちゃん確り掴まれ!!」

「はっはい!!」

「だああもうこつちくんじゃねええええつ!!!」

飛べると言う特性を發揮しつつビビを抱えたまま木々の上を移動して行くレウスだが、逆に悪目立ちしてしまっているのか、大蛇はレウスとビビに狙いを付けて追い掛け回していく。それを振り切る為にスピードを上げて一気に移動していくレウスは確りと胸にビビを抱きつつも、大蛇の追撃を躲しながら根つこの中へと姿を隠す。余りの速度に流石に大蛇も見失い、そのまま近くに見えたルフイを追うように移動をしていく。

「……どっかに行っただか」

「はあ……いきなり凄い事になりましたね」

「だな……」

根の間から這い出す二人は元のコースへと戻り皆と合流しようとした時、明らかな敵意を感じた。身構え頭上を見上げると、巨大な鳥の背に乗った男がこちらを鋭く見下ろしていた。

「貴様らか、青海人と言うのは。よくぞ来てくれたな、俺のテリトリーへ……!!」

「行動起こしていきなりこれかよ……。行くぞビビちゃん!」

「ええ、レウスさん!」

空の王者、神官と戦う

眼前に舞い降りてきた巨鳥の背に乗りながら此方を嘲うかのような笑みを浮かべている男は、槍で肩を何度も叩きながら品定めをするかのように此方を見つめ続けている。巨鳥と同じく研磨され鍛えられた刀剣と等しい眼差しから放たれる殺気に僅かにビビは心を震わせたが、それは直ぐに消えていた。傍にはレウスがいる、という安心感と自分ももう守られるだけのお姫様では無いと言う自覚が打ち消していた。

「青海人……二人か、まあいいだろう。来ただけで上々。ようこそ、我が紐の試練へ……!!」

「紐の、試練……?」

「そうだ。このアツパーヤードにて裁かれる罪人が挑む試練、それが我ら神官が試練。ここは生存率3%の紐の試練……!!」

3%、僅か一桁の凄まじく低い可能性だがレウス自身は確かに低いが絶望やキツイと言う実感などはなかった。リオレウスから入手出来る最高峰の素材であるへ火竜の天鱗は1〜4%という確率で入手出来ていたのだからその程度の生存率なら問題ないと思えてしまう。

「3%ね……敵を倒す戦いなのに3%って可能性は与えすぎなんじゃねえか？」

「……そうですね、畏であるならもつと突き詰めて完璧を目指すべきですからね」

「フツフツフツ言ってくれるじゃないかお嬢さん……そう思うのならば掛かって来い！

このゴッド・エネルに仕える神官、シユラが相手をしてやろう!!」

手首のスナップを聞かせ槍を回転させながら挑発するかのような態度を取るシユラ、余程自信があるようだ。

「試練ね……海賊にそんな物は関係ねえな、唯邪魔をする奴なら吹き飛ばすかぶちのめして前に進むだけだぜ」

「簡潔で良いですね！」

ビビは腰に付けていた二つの筒のような物を手に持つとそれを連結させるかのようにする、それは瞬時に伸縮し長い棒のようになりつつも一部が外れ湾曲し弓となった。これこそ、ビビ専用の武器としてウソツプとレウスが共同で開発した武器、穿竜器である。

「ほう……弓か」

「弦には孔クジャッキ雀の紐が使われてる、扱い易いはずだよ」

「はい、行きますー！」

構えを取るレウスに合わせるように矢を抜き弓に当て引き絞っていく、通常の弓では

考えられないほどに伸びていく弦にシユラは少し面白そうな物を見るかのようにニヤリと笑っていた。目の前のニヤついている男を狙うビビ、そして遂に矢を放った。

「はっバレバレな矢など誰が当るか!!」

バク転で回避しながら巨鳥に飛び乗ったシユラ、回避された矢は真つ直ぐと突つ切りながらそのまま大樹に直撃すると軽く炸裂するかのような音を立てながら着弾点が燃え上がった。

「なっ矢が燃えるのか!？」

「余所見は厳禁だぜ!!」

外れた矢が燃え上がったのは流石に予想外だったシユラは僅かに其方に気をとられている間に前方から迫ってきたレウスへの反応が遅れた。が、巨鳥、シユラの相棒でもあるフザが大きく声を上げながら大口を開けてレウスを迎え撃った。

「馬鹿め、フザが唯の鳥だと思っっているのか!？」

「ッ!？」

「グアアアアアアア!!!!」

レウスも何かを感じ取ったが回避するには余りにも気づくに遅すぎた、フザの口内から感じる暖かいとは言えないほどに熱い空気の奔流。通常の生物が持つて良い程の温度では無い、熱い空気が流れている。そして空気を燃やし尽くすかのように炎が鳥の口

内から一氣に吐き出された。

「火、火を吐いた!? 普通鳥は火なんて吐けない筈!?」

「如何だ青海人、愚かな事をツ、い、否まだ!?」

炎に包まれたレウス、普通ならばフザが吐き出す炎によって焼け焦げている筈なのに奴は無事だと言うビジョンが見えた。迫って来るそれへと突き出した槍、確かな手応えと燃え上がる槍はレウスの体を焼いていく筈なのに奴は無事だと理解してしまっている。炎が晴れた時、そこには炎を衣のように羽織った男が、槍で肩を燃やされているにも関わらず平気そうに此方の肩を掴んでいた。

「——へえ燃える槍か、面白いじゃねえか。だけどな、俺の身体を燃やし尽くすにはこの炎も、槍も、温過ぎるんだよ!!」

「がああっ!?」

握り締められた肩はメキメキと骨が悲鳴を上げて行く、肩を掴んでいる腕を殴り付けるが並大抵の硬度では無い。振り解く所かこのままでは自分の肩は粉碎される、シユラはレウスの胸へと手をやった。

「これなら如何だ青海人!! ——インパクト衝撃!!」

「何を——がっ!?」

瞬間、シユラの手から放たれたのは衝撃波。唯手をやっただけで起こせるような物で

はなく、巨大なハンマーで胸を殴られたかのような衝撃が身体を貫いた。シユラの方を掴んでいただけにシユラにもその衝撃は伝わっていたが覚悟の上だった。いきなりすぎる衝撃にレウスは手を緩めてしまいその隙にシユラは蹴りを入れつつ後退しフザの背に飛び乗った。

「はあはあ……奴めなんて力を……!!しかし俺も修行が足りんな、まさか炎を物ともしないとは……それで心綱マントラが乱れてしまった……!!」

脱出には成功したがそれによって粉碎寸前だった肩にも大きな衝撃が加わり片方の肩が全く動かなくなってしまった。代償は大きい、だがそれでも奴に衝撃を当てる事は出来たと思ったがレウスは空中で数回回転するとそのままビビの傍へと着地し、酷く咽っていた。

「ゲホゲホ……何だ今の……!!奴の手から衝撃が……!!」

「大丈夫ですかレウスさん!!衝撃……掌で押した衝撃で攻撃を!!」

「否そう言う類では無いと思う……あいつは俺の胸に手を置いた、そして次の瞬間には衝撃が……!!」

防御を無視して相手に直接ダメージを与えられる衝撃を武器として使ってくる、かなりやっかいな手段を持っている事になる。レウスは荷物を降ろし身体を竜化させていき人獣形態へと移行する。

「貴様、動物系の能力者か……!!炎を物ともしないとは流石に驚いた……」

「へっ火を吐く鳥に乗ってる奴が良く言うぜ。さてと、第二ラウンドだ、援護頼むぜビビちゃん!」

「はい任せてください!」

素早く矢を番えそのまま放つビビ、そして自らの翼を羽ばたかせて猛進するレウス、フザに指示を出し上へと昇り始めるシユラ。放たれた矢とほぼ同速度で飛ぶレウスは上へと逃げていくシユラを見ると自分の横を飛んでいる矢を掴みそれを一気に上へと放り投げた。

「その程度このシユラが解らぬと思っているのか貴様!!」

「先読みの能力があるようだなお前!俺がさつき、炎に包まれた時も先の風景が見えて居たかのように反応していた!」

「ならこれなら如何です!!」

フザの真下から迫って来る矢に加えて右下から迫って来る新たな矢、二方向から同時に迫って来る矢。

「フザ回避だ!!」

「グアアアア!!」

シユラの力、へ心綱によって見えたレウスとビビの行動。それによる回避や先読みじ

みた行動はフザに素早く指示を出せる、その言葉に従って回避する巨鳥だがその動作に入った瞬間にシユラは三度レウスの次の行動を見てしまった。

「なつまさか貴様つ……!?!」

「はんっ!!」

回避、だがその移動先にそつと置かれるかのように放たれたレウスの火球。シユラは心綱によつて敵の動きを先読み出来る、だがフザはそれをする事が出来ない。シユラが読み取つた情報を命令としてフザに伝えるにはラグが生じてしまい伝達が間に合わなくなる。パートナーという存在が一方に付いて行けなくなってしまう、これがシユラが背負っている弱点。

シユラは思わずフザから飛び降りてしまった、攻撃を回避する為に相棒から跳躍した。その瞬間にしまった!と言わんばかりにフザを見つめたが、フザはそのまま不意打ちに近い火球を諸に受け口から炎を吐き出しながら墜落して行く。それを辛そうに見ながらレウスを睨み殺すかのように鋭い目で見つめた。

「貴様あああつよくもフザを、我が相棒を!!」

怒りを露にしたシユラは槍を構えながらレウス目掛け、その心臓に槍を突き刺さんと駆け出して行くが次第にその動きが鈍く、遅くなつていく。突き出した槍はレウスの眼前で停止しピクリとも動かなくなつてしまう。シユラは相棒を討たれた怒りに駆られ半

ば忘れていた、この場がどのような場なのかを……。ここは自らの試練である紐の試練の場、試練の為に張り巡らせた仕掛けに自分が掛ってしまっていた。

「しまった、紐雲が……!!!」

「紐雲……?」

「レウスさんこれ見てください!」

ビビが空中の一部を指で触れているのが見える、何かを弾いているようにも見えないが良く見えない。だが目を凝らして見ると目に見えないほど細かい、糸のような雲が張っているのが見えた。自分にもかなりの糸が掛かっているのに漸く気付いた。此処は紐の試練、目にも見えないほど細かいが束になれば大人さえ動けなくなる〈紐雲〉が張られているのが、リオレウスという竜の圧倒的なパワーを有しているレウスを縛るには余りにも少なすぎたようだ。

「驚いた……今矢を落とすしちやっただすけど、矢が宙に浮くんですもん。何かと思ったら細い雲が」

「成程な……。さてとシユラとやら、覚悟はいいかな」

「グツクそ……!!フザの、仇を……!!!」

「ビビちゃん、あれをやって見てくれ。こいつなら失神ぐらいで止まるだろ」

「解りました」

慎重に紐雲を避けつつ近寄ったビビは弓を元の筒状に戻しつつも筒を弄り始めると筒が少々伸び持ち手のような部分が出現しそれを確りと握ったビビはそれを構えた。そう、ビビの武器はある時は弓、ある時はトンファーのようにも姿を変える二面性を兼ね備えた武器。

「さあ行きますよ……!!はあああつつつ!!」

トンファーのように姿を変えた武器を構え、それをシユラの前に構えながら持ち手部分を操作していくと、弓の時のように本体が伸びていく。そして伸びきったそれをシユラへとぶつけると、伸びた部分が一気に戻り身体の内側へと衝撃波を放つかのように炸裂した。

「穿竜!!」

「……があつ……!!」

紐雲のせいで全く身動きの出来ないシユラはそれを喰らい血を吐き出した。鮮血が地面を染める光景を見つつ顔を上げて見れば、そこには相棒を打ち落とした男が竜頭を構えていた。

「貴様……!!貴様は俺が……!!」

「眠れよ」

竜頭が腹部に炸裂した、紐雲によって吹き飛ばされる事もなくその場に留まったシユ

ラは相棒の仇を討つことも出来ずにやられる事を恥じつつ、フザに謝罪の念を抱きながらそのまま意識を喪失し槍を手放した。

「やりましたねレウスさん！ってあら……」

「あれま、やっぱりまだそっちは強度不足かな」

一部が壊れてしまった武器を見つつビビは舌を出しててへへと笑う。それを見つつレウスは自らの身体を燃やそうとした槍を拾い荷物を背負いながら、ビビの武器を軽くメンテしてから再び黄金探しを再開した。

空の王者、危機を覚える

「ゴツド・エネルのメエくにおいて貴様らを排除させて頂く。この必殺の斬撃アックスダイヤル貝の威力をぐい賞味あわあああ!」

「ガタガタ言う前に攻撃すりやいいのに」

「これで大体4人位倒しましたね」

「だな。さてと、有難くお前らのダイヤルは貰っていくぜ」

神官シユラを打ち破ったレウスとビビのペアは書き写した地図に従いながら髑髏の右目へと向かっていく。その途中シユラのようなエネルの配下と思われる神兵という者達が襲いかかってきたが、それを容易く返り打ちにしながら、神兵の所持していたダイヤルを奪い足を進めて行く。自分たちは海賊であって正義の味方などでは無い、寧ろ正義の味方の敵側のような存在。追い剥ぎのような事をしたとしても可笑しくは無いし貴重な空島の資源の確保にも繋がる。

「これで斬撃貝が4つ、フレイムダイヤル炎貝が1つ、衝撃貝が2つですね」

「この神兵って連中に共通して言えるのは斬撃貝を持つてるって事だな。一人だけ予備なのか知らんけど他のも持つてたが」

明らかな敵意を持ちながら攻撃を仕掛けてくる神兵と名乗る敵。先程倒した神官シユラといい、エネルは自分達青海からやってきていている人間全員を敵と認識させている。普通に考えてこれからもこちらを狙って攻撃してくるだろう。この神兵が襲いかかってくる分には特に問題は無い。神官と違って此方の動きを読む事は出来ないようにでビビも倒す事が出来る程度の強さしか持たず、斬撃貝に頼っている部分も強い。

「ついでにこの槍も槍自体が燃えるじゃなくて内部に熱を発する貝が仕込まれてたんだな。ちよつと残念だな、燃える槍とかカッコいいのに……」

「まあでも戦力アップじゃ無いですか、それにレウスさん槍術が得意って言ってませんでしたっけ？」

「棒術ね、こーういったランスは使えないんだよな……棒状で先が刃になってるだけなら使えるんだけど」

シユラから手に入れた槍は所謂円錐型なので棒術を使えるレウスには余り使えない代物となっている。それでも投擲武器としては十二分な武器となるのでそう言った方針で運用しようと思っている。貴重な武器である事に変わり無いので背負ったまま足を進めて行くと、森を抜け、島雲に侵食されてしまっている古代の遺跡群へと足を踏み入れた。

「遺跡、か？」

「みたいですね……アラバスタでもこんな感じの遺跡を見た事あります」

此処も嘗てはジャヤの黄金郷の一部だったのかもしれないが、400年も前に空に打ちあげられた事で空の環境にじわじわと侵食されていったのだろう。長い時の流れには人が作った建物など容易く飲み込まれて消えて行くのが定めなのかもしれない。僅かな悲しさを覚えながらも足を進めて行くと、ビビが急に悲鳴を上げた。慌てて振り返ると、ビビの下半身が雲に沈んで行っていた。

「な、何これ!?か、身体が沈んでいく!?!」

「ビビちゃん掴まれ!!何だこれ沼か何かか!?!」

まるで沼のような雲、それに足を取られどんどん引きずり込まれていくかのように沈んでいく彼女の手を掴み引つ張り上げる。幸い引き上げるのに余力は入らず簡単に引き上げられたが、何とも不可解な雲だ。まるで罫のように仕掛けられていたような印象まで受けてしまう。

「あ、有難う御座いますレウスさん……」

「ああ、だけどこれは雲の上を進んで行くのは危険だな。遺跡の上を行こう」

共に遺跡の上へと飛び乗りその上を歩いていく、流星にあの沼のような雲も遺跡を行けば沈む事も無い。足場は悪いか沈んでいくのに比べれば楽な物といえる、そのまま歩いていくが

「あれ、トニー君!？」

「チョッパ―お前何やってるんだ!？」

「お、おとおつレウスにビビイ〜!!良かった無事だったんだあ!!」

そこには身体中に傷を作っているチョッパ―が腰掛けながら水筒をぐびぐびと飲んでいる。身体の傷から察するに自分たちと同じように戦いがあったのだろう。

「大丈夫かチョッパ―、お前傷だらけじゃないか!」

「え、えへへ……ちよつと神官と戦ってたんだ。でも俺、一人だったけど勝ったぞ!!これで俺も立派な海賊だ!!」

「ト、トニー君一人で神官に勝ちちゃったの!？」

思わず驚きの声を上げてしまった、先ほど自分たちもシユラと戦ったがこの空特有の戦い方や相手の動きを先読みする能力もありかなり厄介な相手だというのにそれをたった一人で打倒したという言葉に驚いてしまった。シユラは相棒であるフザを倒された際の怒りに身を任せていたせいで容易く倒す事が出来たがチョッパ―は真正正銘の真つ向勝負だった、相応の傷を受けてしまったがそれでも倒したチョッパ―は立派と褒められて良いだろう。

「兎に角チョッパ―良くやった、正直に驚いたよ。強くなってるんだなチョッパ―も」

「馬鹿野郎そんな褒められても嬉しくねえよこのやろう♪」

「ねえレウスさん、なんでトニー君ってこんなに可愛いんでしょうね」
「だよね」

兎も角応急処置を終えると次はこれから如何するかと言う話になった。この遺跡には何もなさそう故、チョップパーはあの巨大な蔓を登って上に行こうと考えているらしい。それに賛成しいぎ蔓へと向かおうとした時、森から凄まじい速度で此方へと迫って来る何かを感じ取りレウスは二人を脇に抱え一気に飛びあがった。

それは森の大樹を移って行きながら姿を現した。先ほどまで自分たちがいた遺跡は粉々に吹き飛ばされた、だがそこに何もいないと解ると日の元へと優雅に姿を現しながら嘶きを上げた。伝説などに登場する幻獣、ユニコーンのように頭部に生やした一角。美しい白銀に光る体毛に覆われたその姿は酷く幻想的で、この世の物とは思えない美しさは神々しささえ垣間見える。

「何あれ……凄いきレイ……」

「すっげえ……」

ビビとチョップパーがその幻想的な光景と美しさに心を奪われている際もレウスは思わず汗を垂らしながら自らの不幸を呪ってしまった。なんと存在がこの空島にいるのだろうか。あれは自分と同じくモンスターと区分される生き物、だがその常識外れの生態と力故に他とは一線を画されている存在。通常の定義に収まり切らない、”存

在自体が例外”とでも言うべき絶対者。

古龍種、幻獣 キリン 出現。

今、アツパーヤードにて——幻獣と空の王者の戦いが始まろうとしていた。

空の王者、古龍と戦う

神の国、スカイピア。この瞬間にこの名を聞いたとして誰もそれに異議を唱えようとする者は居ないだろう。眼下にて神々しくありながらも幻想的、優雅な姿をした存在がその証明となっていると誇張しているかのようだった。天より差し向けられた神の使い、もしくは神自身なのではないかとすら感じてしまう圧倒的且つ絶対的な存在感にレウスに抱えられている二人は目を奪われた。美しくも気高く輝きを放つ体毛は見る者を魅了してしまう。だが一人、レウスだけは違った。何故あんな存在がいるのかと齒軋りをしてしまっていた。

「(冗談きつすぎるぞ……なんで、なんで古龍がこんな所にいやがんだ……!?)」

最早神の世界の住人とも思えてしまう程の存在の名はキリン、リオレウスなどと同じくモンスターとして扱われている生き物ではあるものの、その力は最早人智を遙かに超越してしまっている。飛竜であるリオレウスとは明らかに格が違う存在、古龍種に属する龍。その外見から龍とは思えぬが、古龍その物自体が龍という物とかけ離れている。

「レウスさんあれって……?」

「兎に角、こつちに敵意を持つてるのは明らかだな……」

「でも凄い綺麗だな」

「(内面も綺麗だったらいんだけどな……)」

古龍とは非常に長寿で特異な能力を持ち他とは一線を画するモンスターの総称である為容姿は然したる問題では無い。生息、形態共に極めて異質でありつつ不明瞭であるがどの古龍もいずれも天災に匹敵するほどの力を持つとされている。勿論、目の前にいるキリンとて例外ではない。古龍 キリンが持つ能力、それは――

「っ!!危ねえ!!」

キリンが天に向かって嘶きを上げようとした時、周囲の空気がバチバチとした張り詰めたような物へと変貌しレウスの全身を突き貫けるような電流が走った。本能が打ち抜かれるような脅威、全身が逆立つかのような震えを感じ二人を抱えてその場から飛び退いた。この行為が僅かでも遅れていたならば3人はやられていただろう。天へと上げられた嘶き、それによって巻き起こった事象、それは――落雷であった。

「キヤアア!?か、雷!!」

「く、雲つてもねえのに!!快晴なのになんで!!」

天から降り注いで行く雷、それはまるでレウス達を裁く神の意図のように追尾するよう落ちていく。キリンが古龍として認識されている理由、それが自在に雷を操る力である。例え快晴であったとしても自らの意思で雷を落とす事が出来るといふ力を宿し

ているモンスター、そしてこのキリンという存在は荒々しく攻撃的な性格でもあるのだ。

「やろおふぎけんなあ!!」

竜頭へと変化された腕を突き出し火球を打ち放つレウス、直撃すれば軍艦ですら無事でもすまないような火球が向かって来ているのにも関らずキリンは動じず軽く嘶いた時、火球を貫く雷撃が落ち火球を散らしてしまった。身動きすらせず、自分の攻撃程度脅威にすら映らないという事だろうか。

「二人とも、兎に角動き続けろ！止まったら雷を食らうぞ!!」

「こええええつつ!!?!? ビ、ビ乗って!!」

「う、うん!!レウスさん如何するんです!?!」

「逃げてでも無駄だろうな！俺が相手をする!!」

この中での古龍の危険性を理解しているのは自分だけ、そして弱点も把握している。ならば自分が行くしかないと思つた、翼を広げつつ飛び上がり一気に迫って行く。それを見下すかのような視線で見つめる古龍は嘶きを上げレウスへと雷の槍を無数に振り下ろしていく。それを辛うじて、本能が感じ取っている雷と言う脅威に脅える感覚を利用しつつそれを寸前で回避しながら前へ前へと進んでいく。

「この、ドスケルビがあああつ!!」

けでは無いが有効とされる力が電気、雷であった。尋常では無い苦しみだった、そして身体が痺れてしまっている。

「レウスさんを助けないと、トニー君!!」

「解ってる! 確り掴まっててビビ!!」

膝を付いて苦しんでいる仲間を救わんとチョッパーに乗ってビビは声を張り上げた、チョッパーもそれには同意だった。レウスは大切な仲間、助けられない理由など無い。雷は恐かったがそれ以上に助けたいと言う思いが勝った。

「いつっけ!!」

チョッパーに騎乗したまま弓を構え、矢を放った。まだ慣れていないがそれでも狙いは十分、真つ直ぐキリンへと向かって行きその体へと命中した。だがその身体は傷一つ付いていなかった。

「う、嘘っ!?!」

「さ、刺さりもしなかった!?!」

チョッパーは既に神官との戦いでランブルボールを使用してしまっていた、6時間に一つが適量という劇薬。直ぐに使う訳にも行かずビビの弓を頼りにし自分は彼女の脚として専念しようと思っていた矢先の出来事だった。矢の先端が刺さる事も無く矢は自ら燃えて消え去ってしまった。余りにも硬すぎる外皮。故かキリンは興味すら引か

れていなかった。再び矢を番え今度は頭部を狙い放った。最早やけくそだった、頭部に当たれば此方へと意識が向き、レウスが動けるようになるかもしれないという気持ちからだった。

「——ッ！」

矢が頭部の角付近に直撃した、矢は突き刺さりキリンが苦しそうに暴れ始めた。頭を激しく振るい矢を取り払おうとしているかのようだった。弱点は頭部の角とビビが思った途端、その周囲に落雷が落ちた。直撃こそしなかった物の凄まじい破壊力の雷の衝撃は既にダメージを受けているチョッパーの意識を奪い去り、三度落ちた落雷はビビの意識を奪い取った。

「ビビちゃん!!! チョッパー!!!」

痺れる身体を無理矢理動かすように地面を強く蹴りつけて二人の元へと跳んだ。駆け寄った二人は完全に気を失っており既に戦えるような状態ではなかった。直撃でないのにこの威力……途轍もない力だがそれを上回るかのようにレウスは怒りを沸きあげさせた。未だ激しく頭を振るっているキリンを他所に二人を傍にあつた遺跡の影に移すと強引に身体を痺れを振り切り古龍を睨み付けた。

再び落とされた雷はキリンを直撃し受けた矢を一瞬で消し飛ばした、少々深く刺さつた矢を抜くのを諦め雷を落とし無理矢理焼き払つたのだろう。雷を受けたと言うのに

キリンは全くダメージを受けているような様子は無い、古龍という存在の出鱈目さを目の当たりにしたレウスだがそれでも怒りは薄れない。寧ろ、闘志と怒りが更に沸騰して行く。

「俺はもう、知らんぞ……惨殺されても文句は言えねえぞ、ドスケルビイ!!!」

懐から小瓶を取り出しつつその中身、真紅の丸薬を取り出した。以前アラバスタでも使用した自分専用のランブルボール、その完成品である。それを躊躇無く取り出した事がレウスの怒りがどれ程の物なのかと言う事を示しているかのよう。そしてそれを銜え一気に噛み砕いた。

「——制限時間は3分、ランブルウルツツ!!」

空の王者、黒炎を纏う

噛み砕かれた丸薬、身体の中に入ったと同時に身体に訪れる変化を把握する。アラバスタでも経験した体が熱くなり全身が燃えているかのような感覚。だがあの時と違い苦しみは無く、確りと意識があるという事をレウス自身が認識していた。自らの意思を保つという考えすら不要、完全なランブルボール。チョッパーに感謝の念を抱きつつ、その力を行使し眼前の敵を打ち果たすという意思を持つ。

「あああつつつ……!!グオオオオオオオオオオ!!」

人獣形態へ自然となつてしまったレウスだが違和感などなく、ある意味自分の意思でなつたのだと感じていた。竜という存在を人の身に映したかのような人獣型、竜の鎧を纏った戦士にも見えるがランブルボールを使った影響かその姿も変貌していた。影を取り込んだように見える程に深みを増した赤い甲殻、そして二周りほど巨大となつた身体を持ったそれは最早通常のリオレウスではない。それを凌駕する力を得た存在と化した。漲り迸る様な力に一種の興奮を覚えつつも、その矛先を目の前にいる古龍へと向けた。

「覚悟はいいよな、古龍。てめえの角を押し折ってやる」

ゆつくりと歩きだす空の王者。一步一步踏み出す度に地面から起こる音に違いを覚えつつも、どれだけ力が上がったのかを実感しながら竜頭を構えた。巨軀となった身体に釣り合うかのように巨大化した翼を広げつつ真つ直ぐ古龍へ敵意を向ける。怒りと闘志が入り混じった想いが瞬時にキリンにも伝わったのか、それに応えるように古龍は嘶きを上げた。

「行くぞっ!!」

嘶きが上がった瞬間に翼を羽ばたかせ、空へと舞い上がるように跳躍し一気に加速した。空から降りてくる雷、古龍の意思によつて操られるそれは真つ直ぐにレウスへと迫ったが、レウスはそれを完璧に回避した。本能が鳴らす警鐘を頼った回避ではなく感覚として雷が何処へと落ちるのかが解るような気がしていた。

自分でも何故理解出来るのか解らない。しかし、それでも構わない。目の前の古龍という圧倒的な脅威を倒す為の役に立つのなら、それくらいのことには関係ない。激しく移動を繰り返しながら雷を避け、敵へと迫って行く空の王者。キリンも先程とは違うという事を理解したのか、今度は自身へと雷を落としそのままレウスへと突つ込んで行った。雷を落とすばかりでは効果はないと判断したからか、その身に雷を纏いながら突撃した。

「竜頭打火!!」

對抗するように、本来なら打ち出す火球を竜頭内に留め、そのまま勢い良く振り被った。互いの身体が衝突し、その身体に雷と炎が炸裂した。雷とキリンの力が加わった一撃は興奮状態で無ければ容易く意識を奪い去るダメージをレウスへと与えていた。ランプルボールを使用しても雷が弱点である事に変わりはない。

「がああつ……!!おおおおおりやあああ!!」

体内を突き抜ける雷撃とキリン自身の力。それを受け苦しみの声を上げるが、負けてられるかと言う闘志が痛みを乗り越え、キリンの硬い外皮へと竜頭を捻じ込ませた。硬すぎる外皮を高熱化した竜頭で焼きながらそのまま一気に振り抜いた。先ほど自分を吹き飛ばしてくれた礼だといわんばかりの一撃、それを受けたキリンはそのまま遺跡へと突っ込んだ。

「あああああつっ!!喰らええええ!!」

吹き飛んで行くそれを視界の中心で捉えつつもレウスは更に強い興奮を覚えていた。相手を破壊したい、更に蹂躪したいという暴力的な欲望を掻き立てて行く。相手への配慮や同情などが消え去って行き、攻撃欲の塊へと変化していくのを理解しながらもそれを止める事無く受け止めた。暴力的で残酷な欲のままに殴り付けた竜頭を構えそこから溶岩を球状へと纏めたかのような火球を放った。放たれた火球はキリンが突っ込んだ遺跡ごと吹き飛ばす程の爆炎と爆発を巻き起こしながら天へ火柱を突き立てた。

——ああ、あああつ気分が良い!!

自分へと雷を振り下ろし勝者のように優雅にしていたあの古龍を、自分の火球を容易く無力化した古龍を、今度こそ炎に包んでやった。その実感が更にレウスに凄まじい興奮と快感を与えていた。自分が自分らしくも無く凶暴で暴力的になつているのを冷静に受け止められているレウスは、それを異常だと解つていてもそこへ足を踏み入れ続けた。

「!!!」

爆炎が上がり続けている元遺跡の一部へと連なつた雷が落ちた。炎を引き裂くように爆炎を消し去り、その中から炎のカーテンをくぐるように姿を現した古龍。だが、その身体に刻まれた火傷と燃えている鬣が炎によるダメージが確実にあるということを物語っていた。

「!!!」

キリンの全身にバチバチとした雷のエネルギーが纏わり付いている。レウスの攻撃によつて古龍としてのプライドを傷つけられたのか、キリンは一段と高い嘶きを上げると無茶苦茶に雷を落とし始めた。しかし無差別という訳ではないようで、レウスの動きを封じ退路を断つかのようには落とされ続けている。

「キレたか、ドスケルビ!! どんどん怒りやがれ、俺はもつと頭に来てんだ!!」

だが、頭にきているのはレウスとて同じ。仲間を傷つけられたという怒り。俺を倒した
いなら俺の怒りを超えて見ろ！とそれを思い知らせるように咆哮した。キリンはその
言葉に反応するように前足を上げ更に高い嘶きを上げる。その瞬間、周囲の空間がブウ
ンと揺れたような気がした。振り上げた角へと膨大な雷が一気に集約していき、それを
レウスへ向け一気に振り下ろした。大地を抉り穿つかのような一撃は広範囲に雷を落
とし、レウスは凄まじい雷の滝へと飲み込まれた。

「つつつ!!!」

十数秒にも及ぶ落雷が終わった時、そこに立っていたレウスは黒焦げになり意識す
らないのか、そのまま硬直していた。そのレウスに止めの一撃を加えんとキリンは雷に
よって筋肉を刺激し一気に加速した。その姿は掻き消え、瞬く間にレウスへと到達しそ
の胸へと自らの角を突き刺した。鎧のような身体へと突き刺さった角。確かな手応え
を感じたキリンだが、直ぐにおかしいと思い、次の瞬間不覚を取った事に気づいた。

「態々、近づいてくれるなんて……有難いなあ……!!!」

あの雷を受けて尚この男はまだ生きている!!?角は確かに身体へと突き刺さってい
るが雷で焼けてない甲殻の深部がそれを受け止め、九死に一生を得ていたのだ。しかも
自分の身体へと腕を伸ばし、炎によって焼けて柔らかくなってしまう部分へと食
い込ませ逃がさぬようにしていた。

「マジでやばかったぜ……流石古龍だ、けどな……俺はお前を超えていく、古龍という常識外れをな!!」

この先自分達の旅を遮るように立ちほだかつて来る強敵、それを乗り越える為には古龍だろうが撃ち倒し前に進む力を持たなければならぬ。大切な仲間を守る為にも、もっと強くなる。その為にレウスは古龍を倒す。それこそが更なるステージへ進む為の第一歩。

「竜頭 黒炎正拳んんんっつ!!」

先程のブレスのように燃え滾っている竜頭、それを身動きが出来ないキリンの頭部の角目掛けて叩きこむ。キリンの最大な武器ともいえる強靱な蒼い角を押し折りながら黒炎の一撃がキリンの頭部を焼き飛ばし、身体を焼き貫き、その背後にあった巨木をも燃やし尽くした。瞬時に燃えかすとなった樹を前に倒れこんだ古龍はそのまま動かなくなつた。

「はあはあ……やった、あの古龍を……倒したんだ……!!」

喜びの声を上げたと同時に意識が一気に遠のいていく。軽くなった身体が重力に引かれていくように地面へと崩れ落ち、その身体が元へと戻っていく。レウスもあの雷撃を受けた時点で限界だった、それに耐えながら放った最後の一撃。そして、古龍を倒したという安心感で、張りつめていたものが切れてしまった。

「やった、ぜ……この、野郎……」

そのままレウスは意識を手放し、泥のような暗闇に吞まれて行った。

空の王者、覚醒の一端を遂げる

以前にもこんな体験をした事がある気がする、酷い倦怠感と痛みと苦しみが全身を包んで離そうとしないこの感覚を自分は知っている。一体何処で感じたのだろうか……：そうだアラバスタで感じた死の感覚に酷く似ている。いやそれと全く同じと言っても過言ではない。混濁する意識の中で小船を漕ぐかのように蕩い続けているのが分かるのが何処か恐ろしく思えてしまった、だが逆らおうとしても引き摺りこまれるかのように引き寄せられている感覚があと続いている。このまま身を委ねてしまおうかという時に身体を電流が駆け抜けた。

『があっ!!?!』

激痛と電撃によって強制的に覚醒させられた意識と身体、瞳が動かないのに周囲の景色が分かるような気がする。幻覚なのか分からないがそこにいたのは全身に大火傷を負いながら、折られてしまった自らの尊厳さを誇張していた角の代わりに雷撃で形を整えている幻獣キリンがそこに立っていた。キリンは死んではいなかった、あれだけの攻撃をしかけたのに未だ健在だった。

『マジかよ……流石は古龍種……』

素直に賛美を贈った、ランブルボールを使用してでの攻撃は自分が持てる最大限の物だった。それを受けて尚立っている圧倒的上位種の存在に何の言葉も出てこずやむを得ず賛美を贈った。その強さに何処か嫉妬しつつも此方を見下すようにしているキリンへと意識を向けるとよろける身体を建て直しながら空を見上げるキリン、かの古龍は同じ先を見ると言わんばかりに見ているように見えた。必死に其方へと目を向けるとそこには巨大な箱舟のような物が漂っていた。そしてその上には異常なほどの大きさの雷雲。

『おいおい……なんだそりや……？おれに、何をしろつてんだ……？』

一体何を言いたいのか全く理解が及ばないがその直後に消えていく光と身体を強く引っ張ってくる感覚が再び強まっていく。まだ、古龍に問いただしたい事があるのに薄れていく意識に怒りを覚えつつもそれは待つてくれない。

—— 待てよ、おい……待てつてんだよ……!!ドス、ケルビイイイツツ!!!

『——竜は竜らしくするがよい』

ドグンツツツ!!ドグンドグンドグン!!!

死と生は同一である、生があるからこそ死がある。死があるから生があると誰かが言った。常に何かが生に何かが生きるのが自然の掟。しかしそれを正しく同一の物とする生き物がある、それが竜である。

転がっていく石ころ、瓦礫の中に埋もれていた男は重圧など関係無しに身体を持ち上げていた。少しずつ持ち上がっていく身体、雷によって折れ落ちてきた大樹など容易く跳ね除けながら起きた男はゆっくりとを空を見上げる。同時に身体の中の組織が切り替わっていく、燃え上がって行く体内の機関に呼応するように浮彫りになっていく甲殻や鱗。

——……グオオオオオオオオオオツツツ!!!!

天へと向くべられた咆哮、大地を揺らし!天へと劈く凄まじい音量と気迫は周囲の雷すら捻じ曲げるように登っていく。睨め付けられた天は脅えたかのように雷を更に降

仲間を助ける為にエネルギーの箱舟に乗り込み激闘をしながらも一度は船から落下したが再びエネルギーが待つ空へと舞い上がり、皮肉にもエネルギーが与えた巨大な黄金によつて雷雲を破壊した。そして最後の一撃を加えようと下がエネルギーのしぶとさと強さに再び地面へと叩き落とされようとしていた。力なく落下していくルフィへとナミが叫ぶ。

折角此処まで来たのに、下の仲間達が折角あんな巨大な蔓を倒してくれたお陰でエネルギーに肉薄出来る所まで来たのに此処までなのかと一瞬間を覗かせた絶望に全てが食い尽くそうとした時落下したルフィへと猛スピードで向かう影が見えた。

「なにっ!?!」

「エネルギーウウウウウウ!!!」

「ツツ……!!ウオオオオオオオ!!!」

大きく弧を描くように移動しつつも再び上昇してくるそれをナミは確りと目に焼き付けた、そう麦わらの一味の中で唯一空を自在に移動する出来る頼りになる男がいた。

「レウスウウ!!」

「レウスこのまま、いつけええええつつ!!!」

「分かったキャプテンツツ!!!」

突然覚醒した意識、背中に乗っているルフィと尾が担ぐように置かれている巨大黄金。此方を見て希望と勝機を見出したナミ、頭上を回遊するように浮遊する巨大な箱舟

とそこにいる巨大な雷神。突然のことで混乱しそうだがそこへ掛けられた船長からの命令に身体が動いた。これで良いと勇気付けられるかのようなルフィの言葉と気迫が身体を突き動かした。更に加速して箱舟と同じ高さまで到達した。

「レウス、思いつきり黄金を尻尾で後ろに弾けっ!!」

「千切れても知らないぞ!!」

「構わねえ!!」

「おうらああ!!」

巨大な黄金を尾で後方へと弾く、レウスの力で弾かれたそれは凄まじい速度で後ろへと飛んで行く。その反動でルフィも持つて行かれそうになるがレウスの身体にもう片腕をぐるぐるに巻き付けて必死に耐えつつ腕を回転させていく。そしてきついのはレウスも同じ、船長と共に必死に耐える。そして限界まで伸びきった腕をエネルギーへと照準に向けた。

「お前ごと鳴らしてやる!! ゴムゴムのおお……!! 黄金竜ライフルウウウ!!」

渾身の力を持つて放った一撃、回転とゴムの伸縮する勢いとルフィの腕力が組み合わさった事で尋常ではない速度と勢いを生み出しながら嵐のような気流を纏いまるで竜のような一撃を雷神に向けた。戻ってきた腕はレウスを通り過ぎる頃には音速を超えてエネルギーの元へと到達しながら箱舟を挟みながらその後方に合った巨大な黄金の鐘へ

と炸裂した。

「おっさん!!黄金郷はあつたぞ!!400年間ずっと、黄金郷は……空にあつたんだあああつつつ!!!」

空の王者、狙われる

「聞こえてるかおっさん、猿達イイイツツツ!!黄金郷は、空此地にあつたぞおおつつ!!!」

天より降り注ぐ尊厳な声にも聞き間違えそうな程に厳かな鐘の音、その歌を聞くものは思わず息を飲みその歌声に酔いしれる。美しく甘美な鐘の音は天よりスカイピア全土へと響き渡っていく。低く厳かな音は重く聞く者の心へと染み渡りながらその記憶へと永久に残る記憶としてその存在を誇示し続ける。遥かな太古からある文明の栄華を誇示し証明した鐘の音。

「おやつさん……この音……!!」

「ああつ……こんなに響き渡る鐘は世界にたった一つだ……へへっロマンじゃねえか」
「ハラハラしちまうぜ……!!」

自らの人生を壊した先祖へと挑戦と命と身体を削りながら海底へともぐり続けながらロマンを追い求め続けたモンブラン・クリケット、手下のマシラとシヨウジョウと共にジャヤで送り届けた麦わら海賊団のことを思いながら空を見上げていた時にその音は響き渡った。反射的に立ち上がり全神経敏感にその音を求めているかのようだった。

「(モンブラン・ノーランド……アンタは嘘つきじゃ、無かつたんだな……)」

空に大きく浮かび上がった巨大な黒い人間の形をした影、それは何処か嬉しそうに飛び跳ねる少年のようだが自分達には見覚えがある気がした。何故なら頭に帽子を被っているからだ。麦わら海賊団も遭遇したという巨大な黒い怪物、それにはある言い伝えがあった。空にいる人間に強い光が当たった時に出来る影だと、つまらない幻想のような謂れだと忘れていたが如何やら真実だったようだ。大きく鐘の音とこの影が証明だ。

「俺の先祖は嘘つきじゃなかった……それを教えてくれたんだろ？ありがとうな、小僧……！」

『この島に到着し耳にしたのは、森から聞こえて来る奇妙な鳥の鳴き声とそれは大きな、大きな鐘の音だ。黄金からなるその鐘の音は何処までも、何処までも鳴り響き、あたかも過去の都市の繁栄を誇示するかのようでもあった。広い海の長い時間に咲く文明の儚きよせて、高々数十年全てを知るように語る我らには、それは余りにも重く言葉を詰まらせる。我らは暫しその鐘の音に立ち尽した』

「ああ……ノールランドの言う通り、すげえ鐘の音だ……」

クリケットは安心したように地面に座りこみながらルフィ達の無事を喜びながらもまだまだ鳴り響く鐘の音に酔いしれた。先祖が言い残した真実に浸るように。ルフィ達も鳴り響く音に酔いしれながらもクリケット達に鐘の音が届いている事を確信しながら勝利と安心の喜びに身を委ねた。一通り音色を全身で聞き終えたとレウスに乗り地

上へと降下していった。その途中でルフイの鼻と食い意地が神官達の食料庫を発見しそこから運び出せるだけの食料を詰め込むとそのまま皆のいる遺跡へと駆け出して行きそこで皆と合流する事に成功した。

「レウスさあんご無事でなによりです!!」

「ビビちゃんってぐびゃあっ?!」

「レ、レウスさん!」

「バ、バックブリーカーふ、再び……」

思わず抱きついたビビによって既に身体がボロボロなレウスが悲鳴を上げた。それもその筈、動けたとはいえ古龍の攻撃を受けているのだから全身はガタガタのボロボロ、崩壊寸前と言っても過言ではないのにそこへ勢いよく抱き付けば崩れ落ちようとするのは必然である。

「い、医者あああっ?!?!」

「だからトニー君がお医者さんでしょ!」

「そうだった!」

「ど、如何でもいいからさっさと診て、くれ……」

大急ぎでチョッパーが診察と治療が開始される、落雷による火傷と一部の骨の骨折と打撲と切り傷。しかしそこまで酷いという事も無く寧ろゾロよりも怪我自体は軽いと

の事。というのも身体の自己治癒力が以前よりも高まっているらしくそれによる回復で怪我の方は治って来ているとの事、問題は身体に蓄積している疲労のほうらしい。

「いやあやつぱりランブルきついわ……慣れてきたけどそれでも身体に来るもんがある」

「トニー君の変形とはまた違った感じですよんね、形が変わるって言うよりもレウスさん自体が変わってるって感じですよ」

「うん。それはやつぱり悪魔の実の差だと思う、幻獣種って俺も分からないけど不思議な生き物になるって事だから」

ルフィ達が食料を馬鹿食いしているのを見ながらレウスはビビと自分の事に付いて語り合っていた。どうやらビビもレウスとキリンとの戦いの最中は僅かに意識があったらしくランブルを使った際の姿を見ていたがチョッパーの形態変化とはまた違う何かを感じずにはいらなかった。

「兎も角、今はゆっくりさせて貰うよ……流石に疲れたよ」

「そうですね、でも凄いわくわくする冒険でした！」

「ははっビビちゃんにとっては今回の事も冒険か。いいねえ若い子は」

「ほらほらレウス！何年寄りぶってるのよアンタも食べなさいよ！」

「分かったよナミちゃん」

その日の夜から数日、麦わらの一味が主催した宴が催された。冒険の成功とエネルギーに勝利した事を祝いと400年も続いた怨恨を消し去り新たな道を進むスカイピアとシャンディアの事を祝福する宴が……。

数日続いた宴も終わりを告げ皆が疲れ寝静まった頃、ルフィが黄金を奪って逃げる事を提案しそれを一味は受託。英雄で居続ける事など海賊らしくないというルフィの発案に皆は賛成だった、それに黄金が手に入るのなら貧乏な航海ともおさらば出来るというもの。黄金を確保し逃げるまでそれぞれが空島でやりたいことをするという自由時間を得た、レウスは一人でこのアツパーヤードの開放を目指していたゲリラの長老に会いに行っていた。

「聞きたい事は何だろうか、私が話せる事ならば良いのだが」

エネルギーを倒し鐘を鳴らしたという事もあり此方への感情は好意的、共に宴もした仲という事もあり長老も協力的。何を聞きたいかはレウスの中で決まっていた。

「この島で俺は雷を司る奴と遭遇した。その幻獣について知りたいんだ」

「……もしや空の幻獣の事か」

空の幻獣、それがこの空での麒麟の名前。確かに幻獣という響きはマッチしている。あれ程に神々しく美しい獣もそうはいない。

「空の幻獣は滅多に姿を見せない、正しく幻のような存在。私も見た事はないが……それと遭遇したのか」

「ああ……あいつはずっとこの島に？」

「言い伝えによれば400年、大戦士カルガラが健在のより居たという。その時から幻のような存在とされ出会った者には力を与えるとされている」

400年も昔からキリンはこの島で生きていたという事になるがそうなる、古龍というのはそれだけ長寿ということなのだろうか。だとしても可笑しくはないが力を与えるというのはどこか納得が言った気がする。

「だが気を付けられよ。幻獣に出会ったものは運命が捻じ曲がるという言い伝えも存在する、お主も出会った事で何か起こるかも知れんぞ」

「運命か……」

自分の運命など既に狂っている気がする、この世界に来ていたという時点で。だがそれがまた捻じ曲がったのならばどのような事が起こるのかを知りたいという欲求もあるのも事実。

「上等だ、どんな運命でも来やがれてんだ」

そのまま長老に感謝をし皆の所に戻ると大量の黄金を確保した皆に出くわし思わず彼も笑顔になった。これでナミから鱗を剥がされて金策にされるという事も無くなる

からである。そしてロビンが戻ると走り出し空島から去る為にメリー号へと駆け出して行った。

「DEAD OR ALIVEね……どうせなら生け捕りの方を選ぶのが当然」

波に揺られる船が一隻、その甲板の上で椅子に腰掛けながら紅茶を嗜みながら手配書を見つめている影が一つ。見つめている手配書は二枚、その内の一枚にはある海賊の写真と名が刻まれている。そしてもう一枚にも同じように写真と名が刻まれているがそれはやや異なっていた。

「ONLY ALIVEって当然か、彼女は一応被害者なんだし？」

『砂漠の女王 ネフェルタリ・ビビ』

ビビに関する手配書までもが製作されるのは至極当然の事と言える。表向きでは彼女はレウスによって誘拐拉致された女王という事になっている。そんな彼女を確保する為に生け捕りのみにし賞金をつけるのは当然と言えるがそれを見ていた人物は直ぐに別の手配書に目を向ける。

「空の王者、レウス……ふふっそう、この人なのね……私の目標は……ああいいわね。滾ってきちやう……」

艶っぽい声を上げつつも身体を抱きしめるその人物、興奮を覚えつつも身体に力が

入っていく。すると影が徐々に変化して行き異形の物へと変わっていく……そしてそれは真つ直ぐと恋する乙女のように恍惚として表情でレウスの手配書を見続ける。

「早くお会いしたいですわ……私の旦那様……♡」

空の王者、理由を知る

上空一万メートルの空島、遙か高い空の彼方より世にも奇妙な大型のタコによつて落下傘のようにゆつくりと降下しながら着水したゴーイングメリー号。本当にあれが当たり前で見慣れている筈の青い海が視界一杯を染め上げる様子に思わず何処か懐かしさを覚えつつも船は帆を張り大海原を進んでいく。船は記録指針が示す次の島を目標として意気揚々と波を割りながら進んでいく。到達したのは目立った街などもない無人島、そこに上陸し食料などを調達し船へと帰り道を進んでいく途中、ある人物に出くわしてしまう。

「にしてもこの地面の跡なんだろうな？」

「自転車でも通つた跡だつたりして」

「こんな無人島でそりゃねえだろ」

森の木々から木漏れ日が入り込んでいる道に歩みを委ねていると地面に一直線に伸びている跡を見つげながらそれに導かれるように足取りを其方へと取つていた。不思議と跡を追うように歩いていくと拓けた草原へと出た、閉塞的な感覚を味わう森から出た事から身体を思わず伸ばすが草原の中央にある岩になにやら影のようなものが見え

た、チョッパーが思わず一体何がいるのかと興味本位で覗きこんで見ると其処に居たのは2mを超えた大柄の男がアイマスクを付けたまま眠りこけていた。

「んんっ……なんかうるさいな……？なんだ、たぬき……？」

「トナカイだよ!!」

チョッパーの気配に気付いたのか目覚めた男はアイマスクを外しながらチョッパーを見下ろした、それに反論しつつも皆がその男に注目していると急にロビンが崩れ落ちながら目を見開いてその男を見つめていた。良く見てみれば海兵の制服を纏っているがあのロビンが酷く取り乱している所などこの場全員は見た事が無かった。

「ロビン!?!」

「ロ、ロビン!?!如何したの!?!」

「な、何でこの男がこんなところに……!?!」

後ずしりを僅かにしながらもその男に強い衝撃を受けたロビンは顔を青くしていた。巨大な海王類にも物怖じせず常に理性的な彼女が此処まで取り乱すところに思わず全員が驚き警戒した。

「ロビン……いつは一体……!?!」

「海兵よ……。海軍本部、大将青雉」

「……た、大将!?!」

目の前にいる存在の強大さに思わず全員が驚きの声を上げる、今まで遭遇して来た海兵で一番の階級を持っていたのは恐らくアラバスタ出航時に襲いかかってきた黒檻のヒナ。彼女の階級は大佐だがそれよりも遥かに階級も上だが海軍の本部の大将と言えば3人しかいないとされる海軍の最高戦力。赤犬、青雩、黄猿、この上となると元帥セングクのみ。他に言葉の尽くしようのないほどの世界最高の戦力。その場の全員に走る緊張感、今までの敵とは比べ物にもならないかもしれないという存在の登場に走った覚悟、戦闘体勢を取りながら青雩の行動に注意する。青雩はアイマスクを外しつつナミやビビを見つめる。

「あらららん?」

「っ……な、何よ」

「そっちとこっちに悩殺姉ちゃんスーパーボイン今夜暇?」

「何やってんだノツポゴラアアツツ!!」

「いきなり二人を口説きに入んじやねえよゴラアアツツ!!」

「おいおいそう怒りなさんな、俺だつてこれでも海兵だ。だらけきつた正義つてモツトーを持つたな」

「見掛け通りかテメエ!!!」

思わぬ発言と色目に当然と言わんばかりにサンジがキレ、思わずこちらの緊張感を返

せとレウスもキレた。軽くブチ切れた二人をいなしつつも落ち着けと声を掛けつつも立っているのがしんどいと寝そべりふてぶてしく構える大将に毒気を抜かれてしまう。本当にこんな男が大将なのかと疑いたくなくなる、海軍の人事はどうなっているのだろうか。

「アラバスタ事件後、ニコ・ロビンの行方が気になってただけでお前達を捕まえる気はない。賞金首が一人増えると合計懸賞金トータルバウンティが変わってくるからな。ええつと……面倒だから計算しなくていいか」

「ぐたぐたかよこいつ……」

取り合えず攻撃や捕縛の意志はないということを明らかにした青雉を攻撃する事はなかった。相手が海軍の大将だからというのも理由のうちだがそのやる気の無さが此方の覇気を奪っているのが大部分だった。そして帰ろうと立ち上がった時、青雉は真っ直ぐとレウスを見つめた。

「お前さんが空の王者か……噂に聞く動物系の幻獣種、例の国の固有種……」

「何だよ」

「一つ教えておいてやる、俺達海軍いや世界政府はお前の能力に興味を示している」

「レウスさんに世界政府が!?!」

青雉は鋭くも強い意志を宿したまま淡々と語り続ける。

「お前らは如何やらそいつの能力の事を余り知らないようだ。本来その能力はとある国にしか存在していない生物の能力が宿っていて外界に出ていることは酷く希少」

「そういえばブロギーさんが海軍ですら手が出せない危険地域だつて……」

「た、確かにそう言つてた……!!」

「世界政府としては如何してもその国の力が欲しい、その為の鍵になるのが……お前だ、レウス」

全員がレウスを凝視した。喉を鳴らし思わず青雉に威嚇の為なのか竜頭を出現させ攻撃体勢を取っているが対象は全く意に介していない。

「圧倒的な飛行能力と海楼石ですら破壊できる常軌を逸する炎熱攻撃、これほどまでに政府として利用価値が有る存在はない。加えて……お前さんはあの国へと到達できる手段を有している」

「……俺はその国に行った事すらないのにな」

「ああ。政府にいる能力者が言つていた、お前さえ居ればその国にはいる事が出来るとな」

「信じ、られねえな」

「それはお前さんの自由だ、だがそいつは確実にお前を狙う……お前の存在その物をな」
「そう言い切ると用が済んだのかそのまま歩き出して行く青雉、全員の視線がレウスに

向かっているままその時が終わろうとした時、ルフィとレウスが走り出しそのまま青雉に向かつて拳を放った。

「レウスは絶対に渡さない!!俺の仲間は、絶対に俺が守る!!」

「だったら政府に伝えろ……俺は何処にも行かねえってな!!」

「あららつこりゃ良い船長だなニコ・ロビン。だが……」

青雉の身体へと確かに突き刺さった拳と竜頭、ルフィとレウスの同時攻撃は普通の人間が受ければ骨の髄までポロポロになる程の威力なのに青雉はピンピンとしている。それだけなら良かったのに、青雉の手が二人の胸を掴むと一気に、病原が相手を蝕むように何かが伸びてきた。白い空気を発散しながら冷却されていく身体、身体と腕が凍りついて行っている。

「冷たっ!!?!うわああああっっ!!!?!」

「凍り付いて……!!?!がああああっっ!!!?!」

冷徹なまでに無機質な音を立てながら凍り付いていく二人の身体、氷はどんどん二人の身体を覆っていく。必死に腕を振り解こうとすればするほどに氷は身体を拘束していき外せなくなっていく。炎を吐いて氷を溶かそうとも試みるレウスだが胸から氷結させられて行く事で体内の炎を生み出す為の器官の温度が一気に落ち込み炎を吐く事が出来なくなってしまう。

「レウスさん!!! ルフィさん!!!」

「あ、悪魔の実!？」

「ルフィイイ!! レウスうう!!!」

「どんどん凍り付いていく二人を救出しようとゾロとサンジが走りこんでいくが青雉は笑うと其方へと二人を投げ渡すように飛ばす。氷に身体を囚われた二人、既に身体が凍り付き身動きすら出来ない状態になった二人は僅かに薄い氷が張った口から弱弱しく息を漏らしている。

「安心しろ、ちゃんと解凍して温かくしてやれば助かる。言っただろ、殺す気も捕まえる気もないって。んじゃ」

凍り付いた二人を慎重ながらも急いで船へと運んでいく一味に適当な別れを告げながら青雉は乗ってきた自転車に跨るとそのまま海へと漕ぎ出して行った、車輪越しに発動する能力で海を凍結させながら海を移動していくのは正しく非常識と言わざるをえない。船で氷を必死に溶かして手当てを続ける麦わらの一味は海軍の最高戦力の常軌を逸した力に思わず身を震わせてしまった。

「青雉さん貴方どういうつもりですか……!!?! 私の日那様を凍結したですって!!?! 今すぐにも炎と毒で殺して差し上げましょうか!!?!」

「まあまあ落ち着けて、加減はしておいたからあいづらがちゃんとお手当てすれば生きてる。それにあれは海賊だが良い連中だからきつと必死になって助けるだろ。詫びつてつもりでもないが後はお前さんに一任するから好きにきなさいや」

「いいでしょう。なら結婚式の式場と教会、その後の一戸建ての料金の立替をお願いします」

「おいおい結婚する前提か？」

「当然です、正しく殿方には正しい女が結婚するのです。だって——私はリオレイアなんですもの♪」

空の王者、水の都へ

海軍大将青雉というとてもない存在との会合、同時に知らされた政府がレウスを狙っているという事実と青雉の圧倒的な力。常軌の逸した悪魔の実の力で凍結されてしまったルフィとレウスはその後一味の必死の看病と手当によつて意識を取り戻す事が出来た、互いに死に掛けながら何とか生還出来た事に喜びつつも一端その身体を癒す為に三日間の停泊を経てメリー号は記録指針が示す次の島へと向かう事となった。

のんびりとした航海をする船を襲った次なる衝撃、それはクロールをするカエルであつた。普通言うなれば平泳ぎをするカエルがクロールをするという衝撃的な光景と常識外れなそのスピードに一同は驚くと思わず其方の方向へと舵を切ってしまった。その際にカエルを追う時の連携は偉大なる航路に入つてから有数とも言えるほどの素晴らしい物だったのが何とも言えなかつた。そしてカエルを追つていくとあるものに遭遇した、海上を疾走する蒸気機関車であつた。

海の上に敷かれている線路を走り帆船とは比べ物にならない速度で進んでいく列車に一同は呆然としていた。陸上ならまだしも海の上に機関車を走らせようなどと考え付かないからだ。そして追つていたカエルは機関車の進行上に立ち塞がると力比べを

するようにぶつかるとは、そのまま吹き飛ばされてしまった。二重の衝撃で呆然としていると近場の駅と思われる所から老人と子供と小動物が飛び出してきた。

「どうやら此処の駅で働いているココロさんというお婆さんとその孫のチムニーとゴンベというウサギだった。ゴンベはなぜかニャーと鳴いているが間違ひなく兎であるとレウスは断言している。そしてそのココロさんから次の島の情報とその島が造船技術で有名であること、そして紹介状まで書いてくれた事で一同は興奮と感謝で一杯であった。意気揚々と次の島、ウォーターセブンへと到達した。

「おおっ……こりやすげえな」

「すっげええっ!!噴水だあ!」

此処まで来るまでにゴーイングメリー号が負っているダメージや完璧な修理が出来る事に鼻歌交じりに進む船の上で見えてきた次の島を見た時、一同は思わず感嘆の声を漏らした。島の彼方此方から沸きだし噴出している無数の水の柱、それだけでは飽き足らずまだ上陸すら出来ていないにも拘らず美しい町並みが確認でき素晴らしい島である事が決定付けられていく。

「うっはああつっすっげえなこりや!!ココロの婆さんが造船がすげえっていったけどこりやその筈だぜ!!超巨大都市だぜ!!」

「これなら海列車も走る訳ですね」

「これならメリーも安心だな!!」

今まで見た事もないような島に連なる都市の大きさに一同の期待もどん膨らんで行く、これならば空島で手に入れた金の換金と船の修繕の事も万全の体勢で行える。メリー号もレウスの鱗や甲殻でなんとか持たせているがレウスの鱗などがなかったら浸水も酷く沈むことも十分に考えられる。いよいよウォーターセブンへと入っていくメリー号、水路が島の中にまで巡っており正に水上都市となっている。

「おい君達！海賊船が堂々とこんな所にいたらまずいぞ！何しに来たんだ略奪か？」
「船を直したいんだ！」

「いや可笑しくないか今のやり取り」

此方へと気さくに声を掛けてくるおっさんの言う通りに船を島の裏側へと回していくがその途中数回島の住人に話しかけられたがどれも海賊を恐れている感じでは全くなかった。妙に寛大で馴れ馴れしい感じがする。そして船を大きく裏へと移動させ岩場の岬へと停泊させた。

「うほほほお〜い!!!よくし俺が一番のりだああ!!」

「いや俺だあああつっ!!」

船を付けると同時に駆け出していくルフィとウソップ、ウソップは兎も角ルフィは本当に青雫にやられていたのだろうか。回復したにしても元気があり余っている。

「待ちなさいよあんた達勝手に行動しないでよ!!?」

「つたくしやうがない……ナミちゃん、あの二人は俺が見るよ」

「お願いレウス、私はビビと一緒に換金に行くわ。あつサンジ君同伴お願い」

「はあくいナミすわあくん♡」

楽しげな雰囲気のまま進んでいく状況、だがこの島が麦わらの一味にとつてある大きな事件の中心となるのだった。

「あれがレウス様……私の想像以上の御仁ですわね♡」

空の王者、変態と姫に出会う

ナミの静止を振り切るように駆け出していくルフィとウソップを追いかけたレウスも早々に追いつく事に成功し共にウオーターセブンの入り口を潜ろうとしていた。

「いやあ此処はどんな島なんだろうな！美味しい飯屋とかあるといいなあ」

「ワクワクしてきたぞお！なあレウス！」

「まあ、な。言っとくけど勝手にどっか行くなよ？俺がナミちゃんに怒られちゃう」

ブレーキ役として大急ぎで駆け出して合流したレウスは自由奔放さにやや頭を抱えつつもこれが当然の日常の一部となりそれにも当たり前のように対処できるようになっている自分に心のどこかで苦笑いを浮かべていた。この世界に来てからもう何年になるのかも数えるのも何時か止め、ルフィ達との航海を心から楽しみつづ日々を過ごしている。もう以前の世界の事など風化し始めていた。偉大なる航路の無茶苦茶具合にも慣れてきたのか次の島はどんな所なのだろうと言う純粹な興味も大きくなっている、そんな思いを胸に足を進める先に見えてきたのは街の入り口と思われる場所に掲げられた『貸しブル屋』という看板だった。

「貸しブルって何だ？」

「知らねえ、ブルドックか？んな訳ないか」

「すいませんブル貸してくださ〜い」

「いやまず何なのか聞けよ!!」

ブルと言われても全くピンと来ない一同、一体何なのかを探る為に聞いてみようと思つたがそれよりも早くルファイが足を進めて行き貸して欲しいと言つてしまった。兎も角追いかけて中へ入つていくと中年の男性がルファイの声に応えて人数を聞いて来ていた。

「三人か、ランクはヘヤガラヘラブカヘキングがあるけどまあ男三人ならヤガラ二匹つて所で良いかな」

「ああそれで頼む。美味しく焼いてくれ」

「いや可笑しいだろ今の会話の流れ!？」

兎も角レンタルの話は一旦ストップしてもらい自分達は記録ロクを辿つて来た事とこの島に初めて来たのでブルについて何も知らないので説明を頼んだ。この島、ウォーターセブンは水路中心の街。陸路よりも水路の方が遥かに多くその水路での足として使用しているのがブルという魚、外見は馬のような魚だが頭が良い上に人懐っこい。加えて引越しにも使えるほどの馬力を持つている為重宝されているとのこと、ボートをヤガララの背中に載せてそのまま馬車や乗馬のようにして移動するらしい。

「へえ結構可愛いな」

「なんか馬みてえな魚だな」

「まあ大体あつてるな」

二匹のヤガラがレウスとルフィを気に入ったのか近づいて顔をなめるのを見ると店主はその二匹にボートを引かせる事に決めた。

「えつと二匹で2000ベリーだったな」

「ほいどうも」

「そうだおっさん、この辺りで美味しい飯屋つてあるか!？」

「飯屋か。飯屋じゃないけどブルーノつて店主がやつてる酒場は結構いけるよ、ほれこれサービスで地図もやるよ」

「うっしまずはその行こうそこ!」

「また勝手に……まっいつかんじゃ行こう!」

ルフィとウソップ、レウスと分かれて乗り込んだヤガラは元気良く声を上げて泳ぎ始めた。勢いよく泳ぎ始めた割には揺れもなく進んでいくヤガラに中々快適である。

「うっほ〜い! 良い天気だし気持ちいいし最高! おい頼むぞお前!」

「ニイ〜」

「にしても世の中にはこんなに都合の良い生き物があるんだなあ」

「揺れも思った以上にないな、快適だ」

地図を広げながら周囲の町並みを見つめるレウス、水路中心と言うだけあって建物は水の上に建てられ歩道を一步出たら広がるのは水路。古くも歴史のある町並みと美しい水路がマッチして奏でている不思議で優しい感覚にルフィもなんだか和んでいる。住人達も非常に良い表情をしておりこの島の保たれている治安と平和が確かな物であると語っている。

「え〜つと……あっちだな」

「よっしあっちだな！あっちだヤガラ〜！」

「ニィ〜!!」

ルフィはルフィですつかりヤガラと打ち解けあつたようだ、元気良くルフィが方向を指示すればヤガラもそちらへと勢い従って泳いで行く。本当に人懐っこい魚なのだろうと思わず頭を撫でた。そんなこんなで水上散歩をすること約30分、やや地図に苦戦しながらも目的としていた酒場へと到着した。ヤガラは通りすがりおばさんに教えて貰った水牛肉を食べてもらいながら近場のヤガラ止め場に待つて貰う事になった。酒場に入ると食べ物の匂いに辛抱たまらなくなつたのかルフィがカウンターへと飛び込んだ。

「やつほお〜いなあおっさん食いもんくれ！」

「おやいらっしやい、これは随分面白い注文が来たな」

店主のブルーノと思われる男性は人当りの良い笑みを浮かべながら取り合えず水でも飲みなさいとよく冷えた水を出してくれる。それを一気に飲み干しつつブルーノは腹が減っている事をアピールする。

「すいませんうちの船長が」

「いやいや大丈夫だよ。うちには色んな奴が来るからね、荒くれ者に比べたら愉快な者だよ。じゃあこの島のお勧めなんて如何かな?」

ブルーノは一度店の奥へと入ると更に山盛りになった肉を持ってきて差し出してきた。ルフィは涎を垂らしながらそれにむしゃぶりつくように喰らい付いたが一口食べた所で停止した。ウソツプとレウスはあのルフィが食事中に止まった事に驚きつつ声を掛けるが途端にルフィはカウンターに凭れ掛るようになりながらうっとりとした声を上げた。

「やくわくらくけくえく♪うんめえく♪」

「そ、そんなにか!?(モグモグ) すっげなんだこの柔らかさ!?! たまんねえ!」

「な、何だこれ……!?! 数週間タレに漬けた肉よりも柔らかいのに歯ごたえもある!?!」
「気に入ってくれたかな? それは”水水肉”というんだ」

初めての食べ物に大感動をしながらも肉を食べていく一同に店主はニコニコと笑顔

を浮かべながらドリンクを出して話を振ってくる。ルフィとウソップは夢中で食べているのでレウスがそれに答え雑談をしながら水水肉を食べている時店の扉が蹴飛ばされるように開けられた。逆行の光の中に立つ一つの影は大きくポーズを取りながら声を上げる。

「アウ・調子は如何だブルーノ!? スーパーに繁盛してるか!？」

景気良さ気に声を上げて入ってきたのは青いリーゼントに赤いアロハシャツを羽織った男……だが下には海パン一丁という変態的な出で立ちをしている珍妙な男だった。

「な、なんだあの男は……?」

「余り相手にしない方が良い、あいつは解体屋フランキー。このウォーターセブンの裏の顔として知られている男でね、船の解体を専門にしている奴なんだが副業として賞金稼ぎをやっている。かなり腕は立つ」

「げっレウスまずいんじゃないやねえか……!？」

小さく焦ったように声を上げるウソップと困った表情を浮かべるレウス。自分とルフィは億越えの賞金首、賞金稼ぎからすれば涎物の獲物。そんな自分達の正体に気付かれるとかなりまずい事になる。ルフィにも何気なく静かにしておけと注意する、が

「お前面白い奴だなく! 何何だ?」

「おう兄ちゃん、この俺のスーパーさが解るか？」

そこはルフィ、忠告など馬耳東風で聞き流しフランキーに興味深深という表情を浮かべている。煌びやかでヒーローに憧れるような視線と褒め言葉で機嫌を良くしていくフランキーにレウスはもうバレタらバレたでなんとかするしかない気がしてきた。

「この俺の今週のスーパーさが分かるとはいいい目してるじゃねえか兄ちゃん、今週の俺がとんでもなくスーパーなのを見せてやるぜ!!外に来な！」

「おおつもつと面白いのが見れんのか!？」

「お、おいルフィ!？」

「あゝマスター、直ぐに連れ戻すよ」

「大丈夫だよ、食い逃げしてくれない限りね」

フランキーに付いていくルフィを追っていくウソツプとレウス、店の外へと出たフランキーはサングラスを掛けなおすと腰を落とし腕を構えた。

「行くぜ……ストロングライト右オオオ!!」

大砲のような音と共にフランキーの右腕が射出され空へと飛んで行く、勢いよく伸びていく腕は鎖で繋がっているようである程度伸びると巻き戻されぐわんぐわんと鎖をしならせながら腕を戻したフランキーは良い笑顔をみせるとルフィとウソツプは大興奮を露わにし声を上げた。

「スツゲエエエエツツ!! スーパーだあああつっ!!」

「アウ!! もつと言つてくれ今週の俺はマジでスーパーなんだぜ!!? よし兄ちゃん達気に言つたぜ!! 酒場の中でもつと俺様のスーパーさを語つてやるぜ!!」

機嫌をよくしたフランキーはルフィとウソップを連れながら中へと戻つていく、それを見送つたレウスも肩を竦めながら戻ろうとするが何処からか自分へと投げ掛けられる視線に気付いた。思わず能力の発動が出来るようにしつつ視線を巡らせると建物の間の影から何かが見つめていた。

「何だ……?」

小さな足音が此方へと迫ってくる、壁の方向を見つめると一人の女性が影から出てきた。緑と白、そしてピンクを基調としたドレスに身を包んだ金髪の女性は王族のようなオーラを纏いながら此方へと近づきながらレウスの顔を見ると僅かに涙を流しながら笑顔を浮かべた。

「漸く、御会い出来ました……心の奥底から会いたかったです。レウス様……♡」
「君は……誰だ?」

To be continued……。

空の王者、恐怖する

建物の影より這い出るようにだが何処か上品さと気品を感じるように現れたその女性に一瞬目が釘付けになり思考が停止すると同じく胸が高鳴ったような気がした。何故そう思ったのかは分からない、高つていない筈なのにそう思えるような不思議な感覚があった。煌びやかドレスに身を包んだ貴婦人は頬を朱に染めながら此方を甘美な物を喉の奥に通したように笑っている。

「レウス様……憧れの殿方……私が心から、魂から求めた御方……♡」

何やらぼうつとこちらを凝視する貴婦人にレウスは居心地の悪さを感じる、全く知らない初対面の相手が自分の名前を知っておりただただ悦に入っているかのよう。此方を見つめ続ける。正直気味が悪いとしか言いようが無い筈、少なくとも理性はそう捉えており一刻も早く居酒屋の中に入ろうと身体に命令を送っているのにそれが受信されない。一方的な拒否をされているかのよう弾かれています、本能が彼女を求めているかのようだった。次第に鼓動が高まり体温が上昇して行く、何故か理解出来ない。理性を超えた何かが求めているとしか言い表しようがない程に。

「何だこれ……何だ、なんなんだよ……!?」

理性すら凌駕し肉体が勝手に意志を宿しているかのような感覚、此方を見つめている貴婦人の事をまるで愛しい愛しい伴侶との長い時間の壁を越えての邂逅を待ち望んでいたように彼女の方を見つめ続けそれに浸り続けていた。

彼女が喜びの言葉を漏らす度に此方も溜息疑問が溜まるが漏れる。見つめられ続けると鼓動冷や汗が出るが高鳴る。そして一步彼女が近づいてきた時足が前に進もうとし腕は彼女を受け止めようと独りでに開いていく。それを見て貴婦人も更に歓喜に酔いしれながらも此方へと駆け出そうと今にも足を踏み出そうとしていた。

「やめろ……やめろっ……!!!」

掠れる声を振り絞り、唸り声を上げながら拳を腹部へと突き刺した。渾身の力、自分で自分の身体を突き破ってしまうのではないかという心配までしそうになるほどの一撃は身体を浮かして通路へと叩きつけた。後少して水路に落ちかけながらも苦しげな息を漏らすレウスを貴婦人は何処か心配そうに見つめる、善意、彼女から感じられるのは明らかな善意だが先程の感覚は彼にとつて恐ろしいの一言に尽きる。何者かも分からないものからの善意は恐ろしいものでもある。

「ゲッホゲホッ……ゴホゴホ……ハアッ……。アンタ、一体何者だ……? 普通の人間つて訳じゃないんだろ」

「はい勿論で御座います旦那様レウス、ですが驚きです。番を求めりオレウスの本能を無理

矢理抑え込むなど驚嘆の一言につきます」

「番……まさかりオレウスの番って言えば……」

「はい。私はレイア、リオレイアです」

リオレウスは飛竜リオスの雄であり雄である以上当然メスの個体も存在しその場合は名称が変わる。その名もリオレイア。空の王者たるリオレウスの番であり陸の女王と呼ばれる火竜、強靱な脚力を持つリオレイアと飛竜の中でも指折りの飛行能力のリオレウス。加えて二頭の閥係は夫婦と呼ばれる。目の前のこの貴婦人は自分と同じ悪魔の能力者であり番である存在、故に自分の中にいるリオレウスがリオレイアを求めたのだろう。

「俺を、如何したいんだ……?」

青雉の言葉が脳裏に浮かぶ、自分を狙っている事と自分がいれば辿り着ける国。そう証言した能力者がいると、それは恐らくこの女性レイアという事になるだろう。仮に自分と彼女が共にその国を目指そうとしたら一体何故そこへと辿り着けるのだろうかは分からないが分かる事が一つだけある。彼女が自分の敵であると言う一点のみ。

「簡単ですわ。貴方と結婚したいですわ」

「……はっ?」

「結婚ですわ結婚!!マリッジをして指輪を交わして愛を誓い合いたいですわ!!」

心の奥底から声を発しながらその場で舞踏会の踊りのように回りだしながら歓喜を表現する彼女に思わずレウスの表情が死んだ。それでも構わずにレイアは言葉を続ける。

「言葉を交わしたい、手を繋ぎたい、腕を組みたい、見つめあいたい、愛を交わしあいたい！最初こそレイアの本能でしかなかったのに何時しか私と一体になった竜の感情は私を支配し貴方と夫婦になりたいという思いに昇華して行つた！ですがこれは洗脳ではなく私の意志であり私の感情！手配書を見た時に一目惚れし確信しました、この方こそ私の伴侶だと……貴方以外に伴侶など有り得ませんわ。さあ参りましょう、私達の愛の巢へ♪」

「成程……詰る所俺が欲しいって事か……」

独占欲とも違う感情、最初こそ能力から受けた侵食だったのかもしれないがそれすら屈服させ自分の一部としそして理解し恋をし愛を深めてきたのが今のレイア。レウスへの愛は紛れもなく彼女自身の物、その愛に一切の不純無し。それはレウスも能力の中にある竜の本能で感じ取っている。

「俺に海賊をやめろと、政府に下れつつうのか」

「いいえ違います、私と一緒になって欲しいのです♪海賊なんてアウトローではなくもつと有意義で平和な世界へ♪」

「断る、アンタを信用できる材料が一つもないし海賊である俺にとってアンタは敵だ。そして俺は仲間と一緒にいる!!」

思わず能力を発動させようとするような勢いで拒否の態度を取った。瞬間、彼女の瞳からハイライトが消えた。黒い眼は闇その物、夜の帳ではなく暗黒その物を体現したような漆黒。瞬間、全身に怖気と冷たい殺気が走った。無意識の内にその手にランブルボールを持ち何時でも変化出来るようにしていたがなつたとしても勝てるかは分からない。真つ黒い闇の中に月のように浮かび上がっている黄金の光と黒い靄の中に浮かぶ赤い瞳、自分にもみ発せられる殺気にレウスは身を凍て付かせる。

「仲間……伴侶の私ではなく仲間……。やはりあの女共ですか貴方を惑わしているのは……ならば近い内に消さねばいけませんね……フツツそうすれば貴方は私を見てくださる……」——ですわよね……?」

普通の声量のはずなのに一喝されたかのような重圧、同時に身体中に染み込んで来る黒い稲妻のような光が体を蝕んでくる。それに飲まれかけながらも必死に意識を保ちながらレイアを見つめながら口を開こうとした瞬間にレイアは迫りそつと頬を撫でた。

「——近い内にお迎えに上がります、旦那様♡」

その言葉の直後に全身に襲いかかってくる重圧が消えレウスは思わず座りこんでしまった。初めて感じた形容し難い恐怖と感覚が未だに身体を震わせている。暫くそれ

に震えていると酒場から出て来たルフィがフランキーの話を一緒に聞こうと引つ張るまでレウスは何も考える事が出来ずにいた。

空の王者、覚悟する

「んじやフランキーも船に詳しいのか!？」

「おうよ。解体屋つてのは壊すのと同じぐれえに作る知識もいんだよ。自慢じゃねえか
そんじよそこらの船大工には負けねえぞ」

「おおつやっぱりお前つてスーパーだな!!」

「ハハハツもつち言つてくれい!スーパーな兄貴と!!」

「いよつスーパー兄貴!!」

自らの確保を目的とした宣言をしたレイアとの会合、それによって身体と心に及んだ影響は確実にレウスを蝕むように記憶に食い込んでいた。理性を無視して本能が肉体を支配するかのように行動するという恐怖とそれを及ぼした者の目的に意志が揺らぐように蠢いていた。全ての光を飲み込むような闇の中に浮かび上がった不気味な月は赤い光を宿しながら此方を見つめていた光景が頭からはなれない。そして一番の問題は自分を手に入れるためには麦わらの一味に、ナミヤビビに手を出すという事を仄めかすような言葉。

「(あれは脅迫か……それとも実際手を出して消せば俺が手に入るって本当に思つての

言葉なのか)」

前者なら兎も角後者を本気で実行しようとするならば狂っているとしか言いようがない。そんな事をして逆にも自分の怒りを買う事は明白、いやそんな事すら考えていないのかもしれない。盲目的に自分を伴侶と見定め一方的と言つてもいい異常な感情を向けているのは分かっている、そしてそれを向けられる自分を求めているのも。兎も角彼女の事をなんとかしないとナミとビビ、下手をすれば一味全体が崩壊する可能性すらある。

「なあレウス一旦メリー戻るぞ！フランキーが船見てくれるらしいぞ！」

「……ほう、しかし良いのか？」

「おうよ、面白い兄ちゃんがこんだけ大事にしてる船だ。俺としても興味があるぜ、出来る事ならある程度の修理ならしてやるつもりだ」

「そりや良かった……悪いがルフイ、俺は少々別行動を取らせて貰つても良いか？」

レウスの申し出にウソツプは珍しそうに首をかしげた。ナミから任されている自分とルフイのお目付け役というではなく自分の事を優先するということがレウスは今までなかったからだ。何かあったのだろうかと心配になるが心配はしないで欲しいと言葉を漏らす。

「何、少しこの美しい街並みを目に焼き付けておきたいのさ。それにお前達のお目付け

役も疲れるからな……偶には一人でぶらぶらしたいのさ」

「あくそういう事か。分かった俺からナミに言っとく」

「悪いな」

そのままルフィ達分の料金をブルーノへと支払うとそのまま酒場から出ると建物の影を縫うように歩き出していく。あのレイアが何処に行ったのかは全く理解出来ないが兎に角じつとして居る事すら出来ない、何も考えずに歩いていく。

ウォーターセブンの裏町は普通の街以上に活気がありそこらの商店から客呼びの声が響き渡り子供達の楽しげな声が溢れている。そんな中を進んでいくレウスの表情は何処までも暗く鋭い物になっていた。

「さてと……すいません地図を貰えませんか」

「はいよ、1400ベリーね」

ルフィ達に預けたままの地図の代わりを購入し取り合えずウォーターセブンの全体を見渡す。水水肉のコロッケを摘みながら持っていたペンで印を付けながら考えていく。先程いた酒場から今の位置、これから如何するべきかを。

「1時間ぐらいで考えたらこのぐらいの範囲に……いやガラとか能力での移動を考えたらもつと広がるか……あても無しに探すなんて無理か……」

深くも考えずにこの広いウォーターセブンからたった一人の女性を探すのは難しい

と言わざる得ない。加えて言うのであれば海列車で繋がっている島の一つが仮面などを用いた祭りを行っている影響でこの島にもドレスや仮面を被っている人間が多くいる為にドレスを纏った女性という手かがりから人を探すのも難しくなっている。簡単に探せると高を括つていたが思つた以上に苦労しそうだ。

「……駄目だ取れる手段がない……」

アツサリと詰つてしまった。どうにも自分らしくも無く突つ走つてしまつている節がある、落ち着きが一切ない。本能的に感じた恐怖と理性が抑えきれない感覚に恐ろしさ、今まで自分と同じような存在と戦つてきたがそれでも感じられなかった恐怖心。それに焦っているのかもしれない。

「……おいリオレウス」

——思わず問いかける、自分の中の竜に。唯一の手がかりがあつた、リオレイアという存在の番である竜の存在が。あの時、悪魔の実として宿つていた竜の意志が自分の中にもあると確信出来た。なら出来る手は一つしかない、この本能に賭けてみる事が一番確実なんじゃないかと。

「てめえが欲してる女を捜してみろ、それが俺が今求めてる奴だ」

あの時、間違いなく理性を超えた動きをした。それに身を委ねてみるしかない。深く息を吸うとゆつくりと身体が持ち上がった、そしてあの時よりも弱いが身体が理性とは

関係無しにゆっくりと歩みを進め始めた。ゆっくりとしながらも身体が従って歩いていく道に何かを感じる。あのレイアと同じものを。

「この感覚、間違い無い……居る」

進んでいく先に確実にあれがいる。徐々に強くなっていく本能を再び抑え付けると最後に本能が示した店へと入っていく。暗い照明に光る酒瓶、バーの店主は静かに席へと誘導しているのに頷きながら席に付く。適当に飲もうかと考えていると店主がいきなりロックで酒を出してきた。

「あちらのお客様からです」

そんな言葉に従って視線を動かすとそこには……

「貴方様から来てくださるなんて……矢張り私と貴方は運命の糸で繋がっているのですね

」

「……かも、な」

二人の護衛を連れた令嬢が静かに此方を見据えていた。

空の王者、居ぬ間に襲いかかる現実。

ちようどレウスが本能に従った末に発見した店に入った頃、ルフィとウソップはメリー号の状態を見てもらおうとフランキーを岩場の岬へと案内した所だった。そこには既にこのウォーターセブンという造船会社の船大工のカクという男が査定のために船を見上げていた所だった。

「おう山猿、テメエこんな所で何やってんだ」

「なんじや騒がしいと思つたらフランキーか、ワシはこの船の査定じゃ」

カクというウソップに似た長い鼻をしている男は一流の船大工として名を馳せているらしくこの島では知らない者は居ないほど、そんな彼はナミ達からの依頼を受けて船の修理の為の査定にやってきたらしい。

「奇遇だな。俺もこの兄ちゃん達に頼まれてこの船を見に来たところだ」

「ほう……それじゃいつちよどつちが正確に査定出来るか勝負と行こうかの？」

「望むところだ！このスパーな俺様に勝てると思うなよ！」

勢いよく甲板へと飛び上がり船の様子を見始めていくフランキーと負けんぞと言葉と笑みを漏らしながら同じく船の調子を見始めていくカク。二人の船大工が船を見て

くれるということ。これなら絶対に良くなるとウソツプは期待を胸にメリー号を軽く撫でる。

「メリー絶対良くなるぞ！そしてこれからもずっと冒険するんだ!!」

「そうだ！メリーは俺達の家で家族で仲間だからな!!」

「そうだぜルファイ！」

共に肩を組んで踊りだす二人に呆れつつも大切な仲間というのは概ね同意だった留守番をしていたゾロは再び昼寝へと戻った。きつと目が覚める時にはメリーの査定が終わっているだろうと思いつつ……甲板の板を軽く撫でたり鉄板が打ち付けられたマスト、レウスの鱗や甲殻などで丸ほど代用するかのような修繕がされている部分を見て驚いたりしつつも査定は進んでいき約20分ほど経った時、査定が終了した。

「査定は終わったぞ、フランキーは如何じゃ？」

「俺も終わりだ。にしてもこの船は愛されてんな、修繕の仕方はなつてねえが愛情が詰ってやがる」

「同感じゃ。此処まで大切にされている船は久しく見た」

二人の言葉のスタートはまずそれに尽きた。メリーを見てまず思った事は心の奥底から大切に思われている事だった、傷こそ多いがそれ以上に丁寧な修繕され消耗が多い部分などは細かく手入れが入れられており大切にされているという印象を強く感じる。

ただの乗り物、移動手段ではなく仲間の一人として此処までの旅路をやってきたのだという事がただの言葉ではなく経験として蓄積されている。

「だろだろ!! メリーは東の海からこの偉大なる航路をずつと旅をしてきたんだ! 途中色々あつたけどさ、これからも一緒に旅をして行きてえんだ!」

「そつか……こいつも幸せもんだな」

振り返るとそこには愛らしきとは裏腹に傷を負いながらも此処まで仲間を運んできた歴戦を感じさせる船体が目に入る。

「ああつーメリーには今まで本当に世話になったからさ完璧に元気にしてやりてえんだよ! 金ならきつと黄金があるからそれを換金して一杯になるからさ!」

「ああ金の事なら大丈夫だ! それでどの位修繕には掛かるんだ?」

純粋でキラキラとした瞳を向けて来る二人に思わずフランキーとカクは如何しようかと思わず顔を見合わせてしまった、普通なら直ぐに結果を知らせるのだが此処まで船の事を純粋に愛しており仲間として認識し、まるで一人の人間のように扱っている目の前に二人にはそんな事を直ぐに言い出しにくい。故に少しづつ話していく事にする。

「そうじゃの……まず全体的な評価じゃが床は張替え、マストも差し替えが必要じゃろう。ある意味分解する勢いで修理して行った方が楽じゃの、船底もかなりのダメージを負っておる」

「ああその辺りは俺も同意見だ。寧ろ驚きに満ちてるぜ、キャラベルつつうのは古いタイプの遊覧客船で偉大なる航路みたいな激しい海なんか航海出来る代物じゃねえ。よっぽど良い航海士が居るんだろうな」

「おう！うちの航海士は世界一だ！お金とみかんが好きだけどよ、きつとメリーも同じぐらいに好きだぞ！」

仲間の事を褒められて嬉しそうにするルフイをフランキーは何処か関心するように笑う。仲間の事を褒められることがまるで自分の事に嬉しい、クルーの事も大切に思えるほどの優しい心を持っているから船にもこんなにも愛情を注げるのだろうと。

「そして船底なんかも酷いがそれらを支えておったのがあの鱗みたいな奴じゃな。あれは一体なんなんじゃ？ポロポロじゃった船体を持ち直させるほどの物なんぞワシらガレーラカンパニーでも持ち合わせておらんぞ」

「うちのクルーにレウスって居るんだけどよ、そいつがドラゴンに変身出来るんだ！その鱗を使わせて貰ったんだ」

「ド、ドラゴン!?!」

カクとフランキーは思わず口を揃えて信じられないと言いたげな言葉を漏らしてしまつた。もうすっかり慣れてしまつていたが一般的にドラゴンは空想上の生き物、この世には絶対にいない生き物の筆頭といつても過言でもない存在だった。

「そいつがさ、確か幻獣種っていう悪魔の実の能力者でさ。ドラゴンになれるんだよ」
「成程そういう事か……それにしても悪魔の実とは恐ろしいのう、まさかドラゴンになる物まであるとは……」

「全くだぜ……流石はこの海で最も非常識な存在だな」

一旦呼吸をおいてから二人は改めて話をし始めた。

「ハッキリ言ってしまうとその鱗とかのお陰でこの船は成り立っておる、なかったら今頃如何なっておったか……少なくとも浸水しまくりで大変だったじゃろうな」

「ああ。竜骨にかなりのダメージが行ってるのに十二分な航海が出来たのもそのお陰だろうな」

「竜骨って……確か船の背骨じゃねえか!？」

ある程度の知識が合ったウソップが思わず大声を上げてしまった。竜骨とは船を作る際にそれを中心にして製作にする大きな木による骨、人間の背骨のような物。そこが傷つくと船全体に影響が出るほど重要な箇所でそこが損傷するということは船にとつては致命的。

「ああだから俺も驚いてるよ。竜骨があんな状態なのに航海出来たのはあの鱗だけじゃねえ、オメエラを如何しても次の島に渡してやりてえって船が思ったからだ。こんだけ大事にされてる船だ、船も兄ちゃん達のことかすげえ大切なんだよ」

「メ、メリー……そんな状態なのに頑張ってくれてたのか……!？」

膝から崩れ落ちながら大粒の涙を流すウソップと愕然としてしまうルフィ。頭が良くないルフィでも話の終着点が理解出来た、もうメリーは……走れないという事だ。

「修繕したとして次の島にはなんとか辿り着けるかもしれないがそれ以上は無理じゃな、この先の海は更に激しさを増して行く。お前さんらみたいに大切に船をしてる者達に余り言いたくはないんじゃないが……この船はもう航行不能じゃ」

その言葉は何処までも重く、鋭く、メリーと共にこの偉大なる航路へと航海をしてきた三人の心へと突き刺さっていった……。

——では明日、またお会いしましょう。

——その時に、お返事をお聞かせくださいね。

空の王者、——決める。

「レウス、レウスウ!!メリーがメリーが!!」

「……チョツパー」

夜中、漸く船へと戻つて来たレウスは皆から事情を聞くと静かに買つて来たのか手に持っていた酒を飲み始めゾロやサンジにも酒を手渡した。未だに帰らぬロビンを除けば一味の中で最年長の彼でさえ落ち着いているというよりも心此処にあらずという表現が似合うような状態に何も言えなくなつてしまひながらも仲の良いチョツパーは縫うように涙を流す。メリー号は麦わら海賊団の船、という単純な物ではない。家であり仲間である、愛情を持つて大切に思つてきた船だ。それがもう走る事が出来ない筈なのに自分たちの為に鞭を打つて此処まで来てくれた事への感謝ともう旅が出来ない事に對する悲しみが胸を打つ。

「ルフィさん……」

不安げに言葉を紡ぐビビに反応を示さないルフィは無言のまま深く麦わら帽を被りハンモックに寝転んでいる。普段陽気で明るいルフィでさえ言葉を失い何も言えずにいるこの状況、麦わら海賊団ではありえない状況に言葉を失つてしまう。

「それで、これから如何するつもりだ船長」

「……」

「おいルフィ、シカトしねえで言え。てめえの海賊団に関わる事だ」

珍しく声を荒げながらレウスが訪ねた、それに対してルフィは答えようとしなかったがハンモックから身体を起こして口を開いた。

「俺、馬鹿だからよ……考えても考えても纏まらねえんだ……」

「ルフィ……」

「メリーは、俺達の仲間であって家族なんだ……それを解体するとか買い換えるとか俺には考えられない……。でも、俺にも一味の命を預かってる船長としての責任つてのを感じる……」

頭を抱えながら胸の内にある物を吐露するルフィ、普段からは考えられないような言葉だが彼にも船長としての責任を確りと抱え込んでいた。自分としては仲間を大切にしたい、だがその仲間には当然メリーも含まれておりメリーも守りたい。だが船長としては乗組員の事を考え新たな船に乗り航海をすることも考えなければならぬ。

「それで、今はこの状況か。辛いな……」

「レウス……」

らしくもないような事を言いながら酒を煽っている彼にウソツプは悲しげな目を向

ける、ルフィは一味全体の事を考えながらも一人一人の事も考えている。メリーとの旅の出発点にあるウソップのシロップ村、その事も深く考えながらそれを意味している事にウソップは気付いた。この事実を知らされて一番ショックを受けていたのはウソップは自分だと思ひ込んでいた。

「ルフィ……お前俺の事気にしてるんじゃないかねえのか、確かにメリーは俺の村で貰った船で大切にしてる……でも俺にとつちやお前らも大事なんだ。だから……」

「だつたらつそんな泣きそうな目で俺を見るなよっ!!!!」

大声が出た、思わず、耐え切れず。ウソップは今にも決壊しそうな涙で溢れ返っており必死に耐えているのが分かる。それを見たレウスは見ていられなくなったのかその場から出て甲板へと身を移した、既に日は暮れて夜に近づきつつある空を見上げながら何を思うのか。

「……」

「あらレウス如何したの?」

「ロビン、遅かったじゃないか」

空を見上げてると荷物を抱えたロビンが返ってきた、彼女曰く途中ヤガラが好き勝手に動いてしまつて中々戻つて来れなかつたとの事。

「皆はっ!」

「ああ、中だ……ロビン」

「何かしら」

「もう、お前は狙われないぞ」

「ツ!!」

その言葉に思わずロビンは荷物を落とした、この男は今なんと言ったのだろうか。そう言いたげな表情にレウスは軽く笑いながら酒を煽った。

「何を言ってるのか、分かってるのかしら」

「ああ分かってる……連中はもつとやばい物に標的を定め、そのために動き出そうとしている」

「やばい物……?」

「あるかどうかも分からないがそれでもリターンは計れないような代物だ、お前さんが抱えてるもんよりも、な……」

悲しげに瞼を閉じる男に女は言葉を失った、なぜをそれを知っているのか嫌何をしようとしているのかある意味で理解出来たがしたくもないという感情も沸きあがってくる。

「貴方、まさか……!!」

「良い女が声荒げて驚くな……」

「如何する、気なの……」

「何大した事じゃねえよ、ただ……一匹の竜が巢立ちするだけよ」

そう言いながらレウスは船室にいる皆にロビンが帰って来た事を大声で伝える、中からはチョツパーやビビが駆け出してきた。それにやや驚きつつもロビンは二人を受け止めた。

「良かった俺もうロビンが帰ってこないじゃないかと思つた……!!」

「心配してたんですよ?!これから長く外に出るんだったらせめて子電伝虫を持ってで行つてよ!!」

「ご、ごめんなさいね。色々あつて……」

「ロビン来てくれ、大事な話があるんだ……!!」

そう言つてロビンを引つ張つて行くチョツパーを追いかけようとするビビは酒を飲み続けているレウスへと目を向けた。如何にも彼らしくないとビビは思い続けている、何かあつたのではないかと女の勤が告げている。

「レウスさん直に仰つてください、何かあつたんでしょ?」

「……ビビちゃんが何を言つてるのか俺には分からないな。俺はただ……これからの一味の事を考えてるだけさ」

「一味の……」

空になってしまった酒瓶を放り投げる、空中に浮かんだそれは重力に従って落ち割れて砕け散ってしまった。それが何故かただ事ではないように思えるのは自分が狂っているからだろうか。

「これから一味は最大の危機を乗り越えなきゃいけない、それに対して俺が出来る事なんてあるのか。ぶっちゃけ今まで俺は一味にそこまで貢献している気がしなくてな」

「そんな事無いですよ!!皆レウスさんには感謝してます、それは確実ですよ!!貢献とかそんな如何でも良いじゃないですか、だって私たちは家族なんですよ!!」

目を見て告げられる言葉に思わず息が詰まった、家族、そうだ確かにルフィもそう言っていたのに無意識に自分はそれから除外していた。そんな中で言われたビビの言葉に思わず呆然としてしまった。

「俺も、家族……?」

「そうですねよ!何時も私達を見守っていていざって時は誰よりも身体を張ってくれる人、それがレウスさんでしょ!貢献!?何が出来るか!?そんな考え捨ててください、何時も通りに居てくれる事が一番なんです」

「そっか……そっか。それが一番か」

その言葉で頭が冷えたのかレウスは表情を作りなおした、確かにそうだ。自分は一々そんな事を考えて居なかった、降りかかってくる事に対して全力で一味の為に行動して

共に笑つてきた。それが今更何が貢献だ、笑わせてくれる。

「有難うビビちゃん、ちよつと嬉しかったなその言葉」

「フフフツもう世話が焼ける人ですな」

「悪かったよ。さてと、俺はちよつと出てくるよ」

「えつ何処にですか？」

「そうだな、気分転換。大丈夫、子電伝虫を持っていくから」

そう言いながら身体を変化させて空へと飛び立つて行くレウスをビビは見送った。何かあったのは間違い無いだがそれを語りたくないのなら聞かないでおこう、きつとあの人なら話してくれるはずだからと信頼の証のような物を胸にしながらビビは再び船室に戻った。そして改めてルフィが決定を下す、メリー号から新たな船へと乗り換えるが、出来るだけメリー号を使つてもらつて船を作つてもらおうというものだった。それに皆賛成しつツその日はそれで話は解散となった……こうして一味に降りかかった危機は回避できた……筈だったのだが

「お待ちしておりました、レウス様」

「——ああ」

一味へと襲い掛かる本当の危機は

「それで、ご決心はお付きになりましたか」

「決めたよ。だが条件がある」

「まあそれはなんでしょうか」

「俺はどうなつても良い、仲間には……指一本、手を出すなッ!!」

これから、訪れようとしていた。

空の王者、居ぬ間に襲いかかる騒動。

夜から朝になり日が昇った、結局あの後レウスは気分転換だと言ったきり帰って来なかったが特に皆は心配と行った様子を見せなかった。普段から彼が確りしているという印象があり心配しなくても帰ってくるという認識を持たれているのと帰ってくる前に一度別れた時に偶には一人でブラブラしたいという発言があったからだ。元から一味のブレーキ役として働かせすぎているレウスには良い休養になるだろうと皆口を揃えて言ったがロビンだけは不安そうな表情を浮かべていた。

そんなこんなで再び前に前進しようとし始める麦わらの一味、その為には造船会社であるガレーラカンパニーに話を通してメリーの無事な部分を新しい船に使うて貰えないかと頼んで見る必要がある。先日フランキーと共に船を見たカクという船大工はナミ達が造船区画を訪れた時に取り合ってくれ船の査定を行ってくれた。そしてその時にガレーラの主であるアイスバーグにも会う事が出来た。彼に話を通せば何とかなると思ひ、その時話を通したナミ、ビビそして船長であるルフィの三人で造船所へと向かう事となった。

「なあアイスのおっさんはどんな奴なんだ？」

「アイスバーグさんよルフィさん。うーんやり手な人だとは思っただけどマイペースな感じの人かしら」

「そうねえ私の目の前で面倒だからって仕事の予定をキャンセルして造船ドッグを案内してくれたぐらいだし」

「ふーん、でもなんか話通じそうなおっさんだな!」

それには概ね同感だ。カクが船の査定の結果報告の際にメリー号の事を話していたが大切にされている事を言われるとそれなりに良い顔をしてくれたし普通に話の通じる人物だ。きつとメリーの件も了解してくれるだろうという期待と確信めいた物がある。ヤガラに乗り込みつつ造船区画へと目指していくが如何にも周囲が騒がしい、街を行く人々が慌てているようで行き交っている。

「あ、あの如何したんですかこの騒ぎ?何か事故でも?」

「一大事だよアイスバーグさんが何者かに狙われたんだ!!」

「ええっアイスバーグさんが!」

「アイスのおっさんが!?!おいナミなんかやべえんじやねえのか!?!」

「と、兎に角造船所まで行ってみましょう!ああもうレウスが居たら一飛びのに!!ヤガラちゃんお願い!」

「ニイイ!!」

ヤガラはその声を聞いて素直に泳ぐスピードを上げた、基本的に温厚且つ人懐っこい彼らは余程ぞんざいな扱いをしない限り従ってくれる。ヤガラは速度を上げたまま水の都を付き進んでいく、途中ではアイスバーグの件で心配でたまらないという市民で溢れ帰り声も響きまわっている。到着した造船所にも多くの人々が押しかけており一種のパニック状態に陥っている。

「すんげえ人だなあ。まるで人の嵐だ」

「その表現がピツタリと合致しそうな位の状態ね……。これじゃあ造船所に入るなんて無理そうね……」

「今聞こえて来ましたけど社員と一部の記者しか入る事は許されてないみたいです」

「そう……。一旦戻るしかないかしらね」

「あつちよつとタンマ！」

諦めて一旦戻ろうとヤガラの手綱を叩こうとした時、ルフィがストップを掛けた。遠巻きに一人の男がドックの方を見つめているのを発見した。それを見つめると一目散に其方へと向かつて行く、其処に居たのは先日カクと共に船を見てくれたフランキーであった。

「おーいフランキー！」

「んっ？おおつ麦わらの兄ちゃんじゃねえか」

「ちよ、ちよつとルフィ何よこいつ」

「えつと、お知り合いですかルフィさん？」

ルフィは事情を説明すると安心したように二人は安堵する、フランキーは見るからにチンピラという風貌でまともに話が出来るような感じではない。実際は中々話が分かり情に厚い一面があるが第一印象ではさすがにそこまでは見抜けない。

「何かアイスバーグっておっさんが大変つてんで何がどうなつてんのか聞きにきたんだ」

「そうか、俺もついさつき話を聞いた所だな。まさかこんな事に……」

「あつそうだねえフランキーつて言つたつけ、アンタも船見てくれたんでしょ？」

「んっああそうだが」

「だつたらお願いがあるの。アタシ達あのメリー号を使つて新しい船を作つてもらうつて決めたんだけど造船所もこんな調子だし、船のどの辺りが無事なのか見てくれないかしら」

「どういう事だそりゃ？」

詳しい事情を話して見るとフランキーは何やら考え始める、自分が伝えた船が限界という現実を彼らは自分なりに咀嚼して飲み込んだのだろう。そして最後に残った手段として今の船の魂を次の船に受け継がせようという考えに至つたのだろう。どれだけ

船を愛しているのだろう、本当に一人の人間に向けるかのような思いにフランキーは思わず感動する。

「よおしそれなら俺が請け負ってやろうじゃねえか!!このフランキー様に任せておけてんだ!!」

「おおっ流石スーパーだな!!」

「だろう!!」

ノリノリでポーズをとるフランキーとルフィを尻目にしながら溜息を交じらせてヤガラに乗り込んだナミは早く行くと催促をする。フランキーも自分のヤガラに乗りこみ、ルフィもそちらに乗るとヤガラは足を進めていく。

「おい兄ちゃん、お前の船にはニコ・ロビンって女が乗ってるってのは本当か?」

「ああ本当だぞ、すげえ頭良いんだ!」

「そうか、そいつと少し話してみてもいいか。ちと聞いてみたい事がある」

「ああ良いぞ」

「悪いな（トムさんが一言言っていた禁断の兵器。それもあいつなら知ってるかもしれないえからな）」

波に揺られながら考えるフランキー、その影にあったのは欠片のようなスケッチでしかなかった物だが今でも鮮明に覚えている。それを偶然見ていた師を見て声を掛け

たが直ぐに笑って誤魔化されてしまった。だがそれを知っているかもしれないという者にもう直ぐ話を聞ける……フランキーはそんな事を考えながらナミ達に乗っているヤガラを追いかける。

空の王者、居ぬ間に襲いかかる組織。

「フム……よしこんなもんか。ほれ出来たぞ、メリー号だったか。この船で無事な箇所
で新しい船に換えそうな部分をリストアップしといたぞ」

「ああ悪いなフランキー、手間な事させちまつて」

「何良いつて事よ、にしてもお兄ちゃんおめえこの船に豪く執着して他が良いのかい」

メリー号の各所を点検し終えたフランキーは手伝いをしていたウソツプへとリスト
を書いた紙を渡しながら思わず聞いてみた。覚悟を決め彼らなりに決めた事なのだろ
うが一番シヨックを受けていたウソツプがそれを容認したのはかなり意外だったよう
に思えた、彼が一番この船をまるで人間のよう扱っているかのように感じたからだ。

「確かに嫌、だけども……俺の我侂で皆に迷惑を掛けちまう……。それにメリーだつて
自分の事で一味に揉め事が起きちまうなんていやだと思ふからよ」

「成程な。おめえなりに心にケジメ付けたつて事か、長つ鼻おめえ思った以上に男じゃ
ねえか」

「あつたり前だ、つて長つ鼻つて言うな!!!」

ウソツプのツツコミを受けつつも再度メリー号の甲板をさすつたフランキーは改め

てこの船が愛されている事を思いながら先程話をしたロビンへと少しだけ視線を向ける。ロビンは冷静を装うとしているが何処か不安そうな感情を浮き彫りにさせている、それだけの内容を言ってしまったのは確かだがそれでも彼女は確りとそれを受け止めていた。ならばこれ以上何も言う事もない、言いたかった事と聞きたかった事は全て終えた。

「んじや俺は帰るぜ」

「おうありがとうなフランキー！」

「気にすんな。それとよ、近日中にアクアラグナつつう馬鹿でかい大波がこの島にやってくる」

「アクア、ラグナ……?」

アクアラグナとはウォーターセブンに一年に一度襲い掛かる高潮の事である、毎年押し寄せる凄まじい高潮で家屋の浸水や建物の水没が当たり前のようにならざるを得ない。現在の街並みはその高潮によって沈んでしまっている家屋の上に建てられた街並みだという。その宣告を受けたナミは確かに風が強くなりながらも気圧が低下している事に気付く。船を移動させる事を決める。その為一味は街の宿に宿泊したが結局まだレウスからの連絡もなく、彼の子電伝虫への連絡も通じる事もなかった……。

「おーいレウスどこに行っただろ!?!」

「船長さんそんな大声を出したら恥ずかしくて出て来ないんじゃないかしら?」
「んっそっか?」

「ルフィ、レウスなら俺が臭いで探すぞ!」

流石に心配になって来たルフィ達は手分けをして彼を探す事となった、ルフィはロビン、チョッパーと共に街中を歩きながらレウスの搜索を開始する。彼の事だから大丈夫だと思いが流石に心配になってくるという物、自由行動という事にしながら皆でそれぞれ散りながら探す事となった。

「あいつ何処行つたんだよ本当に、迷子かあ?」

「ゾロなら兎も角レウスがなるかなあ」

「多分ならないと思うわ、剣士さんと違って確りしてるし」

「ハハハッそりやそうだ!!あっおいチョッパー水水肉だ!!レウスの分も買つて行こうぜー!」

「おおっ良いなー!ロビンの分も買つてくるからな!!」

「ええっじゃあここで待つてるからね」

水水肉の売り場へと駆けて行く二人を見送ったロビンは静かに思考の海に意識を沈めた。昨日のレウスの台詞、もう自分は狙われないという言葉が非常に引つ掛かっている。自分を狙っていると言えれば世界政府しかあり得ないがその政府が自分を狙わなく

なるというのはいもう考えられない、しかし

——連中はもつとやばい物に標的を定め、そのために動き出そうとしている。

それが一体何なのか全く分からなかったが自分に話を聞きたいと言ってきた男、フランクキーが訪ねてきた言葉がずっと引つ掛かっている。

『何かのスケッチ？』

『ああ、俺もその時ちらつと見ただけなんだがありや間違はなく何かの機動兵器のスケッチだった。如何言葉にしたら良いのかわからなかったが漸くハッキリした、ありや竜だ』

『竜……』

竜のような兵器、それに心当たりがないかと言われれば一つだけあった、それは嘗てよく通っていた研究所にあった酷く古びていた一冊の本に一ページだけ残されていた奇妙な記録。世界を滅ぼす邪龍を打ち滅ぼす為に作られたという禁断の兵器の存在、それは竜に模して作られたとだけ書いてあったがもしやそれを狙っているという事になるのだろうか。しかしあるかも分からないそれを政府が狙うのだろうか。

——あるかどうかも分からないがそれでもリターンは計れないような代物だ、お前さんが抱えてるもんよりも、な。

だがそれが最も強い説得力を保持している、だとしたらそれを探す事を条件にレウスは自分への狙いを政府へ打ち切らせたという事になるのだろうか。だとしたらなんて事をするんだろうか、そんな事をしたら一生政府の手の内に収められたまま自由なんてない事になるのに。

「ニコ・ロビン、CP9だ」

「っ!？」

思考の海からその一言は自分を一気に引き上げる引き金となった、自分の背後の壁の近くに声からして男が仮面を被っているフードで身体を隠しながら自分に向けて声を発した。CP9という言葉聞いて身体が硬直した、サイファーポール、それは世界政府直下の諜報機関であり政府からの指令を受けて影で動く組織。自分の事に気付いた上で声を掛けてきている。

「……」

「大人しくついて来て頂きたい、ニコ・ロビン」

「彼の話じゃもう私は狙われないって話だそうだけど」

「賞金首を捕まえるのに理由が必要か」

「——ああ、必要だなクソ豹。俺との契約はどうなった」

そのフードの男の首へと背後から腕が伸びて鷲掴みにする影があった、フードの男は全く苦しい様子など見せようとしないが溜息を付きながら後ろへと振り向いた。

「……貴様は時間まで待機の予定だろう」

「特例で出して貰った、お前の事が気がかりでな……このまま首、へし折られたいか」
「……ふんまあ良いだろう」

首から手を離された男はそのまま空高く跳躍するとそのまま建物の上を疾走していきそのまま姿を消して行った。ロピンは咄嗟に壁へと目をやると丁度死角になっているような所にフードを被りながら仮面を付けていたレウスを見つけた。

「貴方……まさか本当に……!?!」

「……ああつ。ちよつとした契約をな……きつともう大丈夫だろ、ルフィ達と一緒に居ればきつと。それと好い加減名前前で呼んでやれよ、喜ぶぜ」

「貴方は如何するつもりなの!?!」

「……さあな、じゃあな。ルフィ達にはまだ、言わないでくれよ」

そのままレウスは地面を蹴って先程の男と同じように建物の上を走りぬけて去って行ってしまった、追った方が良いのではないかと思つたが直ぐにルフィとチョップパーが戻って来たが彼の言葉通りに口を閉ざしてしまった。

「ねえ船長」

「何だロビン？」

「皆の事、名前でも怒らないかしら……？」

不安そうに聞くロビンに対してそれを聞いたルフィは嬉しそうに笑った。

「怒るわけねえだろ俺達は仲間だぞ」

「そうだと俺はロビンにチョッパーって呼んでもらった方が嬉しいぞ！」

「それじゃあ、今度からそうさせてもらっても、良いかしら」

「ああそうしてくれ!!」

笑顔でそう言うルフィに釣られた笑ったロビンはチョッパーに手を引かれてそのまま街中を進んでいく、彼の言う通り皆ならきつと大丈夫なのだろうという不思議な確信と暖かさがある。それに満足していた。

が、その日最悪の出来事が起こるのであった。

「さあレウス様、行きませう——私たちの明るく愛しい未来へ♡」

「……ああ、分かった」

空の王者、別れを告げる。

「なにい!!? レウスと会ったあ!!!??」

「ええ……言わないでくれて! 言われたんだけど」

一度集合した一味は食事を終えるとロビンが話があると口を開いた、その内容は先程一人でいる時にレウスと遭遇し自分が助けられた事と何やら政府に手を貸すかのような行動を取っている事の告白だった。

「意味が分からねえ……あいつが政府と手を組んで何をすっていうんだロビンちゃん!?!」

「何とも言えないけど多分青キジが言ってた事と関係があるんじゃないかしら」

「あのノツポ野郎が言ってた事!?!」

——世界政府としては如何してもその国の力が欲しい、その為の鍵になるのが……
お前だ、レウス。

海軍大將が言っていた言葉、元々レウスの力はある国にしか存在しない酷く希少な物

であり政府としてはそれを喉から手が出るほどに欲している。その国の力がどれほどの物かは計る事は出来ないが政府そのものが欲するほどなのだからよほどの物なのだろうと推測出来る。

「で、でもだからってレウスが政府に手を貸すなんてあり得ないよ!!俺は信じないぞ!!」
「だが今もこうしてあいつは行方知れずだ、割と納得が行く話だ」

信頼が置いて心を通じ合った仲間である彼が敵である政府と自分から手を結ぶなんてありえない、誰もが信じられないと首を振った。だがそこへロビンが自らの事を含めて話した。何故自分が懸賞金をかけられたのか、何故政府に追われているのかを全て。それらを聞いた全員は驚愕しながらも確りと耳を立てて聞き入っていたがルフイだけは納得出来ないような表情をしていた。

「ロビンが狙われてる理由は良く分かった、でもそんなの関係ねえよ俺の仲間だ。でもあいつがいなくなった事は全然納得が行かねえ!!なんであいつが居なくなるんだ!!此処まで一緒に旅をしてきたのに、必要だつて言うなら俺は、世界政府にだつて喧嘩を売つてやるううう!!!」

——その真つ直ぐさが、恐ろしいんだよ麦わら。

その時、声が聞こえた。その声は紛れもなくレウスの物、皆はその声に反応して飛び出した。夜の帳は完全に降りて外は真つ暗となっていた。月も顔を見せない暗黒の夜

の中、此方を見つめるかのように立ちながらロープを羽織っている一人の男がいた、それは紛れもなくレウス本人であった。

「全くロビンの話を聞いて本当に不安だったんだから!!」

「レウスさん良かった!!」

思わずナミとビビが駆け寄ろうと走り出した、誰もが心を一緒にしながらレウスに駆け寄ろうとする。が刹那、ナミとビビの足元に何かが飛来し地面に穴を開けた。それは彼によつて握られた拳銃が吐き出した銃弾であった。銃口からは煙が立ち登りレウスが引き金を引いた事の証明にもなっていた。それに真つ先に反応したのはサンジだった。

「テメエ……ナミさんとビビちゃんに何をしゃやる!!!」

「……相変わらず女に甘い奴だ、海賊になった以上仲間が傷つく事も考えられないのか」

「んだとお!!!」

「余り、動くな。次は当てる」

聞く事がないような冷たく冷徹な言葉は麦わらの一味から動を奪い去って行く、何故彼がこんな事をするのかという混乱が頭を支配して身体に命令が行かなくなってしまう。あの仲間思いで他人を気遣っていた彼がする筈の無い行為に誰もが凍り付いた。

「今日は、お別れを言わせて貰いに参上した」

「別れ……!?!」

「ああ。短い間だった俺は麦わらの一味だったからな、せめてもの礼儀つて事だ」

「何言ってるんだお前、意味が分からないぞ?!」

思わず前へと踏み出したルフイが叫んだ、それにレウスは反応を見せながら銃を下ろし口を開く。

「俺は俺の価値を引き出してくれる所へと行く、そしてリオレウスという竜の故郷へと
いべき島へと行く」

「そ、それってプロギー師匠が言ってた!?!」

「そうだ。その為にはもうお前達に居ても無駄だ、それにお前たちの世話をするのも疲れたんでな……」

吐き捨てるように呟いていると彼の頭上に巨大な竜が飛来してくる、それは頭上でホバリングをしながら待機をしている。それを見上げながらレウスは迎えかと呟いた。

「それに政府は言った、協力するならば俺への莫大な報酬を用意し相手まで見繕つてやるとな……こんな話に乗らない手は無いだろう」

「嘘だ!!」

「嘘じゃねえよ」

「なら、何で泣いてんだよ!!」

ルフィに言われ頬に手を当てて見る、すると涙が流れていた。無意識のうちに自分は泣いていたと言うのか……。なんて格好がつかない……。そしてこれじゃあ覚悟が緩んでしまう……。

「待てレウス!!」

「……それじゃあな、船長。もう二度と会う事なんてないだろうな」

涙を拭いながらレウスは一気に跳躍すると翼を広げてルフィが届かない距離へと上昇すると竜の背中へと飛び乗った。

「フッフツさあ参りましょう」

「嗚呼……」

空の王者、愛とは何かと思う。

「これで、貴方は名実共に政府側の人間……そして私の旦那様ですわ♪」
 「……まだ結婚したわけではないだろう」

窓を横切っていく煙を見据えながら席に付いたレウスは低い唸りのような声を発しながら乱暴に席を付いた、自分を麦わらの一味から引き剥がした元凶が今自分の笑みを浮かべながら恍惚とした言葉を口々にしながら自分を見ているのが非常に嫌だった。何故こんな奴の傍に居ないといけないのかと考えるより前に答えなんて出る——守るためにこれといるんだ。

「フフフフフフ……エニエスロビーの後は海軍の本部で正式な手続きをしてその後は教会にゴーでマリッジ&ベツトイン&ラブ!!フフフフフフ……!!!」

「……楽しそうだな、お前」

深く、溜息を付いた。隣に嬉しそうな笑みをする姫のような女が座り擦り寄ってくるがこれをレウスは姫とは一ミリも思っていない。自分にとつての姫のイメージは完全にビビで固定されているからか目の前の女には姫という言葉は似合わない、寧ろ……毒婦、それこそが一番に合っているだろうとさえ思える。

「ええ楽しい、楽しいですわ。夢にまで見て貴方様とこうして二人つきり……夢ごっこですわ♪」

「俺にとつては悪夢心地だ……」

胸を苦しく締め付ける光景が瞬から消えない程に強く焼き付いてしまっている、自分へ向けられた視線に込められた困惑の感情と泣きそうなほどに驚いていたナミとビビの表情。嘘だと信じ込みたいと願っているチョッパ、悪い冗談を抜かすなど浮かべながらレディに銃口を向けた事を許そうとしないサンジ。怪訝そうな瞳を向けたまま刀に手を掛けたゾロ、本気なのか問いたそうにするロビンそして——自分の心をあつさりで見抜いたルフィ。離れたいななんて思うわけがない、ずっと一緒に居たかった……世話に疲れるなんてない、一緒にいる事が喜びだった人達と誰が好きで……。

「それでも貴方は悪夢を手にとってくださった、私を選んでくださったでしょう……♡」
「……」

「やつぱり、あんな女なんかより真の伴侶である私こそが貴方のそばにいるのが相応しいのですわ♡」

「ツツ!!!」

その言葉で一気に頭が沸騰する、瞬時に身体が変化しリオレウスとしての力が剥き出しとなって行く。その絹のような美しい首筋に竜頭を噛ませるように突きつけた。竜

のキバが首筋に立てられ捕食の一步手前の状態とも言えるのに女の表情は青くなる所かより嬉しそうな表情を浮き彫りにさせていく。

「お前が……お前さえ居なければ……!!俺は、ナミちゃんやビビちゃんと一緒に……!!!」

「アアアアツ……憤怒に燃える貴方もなんて魅力的……貴方の全てに私は愛を感じておりますわ……♡首に食い込んでいるキバも私を睨み付ける貴方の瞳も……これからは全て、私の物になるのですから、でも——あの女の名前が出るのは不愉快ですわ」

刹那、レウスは以前感じたような悪寒を感じた。理性は拒絶するが本能自体はそれを求める嫌な感覚、だが今度は理性の拒絶反応が大体を締めていた。その時自分は逆に押し倒され首には自分がやったように竜頭が据えられ首に深くキバが食い込み血が溢れていた、同時に冷たく血が固まりそうな殺気にも似た物は自分を包んでいく。

「ガツ……!!?アアアアツツツ……!!!」

「レウス様には私が居ますの、このレイアさえ、私さえ居れば良いんですの。他の女なんて必要ありませんの、分かってくださりますわよね……愛しい愛しい旦那様……♡」

ギリギリと首を締めつつ食い込んでいくキバ、自分を見下ろす女にレウスは悪い冗談か何かという感情を抱く。彼女が自分に抱いているのは悪意でも敵意でもない、純粹すぎる愛情であった。混じり気がない本当の愛を自分に向けている、自分こそが相応しいと洗脳をするかのように問い掛けて来る。

——お前に相応しい愛を持っているのは私だと。

それを、どこか心のどこかで肯定し掛けた自分が居た。そんな思いを抱いたレウスを乗せた海列車は汽笛を鳴らしゆつくりと線路を進んで行く、遠ざかって行く水の都と仲間達。だが皆を救うにはこの手しかない。安全にこの島を出航させ次の島に渡す為には……。

「了解して、くださいますね？」

「……ああ」

この女に、従うしか、ない……。

空の王者——仲間に思われる。

文字通り海原に揺れる波を裂くように敷かれたレールを駆け抜けるかのように走り続ける海列車パツイング・トム、それに搭乗しているのはほぼ政府の役人とその政府に仕える秘密組織の人間。そしてそれらによつて世界政府の直轄地「司法の島」と呼ばれるエニエスロビーへと連行されようとしているレウス。自らを捧げる事で麦わらの一味を無事に島から脱出させるという協定の元による物だが……肝心の麦わらの一味はそれに全く納得がいていなかった。

自らを犠牲にする事によつて命を救われたとしても全く嬉しさが沸く事はなく、寧ろ何故そんな重大な事をたった一人で抱え込んだのかと憤りを隠さなかった。全員が直ぐにレウスを追いかけける事を決めた、一切の迷いなく。しかし彼を乗せた海列車は発車してしまい間もなくと迫ったアクアラグナの高潮の影響で追いかける為の船すら出せないという最悪の状況に陥っていたが、そんな時であった。何とかエニエス・ロビーへと行く方法を探そうとした時、そこへフランキー達の手下を名乗る者達が現れた。

「麦わらさん、頼みがあるんだ!!俺達に、俺達に力を貸して欲しい!!!フランキーの兄貴が政府に連れて行かれちゃったんだっ!!!」

身体中を包帯で補強するかのような治療をした姿で頭を地面に擦りつけながら懇願するフランキーの手下達の纏め役のザンバイが涙ながらに言う。政府の人間がいきなりアジトに殴りこみに来て政府からの任務だからとフランキーを罪人として連行すると言う。それを許せないと襲いかかろうとしたが、政府の人間達の圧倒的な強さの前に自分達はあっさり倒れられてしまい気がついた時にはフランキーは連れさられた後だったという。そしてどうしたらいいかと自分達で相談した結果、フランキーと知り合いで尚且つ非常に強い自分達の力を借りたいと此処まで来たという。

ルファイ達はルファイ達でレウスを取り戻すためにエニス・ロビーに乗り込もうとしていたので、それについては全く問題なく寧ろ仲間が増えると好意的に受け止めていた。何よりルファイはここである事を宣言した。

「よし決めたぞ、俺はフランキーを船大工として仲間に入れるぞ!!そして世界政府に喧嘩売るぞ!!レウスが笑顔で俺達の所に居られる為にな!!!」

そう笑顔且つ力強く宣言をしたルファイに皆は少し圧倒されつつもそれに大賛成で返した。やるべき事を定めたが問題はどうかやってエニス・ロビーへと行くかと言う事になったが、そんな所へやって来たのはココロであった。海列車を出してやるから付いて来いと言うので付いて行くと、そこでは襲撃されたと聞いていたアイスバーグと彼が経営するガレーラカンパニーの船大工達が海列車の整備を行っていた。

「こいつだよ、海列車の試作初号機。その名もロケットマン」

「うおおおおおおつ!!!カッコ良いiiiiiiiiiiii!!!」

アイスバーグが見せ付けたのは海列車の試作機として製造された海列車、試作機として作られたがどうあっても蒸気機関を制御しきれずにブレーキが効かなくなるという致命的な欠陥を抱えてはいるがスピード自体は折り紙付きで、海列車パフインク・トムの最高速度を上回るほどの速度を実現出来ると断言した。その代わり命の保障は出来ないと言われたがルフィはそんな事知るかと思決でロケットマンへと乗り込んで行った。そして……

「んががが、ほいじや行くよ!これより暴走海列車”ロケットマン”、行き先は政府直轄の島エニエス・ロビー……出航!!」

力強くも心地いい汽笛の音と共に、エニエス・ロビーに向けて海列車が動き始めた。徐々に力強く早く回転していく車輪の脈動を感じつつもルフィは大声で叫んだ。

「レウス今行くぞオオオオオオオオ!!!」

水の都から飛び出した海列車は大海原へとその身を投げるように海を切り裂きながら行く。目指すは……政府直轄の裁判所、エニエス・ロビー!!

「フフフツ……」

「ツ……」

屈辱的な物に耐えるかのように顔を伏せながら歯軋りを続けるレウス。真横にいる女、レイアは心の奥底から溢れ出す幸せを噛み締めるかのようにレウスの腕を抱き締めように胸へと寄せていた。腕を通じて伝わって来る柔らかくて暖かな感触すらレウスを不快にしかしていなかった。

「アアアア心待ちにしておりました。貴方とこうして隣り合い肌を触れ合わせる事を……」

「ツツ……」

声を聞くたびに不快になっていき、精神が多大な負荷と汚染を受けていくかのような感覚に陥っていく。自分で決意しておきながら心底嫌になりそうになるが、それを抑え込まなければいけないと理性的なりミッターが働く。それもレイアの強さに起因する事であった、このレイアの強さは自分が今まで相対して来た中でも一際目立って感じられる。それは以前殺し合いをしたあの古龍との感覚に似ている。

「アアアアツ早く、早く辿り着きたいですわ……♪」

——つまりこの女は古龍に匹敵すると自分は感じているのだ。

「エニエス・ロビー、海軍本部を通して貴方は正式のこちら側の人間となると同時に私の旦那様となり契りを交わす……はしたない事ですが興奮してしまいますわ……♪」

「そのまま、興奮し過ぎて死ねばいい」

思わず出てしまった本音だが、それを受けたレイアは更に表情を喜びで染めていく。「であるのにも拘らず貴方は私を選んで下さったのでしよう？ 矢張り運命は私と貴方を引き合わせてくれているのですわっ!!!」

もしもあの古龍ドスケルビと相対した事で運命がこのように捻じ曲がったのであれば、今すぐ空島に赴いて今度こそあのドスケルビの息の根を止めてやりたい所だと強く思うレウスは沸き上がる最悪な心象を抱えたまま海列車に揺られ続ける……。

空の王者、政府の目的に怒る。

「まさか、こんな所で再会するなんて思わなかったぜ。なあ空の王者のお兄ちゃんよ」
「……全くだな。まさか政府直轄の島でト変態と顔を合わせるとか意外にも程があるな」

「おいおい褒めるなよこの野郎ー」

「いや褒めてないんだが」

政府直轄の島、エニエス・ロビ司法の島。世界政府が直轄する裁判所が設置されているこの島、1年中夜にならない不夜島としても有名であり、別名「昼島」とも呼ばれている。この島の異常性はそれだけではなく島の中央には巨大な穴が空いており、そこに海水が流れ込み滝を作り出している。そのような立地にある島へと連行されたレウスは島の最奥に近い塔へと連行された、そこで自分に誘いを掛けて来たレイアが協力している組織CP9の長官室に通されたがそこには予想外の人物と遭遇した。ウオーターセブンで遭遇した変態のフランキーであった。彼も罪人として一緒の海列車でここに連れて来られたらしいが乗っていた車両が違った為全く気付けなかったらしい。

「んでなんでお前さんがいるんだよ」

「……そりゃこっちの台詞だ、解体屋が如何してこんな所にいやがんだよ」

「ちよいと訳ありでな……おめえは」

「俺も訳ありだ」

壁に下げられた鎖に固定されているフランキーと壁により掛かりながら静かに佇んでいるレウス、対照的な立場にある二人には周囲から様々な視線が送られている。政府直属の諜報機関であるCP9のメンバー達の視線が突き刺さってくる、中にはウオーターセブンで潜入任務をしていた者もいる事が流れている会話から察する事が出来る。レウスが言える義理ではないかもしれないが珍妙な人物ばかりである。そんな中で高笑いをしながら一人の男が迫ってきた、CP9の長官であるスパンダムである。

「ようこそエニエス・ロビーへ、空の王者。本来貴様のような海賊は枷も無しで歩ける場ではないのだからな、それを嘔み締めやがれてっんだ!!」

「スパンダム長官つつたか」

「おおそうだ、栄光あるCP9の長官スパンダムだ!!」

「……おいルッチ、本当にこれが長官か。部外者である俺でも分かるぞ、これ無能だろ」

「まあな」

「ルッチイイイてめえ俺の擁護とか一切なしか!?!」

本来折り合いが悪くまともな会話すら成立しなかったCP9のルッチに尋ねてし

まったレウスだがルッチもそれを一切否定せずにそれを肯定してしまった。どうやらルッチも長官がかなりあれなのは思っているらしく内心ではかなり馬鹿にしているようだ。まあそれもこんな長官ではしようがないだろうなと思わず思う、小物と小悪党臭が半端ないからである。

「長官、その声の煩さはセクハラです」

「え” つ……おいカリファ流石に声のでかさは関係ないだろ……?”

「セクハラです」

「うおい……」

「セクハラです」

「えっ何俺って言う存在その物がセクハラなの!!?”

「……なあフランキー、此処って本当に諜報機関の長官室か?」

「ああ、俺も思わず頭の中で記憶を確認しちゃったよ。なんかのお笑い訓練所にぶち込まれたかと思っただぜ」

目の前で行われている寸劇に若干の頭痛を覚え始めてしまったレウスは思わずフランキーと今いるこの場についての確認を行ってしまった。そんな中レウスは歌舞伎のような口調と化粧をした男、クマドリによって席へと導かれる、その前にスパンダムが座った。

「ひひひつまさか政府が追い求めていた奴がこんな奴だったとはなあ……あのレイアって女もどうかしてるな、てめえと結婚したいなんてねえ……」

「全くだ……それには同感だが本人の前でそれは言わんほうが良いぞ」

「けつと言葉を切りながらえらそうにするスパンダムが見下すかのようにレウスを見下ろした。」

「さあ本題に入るぜレウス・R・リオス、政府はお前達の能力の元である生物が生きている島を求めている。そこへ行き着くには番の竜の力が必要だとされているからだ」

「(狩獵が全ての世界……)」

嘗てリトルガーデンにてドリーから告げられた事実、ある意味では自分が帰るべき故郷と言えるかもしれない場所。偉大なる航路の何処かにあるとされている場だがドリーすら場所は知らないと言っていたが、今までの話を総合すると世界政府は最低でも大まかな場所は特定していると見て間違い無い。そして青雉が言っていたその国の大きさやそれを欲しているという政府。

「その島に、何があるって言うんだ……」

「世界を破滅に向わせる程の究極の生物兵器——

イコール・ドラゴン・ウエボン
竜 機 兵だ」

その名を聞いた瞬間に全身の鳥肌が立った、血流が加速し動悸が止まらなくなっていく。心臓がはち切れそうなほどに加速を始めていく、その名を聞いた瞬間に沸きあがっ

たのは深い深い憎しみと怒り、そして悲しみであった。

「とある島に流れ着いた余りにも巨大すぎる物体、湾曲した角、体に合う太い手足、長くて太い尻尾、巨大な鉄で出来た翼。正に幻想でしかない筈の竜がそこにあった。それを秘密裏に回収した政府は確信した、これを作れる島が、竜が居る島があるってな!!」

「竜っ……!!」

「その島を世界政府の物とすれば世界に眠る古代兵器すら屈服させる最強の軍事力を手に入れる事が出来る!!それこそがお前を欲しがっている理由だ」

必死に押さえ込もうとする感情の暴風雨、理性ではなく本能が怒り狂っているかのような感覚、リオレウスとして本能が叫んでいる。ふざけるなど。

「テメエ、あれを、また作る気か!!!俺達の命を犠牲にし冒涇した上で、あれを作るだど!!!? ふざけるなああ!!!」

怒りのまま、憎しみのままレウスは叫んだ。抑え切れなくなった感情は力となって身体に溢れてきた、目の前で顔を青ざめて恐怖するスパンダムにその力を振るおうとしたが自分を包みこむ暖かさがそれを止めた。

「お止めになつてくださいレウス様、これはまだ殺しちやだめですよ。全てが終わったら存分にやりましょうね♪」

「お、おとおおいレイアてめえ長官である俺になんて事を!!?」

海軍本部への連絡の為に遅れてきたレイアが長官室に入ると同時にレウスに駆け寄りそれを止めた。スパンダムはレイアの言葉に怒りを露わにするがそれ以上に怒っていたのはレイアだった。

「黙りなさい、私の夢を侮辱した貴方なんて今すぐ殺したい気分なのよ。猶予があるだけ感謝なさい」

「ひゃ、ひゃい……」

そんな中でレウスは自分を落ち着けながら思考する、今の憎しみと怒りは何だ、また、あれを作る気とは何だ？ 訳が分からない、自分のこの力であるリオレウスは一体何なのだ!!?